FAIRY TAIL ～影～

サソリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＦＡＩＲＹ　ＴＡＩＬ　～影～

【Ｎコード】
Ｎ８５０８Ｕ

【作者名】
サソリ

【あらすじ】
ある日、目が覚めると魔法・一般常識以外、何も覚えていなかった少年魔導士のお話。

――――――――――――――――――――＊この作品の主人公はダメダメな性格ですのでご注意ください。第二章から本格的にダメ男ぶりを発揮します。
――――――――――――――――――――＊ちなみに、原作・設定等を遵守しないのでご注意ください。

プロローグ

ＦＡＩＲＹ　ＴＡＩＬ　～影～
～プロローグ～

「……ん……」

ゆっくりと重たい目蓋を開けると爛々と輝く太陽に雲一つない青い空が見えた。
近くに川があるのだろうか、静かに水が流れる音が聞こえる。

あぁ、落ち着くな
久しぶりだ、こんなに暖かい自然を感じるのは……それにしても中々にリアルな夢だな。

このままでは、仕事に行く気がなくなるよ。何時までも、このまどろみの中に居たい。

……しかしそう言うわけにもいかんだろう。早く夢よ、覚めないか。
このままでは私は■■■■■■てしまう。

そう考えると、私はゆっくりと目を閉じ、暖かい自然が溢れる夢の世界に別れを告げた。

…

……

……

……はずだった。

次に目を覚まし、目蓋を開けた時に見えた光景は爛々と輝く太陽に雲一つない青い空だった。

……あぁ確信したね、これは夢じゃない。

体を温める太陽の光に突き抜けるそよ風、そして寝転がっている体を包み込んでくれず、痛みつけるかのように固く自己主張する岩盤。

手を延ばせば、ぴちょんと水に触れた。流れているから川か？……冷たいな。まさか、こんな近くにあるとは……。

……それにしても、夢がここまでリアルなものか。

「はぁ……どこだよ……ここは……」

ゆっくり、上半身だけ起こすと私の目には覆い茂る木々と清流のごとく流れる川が見えた。

……知らない場所だ。

それにしても、
よくこんなにゴツゴツした岩盤で呑気に寝ていられたものだ。体のあちこち痛いぞ。しかし、しかしだ、今はそんなことはどうでもいい。

私はベットで寝ていたはずだ。何故こんな場所にいるのだ。それにこんな真っ黒なスーツなんぞ着ていたか？

私は■■■■にいたは……あれ？……■■■？いや■■■■……？

……？……私はどこにいたんだっけ？

…それより私は何者だ？私の名前は？

…

…

…思い出せないだと！？

まさか記憶喪失だとでも言うのか……

はぁ、ややこしいことになったぞ。

しかし、そう焦ることはないな。川や木のことが分かると言うことは一時的な記憶喪失だろう。

……まぁ、何時か思い出すさ……

それより、これからどうするか、だな

そう考え、立ち上がった私は、辺りを見回したが自然以外何もなかった。人工物がない、どこかの森みたいだな。何故ここにいるかはわからないが

【ぐぅ～】

……まずは腹ごしらえだ。腹が減っては何もできんからな。

ふむ、ちょうど川辺にいるんだ。魚でも食べるとするか。
そう決めると、すぐに川を眺めた。魚が泳いでいるのだろう、いくつかの魚影を見つけることができる。
よし、食べ物は豊富にあるようだな。これで一安心と言ったところだ。

それに…魔法のことは忘れていないようだ。何とも都合の良い記憶喪失だ♪

と言うか魔法以外一般知識しか覚えてないみたいだな。

っとそれより飯だ。はてさて、魔法は発動するかな？

【影槍】

ぼそっと小さく呟き、黒光りする魔方陣を足元に展開させる。

すると、その行為によって絶命した魚が、ぷかぷかと浮かんできた。

どうやら魔法は正常に発動し、魚影から漆黒の槍が飛び出して見事に魚の真ん中を貫いたようだ。

すでに絶命し、影槍によって幾らか体を失い軽くなった魚は沈むことなく、ぷかぷかと浮かんでいる。

「ふむ、一丁上がりというヤツだな。」

そしてまた魔方陣を展開させると、次は自分の影から、にゅるにゅると漆黒の手を数本出し、浮かんでいる魚の所まで長く伸ばし数匹の魚を回収した。

ふむ、上出来♪上出来♪

さてお食事の時間だ♪

「いただきま～す！！！」

…

…
…

「……知らない天井だ」

またしても知らない場所にいる。どこだ、ここは……

確か私は魚を食べて……から記憶がないな。

「やっと起きたかい」

私が知らない天井を見つめ……いや天井でもないな。あれは木？……もしや……ここは木の中なのか？何とも辺鄙な場所にベットを置いてるものだ。

「聞いているのかい？」

「！？……む……何だ、誰だおまえは……」

いきなり喋り掛けられたからビックリしたじゃないか。てか誰だ？

この婆さんは……。

私にいきなり話しかけてきたのは、Ｙシャツと長いスカートの上に真っ赤なマントを羽織っている婆さんだった。ピンク色の髪の毛を頭の後ろでお団子にして金色の髪飾りで止めている。たぶん若い頃は美人だったろう。

「命の恩人にその態度は酷いもんだね。こちらこそ聞くよ。あんた何者だい？」

「……命の恩人だと？私は助けられた記憶などないが？」

「あんた、あの川の川魚を生で食べただろう。あそこの川魚は毒を持っていてね。焼けば中和されるんだがね。……ワタシが偶然通りかからなかったら、あんた今頃あの世行きだよ。」

そう言えば少し思い出してきたぞ。

……確か魚を食べて苦しかったような……ということはこの婆さんの言うことは本当のことか？

しかし、人に出会えるとは運がいい。これで現状がわかる。

「そうか……礼をいってやる。ところで、おまえは誰だ、ここはど

こだ。さっさと答えないとぶち殺すぞ？」

「……礼儀がなってない子供だね！しかもなんて口の聞き方だい！！」

「おい！ババァ？聞いてんのか？お前は誰だと聞いているんだ！」

「相手に聞く前に自分が名乗るのが礼儀だと知らないのかい！」

ちっ、それぐらいで怒ってんじゃねぇよ。短期すぎじゃないのか、この婆。

つか……名前か……覚えてねぇんだよな。ふむ、偽名でも名乗るか。

うーむ

…

…

…

…

…

…はっ！？

これだ！この名前しかない！！！

「私の名前は、ナナシだ」

「……あんた、舐めてんのかい！」

何!?なめているだと？一生懸命考えた名前だぞ。

「本当のことだ。何だその眼は？人様の名前に文句あんのか？あぁ？」

「はぁ……じゃあ家名はなんだい？」

「ネームレスだ!!!」

「……」

何だ？婆さん、そんなに私の目を見ないでくれ。……恥ずかしいじゃないか。

「……あんた…もしかして記憶がないのかい？」

「な、何故それを!?」

エスパーか!?コイツァ驚いた!?

「はぁ、厄介な生き物を拾ってしまったよ。それにネーミングセンス無さ過ぎだ、この子供は……」

何だ、そのやれやれみたいポーズは……。

「それよりもお前の名前は何だ！私は答えたんだ。さぁ言え！【ごちん！！】ぎゃっ！？」

「さっきから年上に対して礼儀がなってないよ！！」

ぐおぉ、何て力で叩きやがる。コブが出来るじゃないか。いや既に出来て来てるじゃないか。

ぐおぉぉ、
ジンジンするぅ

「……ワタシの名前は■■■だ」

「あん？頭さすってたから聞いてなかった…もう一回言え……【ギロリ】ってください。お婆様♪」

……恐怖！そんな目で睨まないでくれよ……それにしても何て目だ。きっと他の人間にも恐れられてんぞ、この婆さん。

「まぁ、いいだろう。ワタシの名前はポーリュシカだ」

……ポーリュシカ……

知らない名前だ。

「そしてここはフィオーレ王国にある森の中に作られた私の家だよ」

フィオーレ？

……聞いたことないぞ。

どこだ、ここは！？

1　薬草集め

深夜
すでに陽は落ち、月の光以外は何もない時間。漆黒に包まれた森の中にある一本の大樹の枝に、私は立っていた。

じっと見る視線の先は、辺りを覆う木々が全く生えていない場所だ。そこは半径3メートル程の丸い円の地面が剥き出しになっており、月の光で照らされている。

それでもすべてが光に染まっているわけなく、円の端には数本の木々によって影が出来ていた。

「ゴブリンはまだかよ」

私が婆さんに助けられて既に二年が経っている。現在は婆さん家の近くにある木の中に家を作り生活している。

どうやら婆さんは高名な治療魔導士らしい。そして大の人間嫌いだとよ。しかし、私は平気みたいだ。一度そのことを聞いてみたが、はぐらかされた。私は人間には見えないのか？

いやいや、どこからどう見ても人間だろう。赤色の目と白髪の立派な男の子だ。まぁ男の子はこの時間に外にいないんだけどな

それにちゃんと成長もしている。あの日から身に着けている漆黒のスーツは裾と袖が短くなりつつある。もっと成長するんだ私！

つまり、成長できている私は人間だと思う。たぶん……。いや絶対人間に決まっている！！！

まったく、婆さんのせいでいらぬ心配をしてしまったではないか。しかし、変なことを悩むのはヤバいな。あまり脳を動かすと記憶を思い出してしまうかもしれない。それだけは避けねば！

とにかく、私は人間で決定だろう。

まぁ、だから優しい私は人間嫌いの婆さんのことを考え、離れて生活した方がよかろうと答えが出た。そのため、今では別の場所に住んでいる。

飯とかは作って貰ってるから、あんまり意味ないけど……。

別に独りがよかったための行動ではない。ホントだぞ？ホントなんだから！！

人と生活していると危険だと感じたんだ！！！

おっと、話が逸れてしまったな。

えっと……私は二年経っても、今だに記憶喪失のままだ。どうせなら、このまま記憶が戻らなければいいのに……。

ちなみに、最初はヒモのような生活をしていた。しかし、何時まで
も婆さんの世話になるわけにはいかないと一大決心し、薬草集めの
仕事をしている。もちろん報酬もちゃんと貰っている。

……別に人里に降りた時に見た宝石が欲しいための行動ではない。
ただ、婆さんの手伝いをしたかっただけだ。

まぁ、つまり

婆さんが治療魔導士として動くには薬草が必要な時もあるのだ。し
かし婆さんは高齢者である。薬草採集も一苦労であろうと考えたた
め、暇な私が請け負っているというわけだな。

そして、現在はゴブリンというモンスターを待ち伏せ中だ。

こいつは

リスを小型犬くらいに大きくした感じのモンスターだ。ピンク色の
毛が全体を被い、所々に茶色のまだら模様の毛がある。そして一番
重要なのがこいつらが着けている緑色の葉っぱだ。

この葉っぱこそが、私が今日求めている薬草だ。名をゴブリンの葉
っぱと言う。

うむ、素晴らしく分かり易い名前だ。感嘆するな。この名前を付け
た人は賞賛に値する。

「わん、わん」

ちなみに、このように犬の鳴き声に似ているぅ！？

《《《わん、わん》》》

で、出てきやがった！！　しかも６匹だと！……なかなかどうして……よい金儲けになるではないか。ぐふふ

実はこいつらは一応、レアモンスターらしいのだ！そして、言わずもがな薬草もレアらしい！！！

夜行性で単独では行動せず力も弱く性格も臆病なため、中々人前には現れないのだ。しかし、まぁ６匹も現れるのは初めてだ。

今まではいくら集団行動を得意としているからといっても４匹が最高だったからな。素晴らしいぃ！

『わんわん』

あぁ、なんて鳴き声だ。まるでどうぞ、ジェニー（お金）を貰ってくださいとばかりに鳴いてるようだ。

その気持ち、受け取ったぞゴブリン達よ！！！

幾分か眺めていると、ゴブリン達は、月の光を楽しむかのように踊ったり跳ねたりしている。なんて可愛らしい行動だ。ファンシーものが好きな女性には、たまらないぞ。私にも金が踊ってるように見えて幻想的だ。

そう考えつつ、私は【影沼】と誰にも聞こえないような小さな声で呟くと、足元に魔方陣を展開した。黒光りの魔方陣のため月の光に夢中のゴブリン達は気付かない。

毎回思うが、バカじゃないのか……こいつらは。普通、発光したら気付くだろうが。

まぁ、それは置いといて、薬草の採集が先だな。既に魔法は展開したから時間の問題だがな。

そう思い、楽しそうに踊っているゴブリン達を眺めていると

「わん！？わん！？」

一匹のゴブリンが悲痛の叫びを上げ始めた。当たり前だな。なんせ自分の体が自分の影に、ずぶずぶと沈んでいるのだからな。

『わん！わん！？』

おぉ、おぉ、他の仲間が助けに入るか……いいねぇ……いい友情だよ、君達ぃ。

おやおや、全員で引っ張りあげようとして大丈夫なのかい？

『わん！？』

ほらほら、そのゴブリンの影に触れたらダメじゃないか……これで４匹が終了だね。

残る２匹は……おぃおぃ白状じゃないか。沈んでいく仲間達を助けなくていいのかい。

「わん！？わ……」

ほらぁ、１匹いなくなっちゃったよぉ？

「まぁ、お前達も終わりだけどね」

そう私が小さく言った時、ゴブリンは仲間達が沈んでいくのを震えて見ていた、しかし、その残り２匹のゴブリン自身の影から、にゅるにゅる漆黒の手を出し、一本ずつ近づかせる。

くくっ、2匹のゴブリンは気付いていない。

これで終わりだね～。今日はたんまりと金が手に入りそうだ！！！

そう、私が笑みを浮かべ思いを馳せている

その時

「わんわん！？」

体の首下まで完全に沈んでいる瀕死認定のゴブリンが吠えて教えやがった！！！

「野郎！！！」

仲間の必死の声に気付いたゴブリン達は近付いてくる手をスルリとかわし大きく飛び退く。

「失敗だ！ちくしょう！」

かわし飛んでいるゴブリン達はほっと安堵する。

それを見て私はくやしが

「……なんてねぇ」

るわけがなかった。

「「!?」」

ニヤリと私が笑うと、共にゴブリン達は地面に着地した。しかし、着地した途端に木々で出来た影にズブリとハマり、声を出すこともなく一気に沈んでしまった。飛んで勢いがあったんだろう。一瞬の内だったね。

これで終わりだと言っただろう?

待ち伏せしとくなら、トラップは常套手段だよぉ残念~。

程なく、すべてのゴブリンが影の中に沈んでいった。

ぐふふ　薬草採集おーわり

1　薬草集め（後書き）

とある魔導師の家にて

「おはよう、婆さん！」

「あぁ、おはよう」

「見てくれよ！ゴブリンの葉っぱを6枚もゲットだ！」

「……ちゃんとゴブリン達は森に返したんだろうね？」

「当たり前よ！葉っぱ採ったら返してあげたさ」

「それならいいさ」

という会話があったとかなかったとか

2　見つけた

ゴブリンの葉っぱ6枚という大挙を成し遂げてから数年が経った。
あれから6匹の集団が現れることはなく、残念な日常を送っている。
まだ宝石を買うためのお金は貯まっていない。

高すぎるんだ、こんちくしょう！

それに身長も伸びたから新しいスーツ代に貯めたお金が消えてしまった。何て儚いんだ。お金なんて貯めても貯めても出て行く一方だ。
……べ、別に無駄遣いはしてないさ。

ちなみに今は婆さんから頼まれた買い出しの帰り道だ。もう夕方だぞ。

かなりの量を買わされたんだが、あの婆さん……私のことを何だと思っているんだ。運び屋じゃないんだぞ、あとでしっかり報酬を貰わないとな。

まぁ、荷物は全て影の中に収納しているから楽チンなんだかな。

それにしても見渡す限り誰もいないな。

既に人里から離れている獣道を歩いているから、誰もいないし人工物もない。

……自然しかないというのも飽きてきたな。

薬草タバコでも吸いながら歩くか

私はそう考えると懐から小さな箱を取り出す。

そしてｂｏｘ型の箱から一本の細長い１０センチほどの、中に乾燥した薬草が詰まった白い棒を取り出し、口に沿えた。

じゅぽ　と安物のマッチを使い火をつけると、すぐに消えないよう、手を添えて口元の煙草の先端に火を近付ける。

そして一度、軽く吸うと火が灯ったようだ。先端から煙が出てきた。それを確認すると吸った煙をすぐに全て吐き出す。

私は一度目は肺に入れないタイプなのだ。そして2度目からはゆっくりと肺にいれ、薬草を体全体に馴染ませるように楽しむ。

うむ、やはりうまい。さすがは婆さん特性のモノだけはあるな。

「ふぅ～」

この薬草タバコは、微々たるものだが魔力を回復する効果がある。

【影の倉庫】は常に微量の魔力を喰うからな。こうやって適度に回復させないといけないのだ。

まぁ普段は、吸わなくても自然回復でどうにかなるんだが、今日は

大量に入れているからな。量が多いと消費魔力が多いのだ。

それにしても、

薬草タバコのくせにして、何たるコクと香しい匂いだ。本物のタバコにも劣っていないぞ…と思う。吸ったことないから分からないんだよな。

ただし、メンソールがキツい。これは薬草タバコの宿命だな、諦めるしかないか。

そう考えながら帰路につこうとしたとき……前方に人影を見つけた。誰だ……こんな夕暮れに人だと？

こんな時間に来るのは…マカロフしかいないか？

まぁ、近づけば分かるか

【転影移】

そう呟き足元に魔方陣を展開させる。煙草を銜えたままズブズブと、体を影に沈ませ前方に見える人影まで移動した。

…

…

…

「よっと、やっぱりマカロフだったか。よぉ、爺さん、薬貰いに来たのか？」

前方の人影に転移し影から這い出ると、そこにいたのは小柄な白髪の爺さんだった。

この爺さんの名前はマカロフ・ドレアー。何か偉い人なんだとよ。確か…フェアリーテイルだったかな？そこの魔導士ギルドのマスターらしい。

「ナナシか！？…ビックリさせるでない！（相変わらず、気配を感じなかったのぅ）おまえこそ何故ここにおる。薬草集めはよいのか？」

爺さんは私を見上げながら言葉を吐いた。それにしても、相変わらず小さい爺さんだ。

「あぁ、今日は買い出しを頼まれたんだよ。それよか…歩きながら話そうぜ」

おまえが止めたんじゃろうが！と叫ぶ爺さんを置いて、私はスパスパと煙草を吸いながらスタスタと歩いた。

「待たんか！……はぁ、本当にお前さんは自由人じゃのぅ」

「自由が一番だ。このまま私は自堕落に生きてやるんだ！！！」

「いや……ダメじゃろ（コヤツ……まだ逃げておるな）」

なんだと！？

私が永遠の抱負を語ったのに爺さんはあろうことか、婆さんと同じセリフを吐きやがった。

何て奴らだ。自堕落の何が悪いんだ！薬草集めだけで生きていけるぜ！金も手に入るし最高の人生だぜ！

私は森から一生、外には出ないぞ！！！

「まぁ……それも今日までじゃからな」

「あん？何か言ったか爺さん？」

「いやいや、それよりお前さんに尋ねたいことがある」

むぅ、いきなり真剣な顔をしてどうしたんだ。

「儂の他に誰か人を見なかったかのぅ？連れと、はぐれてしまって

の」

「んにゃ、見てないな。てか何だ、連れがいたのか……探してきてやるよ。この森で迷ったら大変だからな。んじゃまたあとでな、爺さん」

「ちょっ、待」

マカロフが叫んだ時には既にナナシは姿を消していた。

（儂……誰が連れなのか、言ってないのじゃが……相変わらず自由奔放な奴じゃ……）

そう考えたが、まぁ、大丈夫じゃろ。儂、知ぃらなーいと呑気に言うとポーリュシカの家へと歩みを進めた。

……　……　……　……　……　……

…

「あーぁ、失敗したな。誰が迷子になったか聞いておくんだった」

現在、私は爺さんの連れを探しているのだが、見つかっていない。

一度、婆さんの家に戻るか？すでに家にいるかもしれないからな。

そう考え、帰路に着こうしたその時。

……ん？今、何か動いたな。モンスターか？

……いや、人みたいだ！遠すぎてよくわからないが行くべきだろう。

【転影移】

ずぶり

「やっぱり人だったか、誰だ～迷子のば！？【転影移！！】〔ガシッ〕ぎゃっ！」

「やっと見つけたわよ！ナナシ！」

「あぁぁぁぁぁあたまが～！？」

私が転移した場所には、誰かいたが、その誰かが問題だった。その人を見た瞬間、再び転移を使い逃げようとしたが……影に潜る前に頭を掴まれてしまった。あぁ終わりだ、すべてが終わった。つか頭が痛い。掴む力を間違えているぞ。

「……ミラ……ジェーン」

「全く！どこにいやがった！！！」

「ば、婆さんに頼まれて買い出しに行ってたんだって痛い痛い痛い、掴みすぎだ！馬鹿野郎が！！！」

「ふんっ！！！！！！！」

「痛！？」

ぐおぉ、投げやがって……何て力だ。このアマがぁ！！！

「それよりさっき、何で逃げようとしたんだ？……言えよ。あぁ？」

【ぐりぐり】

「いって！足で頭を踏んでんじゃねぇ！」

「……あぁん？」

くっ！何て乱暴なアマだ！もう少しお淑やかにできないのか……ぐおぉ頭が痛い。同じ場所を的確に踏みやがって！二度攻めか！！この悪魔がぁ！！！

【ぐりぐり】

「ふっふっふ、可愛いな、ナナシ♪」

「ドS！？」

現在、地面に横たわっている私の目の前で腕を組み、グリグリと私の頭を踏んで頬を蒸気させているドS少女の名前はミラジェーンと言う。

通称ミラだ。ちなみに私と同じ１３歳だ。ペチャパイめ、顔が可愛いだけで女の欠片すらないクソアマだ！

【ぐりぐり！！！】

「ぐえぇ！？」

「今、変なこと考えただろ？」

「め、めっそうもございません！！！」

銀髪の長い髪を頭の後ろでひとくくりして、たれ下げている。服は子供らしくないヘソ出しの黒のタンクトップに短パンと太ももまであるニーソを履いていた。最近爺さんのギルドに入ってきた新人…らしい…。

【ぐりぐり】

あぁ何故、私はこいつと知り合ってしまったんだ。

あの時、フェアリーテイルに薬なんか届けなければよかった。

「聞いてんのかよ！ナナシ！」

「あぁ、聞いてるよ。とにかく足をどきやがれ、痛いだろうがよ…」

「ちっ」

……何でそんな残念そうな顔で足を退けてんだよ！

「……逃げようとした理由はあれだ……」

「何だよ？早く言えよ」

そんな顔で睨むなよ、青筋浮いてるし顔がヤバいぞ

「まぁ……あれだあれ……ん？誰だアイツら？」

「……あ？」

「あっ！あんな所にエルフマンとリサーナが！？危ない！？」

そう言って、私がミラの後ろを指すと

「何！？」

ミラは瞬時に振り返り、二人を探し始めた。

おぉおぉ、何て優しいお姉ちゃんだ。家族愛　それも良し。だか！

私のことは、ほっといてくれ！

【転影移】

じゃに～

ミラが振り返った時には既にナナシはいなかった。

「……いないじゃない。一体どこにいるのよ。ナナ……し……」

また騙されたと呟いたミラはぷるぷると体を震わせると大声で叫ん

だ。

「ナナシ!!!ぜってい!ぶっ倒す!!!」

ひぇ～くわばら、くわばら
私を探す声が、ここまで聞こえるとは……ミラ……恐ろしい子!?
しかし、もう辺りは暗くなってきたし、私を探し出すのは不可能だな。勝った!ぐふふ

とにかく一安心だ。あぁ、それにしても頭が痛い、踏みすぎだ。バカミラが!

【ガツン】

いって!?……あぁん?　こんなとこに岩なんてあったか?

【ガラガラガラ、ドシャン!!!】

「は?岩が崩れた?」

わ、私がぶつかっただけで岩が砕けただと？

私って実は凄い怪力の持ち主なのか！？

……という冗談は後にして……何だこれは……はっ！？トランクケース！？ヤバいぞ、にげ

【ガシッ】

後ろから腕を掴まれた！？

「探したぞ。どこにいたんだ、ナナシ」

あぁ、その声は……何故ミラといるんだ。お前たちは犬猿の仲だろうがよ

「聞いているのか？」

ギギギと顔を後ろに向けると、ふてくされた顔のアマが私の腕を掴み立っていた。

コイツの名前はエルザ・スカーレット。赤髪の長髪を後ろにひとくくりにして三つ編みにしている。

服装は、上半身はYシャツの上から鎧を羽織り下半分は白の長いスカートを履いていた。腰には剣をさしている。

ちなみにフェアリーテイルに所属している凄腕の魔導士だそうだ。

しかし何故に、ふてくされているのだ。……いや……たぶん、私の記憶が確かならば……。

「あぁ、私の荷物を崩したことは許さんぞ」

「ごめんなさい」

あぁやっぱりね。てか、こいつの荷物多すぎなんだよ。どんだけ持ってきてんだ。

「ふっ、いいだろう。しかし私の荷物をすべて持つなら、許してやろう」

偉そうにしやがって！

「はいはい、持ちますよぉ」

こいつに逆らったら、地獄が待っているからな。手を掴まれている以上大人しくするしかあるまい。

まぁ、影に入れるだけだから簡単さ
よっこらせと

「っておい、手を離せよ。動きづらい」

「ミラのように逃げられたら困るからな。それにしても、この勝負は私の勝ちだな。ふふっ♪」

ちっ逃げれると思ったのだがな。それにしても……何の勝負だよ。
そんなに、ナイ胸張って喜ぶようなことなのか？

って、そろそろ時間がヤバいな。

「逃げねぇよ、もう時間も遅いんだ。早く帰らねぇと婆さんに「見つけた、ナナシ！！！」やばっ！？」

【転影ぃぶはぁ！？】

ぜ、ぜ、全力疾走してからの跳び蹴りだと！？

うぉぉ……し、死ぬ……エルザ！？離しやがれ！？

え？何故、拳ぶふぅ！？

ミラの全力疾走＋跳び蹴りを喰らった私は吹き飛ぶ筈だった。しかし、しかしだ。私の腕を掴んでいるエルザが手を離さなかった。そのため、ぐるりと半回転したあとエルザの方に向かい、何故かエルザの拳で沈められたのだ。

なぜぇ？なしてぇ？意味が分からない。

「てめー！、よくも騙しやがったな！って何でエルザがここにいんだよ！」

「遅かったな。この勝負は私の勝ちだ。ふふん♪」

「最初に見つけたのは私だ！！！　だから、ナナシは私のだ！！！」

「いやいや……コイツは私にこそ、ふさわしい！！！」

「ふざけんじゃないわよ！」

「なんだ？やるのか？」

お、おい……こち……と……ら重……傷だ……ぞ。け……んか……してる場……合か……たすけ……。

そこまでが限界だったのだろう、ナナシはガクリと気絶した。しかし、気絶したナナシに喧嘩をヒートアップさせている二人は気付く

ことはなかった。

3　一歩

「知っている天井か？って痛！？」

目を覚ました私はゆっくりと上半身を起こした。体のあちこちが痛い。

そして起き上がった私は辺りを見回す。どうやら、どこかの部屋のようだ。

窓から見える風景は漆黒に染まっているから夜なのだろう。

部屋の隅には適当に投げ重ねられた服の塊と、その横に積み重ねられた魔導書の山。テーブルの上にある灰皿には大量の吸い殻がある。

それに加えて、そのテーブルの上に二つの精巧な人形が座っている。

……完全に私の家の中だ。何時帰ってきたのだろうか。

それにしては

体中が痛い、頭はズキズキするし、腹辺りも尋常じゃない痛みだ。

ぐおぉ！それに引きずられてできたような傷跡があるぞ！

なんだこ「おっ、やっと起きた。何時まで気絶してんだ、長すぎんだよ」

「誰かさんが引きずって、ここまで運んだからではないのか」

「あぁ？私のせいだと言うの！？」

「その通りだろう？」

「な！？てめぇ！」

何？このカオス

テーブルの上にいる人形達が…上！？

「おまえら！そこはテーブルだ、ボケ！降りんか！横に椅子があるだろうがよ！！！」

「大体エルザが！」

「いやいや…ミラのせいだろう」

……聞けよ、私の話を……。

そう、テーブルの上で言い争いをしているのは先程、森の中で私に暴力を振るったミラとエルザだった。

あまりの衝撃に現実から逃避していたようだ。

てか何故こいつらは私の家にいるんだ。

「おまえら、何故ここにいる?というか、よく私の家がわかったな」

私はさっきよりも痛む、頭を押さえながら何時もの喧嘩をしているミラとエルザに話し掛けた。

すると

「「ポーリュシカさんが教えてくれた」」

二人はいがみ合いながら同時にまったく同じことを喋った。

……これは聞こえてんのか。ということはさっきのは無視したのか!?

何てクソアマ達だ…いい根性してんじゃないか。

それにしても、実は二人とも仲がいいのではないのか?声がピッタリ合っていたぞ。

それより!婆さん!何てことをしてくれたんだ。

私の唯一の楽園を知られてしまったではないか!?最悪だ。最低で最悪の事件だ!もう引っ越そうかな。

まぁ、それより

「婆さんの所にいくか…早く荷物を届けないとな…よっこらせっ」

早く行かないと殺されるかもしれないからな。前に時間を守らなかったときは酷かったからなぁ。あの婆さん、短気なんだよ。っと、愚痴を言う前に急ぐか。そう考えながら立ち上がると、婆さんの家に向かった。

ミラとエルザ？
二人とも喧嘩がヒートアップして家の物を投げ出したから放置だ放置。

たぶん帰ってきたら、我が家は散々たる状況になっているんだろうな。

うぅ、ごめんな。私の魔導書達よ。きっと今頃バラバラだな。ミラが投げて、エルザが剣で切っている光景が目に浮かぶよ。

あぁ、私の家から変な音が聞こえてくる。魔導書は消滅してもいいが、私の秘蔵書達よ、生き残ってくれよ。

まぁ、隠してあるから大丈夫だろう。

…

…

…

「入るぞ、婆さん…て爺さんもいたのか…」

私が婆さんの家に入ると、マカロフの爺さんとお茶を楽しんでいた。

「おぉ、起きたか～」

「やっと起きたようだね」

のほほんとしやがって！

「何故、あいつらがここに来ているんだ！そして何故、私の家を教えた！」

あまりに、のほほんとし過ぎたろ。つい叫んでしまったではないか！

てか、ざけんな老人ども！体中痛いわ！財産も消滅していってるわ！

ちくしょう！

「どうにかしろ！！」

「まぁまぁ、落ち着くのじゃ」

「そうだよ、落ち着きな。どうせ、あの家とも今日でお別れなんだ。別に教えてもいいだろう」

「これが落ち着いて入られるかって……何？今日で最後だと？どういうことだ婆さん」

私の怒鳴り声を物ともせずに二人は私を落ち着かせようとしたが、これが落ち着いていられるか！と思い再び叫ぼうとしたが、婆さんの口から、信じられない答えがあげられたことに気付いた私は疑問を口にした。

「……あんたはマカロフのギルドに入るんだ。だから明日、ここから出て行くんだよ」

「は？フェアリーテイルに？嫌に決まってんだろうが。婆さん、寝言は寝て言えよ。知っているだろう、私は自堕落に生きたいんだ」

何いってるんだ、この婆さんは、私がギルドなんて入るわけがないだろ。

ギルドとは魔導士達の集まる組合で魔導士に仕事や情報を仲介する場所らしいが、薬草集めの私には関係ないぞ。

ギルドに所属しない魔導士は一人前として認められないらしいが、名声や世間なんてどうでもいい。誰にも注目されず、だらだらと生きれるならな。

「はぁ……とにかく明日ここをマカロフ達と出な。今日買ってきたモノは私からの餞別だ。……私はもう寝るよ。それと、もう薬草はいらないよ。欲しくなった時はあんたに依頼してやろう。」

そういうと婆さんは立ち上がり部屋から出て行った。

「ちょっと待てよ！」

私の制止も聞かずに。

……

……

……

部屋からポーリュシカが居なくなるとマカロフとナナシの二人だけになった。

「はぁ、いきなり何なんだよ。マジで意味がわからん。」

立ち尽くしたままポツリと呟くナナシに、マカロフが話しかけてきた。

（何だよ……何でそんな真面目な顔をしているんだ。）

「ナナシよ。〔おまえは外の世界を見てみたらどうだ〕……ということじゃよ。奴は口下手じゃからの。だが、あやつの考えに儂も賛成じゃ、お前さんはまだ若い。こんな所で腐らんでもいいじゃろ？」

「腐る！？どこが腐っていっているんだ。私は薬草、魔法、他にも幾つかの勉強している。それなのに腐るだと？腐るわけがないだろうが！逆に私は成長しているんだぞ！！！」

「……ただ知識を溜め込んでどうするのじゃ……」

「あぁ？」

マカロフは顔を真っ赤にして怒りを露わにするナナシをジッと見つめる

「もっと上を向いて生きてみよ。何を隠れてコソコソとしておるのじゃ」

「……べ、別に隠れてなんか……」

そう言われると、先ほどまで威勢のよかったナナシは成りを潜ませた。唇を震わせながら、マカロフから目をそらす。まるで何かから逃げるように……。

「儂の目を見よ！」

「っ！？」

「そんなに記憶を取り戻すのが怖いのか？お主は何の勉強をしておるのだ。どうせ記憶に関することじゃろ？」

「！？……べっ別にそんなんじゃ……」

バツの悪そうな顔になるとナナシは無意識のうちに、ぎゅっとスーツの裾を掴んだ。

「何を悩んでおる。大丈夫じゃ。記憶を取り戻したりしたとしても、お前さんはお前さんじゃよ。」

「！？……ほ、ほんとにそうだろうか……わ、私が記憶を取り戻したら私は居なくなるじゃないのか！？」

マカロフの返答を聞く前にナナシは、今までため込んでいたものをすべて出すかのように、矢継ぎ早に言葉を吐き出す。

「わ、私は私が何者か、どこで生まれたのか、何をしていたのか分からないんだぞ！唯一魔法は覚えていた！しかし、真っ当な魔法が少ない！

私が私である前は、きっと真っ当じゃなかったんだぞ！そんな私が出てきて見ろ……私は私でなくなってしまう可能性のほうが高いじゃないか！！！」

「それでもお主がお主として今、ここに生きていることには変わりはないのじゃ。

刺激の少ない自堕落な生活を送り記憶を思い出さないようにするのもよかろう。だがの、あえて外の世界に飛び出してみようと思わんか？

記憶なんぞ思い出しても大丈夫じゃよ。お前さんが自分を忘れない限り……の。未来は誰にも分からないのじゃ。決めつけだけで生きるのは辞めたほうがよい」

「……だが、それだと迷惑を掛けるかもしれない……私は誰かを傷つけるかもしれない……」

「迷惑結構！！！！！」

びくっ

全身を震わしながらナナシが言葉を発すると、マカロフはいきなり大声で叫び立ち上がった。
ナナシはビクリと驚き、俯いていた顔を上げ怯えた目でマカロフを見た。

「ガキが何を生意気なことをいっておる！！何のために大人がおると思うのじゃ！！！」

そう叫んだマカロフは一呼吸置くと　にかりと笑い

「……困った時はガキはガキらしく、大人を頼ればいいのじゃ。そのために儂らがおるのじゃからな。何時でも助けてあげよう。だから、外に出て見ぬか？」

「……」

マカロフはそう言った後、顔を伏せ、沈黙を続けるナナシに、

「別に今日、答えを出さずとも良い。ゆっくりと考えてみよ」

そう言葉を掛けると家の外に出て行った。

……

……

……

爺さんが出て行って既に3時間が経つ……か。その間、様々な考えが頭に浮かび……は消し、浮かびは消し……と繰り返していた。しかし少し結論でたような気がする。

「私も……ただのガキか」

私はただ逃げていただけなのかもしれないな。記憶を思い出すということから……。そして私は私でなくなるという恐怖から。

あぁ、未来はどうなるか分からないよな。それなら本当に自由を求めて生きてみるかな

そう考えると私は外に出て爺さんがいる場所まで歩いた。どうやら爺さんは月見酒をやってるみたいだ。

ジジイのくせに飲み過ぎだ。……でも今を楽しく生きているということか……爺さんらしいな

そのまま爺さんの背後に立つと一緒に月を見上げながら話し出した。

「もう決まったかの？」

「あぁ……私はこれからどうなるかわからない……それに、この考えはブレるかもしれない。耐えきれずに逃げ出すかもしれない……でも……でも未来がわからないのは誰だって同じなんだよな」

そこで一呼吸置き振り返った爺さんの目を一度見て、再び顔を上げ月を眺めながら

「もう少し、前に進んで見ようかと思う。進まなきゃ何も始まらない。そして本当の自由を手に入れることもできない……だから……だから、私が私であるために自由に生きれるように外の世界を見てみたい。偽りの自由じゃなくて本当の自由を求めて歩きたい！」

顔を戻し再び爺さんの目を見た。

「……だから……」

酒の影響で真っ赤になった顔だ。だが、目は真剣そのもの。本当に凄い人だったんだな、この人は。今になって実感するよ。

「だから、私をフェアリーテイルに入れてください！マスターマカロフ！！！」

思い切り頭を下げ、そう言うと、マカロフはナナシから体を背けると月を仰ぎ見た。

「自分の信じた道を進め……それがフェアリーテイルの魔導士じゃ、よいな？」

「あぁ、ああ！」

頭を下げたままナナシの瞳から、自然と涙が溢れ出て、頬をつたった。

……生まれて初めて本気で泣いたな。

進もう……自分の信じた道を……最高の未来を目指して！

今日から私はフェアリーテイルの魔導士だ！！！

……　……　……　……　……　……　……　……　……　……

月明かりが照らす、この場所が私のスタート地点だ。

スタート地点を作ってくれてありがとう、ポーリュシカ婆さん。

スタート地点に立たせてくれてありがとう、マスター。

私は生きる、私として。

…

ん？何だ？この焦げた匂いは…。

ふと私とマスターが月を眺めて感慨にふけっていると、どこからか焦げた匂いが漂ってきた……

……まさか……

ぎぎぎとマスターと共に後ろを振り向くと……真っ赤に染まる空が見えた。

「あ、あそこは！？」

「……私の家のある場所だ……」

そう言うやいなや

私は【転影移】を使いマスターを置いて一人、家に向かった。そして私が見た光景は……完全に燃え落ちている我が家だった。

あぁ！！私の秘蔵のグラビア写真集が！！！

私は膝から崩れ落ちると二度目の本気涙を流した。

その横でどこか、ふてくされた顔をした妖精が、二人いたが見なかったことにした。

そんなに巨乳がいいのか、燃やして正解よ、とか呟いている。

「うむ、山火事だったんだな」

私は一歩、進んだ気がする。

4　無情

私がフェアリーテイルの魔導士になり数ヶ月が過ぎた。

この数ヶ月の間にいくつものクエストをクリアすることができ、少しは魔導士として生きるのに慣れてきたようだ。

お金も薬草集めとは段違いに入ってくるし、フェアリーテイル様々だな。

ちなみにギルドに所属する魔導士達は所属しているギルドの紋章を体のどこかにつけている。

フェアリーテイルは鳥の形をした紋章だ。

例えばミラは左足の太ももに白い紋章をつけている。

私も体のどこかに付けようとしたが……何故か紋章を体に付けることが出来なかった。そのため今は、ネクタイピンを紋章の形にして付けている。

しかし、何故付けることができなかったのだろうか……。

まぁ、そんなことをウジウジと考えても仕方ない。

それにしても今は、充実しているな。

自由に生きることができてるようだし、金もある、薬草タバコも旨いと人生を満喫してる。

そう考えている私は現在、マグノリアと言う街にあるフェアリーテイルのギルド内にいる。

その中で、カウンター近くの長いテーブルを使うための長椅子に横になって寝そべっていた。

ちなみに、寝そべりながら、片腕で頭を支えながらタバコを吸っている。

床に置いた灰皿は新しいタバコカスの投下を拒否している。結構吸ったなぁ、しかしまだまだ足りん！

私みたいなのが、タバコを吸っていて怒られないのかって？

ギルドのみんなには、薬草のタバコだと真実を伝えているから怒られることはないさ。

それに、ここのギルドの奴らは比較的、自由奔放だからな。なかなか癖のあるやつが多いんだよ。だからこんな風に寝ていても怒る人はあまりいないのさ。いやぁ実に自由って最高だな。自由万歳！！！

そう考え、悦に浸っていると

「ナナシ兄ちゃん、寝ながらタバコ吸ったら危ないよ」

「そうだよ、ナナシさん危ないよ」

誰かが注意してきた。真面目な奴らもいるんだよな。めんどくせぇ……誰だよ……

立ち上がるのはめんどくさいので、寝たまま赤い目だけを動かし、ギロリと睨むと、そこには少女と少年がいた。

「リサーナに……エルフマンか……散れ」

この二人はミラの妹と弟だ。

リサーナはミラと同じ銀髪で髪型をショートカットにして、ピンク色の膝あたりまでのワンピースを着ていた。１１歳だ。

エルフマンのほうも銀髪で、こちらはざっくばらんに髪を短く切っており青いスーツを着て赤い蝶ネクタイをしていた。１２歳である。

ちなみに兄弟のなかで一人だけ色黒な肌を持っている。

「聞いてる?座って吸わないとダメだよ?前にミラ姉達に怒られた

の忘れたの？」

「あぁ？うっさいな。ガキは散れ。ナツやグレイ達のように外で遊べよ。
それに座って吸うなんて、めんどくせぇよ。今はアイツらはいねぇんだから、イイだろうがよ」

「……私がミラ姉とエルザ、カナに言いつけるから……」

「ん～！よく寝た♪」

そう言うと勢いよく立ち上がり、私より身長が高いエルフマンに寄りかかる

「寝ながらタバコなんて吸ってないぜ。な！エルフマン！」

そう同意を求めると

「え？あ、うん…そうだね」

エルフマンは俯きながら同意してくれた。うむ、ホントにいい奴だな。ミラの弟とは思えないな

……が、

「ナナシ兄ちゃん！薬草くさいよ。それに床はタバコカスばっかりだし……もう！絶対ミラ姉に言うからね！」

と痛烈なツッコミを入れられた。……リサーナェ

悪魔の妹め！！！

「はぁ」

私は何時か来るであろう、悪魔達のことを考え、憂鬱な気分になった。

が、ただで転ぶ私ではないのだ。見ていろよ、リサーナ！

ワザと哀愁漂う背中を二人に見せながら、がくりと肩を落とす。そして二人の見えないところで、タバコの火を指でもみ消すと、悲痛な面持ちを作り、灰皿にゆっくりとタバコを捨てた。

……どうだ？

「全くもぅ……いいよ、今回はお姉ちゃん達には言わないであげるから」

「ふっ」

……勝った。さすがはリサーナだ、心が澄んでいるだけはあるな。
しかしあいつ（ミラ）に言われたらボロ出しそうだな。この子優しいから。

と言うことは……次はあれの出番だな

「頼むからホントに言わないでくれよ、ほらっ、マグノリアテーマパークのチケットを上げるからよ」

「「ほんと!?」」

そう言って影から取り出したチケットを2枚ずつ渡すとリサーナとエルフマンは喜びに満ちた顔になる。

ちなみに、このチケットは前回のクエスト報酬のオマケとして依頼主に請求したやつだ。行く気はなかったんだが、貰えるもんは貰わないとな

いやぁ、役にたってよかったな!チケットよ!!!

「あぁ、ナツとデートしてこいや。エルフマンは誰か誘っていけよ」

「「うん♪」」

私がそう言うとエルフマンは大きく頷き、リサーナは頬を蒸気させ嬉しそうに答えた。

おぉ、おぉ、青春してるねぇ。そうなのだ、リサーナはナツという少年に好意を寄せている。

これで告げ口はすまい、一丁上がりってやつだ。ＨＡＨＡＨＡＨＡ！！！

私が、心の中で高らかに笑っている時、一人の女が近づいてきた。

……何しに来た……

「買収されてるよ、二人と、きゃっ！？」

「ばかやろう！？何いってんだよ。」

すぐさま女を腕で拘束し、リサーナ達には聞こえないように小さな声で喋る。

「本当のこと言ってるだけじゃない」

女は何やってるのよと私を見てきた。こいつぅ！私の必死の努力を壊すつもりかぁ！

「どうしたの？ナナシ兄ちゃんに、カナ？」

「何でもないよ～ほらっあそこに座ってジュースでも飲んでな、私の奢りだよ～」

「白々しい。リサーナを騙してるくせに」

ぐおぉぉ、殴るぞ、このペチャパイがぁ！！

「ちょっとこっちに来い」

この女、カナ・アルベローナ　長い茶髪をひとくくりにしてオレンジを基調としたワンピースを着ている。

フェアリーテイルの子供組の中でも、ギルド歴が一番長いやつだ。１２歳である。年下がぁ！！

「ちょっと！引っ張らないでよ」

「余計なことしやがって……何だよ、その手は……」

リサーナ達から離れ、マスターが座っているカウンター辺りに連れて行くとカナは、にこりと笑いながら手を出し、何やら催促している。

「♪」

「……チケットなら…もうないぞ」

「……なら連れて行っててよ」（ナナシとデートできる♪）

「自分の金でいけよぉ…「リサー」わ、わかったよ……今度な……」

お、脅しかよ。頼むからリサーナには言わないでくれ。
騙した私が言うのもなんだが、あの子の純粋な心はそのままにしてやってくれ。エルフマン？男は強く生きろよ

「絶対よ♪ナ・ナ・シ・の奢りだからね。じゃね～」（ミラ達にナナシはあげないんだから！）

な、なんてアマだ……吸い尽くされるぞ……私の貯金が。
終わった……終わったんだ。またお金がなくなっていくよ。あぁ無情……。

そう私が肩をがっくりと落とし、悲しんでいると、何時の間にかギルドに来ていたミラが近づいてきた。

何か顔真っ赤だぞ？

「ミラ？どうした「何やってんだよ、邪魔だ！！！」んぐふぅ！？」

「そんなとこに突っ立ってんじゃねぇよ！おらよ！！！」

「ってぇな！いきなり何回も蹴るんじゃねぇ！ミラ！！！」

おまっ、どれだけ私に暴力振るえば気がすむんだ……理不尽だぁ

「うっせぇよ、カナなんかと楽しそうに喋りやがって！」

「馬鹿やろう！搾り取られたんだよ私は！見てみろよ、このやつれた顔を、次は金を搾り取られるんだぞ。って、どこにいくんだ、私の顔をしっかり見やがれ、ミラジェーン！！！」

私は、カナに搾り取られた精気がない顔を見せようと、ミラの顔近くまで近付いた。ミラは一度は顔と目をしっかり見たが、

その後は私の目から逃げるように目をキョロキョロさせている、と思ったら何も言わずに…去っていきやがった！

ちゃんと見やがれ！！！

……ただ、私の叫び声がギルド内に響き渡るだけで空しさは倍増だよ、ちくしょう！

「……さびし……」

そう呟くと私はリサーナ達のテーブルに戻ることにした。

その時、

「卵だぁ！！卵ひろったぁ！！」

ナツが、自身の体ほどもある大きな卵を抱えてギルドに入ってきた。

「卵だぁ？」

5　でかい

リサーナに怒られカナには、たかられ……しまいには突然ミラに蹴られ、反論したら無視された。
何て可哀想なんだよ私は。虚しいわ、寂しいわで悲しくなってくるな。

「……さびし……」

そう考えると、うぅっ　と目尻を押さえながら、先程のテーブルに戻ろうとしている時

「卵だぁ、卵ひろったぁ」

そう言いながら、ナツが自分の体ほどもある大きな卵を抱えてギルドに入ってきた。

また変なモノ持って来やがって。今回は危険物じゃないのを願おう。

前なんて、人類の敵！黒い奴を素手で持ってきやがったからな。

……あの時はヒドかった……特にミラが、ミラがなぁ……思い出すだけでも寒気がする。よく生きていたな、私

エルザやカナも酷かったがミラはそんなもんじゃ……よそう…もぅ思い出したくもない。

ちなみにナツはボコボコにされていたな、それにプラスして何故か私も。

今でも不思議だ！、あのクソアマどもがぁ！！！　っとそれよりナツだな。

ナツ・ドラグニル

桜色の短髪をしており、鱗模様の長いマフラーを首に巻いているのが特徴だな。

年齢は知らんが、たぶんリサーナと同じじゃないのか、決して私とタメでも年上でもないガキだ。

何でもドラゴンに育てられたらしい。　ドラゴンねぇ……ホントにいんのかよ。

親がドラゴンってことはナツもドラゴンと結婚するのか……いや、有り得ないな。それに……リサーナがいるしな。

将来はリサーナとでも結婚するんじゃねぇの。お互い惹かれあってるからな。「只今、戻った」同世代と仲がいいことは良いことだな、うむ、ナツよ、「戻ったと言っているんだ！ナナシ！」私達みたいになるなよ。特に女には気を付けろ。人生破滅するぞ。

「んなもん、一体どこで？」

「東の森で拾ったんだ」

おっと、いつの間にか　ナツはマスター達と話をしているようだ。

「おい、聞いているのか」…それにしてもデカい卵だ。売ったらいくらになるだろうか。

……１０００ジェニーか……いやいや、五桁いっちゃうか！？いっちゃうのか！！これは、こうしちゃいられないぜ。

「ナツ～卵貸せ、うおっ！？」

【ガシッ】

「どこへ行く？」

「あんだよ！？邪魔すんじゃ！おぉ、エルザん……お帰り～♪」

「誰がエルザんだ、私はエルザんになった覚えはないぞ」

エルザぁ、いつ帰ってきたんだ。しかも何で怒ってんだよ。私に対して怒っているのならお門違いだろぅが。

「お帰り……エルザ」

「ああ、それでいい。只今戻った。ところで何の騒ぎだ?喧嘩しているような雰囲気ではないが…」

けっ、何がそれでいい、だ!ボケが!

「ナツが卵拾ってきたらしくてな、しかもバカでかい卵だ。「そうか」いやぁ、あれは売れるぞ。しかも高く売れるな。きっと五桁いくぜ、五って聞けよ!……また無視かよ…おまえから聞いてきたんじゃないのかよ…」

私に自分から質問してきたはずなのにエルザは、要点だけを聞くと話している私を無視してマスター達の所にいっちまいやがった。

私の話は長いって言うのかよ、すまなかったな!ちくしょうが!

もう今日は踏んだり蹴ったりだ!

時間はまだ早いがクエストにいくか…。

あっ灰皿あっちに置きっぱなしだった。

…　…　…

そう考えた私は新しいクエストに行こうかと、いそいそと準備をしていた。

「あれ？ないぞ」

しかし、灰皿を回収していないことに気付き、長椅子に戻ったが灰皿はなかった。

「おぉ、エルフマンや、私の灰皿知らね？」

「あっ……それなら姉ちゃんが片付けて……」

私の！奢りジュースを飲んでいたエルフマンが話し出した、その時

「エルザが帰ってきたってぇ！？この前の続きやるよ。かかっておいで！」

「ふっ、そう言えば決着は着いていなかったな、ミラ」

私と同い年の二人が喧嘩を始めた……テーブルに着いて私の！奢りジュースを嬉しそうに飲んでいたリサーナが、それを見て

「また喧嘩ぁ」と二人に苦言を発している。もっと言ってやれ！！
私が言ったら攻撃対象が私に変わるからな。それだけはごめんだ。
しかし姉妹でここまで違うとは……ミラ、過激すぎる子……。

「また始まったね。あれでエルザはナツやグレイが喧嘩してたら止めろって言うんだから……困ったものね」

何だ……カナか。

「あぁ、全くだな。って珍しいな、お前がスペシャル：フェアリーテイル：ジュースを飲んでるなんて……高いだろ……それ……」

そう言いながらやって来たカナはギルド内で販売されているジュースの中で一番高いジュースを美味しそうに飲んでいた。

バカ高いんだぞ、そのジュース。お前が買えるわけがない。誰に奢ってもらったんだ、マカオか？

いや……まさか……こいつ……。

「ごち♪」

「ぐおぉぉ！このばか！畜生が！……「言うよ？」はっ！？い、いいぜ……わ、私の奢りだ……」

ごち♪とか可愛らしくウインクした、このクソアマは……予想した通り私の名前でジュースを買っていやがった。

いくらすると思ってんだ。ちくそぅ、このアマに買収行為を見られたのが運のツキだったのか…。
まぁ過去はいい、戻らないからな、悔やんでも仕方がない…それよりも聞くことがある。

「……それ何杯飲んだんだ」

「これで十杯め♪」

「……うそだろ」

「美味しい♪」

過去は悔やむものだ！！！過去を悔やまない者なぞいると思うか、いやいない！

ちくしょう！破産だ…もう金は残っていないぜ…今回のクエスト失敗したら破産だよ！

森に帰るか

「それで最後にしてくれ……」

「え～まだ飲みたい」

「勘弁してくれぃ……」

このペチャパイが！！

……ん？何だよ…顔真っ赤にして腕で胸隠したりして…隠すモノなんてないだろうが…。

「えっち」

「ばかやろう！！お前の胸板見て発情するかぁ！私はボッ、キュ、ボンの三拍子が好きなんだよ！大体な！！」

顔を真っ赤にして体を抱き締め、モジモジしているカナに反論を続

けようとした、その時

「へぇ」「ほう」

《ガシッ》

「てめぇ、カナの胸、見てやがったのか」

「セクハラだぞ、貴様には失望した」

「「ちょっと来い」」

「な!?やめ、ぎゃ……ナツ、グレイ、助けてくれ!!!卵なんてどうでもいいだろうが!リサーナ、エルフマン、私を見捨てないでくれぇ!やめてぇぇぇ!!!!!!」

何時の間にか、喧嘩を終えていたミラとエルザに腕を掴まれた私は必死に仲間に助けを求めるが

「何の卵だと思う?」

「ドラゴンに決まってる!」

「ドラゴン!?」

誰も助けてくれず地下にある倉庫まで引きずられていった。そんなに卵が大事かよぉ！仲間じゃないのかよぉ

【サタンソウル！】

【煉獄の鎧！】

【マジックカード！】

「いやいや、それで殴ったら死ぬから！何だよ、その馬鹿でかい剣は！って何でカナまで入ってきてんぎゃあああああああああああああああああああああああああああああああああ！？」

……

……

……

……

「ぐふぅ」

「今度から他の奴の胸を見るんじゃねぇぞ！」

「反省をしろ、反省を」

「……ナナシのえっち……」

もうやだぁ、森に帰りたい。

三人のお説教?が終わると私は一階まで投げられて床の上で横になっていた。

「聞いてんのか!」

「聞いているのか!」

「責任取ってよ!」

…いや、まだ続いているよ…もうどうでもいいや…ははは…ふふふふ

私があまりのストレスに壊れかけていたその時

「ナナシよ…クエストの時間じゃぞ」

おぉ!マスターが声を掛けてくれた!ひゃっほ~

忘れてたぜ!

「あっやばいー。時間がないー。もうクエストにいかないとー。」

「ちっ」「それは仕方ないな」「ちぇ」

ふぅ、やっと地獄から解放される。やりすぎなんだよ、クソアマども！

そう考えると私はクエストにいくために準備を始めた。

その間

「ほ、ほらよ、こ、これ……灰皿。クエスト失敗して、し、死んだら笑ってやるよ。笑われたくなかったら頑張りな。絶対帰ってこいよ。じぁあね」

「あぁ、ありがとよ」

ミラが私の灰皿を渡してくれた。つか人の顔を見て渡せよな。そっぽ向きやがって。どこ見て話してるんだ。

しかも最後、早口で言ってたから聞き取りづらかったっての。

…クエストなんかで死なねぇよ。死んでたまるか。

それにしても
おぉ、ｍｙ灰皿　探していたぞ。綺麗になって帰って来やがって。
……どこで綺麗になったんだ。まさかミラが？ないない……あんな悪魔に灰皿なんて洗えるかよ。

そう考えながら、綺麗になった灰皿を眺めていると

「こらっ、ナナシ。そんな服装で行ってどうする。ちゃんと正さないか。私が上げた紋章ピンも、はずれかけているぞ。まったく…」

そう言いながらエルザが服の乱れやネクタイを正してくれた。

しかし、こいつ……まだ怒ってんのか……いや、

「私に惚れてんのか？顔真っ赤だぞ。だが残念だ、エルザ、私はペチャパイに興味はないのだよ。美乳、もしくは巨乳になって出直してこい。」

なんて冗談言ったら殺されるな。

「……ありがとう……」

「うむ、これでいい。いいか…しっかりクエストを遂行するのだぞ。くれぐれもフェアリーテイルの名を汚す行動は取るな。無事に戻ってくるのだぞ！それではな」

いや、服の乱れを直してくれるのは有り難いが…おまえらのせいで乱れたんだろうが…

これ以上怒られたら堪ったもんじゃないから、あえて言わないが。

…それに汚さねぇよ、私はフェアリーテイルの魔導士なんだからな。誇ることはできるが汚すことなんて馬鹿な真似できるかよ。

よし、そろそろ行くかなと準備を整えた私はギルドの片方の扉から外に出る。

すると、カナが横の入り口の扉に寄りかかっていた。

「あっぶねぇな、誰か出てきたら滑るぞ」

「ナナシは片方のドアしか開けないの知ってるから大丈夫だよ……ほら、ナナシ……これ」

大丈夫だよってバカか。出てくるのが私じゃなかったらどうすんだよ。

「あぁ……ありがって何だこれ？」

「ジュースの請求書♪」

あぁ……出発前に嫌なの渡すなよ。

スペシャル：フェアリーテイル：ジュースの代金か……いくらになったんだ。

えっと、ん？ちょっと待て。疲れているのかな。そこの段差に座って落ち着いて数えよう。

ひぃふぅみぃよ……

「おい高すぎるぞ！明らかに１０杯ってレベルじゃねぇだろうが！聞いてんのかカナ！」

明らかに請求金額が違うのだ…それを確認すると、私の髪の毛をいじっているカナに向かって叫んだ。

すると

「私はスペシャルは・１０杯って言っただけだよ？」

にこりと笑いながら、そう言うと、後ろから私の首に腕を絡ませ抱き付いてきた。

「……つ、つまり他にも沢山飲んだと？」

顔を引きつらせながら、カナに聞くとカナは耳元に口を寄せてきて

「ごち♪」

と言いやがった！

ぐおぉ！今回は絶対にマジで失敗できねぇじゃんかよ。本当は少し余裕があったのに！こんちくしょう！

「♪～」

♪～じゃねぇ！クソが！

あっ、こら！頬擦りするんじゃねぇ、柔らけぇじゃねぇか！

私は固い札束に頬擦りしたいわ、ボケ！

……

……

……

……

カナに請求書を渡されてから1日が経った。私は今、ギルドから離れた場所にいる。当たり前か……

今回はハートフィリア財閥のトップが依頼主だ。

ハートフィリア財閥、この大陸でも有数の財閥だ。私は今、その依頼主の家に向かっている。財閥だからな、たんまりと報酬がもらえそうだ。請求書の代金を払うために頑張らないとな。

それにしても、のどかな村だったな…。依頼主の家まで行くのに2、3カ所、村を通ったのだが、すべての村がゆったりと落ち着いた雰囲気を醸し出していた。

よほど生活するのが楽なのだろう、羨ましい限りだなっと見えてきたな。

【転影移】

依頼主の家が見えてきたので私はすかさず魔法を使い、屋敷の前まで移動した。魔力はもう温存しなくて大丈夫だな。

楽チン、楽チン

あぁ、門番に挨拶するのめんどくさいからスルーしてっと、……ふむ、多分あそこに依頼主はいるな。

門前に着くも影から出ずに依頼主がいるであろう場所に再び転移した。

「おっ、当たりだねぇ」

「!?誰だ!貴様は!」

私が部屋に入ると依頼主がいた。事前に雑誌で写真を見ていたから、すぐわかったよ。写真通り金髪のオールバックのおじさんだなっと

「おっとベルは鳴らすな、依頼を受けにきただけだ。私はフェアリーテイルから来た者だ。」

いきなり、現れた私に驚いたのだろう。依頼主の男つまり財団のトップは誰かを呼ぼうとし、ベルを手に持ったが

私が紋章ピンを見せながら話すと手を止めベルを元の場所に戻した。中々度胸が据わっている男だ。いや、あまりギルドで依頼したことないな。この男。

私が偽物だったらどうする気だボケが。そこは一応、ベルを鳴らせよ。そう悪態付く私に気付くことなく男は椅子に座り直すと両手を組んで話し出した。

「はぁ、子供だと……依頼はきちんと果たせるのだろうな」

「見た目で判断してほしくないな……私はフェアリーテイルの魔導士だ。依頼は完璧にこなそう」

ため息をつき、睨んで見てくる男を私もまた睨み返した。多いんだよな、子供だからと言って舐める奴らが。フェアリーテイルの魔導士を舐めるなよ。

「ふん、よかろう。どうせ何人も失敗しておるのだ。貴様みたいな子供に頼るのは癪だが依頼しよう。」

「……契約成立……だな」

「あぁ、……精々死なないことだ……では早く出ていけ。私は仕事

で忙しいんだ。」

…

…

…

ちっ！何だあのいけ好かない男は…

まぁ、気持ちもわかるか。この依頼、既に二人が赴き失敗しているらしいしな。魔導士を見下すには十分ってか。クソが、見てろよ！

……すぐに終わらせて度肝抜かせてやる

…

…

…

…

…

…依頼を受けて一週間経った、やっと目的地に着いたな。バカでかい豪邸だ。成金め。すぐに泣かせてやる。

しかし今はまだ夕方だ。深夜に忍び込むとするかな。

……

……

……

……

時間は深夜

私は今、目的の建物の側にいる。こんな時間だ、周りには門番以外は誰もいない。側で猫が鳴いているぐらいだな

よし、すぐに終わらせてやるよ。門番なんて、居ても居なくても変わらねぇよ。

【転影移】

そう魔法を展開させると建物内の影に移動した。

「よっと……楽チン、楽チン。すぐに終わらせてやるよ……は？…なんだありゃ」

転移が終わり影から飛び出ると、まず状況を確認した。どうやら私は大きなホールを見渡せる二階にある通路に転移したようだ。

しかし、しかしだ。なんだ…あの馬鹿でかいシャンデリアは…。

そう私が転移したホールには馬鹿でかいシャンデリアが吊してあっ

たのだ。何とも趣味が悪い、この家の持ちっ！？

【波動！！！】

ドガァァァン！！！！！！！

5　でかい（後書き）

次回の戦闘は地味です。

地味な戦闘がモットーですから。原作キャラに比べたら完全に見劣りします。

6　ハドウ

【波動！！！】

「っ！？」

ドガァァン！！！！！！

私が趣味の悪い家主に悪態を吐いていると突然、私のいる場所に向かって何かが撃ち出された。

何とか避けることが出来たが、あと少し気付くのに遅ければ殺られていただろう。

「ちっ、魔導士か！？」

何かを避けた後、土煙が舞う中を私は転がりながら二階の通路を移動した。

「ごほっごほっ」

そして立ち上がると辺りにはまだ煙が立ちこめている。満足に息を吸うことができないため煙から飛び出し離れた場所に移動した。

一階を見下ろすと緑色のスーツを着たガキが悠然と後ろに手を組んで立っていやがった。

そんな私を見てガキは

「ほぅ、よく避けたな。今までの魔導士の中でも一番の反応速度だ」

生意気な口調でそう言いやがった。何が、ほぅだ。くそゲジ眉が！

「ちっ、クソガキがぁ…私に手を出すとはいい度胸だな…そのゲジ眉、むしり取ってやんよ」

私は手をワキワキさせた後、一階に飛び降りる

「な!?初対面の人間に対して何て無礼な発言だ!」

【波動!】

「ばかやろう!!お前はその・初対面の人間に攻撃を仕掛けたのだぞ、ゲジ眉のガキが、ちっ!」

私が一階に降り立つと共にゲジ眉が反論しながら魔法を撃ってきた。

衝撃波みたいなヤツだな。風使いか?とにかく防ぐかな。

しかし
展開する時間がなかったから横にズレ、ギリギリかわす。

「貴様も子供だろうが……ほぅ、魔法を使って防がないとは……私の魔法が何かわかるのだな」

「けっ、尻の青いガキが何言ってやがる。私は既に尻は青くないのだよ。

……あぁ…てめぇの魔法は既に聞いている。」

何？魔法で防げないのか？魔法使わなくてよかったぁ。……じゃあ、こいつの魔法は何なんだ？

風使いじゃねぇのか？

「さすがは……貴様…どこのギルドだ。私か？私はラミアスケイルのユウカだ。魔導士ギルド・ラミアスケイルは聞いたことがあるだろう？」

勝手にペチャクチャ喋りやがって……誰も聞いてねぇよ。

「魔導士ギルド・ラミアスケイル。あの岩鉄のジュラがいるギルド

だな。週サラーで読んだ記憶がある。」

……週刊ソーサラー、略して週サラーとは魔導士達の情報雑誌だ。
様々な情報が載っているから色々と勉強になる。

特に女性魔導士達のグラビアのページがあって、私は大変重宝しているのだ！

「そうだ、あのジュラ様だ。聖十大魔道士クラスの力を持っていると言われる。ラミアスケイルのエース……」

先月見たあの子とか……先週のあの人とか……もうボイン、ボインでたまらないのだよ。ぐへへ。

「……で……だから……と……む？」

エルザ達には見つからないように読まないといけないから困ったもんだぜ。

別に写真ぐらい眺めたっていいじゃないか
それにしても今週号は袋閉じがあるらしいのだ！

楽しみだなぁ。でも金ないんだよな。まぁこの依頼クリアしたら入るから心配しなくて大丈夫か。待ってろよ週サラー！

「聞いているのか！」

【波動！】

「ぐへへ、っ！？あぶねぇだろうが、何しやがる！」

危な！ギリギリだったぞ今の。

「貴様はどこのギルドかと聞いている！」

「私？私はフェアリーテイルの魔導士だ。ふふん、お前の負けは決まっているようなものだな。

……そうだ…あの聖十大魔道士のマカロフがマスターのギルドだ！あーはっはっはっは！！」

「何だとぅ！マカロフなぞ、ジュラ様に比べたらカスに近いわ！」

「てめぇのジュラは聖十大魔道に・近い・だろうが！マスターを侮辱しやがって、殺すぞ、クソガキがぁ！！」

マスターを馬鹿にすんじゃねぇよ。ぶっ殺してやんよ。と殺気を込めて私はギロリと奴を睨んだ。

「くっ！？」

【波動！】

「お前の魔法は既に知っている…私には聞かんのだ！」

すぐに横に避ける。当たらなきゃ意味ないな。この魔法…。
反撃の開始だ。後ろからの不意打ちなら効くだろ

【影槍】

「すばしっこい奴め…！？【波動】無駄だ…知っているだろう、私には魔法は聞かんのだよ。

例え不意打ちだとしてもな。あぁこんな魔法しか使えんのか。さすがはフェアリーテイル、弱小ギルドだな」

ゲジ眉の後ろにある影から影槍を出したが、奴が振り向き魔法を唱えると打ち消された。防御もできんのか…便利な魔法だな。

てか

「弱小ギルドだと！ふざけんじゃねぇぞ」

絶対ボコってやる。

ギルドの皆は私より強いヤツでいっぱいなんだよ。下っ端の私なんかで判断してんじゃねぇよ！

「ふっ、私の魔法は魔法を通さす魔法…つまり、魔法しか使えん貴様に勝機はないのだよ。残念だったなフェアリーテイル、尻尾を巻いて帰るがいい！」

【波動！】

「ちっ、知っているさ…試しただけだ。何事も聞くだけではダメだからな…自分で経験して人は成長すんだよ！」

おぉ、なるほど魔法を通さない魔法か…厄介だなでも説明ありがとよ。なら魔法じゃないなら良いってことだよな。

避けながら考えると、影から本物の長槍を取り出した。この前、勝手にエルザから拝借したやつだ。たぶん強い武器だぞ、これは。

「くらえや！」

槍を影の手に持たせると大きく腕を振り奴に向かって投擲した。私の非力な腕ではこんな重たい槍なんぞ持てんのだ。

「ふっ、馬鹿が」

【波動】ガキン

「うぉ、砕け散っただと……」

「当たり前だ！魔力の渦に貴様のような、へっぽこな魔法の力で投擲しても私まで届かんのだよ。」

悪かったな、へっぽこで、私は隠密やサポートが専門なんだよ。

それにしても魔力の渦だと、そうか……それを展開しているからヤケに埃が立つのか。

……ということは素手で飛び込んでも槍のようになるだけか……

はぁ……それより……槍……どうしよう……

うむ、帰ったらこっそりギルドに立て掛けておこうかな。槍の残骸を。

後で回収しないと【波動！】ってあぶなっ

「戦闘中に考え事とは大したものだ。そろそろ終わりにしよう」

【波動！】

「波動、波動うるさい奴がぁ！くらえ！」

【影弾！】

「……はっはっは、どこを狙っている。私はここだぞ馬鹿め！」

そう、私は影で作った魔力弾を放った。しかし奴に向かっていくと思いきや頭上に飛んでいったのだ。

……だがこれでいい。

「馬鹿はお前だ…上には何があると思う？落ちてくるぞ？」

ニヤリと笑い私は上を見た。

「！？まさか、シャンデリアを落として！」

【波動！】

「!?何、落ちてこないだと!?」

奴が上を向き魔法を展開するのを見て、こちらも魔法を展開する。

【オロチ・シャドウ】

「なっ!?蛇!?」

上に魔法を展開している馬鹿に向かって無数の蛇の形をした影で襲い、奴を捕縛する。いくつかの蛇が魔力の渦に触れて消えるが許容範囲だ。

ふっ馬鹿が!

そうハッタリだったのだ。シャンデリアなんか高そうなヤツ落とすか。今回は隠密なんだ。騒ぎになっちゃ困るんだよ

「馬鹿な、波動を展開している私に何故魔法が効くのだ!?」

「馬鹿はお前だと言ったはずだ。お前の魔法は一部にしか展開できん。今、お前は魔法を上に展開しているから、左右下ががら空きなんだよ」

さっき後ろから攻撃した時に気づいたんだよな。こいつ、振り返って止めてたからな。

「！？」

「自分の魔法の弱点ぐらい知っておくんだな、ガキが！終わりだよ」

「やめっ」

【影沼】

そう言うと私は叫ぶ奴を奴自身の影にぐぷりと沈めた。

「一丁上がりってヤツだな、フェアリーテイルの魔導士を舐めるなよ」

私は床に残った奴の影を見ながら、そう呟いた。

あぁ、殺してはないから安心しな。時間が経ったら勝手に浮き出てくるさ

それより

おぉ、何てことだ…長槍がボロボロじゃないか。先端なんて無いに等しいぞ。…殺されないよな。

っと、それより仕事を遂行しないとな。それにしても意外に時間が掛からなかった。

弱い魔導士で助かったぞ。あいつに二人もやられたとは信じられんな。

そう考えながら、ホールを後にし、私はある場所へと向かった。

……

……

……

うむ、魔導士はゲジ眉だけだったな。他は傭兵とかしかいなかった。ちなみに全員、奴ら自身の影の中だ。

「ここだな、ごめんくださいよぉ」

私は今、キラキラと金色で覆われた悪趣味な部屋に入った所だ。中には金色のスーツを着た金髪のジジイがいた。夜中なのに起きていて大丈夫なのか？ジジイよ。死ぬぞ。

「誰だ！？子供だと……誰か、誰かおらんのか！」

ジジイは立ち上がり狂ったようにベルを鳴らしている。馬鹿なやつだ。

「よぉ、叫んでも無駄だぜ。護衛は人っ子一人残らず、おねんねだ。……来た理由はわかっているよな。こちらは騒ぎを大きくしたくな

い……早く……出せ！」

ジジイの近くによりギロリと赤い目で睨みつける。

「ふ、ふざけるな子供が！？ら、ラミレスケールはどうした！早くこい、いくら出して雇ったと思っているんだ！？」

しかし、ジジイは唾をまき散らし助けを求めるだけだ。おいおい、可哀想だろうがゲジ眉がよぉ。

「ラミレスケールじゃねぇよ。ラミアスケイルだ。自分が依頼したとこのギルド名ぐらい覚えとけ、

ちなみに奴なら、もういない……。」

「……わ、儂は知らんぞ…持っておらん」

その返答じゃ、儂…持ってます。と言っているようなものだぞ。

「早く渡せ…金ピカの鍵だ…」

「そ、そんなもの…もっておらん！早く出ていかんか！」

あくまでもシラ切るってか

「いいか…もう、諦めろ。そして…早く出しやがれ……宝瓶宮の扉を開くための鍵・アクエリアスの鍵をよぉ。ありゃな、黄道一二門の鍵、お前には扱えない代物なんだよ。」

ジジイの胸元を何とか掴み、下からギロリと睨み付ける。

「あ、あの鍵は儂のモノじゃ！！」

「バカやろう！！盗んだモノを自分のモノとは言えねぇんだよ！！どうやって、あの家から盗んだか、経緯は知らねえがな。

…てめぇは法を犯したんだ。それをな、こちらは穏便にすませよぉってんだよ！！！」

そしてジジイの胸元をより強く握り、ドスを効かせた声で喋る。

「返せ！星霊を呼ぶための鍵をよ。てめぇはアクエリアスの契約者でも星霊魔導士でもねぇだろうが！！！」

…

…

…

…

…

「はぁ、胸糞わりぃぜ」

結局、ジジイは鍵を出さなかったからジジイを影にいれ、無理やり部屋を捜索して見つけたぜ。

人のモノ盗んで自分のモノとか、大概にしとけって話だ。

「なぁ、あんたもそう思うだろ？」

「依頼は終わったはずだ。早く帰れ馬鹿者が！」

「ケチクサいこと言ってんじゃねぇよ。メイドさんおかわり、お願いね。ライス大盛で…うんそう。あっ、お持ち帰りの品もお願いね。」

そう、無事、依頼は達成した。今、私は依頼主の家に帰ってきて、お食事をご一緒させてもらっている。

なんせ、この二週間の食事は酷いモノだったからな。食事ぐらい、追加報酬でくれとねだり、断られ、無理やりバカデカい食卓に座り

今に至る。

高級料理だぜ！メイドだぜ！

ビバ！財閥！

「しっかし、娘さんは一緒に食わねぇのか？いんだろ、１人娘が？」

「貴様には関係ない…食べたら出ていけ。私は失礼する、ではな」

依頼主は食事を残したまま部屋を出て行った。また仕事かな。もったいないな。…残ったステーキだけ貰おう。

「依頼料もきちんと貰ったからな。これ食べたらオイトマするよ。おっ、ありがとうよ……うま……って、こんなにいいのかよ！？」

独り言を言いながら
メイドからライスを受け取った私は男の食べ残し極太ステーキを上に載せ食べていた。

そしたら、一人のオバメイドさんがたくさんのお菓子を持ってきてくれたのだ。

やったねぇ！冗談だったのによ。こりゃ皆のお土産になるな。これでエルザの槍の件は大丈夫だろ。

…　　…　　…　　…

満腹、満腹　げっぷ

食い過ぎたか……さすがに、あの後デザートは止めとくんだった。

既に私は屋敷を離れ、腹をさすりながら帰路に着いている。もう夕方かよ。早く宿屋に行かないとな。野宿になっちまう。

しかし

さすがに満腹を超えたマンプックの状態で転移を使ったら吐くからな。うぷっ、考えただけで吐きそう。

徒歩で帰って…おや…

「何やってん、げぷぅ。すまん、頼むから引かないでくれ。食い過ぎたな」

ちょうど川沿いの所で金髪の少女に出会ったのだ。第一村人発見だ。

こちらを見ていた少女に爽やかに話掛けたが、少女の私に対する印象はゲップ野郎に早変わりだ。

「あの……大丈夫？」

おぉおぉ優しいねぇ。

「大丈夫さ…所で名前は？私はナナシと言げふ……すまん」

「ふふ、あたしは……ルーシィ。あの、ここはね」

「あぁ皆まで言うな。私は別に村を訪ねたわけじゃない。ほら、あそこの馬鹿でかい豪邸に荷物を運んだ、【運び屋】だよ」

私の影は便利だからな。ギルドでは輸送の依頼も受けているから間違いではない。

どんなモノでも運んでやるさ。意外にいい稼ぎになるからな。まぁ、まだ2、3回しか運んだことはないがな。

「運び屋さん？」

ああん？何だよ、その疑った目は……怪しい者じゃねぇぞ！ガキでもねぇ！

「それより少女よ、悩み事かね」

マスターの真似をしてみる。人生相談の経験してみたかったんだよな

「……悩んでるように見える？」

少女が私の目を覗いてくる。

「あぁ、こんな川沿いに少女が1人じゃな。気づかない方がおかしい。」

その目をしっかりと見て返事を返す。

「…あんた、魔導士って知っている？」

「もち、それぐらい常識だろ」

そう言った瞬間、少女はモジモジし始めた。何だ、トイレか？

「あのね…笑わないでね。あたし、星霊魔導士になりたいんだ！」

「なればいいじゃん」

「あ、あれ？即答？星霊魔導士よ？大陸でも少なくて、選ばれた人しかなれないっていうレアなやつよ？」

何、慌ててんだ。

「いや、別になろうと頑張ればできるんじゃないのか？うぷっ、何だよ、悩み解決じゃねぇか。よかったな少女、いやルーシィよ。ではなっぷ」

そう言いながら向こうの岸まで影の橋を作り、少女もといルーシィから去った。

「え？ちょっ、魔法！？って、あんたマイペース過ぎるでしょ！」

あぁ、人の悩みを解決するってのは気持ちのいいことだ。何かルーシィが叫んでいるが、よせよ、礼なんていらねぇよ。

夕日が綺麗だぜ。

こうして、私の今回のクエストは終了したのである。

……

……

……

……

後日

「ただいまさんよ～」

いやぁ、意外に早くギルドに帰ってきたぜ。

「よぉ、もう帰ってきたのか。ナナシ」

ん？あぁグレイか

「お前また服、脱いでるぞ」

「おぉぅ！？」

そう、服を脱ぐという変態な習性を持つ、こいつの名前はグレイ・フルバスター。短髪の黒髪の１２歳だ。ナツと顔を合わせれば良く喧嘩している奴だ。

「依頼達成したのかよ」

「あぁ、もちろんだ。ほらよ、今回の土産だ。」

正面に立っているグレイにお菓子を投げ渡す。

「あぁ……」

「どうした？高級品だぞぉ、うまいぞ」

「あぁいや、菓子のことじゃなくてよ。俺もナナシみたいに、いっぱいクエストを達成できるようになりたい…」

そういうや否や、黙り込み俯いた。あぁ最近、仕事してなくて焦ってんだな。子供用は少ないからな。

「ばぁか、焦るんじゃねぇよ。コツコツとやっていけば自ずと早くなんだよ。私だって森で薬草集めの仕事してなかったら、きっと今頃グレイと同じぐらい暇潰してるさ。」

そう言ってグレイの頭をワシャワシャと撫でてやる。

「や、やめろよ！」

おや、これは失敬

「特に私は他の者がよく受ける討伐系を受けないからな。そもそも専門がグレイとは違うんだ、私は戦闘は苦手なんだからな。隠密や輸送って仕事はな、影使いの得意とする依頼だからな。討伐系に比べたら、あんまり時間が掛からんのだよ。それに、魔法の力でいったらグレイの方がすごいぜ。」

「でもよ…」

顔を上げたグレイの頭を再びワシャワシャと撫で

「焦るなよ……お前は強くなる。私の言葉が信用できないなら、訓練して強くなれよ。ただ座っているだけでは強くなれんぞ。じゃあな」

そう言い、グレイから離れマスターがいるカウンターまで歩いていった。その途中で会った仲間にお菓子を投げ渡していく。

そうしていると後ろから扉が勢いよく開く音がしたからグレイが出て行ったんだろう。

私やグレイ、他の子供組は将来、フェアリーテイルの柱になる。だから、強くなれよ、グレイ。

私たちがフェアリーテイルを国一番のギルドにするんだ。弱小ギルドなんて言わせなくしてやんよ！

大体ギルドにいる皆にお菓子を配り終えた後、私は何時もの席でタバコを吸っていた。子供組はグレイ以外いなかったな。みんな外に出てんのかね。

そろそろ横になろうかな。ゴロゴロしたいぜ。それにしてもナツやリサーナは、まだ例の卵で遊んでいるらしいな。飽きないのか？

「……おかえり」

そう考えていると不機嫌そうなミラが横に座ってきた。

危な～寝ていたら殺されるとこだった。座っていてよかったよ。

「あぁ、ただいまっ痛」

返事を返すといきなりミラが抱き付いてきた。……またか…クエストから帰ってきたら、

何時も抱き付いてくるんだよな。乱暴者のくせに寂しがりや、なんだから困った奴だ……

今日だけは大人しいミラになるんだよな。ギャップがすごいぜ。だが注意しろ、今日だけだ！

前なんて勘違いして酷い目に合ったからな。もうボロボロだ！私のピュアピュアハートを返せ！

「ちゃんと帰ってきただろ？私は居なくならないさ」

「……ふん」

タバコを灰皿に置き、抱き付いてきたミラを片腕で抱き締めて残りの手で頭を優しく撫でてながら考える。

あぁ、どうして私は信用がないのだ。そんなに、ひ弱に見えるのか。お前らと体付きは変わらんぞ。

もっと…成長…はっ！？週サラーの袋閉じ！…先々週号だよぉ。ばいん、ば

「っ！？何だよ！！強く抱くなよ！」

「今、別のこと考えていただろ…」

ギロリと睨まれてしまった。

「……お菓子あるよ？」

「……よこせ」

ふぅ、何とか回避したぜ。ミラは私が上げたお菓子をゆっくりと食べている。

こんな風に見たら可愛いのにな。暴力さえなければな。まぁ、ペチャパイに興味はないがな。しかし、可愛いことに変わりはない。癒される～。

「やっぱり…私達とチーム組もうぜ。そしたらずっと一緒にいられるしよ」

「あん？…無理だ。私とお前らでは専門が違うんだ。皆の中で運動能力が一番低いの私だぞ？体力がもたんよ」

お菓子を食べながらミラが話してきたが即お断りだ。今の私に討伐系は無理だ。

私が速攻で拒否すると、少し顔を赤らめているミラが顔を寄せて来た

「……私も隠密系やる」

「無理だ…テイクオーバー、つまり今まで倒した魔物を体に憑依させて戦うスタイルのお前には隠密は到底合わん。証拠を残したらダメなんだ。…私の影魔法は跡が残らないからな」

「……な、なら変身魔法覚えたら連れて行ってくれんのかよ？」

「ん？……ふむ、それなら行けるクエストもある…か…いいぞ。ただし、中級レベルを完璧に覚えたらな」

「ホントだな！？」

「ぐぇ、首を絞めるな。首を！ホントだホントだ」

興奮して首を絞めてくるミラの腕をパンパン叩くと離してくれたが、次は胸元を掴み寄りかかってきた。服を掴むな、伸びるだろうがよ。

「すぐ覚えてやる」

おぉ、おぉ、意気込んでいるねぇ。しかしな、完璧に覚えるのは苦労するぞ。

どのぐらい掛かるかな。半年ぐらいかな……その頃には丸くなってることを願おう。

そうじゃないと過労で死ぬな。

そう考えながら手はミラの頭をゆっくりと撫でていた。

「～♪」

ご機嫌な奴め

「なぁ…絶対一緒にクエスト行こうな♪」

胸元で喋られると、くすぐったいな

「あぁ」

「絶対の絶対だかんな、わかってんのか？」

「あぁ、ってそんなに私は信用ならんのか！？」

「なるわけねぇだろ」

そんなハッキリと……

「はぁ、約束だ。必ず、ミラとコンビ組んでやるよ。だから頑張って練習しろ…いいか、完璧に…だかんな。」

「わかった♪」

こうして私の1日はまた過ぎていく。何だか今日は久し振りに優しい時間を送れた気がする。

フェアリーテイルにいると落ち着くんだよな。何か暖かい気持ちになる。

やはりクエストから帰ってきた日はいいな。

毎日いると、この暖かみに麻痺するから。

「今日はずっと一緒にいんだからな。離さないからな?わかってんだろうな?」

「へぃへぃ、明日の朝まで一緒にいてやるよ」

「♪」

あぁ、明日の朝はきっと重傷だな。薬用意しとかないと…。

6　ハドウ（後書き）

戦闘は…地味ですね

まだまだガキのナナシです。

同じ子供のユウカとの会話もどこか幼さを残そうと書いて見ましたが如何だったでしょうか…

フェアリーテイルの子供組ではお兄さん?的存在ですね。

何時も悪態ついてますが皆のことは大切な仲間だと思っています。

7　おはよう

「…！……！？」

くかぁ～むにゃむにゃ

「…！！……！！」

あんだ？うるさいな。人が気持ち良く寝てんのによ。まだ寝かせてくれよ。今日は休みなんだ。昼まで寝させてくれ。

「ナナシ、ご飯冷めちまうぞ！」

あ？てか誰だよ…勝手に家に入ってきたのは…不法侵入だろ…軍に突き出すぞ。

そんなことより睡眠が先だな。勝手に人様の睡眠を邪魔してんじゃねぇよ。

「…散れ…不法侵入者が…」

むにゅ

「きゃっ!?」

あ?何だ?この柔らかいの。

まだ眠たく重い瞼を開けることもせずに、しっしっと不法侵入者に手を振るとヤケに柔らかいモノに触れた。

癖になりそうな柔らかさだ。何か前にも触ったような…。

むにゅむにゅ

「ひゃ!?」

おぉ~柔らけぇな。手のひらにしっくり来るサイズだ…うむ、何とも言えない感覚で男心をくすぐるな。

たまらんな、ヤミツキになりそうだ。ん?…何だ、これ?柔らかくて少しコリ

「は、早く起きやがれ!!」

「ふぐぅ！？」

「おら！この！変態が！」

「ぎゃっ、やめっ…ぐ……」

「おい、気絶してんじゃねぇぞ！まだ終わってねぇ！性懲りもなく、また人の…」

…

…

…

…

…

鍵回収クエストから帰ってきて1日が立ち、再び朝が来た。今日が始まったのだ。朝陽が昇り、マグノリア全体には朝霧が立ち込め、この時間に外に出ている人はいない。

ハコベ山を登山している者は、山頂付近でさぞや、素晴らしい日の出を見ていることだろう。

「へっくしゅ！…さむ…」

そんなことを考えている私は何故か外にいる。…非常に寒いし、意味がわからない。私は昨日、甘えてくるミラの世話をしていたはずだ。何故だ！

「……ミラ、はずせよ……」

「……ふん」

そう、何故か私は今、蓮巻き状態でミラん家の外に放置されている。プレイなのか？これは縛り放置プレイなのか！？全然、燃えないぞ。そんな私を不機嫌そうな顔で家の窓際から見てくるミラがいるのだが、助けてくれと頼んでも一向に助ける気配はない。

「なぁ、ミラ？私は何故ここで蓮巻き状態なんだ」

「…私は知らないわよ。自分で寝ぼけて、したんじゃないの…」

「そんな性癖、私にはねぇ、ドSのお前がやったんだろうが…は、はっくしゅん…早く助けやが……おい…窓を閉めっ……」

【ピシャリ】

ったく、何なんだよ。

それに、この仕打ちは……前回は寝てたら水ぶっかけられたしな。

やっぱり嫌われてんのかな…。はぁ…。

「はっくしゅん！」

って今はそんなこと考えている場合じゃない。…はぁ…魔法使うか。

そう考えると影から二本の黒い手を、ぐぷりと出しロープを外した。

「あ～ぁ風邪引かなきゃいいけどな……うむ、早く家に帰るか…ミラは…もう大丈夫だろ」

呟きながら解いたロープをあぐらをかいたまま纏めていると

「…自分で解いてんじゃん。」

先程より不機嫌そうな顔のミラが私の後ろに立っていた。

「あ？今更来ても遅いんだよ。私は帰るからな…スーツに着替えなきゃいけねぇ。よっこらせっと……ととっ…危な…放せ…」

立ち上がった私の腕を掴んできたので振り払う。危ないな、転けるところだった。

私も機嫌が良いわけがないので、彼女をぞんざいに扱うのはしょうがないだろう

「……朝ご飯……」

「あ？何だよ。聞こえねぇよ」

「あ、あのな。朝ご飯つく「じゃあな」」

…全く…ひどい目にあったな。おぉ、寒い寒い。
また1日が始まるな。
早く着替えてくるか。

今日は長引きそうだからな。てかアイツはブツクサと何を言っていたんだ？

…

…

…

…

疑問を感じつつも私は一旦、家に帰る。そして、寝間着にしていたシャツとズボンを脱ぎ、何時もの漆黒のスーツに着替えると、すぐに出掛けた。

…

…

…

…

ミラの自宅へとな。

【ドンドン、ドンドン】

「ミラ！開けろ！」

【ガチャ】

「…何…」

はぁ、やっと出てきやがった。何回ノックしても出なかったからな。

睨むな、綺麗な顔が台無しだぞ。

って…くそぅ！何時もこうだ、昨日みたいな日を送るとコイツが可愛く見えてしょうがない。私よ～幻だ幻だぞぉ、昨日のミラはもういないんだ。勘違いするな。

「何しに来たかって聞いてんだよ！」

…そう怒るなよ。

「買い物いくぞ」

「は、はぁ？…な、何で私がナナシと…か、買い物に行くのよ？」

もう忘れてんのか？

「【変身魔法】覚えたいんだろうが…魔導書、買いにいくぞ」

「！？」

何驚いてんだよ。そんなに予想外のことか？昨日約束したことだろうがよ。

「行かないのか？行かないなら帰るぞ……寝たいし……」

「行く！！すぐ準備するから待ってろ！」

…あんまり慌てるなよ。あぁ、ドアノブが歪んでるよ。どうすんだ、これ。

はぁ…全く、直してやるか。まぁ、何回も直しているから楽勝だな。

そう考えると、ドアノブに向かって手を近づけ唱えた。

【時のアーク！】

そう、この魔法、【時のアーク】は物体の時を操る太古の魔法。ドアノブぐらい直ぐに直る。

これは失われた魔法の一つで、今では文献や伝承でしか確認できない。

つまり、つまりだ！これを唱えれる私は

「…何してんだ…」

「……時のアーク！」

「…で、直ったの？」

…　…　…

「直るわけないよなぁ」

そう、唱えても使えなければ意味はないのだ。

【時のアーク？】

はっ！そら使えたら、便利じゃボケが！！！

「まだ寝ぼけてんのか、…殴って起こしてやろうか…あぁ？」

「おはよう！！！」

7　おはよう（後書き）

ナナシは自由人です。

今回は切りがよかったので短めです。

今回から小出ししますが、纏めて出したほうがいいでしょうか…

では、また今度お会いしましょう。

8　魔法屋に行こう

魔法、それは特定の者達だけしか使えないレアな代物ではない。

この大陸では、魔法は普通に売り買いされていて、人々の生活に根付いている。

魔力を持たない人はラクリマという結晶石に魔法を内蔵したモノを使用して生活に役立てている。

そして私が住んでいるフィオーレ王国にある人口約六万の街、マグノリアは古くから魔法も盛んな商業都市である。

そしてこの街では、一つだけ魔導士ギルドがある。ご存知の通り、その名を【フェアリーテイル】と言う。

我らがギルド、我らが誇り、我らが道標、そして我らの家、我らは仲間であり、家族。そんな堅固な繋がりを持っている国一番のギルドさ。

私が経った数ヶ月いて、これだけの感情が持てるんだ国一番に決まっている。いや大陸一番のギルドかもしれないな。

現在の時刻は朝霧が覆う早朝ではなく、多くの者達が外に出て休日を楽しんでいる昼に近い朝だ。

【トントン、カンカン】

とミラの自宅のドアノブを直しながら説明してみた。ドアノブを直すのにどれだけ時間掛けている、だって？

意外に大変なのさ。まぁ、もう終わったがな。前よりは早くなっているか。

…それにしても腹が減った。それもそうか、早朝から何も食べてないからな。

エルフマンやリサーナは最近、家に帰ってないみたいだからミラん家で食事はできないしな。

アイツらが作った料理は旨いんだよ。前泊まった時に食べたら、ガキが作ったとは思えない美味しさだったからな。それに二人は優しいからなぁ。

エルフマンにどっちが作った？って聞いたらミラに視線送って「姉ちゃんが…」とか嘘ついて料理ベタな姉に気を使っていたからな。

微笑ましい家族愛だ。ミラが料理上手とか信じられねぇよ。その時は一蹴してやったんだが、その後の記憶がないんだよな。

クエスト帰りで疲れていたんだろうな。気がついたら、寝室でミラ

の抱き枕やっていたよ。まぁ、とにかく、ミラは料理が上手なわけがないことは明白なわけだ。

だって、考えてみろよ。あのミラだぜ。昨日は可愛いくて襲いそうになったが、1日経ってしまうと何のことやら。

今だって…ドアノブ直している私を放置して、自分は部屋でノンビリしてるんだからな。

それにミラが作った料理を想像するだけで恐いな。とても酷い味がしそうだ、口に入れるのも恐ろしいわ。

昨晩も何か色々作っていたが…パスした。何か凝った料理ばっかり作ってやがったからな。

週サラーの読者コーナーで読んだぞ、料理初心者は簡単な料理は作らないで冒険に走る…とな。確実にミラが当てはまるじゃないか。食べなくてよかったな、今頃はトイレがお友達だったかもしれん。

「……もう直った？」

「ん？ああ、もう終わったぜ。よし、買い物にいくとするか。…どっかで朝飯食べた後でな…一旦ギルド行くぞ。あそこなら何かあるだろ」

そんなことを考えているうちに、どうやら姫さんが痺れを切らしてやってきたようだ。つか顔赤いぞ、それに何だかそわそわしているな、トイレか？早く行ってこい。

「あ、あの…な…ナナシ…これ…」

「ん?何だ?おぉ、サンドウィッチじゃねぇか!うまそうだな。誰が…ってお前が作ったのか?…ならパスだ。昨日もいっただろうがお前の料理はまだ食わんぞ。もっと上手になってから食べるから今は修行しろ、修行」

私がミラに早くトイレ行ってこい視線を向けていると、ミラが後ろ手に持っていた何やら載った皿を差し出して来たから、見てみると美味そうなサンドウィッチであった。

しかし、しかしだ。作った人がミラなら食わんぞ。食わず嫌いと言われようが毒は食いたくないのだ。

週サラーで読んだぞ!料理ベタなヤツは洗剤で食べ物を洗うってな。もうそんなの毒の何物でもないじゃないか。私はまだ死にたくないぞ!

「あぁ、いや……リサーナが作ったから…だから…食べろよ…」

おぉ、それなら一安心だ。何だリサーナ帰っていたのか。

さては、ナツとの卵遊びに飽きたな。つか何でコイツは俯いて落ち込んでんだよ、らしくないぞ

まるで昨日のミラのような感じがするな。

「別に一生食べないって言ってないだろ？ちゃんと料理上手くなったら食べるから安心しろよ。ただ実験はエルフマンに頼め、私は却下だ」

そう私が言ってもミラの顔が晴れることはなかった。

……いや、気持ちは分かるな。確かに出来のいい妹がいたら、嫌だわな。私だったら嫉妬するな。まぁ、あえて触れないでおこう。そこは姉妹で何とかしろ。私には手を入れることができない領域だからな、勘弁してくれ。

「そうか、そんじゃ有り難く頂くとするか、それにしてもうまそうだな。頂くぜ」

「ぁ……」

ミラの返事も聞かずに手に載った皿から、１つのサンドウィッチを手に取ると立ったまま、かぶりついた。

「美味しい？」

「おぉ、旨いな！！」

白く柔らかい食パンに新鮮なレタスとトマトのマッチングが何とも言えない瑞々しさを醸し出している。その他にも何か味がするが、良いスパイスになっていて美味だ。ギルドで食べるサンドウィッチとは天と地の差があるぞ！う～ま～い～ぞ～、と口から光が出てきそうだな。うむ、星３つ！！！

労働の後だから、より美味しく感じるな。今の私は最高に幸せな気分だよ。

「そ、そう？」

「ああ、メチャクチャ美味しいぜ。毎日食べろって言われても飽きないだろうし、逆にこっちから毎日食わせろって言うな」

「♪」

ん？何で、そんなに嬉しそうなんだ？…あぁ、妹が誉められて嬉しいのか。しかし一つじゃ足りないな。

「…卵のヤツ、食べていいか？１つじゃ足りなくてな」

これ、あの馬鹿でかい卵のかな？

「皿に載ったの全部食べていいわよ。てかさ、家ん中、入って食べ

ない？」

「あぁ、そうだな。一旦食卓で食うか…リサーナにも礼を言わないといけないしな。全く凄い料理を作るヤツだな、ナツが羨ましいぜ」

「あ、あの子は…もう外に出て行ったから…私から言っておく…」

「そうか…まぁ、いないもんは仕方ないな。んじゃ、お邪魔するかな」

その後、食卓に入り、皿のサンドイッチはすぐに完食してしまった。まだ食い足りんぞ。美味しいモノは別腹だからな。

「足りたのか？」

そんな私の空腹に気付いたのかミラが

「まだまだ沢山作ってあるから、少し待ってろ」

そう言って、何やらご機嫌な様子でパタパタとキッチンに消えていった。ふむ、さっきからご機嫌だな。全然、暴力も振るって来ないしな。

少しは成長したのか？…そう言えば朝から殴られた記憶がないぞ。不機嫌で怖い顔なら見たが…。コイツは…もしかしたら、もしかす

るかも!!

【ガチャ】

「ただいま~」

「ん?」

「あ~!ナナシ兄ちゃん帰ってきてたの?おかえりなさい。ミラ姉いる?」

可愛らしく挨拶してきたのはリサーナだ。早いな、もう帰宅かよ、ガキはもっと外で遊びなさい

つか、何で私が帰ってきたこと知らないんだ?…あれ?もしかして、このサンドウィッチ…食べたらダメなものなんじゃ

…まぁ、考えでも仕方ないな、食ってしまったモノはしょうがないからな。

「え?ミラから聞いたんじゃないのか?まぁ、いいか、ただいま。リサーナよ、サンドウィッチありがとうな。美味しく食べさせて貰っているぜ。それとミラはキッチンにいるはずだ」

「サンドウィッチ?私…そんな……あぁ…まだ認められないんだ。ミラ姉の作った料理……」

「何ぶつくさ言ってんだ？あぁ？聞こえねぇよ」

「はぁ…ミラ姉可哀想…そしてナナシ兄ちゃん最低」

そう言うと、ミラがいるキッチンまで危なげに走っていった。

……また無視かよ…てか何だったんだよ、あのジト目は！私は何も悪いことはしていないぞ！

その後は、「もうお昼も近いから、どうせならよ…」とミラがサンドウィッチ他、何品かの軽食を持ってきたから美味しく食べさせてもらった。凄いなリサーナは…。こんな短時間で作るなんて…天才かそれにしても終始、ミラはご機嫌だったんだが、やっぱり成長したのかな。期待してしまうぞ。もう暴力の恐怖に怯えなくてもいいんだね。私、ミラを信じてるから！

リサーナ？

リサーナは料理を作った後、それを大量に持って、どっかに行ったよ。たぶんナツに食わせるんだな。すまんな、ナツ、少し分けさせてもらったぞ。今度お菓子を大量に上げるからそれで許してくれよ。

ただ、出て行く時のリサーナが私を見る目が冷たかった気がするのは勘違いなのか？私は悪いことはやっていないぞ、それでも私はやっていない！

「早く行かないと店が閉まっちまう！ナナシ！急げ！」

おっと、回想に浸り過ぎていたようだ。姫さんがご立腹だぜ。
…てか閉まんねぇよ、まだ昼間だ、落ち着けよ

「ナナシ！」

「へいへい、行きましょうかね」

まぁ、いいか。それより、この姫さんのご機嫌を損ねたくないしな。お買い物に行くかな。ついでに私も魔法具でも買おう、大金入ったしな。

やはり財閥系からのクエストは最高だ。アイツら金銭感覚麻痺しているからな。経営の資金繰りはシビアなくせにプライベートは甘いんだよな。しかし、そのおかげで報酬として大金をもらったんだ、感謝しないとね。

…

…
…
…

マグノリアにある、とある魔法屋にて。

「すぐ、選んでくるから待ってろよ」

「人に指を向けるな。それと自分に合いそうな本を選べよ」

「わぁってる」

今、私は、ここ数ヶ月で行き着けとなった魔法屋に来ている。店に入った途端にミラは、本棚の方にいっちまいやがった。

元気なやつだ。それにしても、殴ってこないぞ…こりゃ、進化したな。地獄から解放されたんだ！

まぁ、それはいいとして、金も入ったし魔法具か何か買うか。私の影魔法は決定力に掛けるからな、魔法具か何かで戦力アップしないとな。

「うぃ～す、おっさん」

私は店番をしている恰幅のよい初老の男に話し掛けた。

「おや、ナナシ…いたのかい…新しい魔導書ならいくつか入ったよ。買うかい？」

店に入った時には気づけ。ボケてんのかよ。

「おぉ、マジか…買おうか、全部くれ。何冊あんだ？」

ふむ、また新しいのが入ったか。

「あいよ。１６冊だ…何時も通りにするなら半額でいいよ」

「あぁ、読んだら、ここで売却するよ。ふむ、今回は【ガンズマジック】の魔法か…銃を買えば練習できるかな？」

そう、私はお金の節約のため、読んだ魔導書は売却している。その方が多くの魔導書が読めるからな。それにしても【ガンズマジック】か…眼鏡に記憶させておくだけにしようかな。練習する時間がいりそうだ、そんなことするなら影魔法を鍛えた方がマシだな。

眼鏡に覚えさせれば何時でも読めるしな。本当に暇になった時に練習してもいいかもしれないな

そう、私は薄黒くて少し瞳が見えるサングラス型の記憶魔法が内蔵された便利な眼鏡を持っているのだ。

まぁ、ポーリュシカ婆さんが餞別にとくれたヤツだがな。婆さんには感謝しないといけないな、こんな高価でレアな魔法具は店じゃそう売ってないからな。

それはさておき、何か戦力アップになりそうな魔法具はあるか…あ…そういえば、聞かないといけないことがあったんだ。

「なぁ、おっさん」

…

…

…

「魔法を通さない魔法？」

「あぁ、今回の仕事先で会ってな…もし、そんな感じの魔法が魔導書に載っているなら欲しいんだが…」

あれは便利な魔法だからな。是非、手に入れたい。

「…う～ん…この店にはないね…本当にアビリティ系だったのか？魔法具でならありそうだが…」

「いや、ホルダー系じゃなかった、道具は見なかったしな。完全にアビリティ系だろう。何とか見つからないか？」

そう私が聞くと、俯き何やら考える素振りを見せたが、すぐに顔を上げたてきた。

「…元々アビリティ系は評議会が決めたのしか販売してないからね。儂はその魔法は販売されているの聞いたことがないよ。」

ふむ、おっさんが断言するなら他の店にも置いてないな。この人は元々魔法開発局にいた人だからな魔法の知識は私なんかより遥かに凄い。

ということはゲジ眉独自の魔法か非常に残念だ、魔導書に載っていたのなら覚えれる確率は上がるんだが、ゲジ眉、独自の魔法は流石にお手上げだな。

1から指導してくれるなら覚えれるがそんなこと頼めるわけがない。諦めて魔法具で探してみるとするか

おっと、いきなりカタカナが飛び出して何が何やらの人がいそうだ

な。

「アビリティ系っていうのは修練や魔導書で覚えた魔法のことで私の影魔法のようなものだ。ホルダー系とは道具に付与された魔法を用いて使うことでエルザがそうだな。あいつは鎧や剣とか使うからな。ちなみに星霊魔導士もホルダー系だな。

強いやつはアビリティ系を使っている奴が多いが、別にホルダー系が劣っているわけではない。エルザを見れば分かるだろう、私なんて瞬殺だからな。モノは使いようと言うヤツだ。

ただ魔法具は壊れれば発動しなくなるからな、そこがホルダー系最大の弱点だ。だから安全を考えるとアビリティ系を選ぶ奴らが多いわけだ。

ただし、魔法を極めようとしていない者達の多くはホルダー系を選ぶ傾向が強い。つまり楽して稼ぎたいからホルダー系を…と言うことだな。そう言う奴らはザコばかりだから頭の片隅に入れて置けばいい。

わかったかな?よい子の皆?」

「…誰に話し掛けてんだよ…頭大丈夫か?まったく、コイツは目を離すとダメだな。（やっぱり私が居てあげないと）」

ひどっ!?

何時の間にかミラが帰ってきていたようだ。ミラは私の背後に立ち、

ゴムで一纏めにした腰まである私の髪の毛を引っ張ったり指に絡めたりして遊んでいた。

…何故気付かないのだ、私よ。こんなことよくあるぞ、集中すると周りが見えなくなるんだよな。直さないと何時か仕事でも失敗するかもしれん、注意しておこう。

「…こほん、ミラよ、決まったか？」

そんなジト目で見るなよ。何だか恥ずかしいじゃないか

「考えたんだけど…魔法具使えば簡単じゃない？」

oh…ナンテコッタイ

「覚えろ…道具はダメだ。絶対にダメだ」

「何で！…すぐにクエスト行けるのに！」

はぁ…

「完璧にしないと連れて行かないと約束しただろ…それに、魔法具が壊れた時はどうすんだ。仕事は待ってくれないんだ。絶対に覚え

ろ…」

「…だって…よ」

あぁ、俯くな。可愛い奴め。やはり暴力を振るわないミラはいいな。抱き締めたい。

「いいか…どうせ魔導書に書いてある変身魔法は中級までだ。絶対覚えろ。きっと役に立つ時がくるからな」

そう言いながらミラの細い腰に手を回し抱き寄せる。柔らかいなぁ、やっぱりペチャパイでもいい気がしてきた…女は胸じゃないんだよ！

「か、勝手に触るな！」

「ふぐぅ！？」

えぇ！？嘘だろ、昨日は散々、抱き締めたじゃないか。てか腹パンはダメだろ…出ちゃうぞ、さっきの昼飯がで…

「ばか！変態！」

「ぎゃっ…やめ…」

「…ふん、また探してくるから待ってろよ」

……何が何だか…結局、ミラはミラだったということか。悲しいぞ、くそぅボイン、ボインを求めるしか私にはないのか！

ペチャパイの奴らは全員悪魔だ！！！

「何故だ…何故悪魔しかいないんだ」

「そら、ナナシよ。人前で、そんなことされたら殴られるだろうよ。」

おっさんか…見てないで助けろよ

「あぁ？昨日もギルドでしたんだぞ。意味がわからん」

「はぁ、ここはギルドじゃないぞ。家の外でそんなことされたら誰だって恥ずかしいだろうさ。全く、女心が分からんやつだ…根っこからわかってな……根っこか…それなら確か…」

何だよ…女心って…ミラは悪魔だ…悪魔で決定だ。もう伯爵級の大悪魔だぜ！

小悪魔なら大歓迎なのによ。そんなペチャパイ見たことが…カナ？

ありゃタカリ悪魔だ、断じて小悪魔なのではない。

それにしても

「痛ぇな…たく殴りやがって…ん？おっさん？どうしたんだ」

私が立ち上がると真剣な顔をして何やら考えているおっさんがいた。

「…魔法を根っこから解除する魔法ならある。」

「解除？解除魔法のことか？それなら中級程度なら覚えているが、ありゃ封印やトラップ解く時に使う魔法だぞ」

解除魔法…隠密やトレジャーハンターには必須の魔法だな。ただ特殊な封印だと上級レベルがいるがな。

解除魔法を主体に使う者をディスペラー、解除魔導士と言う。こいつらも私と同じで戦闘が得意なやつは少ないと思う。

ふむ……今度、任務のレベルが上がると、必須になるかもしれないから上級魔法を習得しとくか。

「いや、それじゃない」

そういうとおっさんは店の奥に引っ込んでいったが、待つこと数分後何やら分厚い本を持って帰ってきた。

「これだ…超上魔法【ディスペル】」

「超上魔法!?それに何て分かり易い名前!」

惚れたぜ、名前を付けた奴に。

「あぁ、こいつは儂が開発局にいた時に仲間が開発しての。この魔法は相手が発動したありとあらゆる魔法を解除できる」

…凄すぎだろ…

「それさえあれば最強じゃねぇか…評議会から禁書指定が掛かったんじゃねぇのか?」

「いや、それがの。この魔法は理論だけで完成してないんだよ。ただ、空論の魔法での…だから、ただの本なんだ。」

空論か…

「しかし…机上に出るということは完成できる可能性があるということだよな…おっさん、その本売ってくれ」

もし、未完成でも使えるようになったら意外な戦力になるかもしれないな。今の私の魔法じゃ、何時か壁に阻まれる可能性が高いからな。決定力も欲しいが小手先の技も何か欲しい。

「売り物じゃないの」

はぁ…そうだよな、机上の空論といえど超上魔法の理論書だからな

「ただでやるよ」

「いいのか!?」

「これからもお得意様になってくれる大切な客だからの。どうせ眠らせるより、誰かに読まれたほうがいいからの」

何ていい人!ボケてないよ、あんたは天才だよ。

「ありがとうよ!早速、何か魔法具買うぜ!」

これで戦力アップだ!

おっさんから本を受け取ると、すぐさま影にいれ品物の物色を始めた。後で読まないとな。ふむふむ、中々いろんな魔導具があるではないか。

通信用のラクラマ、その他各種ラクリマに剣、風読みの眼鏡に…フライパンだと…誰が使うんだよ、こんな馬鹿でかいフライパン。

ん?…指輪か…これなら何個か買ってもいいな。緊急用に使えるかもしれないな。

どれにしようかなぁ、え?これは…

「まさか!?」

な、なんだと…今、私は夢を見ているのか…こんな指輪が存在していいのかよ!!

「おっさん!」

私が叫びながら、がばりと勢い良く顔を上げ男の方を見るとゆっくりと頷きサムズアップしてきやがった。ははっマジモンなのかよ

男の夢…いや全人類の夢!「ナナシ、選んだぞ」けしからん、実にけしからんぞ。しかし、これは買わねばならん。ここで買わねば男が廃る!この指輪、この【魅惑の魔法】が掛かった指輪!これさえあれば…

「これさえあれば…」

「これさえあれば？何見てんだ…みわくの指輪？…みわく…魅惑！？…ま、またか、またかよ。そ、そんなに他の女がいいのかよ。何時も何時も人をコケにしやがって！…私が側にいるのによ！！！」

「おっさん、これくれ！この魅惑のぐふふを！！！」

これでボイン、ボインハーレムじゃ、ボケが！！

ぐへへへ、ぐふふ

「ん？…後ろを見ろ？」

何だよブロックサインで、しかも震えてんぞ。年か？早く向け？

「…はいはい」

「……」

「……えっと…ミラ？」

「……」

【魅惑の指輪！】

キュピーン！

「……」

「ふっ、勝った、すぐに発動させてよかった。これでミラも私の女の一人だな。おいでミラよ」

「……」

「あっはっはっはっはっはっはっはっはっはぐぅ、ぎゃっ！やめっ！な、何で!?【魅惑のゆびあぁぁぁぁぁぁ！】…え?嘘だろ、何故効かない、おっさん、不良品だぞ！」

「チャーム、魅惑の魔法の弱点は理解…その魔法を知っている人には効かないのさ。わかったかの、よい子の皆様?」

誰に説明してんだ、おっさん！

…そ、それより逃げないと

「どこいくんだよ?あぁん?」

「ひっ……あ、あわわわ……」

今日は中々ハードな1日になりそうだ。

まだ始まったばかりなのにな。

「馬鹿ナナシ！！！！！！！」

さようなら、皆様

またあえ……

8　魔法屋に行こう（後書き）

実はナナシも同世代の女の子に興味が有るのですが、いかんせん濃い少女達ばかりで、現実逃避をしています。

そろそろ年代を一気に飛ばして原作に入りたいですね。まぁ、まだ少し過去編は続きますが…

ちなみに過去編はミラをメインにしております。

9　幸福（改訂）（前書き）

今回は書き方を変えています。とても違和感があるかと思いますが、見てやってください。

9　幸福（改訂）

【ズザザー、ズザザー】

フィオーレ王国、人口１７００万の永世中立国である。

この国には様々な人が暮らしており、その中には魔法を生業としているものもいる。彼らのことを人々は魔導士と呼んでいる。

魔導士達は様々なギルドに属し依頼に応じて仕事をする。そのギルドは国内だけでも多数存在している。そしてマグノリアにある我らがフェアリーテイルもその一つである。

その街のある一角では横になり縄でグルグル巻きにされた白髪の少年が銀髪の少女に引っ張られていた。

それを見た住人達は、また馬鹿なことをやったなと哀れんだ目で少年を見ていたから、日常茶飯事の光景なのだろう。

「ミラよぉ、許してくれよ。もう洗脳魔法掛けたりしないからよぉ」

「ダメに決まってんだろ。絶対許さねぇ…つか…また、理解してねぇのかよ。家に着いたら、わからせてやる…」

そう、私は今ロープで蓮巻き状態にされ家まで引きずられている。

住人達の視線が熱いぜ。こんちくしょう！

ミラよ、理解はしてるさ。洗脳魔法を仲間に使ってしまったんだからな。まぁ、何故か効かなかったんだがな。それに買うことも許されなかった！何故だ！

しかし、エルザにバレたら殺されるな。フェアリーテイルの名を汚す行為をしたからな、あぁ、私は誘惑に勝てなかったのだ…どうかエルザがクエストから帰ってきませんように

そう考えていたナナシは小さく声に出して願っていた。

「ぶつぶつぶつ」

「…何やってんだよ、気持ち悪い…」

…拝んでいただけなのに気持ち悪いはないだろう。つか持ち上げるな。この馬鹿力が！

「おら、着いたぞ」

「うわっ」

私は家の床に思いっきり投げられてしまった。てかもう家についたのかよ。ヤバいな逃げないと…

「投げるな、バカ女！…ひぃ、や、やめろ…な？もうしないから、絶対しないからぁ」

そう叫ぶナナシを無視してミラは床から立ち上がろうとしたナナシに覆い被さり再び床に沈めた後馬乗りになって説教を始めた。

「いい？ナナシは私だけのなの！だから……」

…

…

…

…

魔法屋来店から数日後

フェアリーテイルのギルド内はいつも通りの賑やかな雰囲気を醸し出していた。

多くの仲間達が楽しそうに酒を飲みあったり、バカ騒ぎをしている。

そんな中、一人でポツンとイスに座りタバコを吹かしながら、テー

ブルに載せた本を読んでいるナナシの姿があった。

【ガヤガヤ】

あれから数日後
私は何とか生きている。枯渇するかと思った。

今はギルド内の何時もの場所でタバコを吸ってる。生きてるって幸せなことだな。久しぶりのタバコがうまいぜ

この数日間はずっとミラん家に監禁されていたからな。

まぁ、その間にミラに変身魔法のコツを教えたり、おっさんから貰った魔導書を読んだりと。

よほど監禁という名からは程遠い生活を送っていたのだが、至る所でミラが甘えてきたから私にとっては十分拷問だったろう。

クソが！私に気がない癖にベタベタしてくるんじゃねぇぞ！私がその気になっても殴ってくるだけだしよ！男をなめてんのかよ。

絶対、ミラより強くなってやる、そのためにも戦力アップさせないとな。おっさんから貰った理論書に載っていた魔法

その名を【ディスペル】

発動中のありとあらゆる魔法を制限なく無効化する超上魔法。これは理論上の魔法であるがこれを習得できれば、ミラにも勝てる最強

の魔導士となることができるだろう。

しかし、しかしだ。魔法開発局の者達が完成させることが出来なかった魔法だ。そう簡単に発動させることが出来るわけがない。

ただ、私は糸口を見つけることができた…というより巻末に書いてあったことだが。

ディスペルの基本は、相手の術式に介入して魔法を存在させないようにすることらしい。

しかし、それを行うためには様々な術式を覚え、相手が発動した術式を瞬時に判断し、介入して壊さなければならない。

むずっ！！しかも様々な術式を覚えるって……また評議会の保管庫に侵入するしかないか？

てか、ぶっちゃけ、この魔法…駄作じゃねぇのか。ゲジ眉の【波動】の方が時間掛からずに覚えられるな。

それに、こんなこと出来るの天才しかいねぇよ。

ふむ…しかし凡人でも発動できる可能性もあるにはあるか？

魔法具を大量に身に着けることで発動できないだろうか。例えば、頭や目の変わりとして使えば…発動させれるか？

いや、しかし私が考えつくぐらいだ、魔法開発局の者も考えたに違いない。

そして実験してみたのだろうか？…本には載っていないから分からないな。

しかし成功しているなら記されているはずだ。

「何読んでんの？」

ふむ、ということは何らかの問題があるのか…思い付く問題点と言えば、数が多すぎて人間が身に着けるには適していない…とか、あとは予算の関係とかだな。

さすがに魔法開発局も金には限界があるからな……

「何！読んでんの！！」

ん?誰だ?耳元で叫ぶな、馬鹿やろうが。

「あぁ、カナか…これか?これは新しい魔法の理論書だ。読んでみるか?」

私は読んでいた理論書を渡すが、カナは本を開くとすぐに

「うわぁ、遠慮しておく。目がチカチカするもん、私、こっちの方がいい」とすぐに本を返してきた。

「まだガキには早いよな」

…そりゃ、そうだろうな理論書なんて文字しかないからな。とカナから本を返して貰い、また読み始めた。

「むぅ、あんたもガキでしょうが、良いもんね週サラ読むから、べェ〜」

全くガキな奴だ。週サラーなんて理論書の凄さには勝て…勝…がぁぁ!?

「お、お前!そ、それどうしたんだ!!」

「うん？これ？私が前に買っていたヤツだよ」

袋とじ！袋とじがある週サラーだと！？

「何？これ読みたいの？」

くぅ、その意地悪そうな顔をやめろ！こいつ分かってやってるな。私がその雑誌を喉から手が出るほど欲しがっていること知っているな！

誰から聞いたんだ。確かにギルドの男共に持ってないか聞き回っていたが、

どこで聞きつけて来たんだよ。いやいや、今は週サラーに専念するんだ。目の前に有るんだぞ

こうなったら！

「カナ！！！」

…

…

…

普段通りのフェアリーテイルのギルド内の、とある壁際のテーブルで少年と少女による取っ組み合いが行われていた。

「だから！お願いだから私に下さい！カナ様」

「えぇ？どうしようかなぁ？」

…どうやら取っ組み合いではなかったようだ。ナナシが一方的にカナの胴体を抱き締め、何やら必死にお願いをしている。

「本当に見たいんだ！」

ナナシの赤い顔から相当に興奮しているのがわかる。一方、抱き締められているカナも顔を真っ赤にしている。だが、ナナシには悟られまいと、平然と返事を返す。

それに加え、手に持っている雑誌を膝を付いて、腰に纏わりついているナナシの頭上で左右に振って見せた。

「ほれほれ」

「あっ、私の週サラーが」

それと同時にナナシの首も左右に揺れ、まるで餌付けしている様子のようだ。

カナが左右に振っている雑誌をナナシは物欲しそうに見ていたが限界が来たのだろう。

「もう我慢できん！したくはなかったが強行突破じゃボケ！！」

「わっ！？」

そう叫ぶとカナから無理矢理、雑誌を奪おうと押し倒し羽交い締めにし始めた。

「週サラー！週サラー！見るんだ！私は必ず！」

「ち、ちょっとナナシ！落ち着いて！や！？」

テーブルの下で騒然な戦いが始まった。「週サラー！」「こら！そこ触ったらダメだって！やぁ！？」と争い合う音と共に二人の声が聞こえている。

そして数分後

既に戦いに決着が着いたのだろう。争う音も声も何も聞こえない。ただ荒々しい息づかいが聞こえるだけだ。

そして、テーブルの下から一人がゆっくりと立ち上がる。その者の

手には少しクシャクシャになった雑誌が握られていた。

「はぁはぁ、やっと…やっと」

立ち上がった者は争いで服が乱れたのだろう、ずれ下がっていた【ワンピース】の肩紐を元の位置に戻し、床に沈んでいる【ナナシ】を顔を真っ赤にさせながら見た。

「えっち」

ナナシは何度も殴られたので有ろう腹を押さえて床に寝転がっていた。

「……ぐふっ」

(ちくしょう、やっぱり勝てなかった。強行突破なんてするんじゃなかった…)

それを見たカナは

「もう、しょうがないなぁ。」

倒れたナナシの上に座り雑誌を読み始めた。

その時

【バンッ】と突然ギルドの扉が開かれたと思いきや、一人の少年が叫び声を上げながら中に入ってきた。

「誰だぁ！卵盗んだ奴はぁ！」

「あ？うるさいな。カナ…誰だよ。私の位置からは見えんのだ」

「ナツとリサーナよ、何か卵無くなったって言ってる」

（ふむ、どうやら怒り心頭のナツと少し泣いているリサーナが入ってきたようだ。

床からじゃ見えないが、奴らの会話の内容から察するに、自分達が必死に孵化させようとしていた卵を無くしたみたいだ。

…卵ってあの馬鹿でかい卵のことか…

確か…食べたな。あのサンドイッチに入っていた卵のことだろ）

ナナシはカナに座布団にされながら考えている。中々手慣れたように座布団になっているから日常茶飯事の行為のようだ。

「誰だぁ！！」

そう叫んでいるナツに子供組がワラワラと集まってきた。

（うるさい奴が…）

「あたし、ちょっと行ってくるね」

（おっ、カナが離れてナツ達の所に行きやがった。
それにしても久し振りだ。子供組勢揃いだな。皆が集まるなんてことは早々ないからな。しかし、これはチャンス！袋とじ♪～ふんふん♪）

ナナシは痛むはずの体も何のその、とすぐさま立ち上がった。
そしてカナがテーブルの上に置いた雑誌を手に入れることに成功する。

「やった、遂に手に入れたんだ！私はカナに勝ったんだ！」

喜びながら叫び、夢中となって雑誌を体に引き寄せる。よほど嬉しいのだろう、涙が頬をつたっていた。

しかし雑誌の持ち主であるカナの方も、喜んではしゃぎながら雑誌を抱き締めているナナシを背後から見て

「…まっ、いいかな。どうせ何か邪魔が入ると思うし…」と呟くと子供組の輪の中に入っていった。

…

…

…

集まった子供組が何やら会話をしているのを耳だけ傾けて聞いているナナシは

遂に手に入れた念願の雑誌をテーブルに置き、何度か拝んだ後、ゆっくりとページを開き始めた。

それと同時に子供達の話も始まったようだ。

「卵が消えた？」

（グレイ服着ろ、その脱ぎ癖止めないと将来変態だぞっと、よっと週サラサラ～）

「私は知らないわよ。つかグレイ、服」

「おおぅ」

（カナよ、よく言った、そして戻ってくるなよ。どこに袋とじはあるのかな♪）

「エルザ！吐き出せよ」

（むっ）

「おい、少し飛んでないか」

（むむっ）

「ミラ姉、卵知らない？」

（おっほぉー！）

「知らないわよ、ナツあんた自分で食ったんじゃないの」

（これか！遂に桃源郷が！）

「おいミラ、酷いことを言うんじゃない。」

（ぐふふ、グラビアを破らないよう慎重にキリトリ線に沿って破らないと…）

「ふざけんじゃねぇぞ！ミラ！」

（ピリピリ、ピリピリ）

「やんのかぁ！手加減しねぇぞ！ナツ！」

（ピリっと、うむ開いたぞ）

「ミラぁ！！」

（遂に遂にだ、待ちに待った袋とじの中身が！！）

「おい、二人ともやめろ」

（ではでは御開帳～）

「ナツてめぇ！」

（ゆっくり、ゆっくりね）

「おらぁ！」

（開いた～）

【ドガン！】

（！？）

「うぉ！こらガキ共！こっちで騒ぐんじゃねぇ！テーブルがひっくり返ったじゃねぇか！あ～ぁ、せっかく…今か…」

（あれ？週サラーがない……え？どこいったんだ？ｍｙ週サラーよ、出てきておくれ！）

「止めないかお前たち！」

（まさか…テーブルの下か…よっと重いな……おぉ、あったあった。全くお茶目さんだな♪）

【ピチャ、ふにゃ】

（え？濡れてる？嘘だろ）

「うるせぇ、エルザ！」

（…ふにゃ、ふにゃ…
ははは、ページが開かないや。いやいや、まだ大丈夫だ！ゆっくり、ゆっくりね）

「お前ら！止めないか！【グシャ】むっ…なんだ、雑誌？」

（あっ…嘘だ…怪獣エルザンに…）

「エルザぁ！」

（あ…そんな…暴れん坊ナッツに…）

【グシャグシャ】

（ｍｙ…ｍｙ週サラーが…）

「痛っ、ナツ！許さんぞ！」

【グシャグシャ】

「ははははははは」（ボロボロじゃあ、袋とじも全てボロボロじゃ！）

「やってやるぜ！こいよ！」

「止めろナツ！エルザには勝てねぇぞって何で俺まで殴るんだよ！エルザ！この野郎が！」

まさに大乱闘。最初にミラとナツが殴り合い、それを止めようとしたエルザも喧嘩に加わり

エルザに何故か殴られたグレイ達も参戦して４人による大乱闘を始め、辺りはグチャグチャだ。その過程で楽しみにしていた雑誌が、ゴミくずに変わり果てたのを見たナナシは

「あっハハハハハハmy、mymymymy」

壊れて

「ぢぐじょ〜う〜、ぢぐじょ〜う〜」

泣いていた。

そんな喧嘩を眺めていただけのカナは

「あ～ぁ、私知らな～い…で？あんたは参戦しないの、ナナシ？」

「わ〝だぢの〝ぼい〝ん〝がぁ〝」

「あぁ、そっか。あんた接近戦弱いもんね、週サラは残念だったね。よしよし」

床にうずくまり、喧嘩にも参加しないで、ただ涙を流すナナシの頭を撫でていた。中々、優しい面もあるようだ。

「ぢぐじょ〝う〝～」

私はバンバンと床を叩き悔しがる。これしか出来ないのだ。喧嘩なんか参加してみろ、ボロ雑巾が待っているぞ。カナ！撫でるなよ！何だか、もっと悲しくなるじゃないか！

そう考えながらカナの撫でてくる手を払い退けていた私の耳にカウンター辺りから声が聞こえてきた。

どうやら、数人の大人とマスターであるマカロフが話を始めたようだ。

「マジで酷い世代だよ」

「全くその通りだぜ」

あぁ、大人たちの会話か。つか止めろよ！バカやろう共が！おまえ等が止めていたら週サラーはな！週サラーはな！

「数年後のギルドが想像できねぇぜ」

…私もしたくもないぞ。地獄絵図が見える。今でさえ、うぅ。

…カナ！撫でるな！

「反発しあうのは認め合うからこそ、奴らには互いの顔がはっきり写っておる。なぁんも心配することはないわ」

…

…涙で見えないや…マスター、私は見えないよ。

…

…

…

大乱闘が終わり、ようやく落ち着きを取り戻したナツ達は再び話し始めていた。

「俺の卵どこいったんだよ」

卵なんてどうでもいいよ

「たく」

ため息つく前に服を着ろ。それより

「週サラーぐすっうぅ」

あぁ、ボロボロで雑誌の名残すらねぇ。何だこれ、もうゴミじゃねぇか

「何泣いてんだよ、ナナシにナツ。お前達、可愛いな」

ドSが！私が泣いてるのはお前らのせいだぞ！褒悦な表情浮かべやがって！クソアマがぁ！

「泣いてねぇよ！」

何だよ、ナツも泣いてんのかよ。バカじゃないのかコイツ。卵ぐらいで泣いてんじゃねぇ。私はな、私はな！夢をボロボロにされたんだぞ！

「この辺にしないか、ミラ。ほらナツも泣くんじゃない。…所でナナシは何故泣いている…」

『さぁ？』

てめぇらのせいだ！ボケが！

「いい加減返してやらないか、ミラ」

いやいや、もう私が食べたからな。ナツの卵なら私の腹で消化されたぜ

「私じゃねぇってんだろ。つかてめぇが食ったんだろ」「ぐぇ」

「何だと貴様！！」「ふぐぅ」

また喧嘩かよ。つか踏むな、痛い痛い痛い！何で私の上で喧嘩するんだよ！

「クソアマ共、足をどけんか！」

「あぁ？」「何だと？」

「ど、どうぞ踏んでください、お姫様方」

《……》【グシャ】

「ぐぇ！？本当に踏…い、いえ、何でも…」

「…たまご…ぐすっ」

【ぐりぐり】

えぇ？リサーナがゆで卵にしたんじゃないのかよ。何で泣きそうなんだよ。やっぱり食べちゃダメだったのか？

私のせいなのか？ってグリグリするな！もう我慢できんぞ、卵なんて関係ねぇ。魔法でコテンパンにしてやる

堪忍袋の尾が切れたとばかりに私が立ち上がり叫ぼうとした時

「あぁ、そう言えばエルフマンがあんな卵欲しいっていってったっけ」

突然、カナが衝撃的発言をし、それを聞いた私達は驚きの声を上げた。

『えぇ!?』【ぐりっ】

まさか、エルフマンが茹でたのか?それでリサーナは知らなかったんだな。…わ、私しぃーらないこのまま、踏まれていよぅ

「あいつが食ったのか」

…食ったのは私かな?

「信じられない」

私も信じたくない

「ナツ、リサーナごめん」

おや、真打ち登場だ。さぁ！どう出る、エルフマン。私は助け舟は出さないからな。

「てめぇだったのかエルフマン」

「…卵！？」

って卵持ってるじゃないか。ということは私が食べたのは別物か。よかった。ん？じゃあエルフマンは…

「泥棒だ！泥棒エルフマンだふぎゃ！？」

「黙ってろ」「黙っていろ」

「…ふぁい…」

言ってみただけじゃないか…私だって冗談を言いたい時はあるんだぞ。ただ、お願いだから顔は踏まないでくれ

「別に盗んだわけじゃねぇんだ。夜になると冷えるしナツは寝相悪くて卵をほったらかしにするから」

優しい、優しいエルフマンだ。誰だ！泥棒なんて叫んだやつは！

「じゃあ」「まさか」

「うん、俺魔法が上手く使えねぇから一人でこっそり温めてたんだ」

「そうだったのか。おまえ男だな」

「ありがとうエルフ兄ちゃん」

何だか心暖まる会話をしている所悪いが、こちらは最悪だ。誰か助けてくれ

「さっき私のこと疑ったろ、マジで」

【グリグリ】「痛い…」

「お互い様じゃないのか」

【グリグリ】「あれ？…なんだか」

「…気持ちよくなってきてる…だと」

何だか、道が見えてきた。これが進化、成長していると言うことな

のか。

ナナシが新たな道に一歩踏み出そうとした、その時

【ふわっ】

卵が宙に浮いたかと思うと光を放ちながら、ピシリと割れ始める。

その様子を見たギルドの者達は珍しいモノを見るためだろう、持ち前の野次馬根性を見せ、子供達の周りに集まってきた。

その時、一瞬光が強くなったかと思うと

【パリン】

「きゃう！」

「「「「ネコ！？」」」」

完全に割れた卵の中から青色の猫?が現れたのだ。
まさかの卵からの猫に多くの者は驚愕していた。もちろんナナシもその一人である。

(猫だと!?

いや、正確に言うと猫ではないだろう。猫は卵からは産まれないからな。

何と!翼が生えたネコだ……ふむ…コイツは……【ツバネコ】と名付けようか。)

ナナシがセンスの欠片もない名前を必死に考えているうちに羽を生やした猫はナツの頭に着地し

「あい!」

可愛らしく鳴いた。その瞬間

『可愛い!!!!!!』

卵の誕生を見にきた野次馬や子供達も含めてギルドの皆が猫の虜にされ、猫をもみくちゃにしている。

大騒ぎのギルドの様子を見ていたナナシは

（これは…コイツは…魅惑の魔法か？だったら危険生物じゃないか！？）

「みんな、騙されているぞ！ソイツからは危険な痛い痛い痛い！耳を引っ張るなカナ！」

「今、良いところなんだから、黙っていなさい。」

「バカやろう！？皆騙されているんだ！私の目を見てみろ！この真剣な目を！私が皆の目を覚ま」

「ほらっ予備の週サラよ。今だけ読んでいいから」

「あっちで読んでくるね」

カナに週サラを渡されると直ぐに端っこに移動して幸せそうな顔をして読み始めていた。何とも現金な奴である。

「見てナツ、さっきまでは皆カリカリしてたのにあんなに嬉しそう。この青色の猫ちゃん、幸せを呼ぶ青い鳥みたいだね」

（袋とじ～♪おっほぉ～
ボインボインじゃボケ）

「幸せか……それじゃあこいつの名前はハッピーだ！！」

（ひゃっほ～！…おや…この方は…）

「あい！」

「ドラゴンのハッピーだ！」

「あい！」

「いや、ドラゴンではないだろうが」

（ドラゴン級のボインだ！
うっひょう～！！）

今日は何時も恵まれないナナシも青い猫のおかげで幸せ（ハッピー）な1日を過ごせることだろう。

「う～む、はっぴぃ！」

「あい！！！」

9　幸福（改訂）（後書き）

書き方を変えてしまい申し訳ございません。

一度は、今まで通り書いてみたんですが、何だかセリフを言ってるだけで描写がきちんと表現できなかったので書き方を変えて見ました。

原作（アニメ）通り進めるのは大変ですね。どこを切ろうか迷ったんですが、結局どこも切れずに書き方を変えてしまうと言うお粗末な展開になってしまいました。まぁセリフは少し違いますが。

今回のは作者の力量不足です。申し訳ございません。

今後原作に入るなら、このような書き方に変えるかもしれません。

ただ、皆様から
前の書き方に戻したほうがいい　と言う要望があるなら検討致します。

この話も削除もしくは改定を検討致します。

他にもダメ出しをお待ちしておりますので、よろしくお願いします。

最後に、

今回はようやくナナシにも幸せが訪れて、よかったねという話です。

では感想、ダメ出しお待ちしております。

１０　暗殺（前書き）

今回は別の方の視点です。

前話とは雰囲気が異なるのでご注意ください。

では、どうぞ

10　暗殺

とある街の深夜、多くの街の住人は明日に備えて睡眠を取っている時間だ。

起きている人間と言えば、辺りを巡回している兵士か、もしくは何らかの理由で夜更かしをしている者ぐらいだろう。

辺りは既に暗闇に包まれており、月明かり以外に街を照らすのは外灯ぐらいである。

【コツコツ、コツコツ】

そんな時間に

淡いオレンジ色を放つ、とある外灯の下を三人の兵士が通り過ぎる。

一人は正面を見据え、残りの二人は首だけでなく体全体を使って左右をキョロキョロとしながら歩いていた。巡回のようだ

【コツコツ、コツコツ】

辺りには兵士たちが歩く音しか聞こえず、他の人の足音は聞こえない。前を見て歩いていた兵士は今日も何事もなかったなと思い、とある外灯から遠ざかっていった。

兵士達が通り過ぎると辺りには発情期特有の猫の鳴き声や犬の遠吠え以外に聞こえるのは何もなかった。

その時

突如、嵐が通り過ぎたかのように猛烈な突風が外灯付近を通り過ぎていった。

しかし、動物達は別段と何事もなかったように何時も通りを振る舞っている。動物達にとってはただ風が通り過ぎただけのようだ。

だが、人間が見たら明らかに異常なことは分かる。何故なら通り過ぎた風が再び舞い戻ってきたからだ。

そしてごぅごぅと、ひどい音を出していた風がようやく収まり、辺りに静けさが戻ってきた。

しかし、その時には既に淡い光を放つ外灯の上に一人の男が立っていた。

一体どうやって登ったのだろうか、普通の人間では登ることもできないような高さにある外灯だ。

だが、それもそのはずだ。男は普通の人ではなかったのだから…

男は長い灰色の髪に刺青だらけの上半身をさらけ出し、下半身にはダボダボの灰色のズボンを穿いていた。彼を見た人は誰もが一度は振り返ると思われるほど奇っ怪な格好をしている。

それに加えて、奇っ怪な姿をしている男はこれまた奇っ怪な巨大な得物を手にしていた。

そして、男は何かを調整するように得物を一振りした。すると周囲一体につむじ風が通り過ぎたような風が吹きあれ、それに驚いた動物達が情けない声を出しながら外灯から遠ざかっていく。

それを見ていた男は無表情な顔から一転して不機嫌な顔になると得物を肩にぶら下げ、空高く舞い上がり風のように早く消えてしまった。
男が消えた辺りにはただ風の吹く音が聞こえるだけである。

…

…

…

…

「クソが！！」

巨大な得物を肩にぶら下げ空を舞っていた男は額に汗をかきながら、さらに移動速度を上げた。どうやら男は焦っているようだ。

どこか男の焦りが現れているのだろうか、巨大な得物はカタカタと音を出し続けていた。

自身の焦りに気付いていない男は

「今回は失敗するわけにはいけねぇ。」

そう呟くと男は考え始めた。

どうなってやがんだ、最近、仕事がうまく進まねぇ。

前回ので何回目の失敗だと思っている、それに俺だけの失敗じゃねぇ、ギルド全体が立て続けに失敗してやがる。

このままじゃクライアントの信頼を失っちまうじゃねぇか。何とか今回は成功させねぇと…。

「絶対に遂行してやる」

男は呟きながら移動速度をさらに上げ、目的の地まで急ぐため、体に風を纏わせると疾風のように辺りを通り過ぎていった。

…

…

そしてようやく男の目的地に辿り着いたのだろう。どうやら男の目的地は巨大な門がある豪邸のようだ。門の前には見張りだろうか複数の人の存在が確認される。

「けっ」

しかし、男は門など関係ないとばかりに上空を飛び門を抜けるとゆっくりと屋敷の屋根に降下し、降下地点でタムロっていた黒猫を風を使って追い払った。そして辺りをキョロキョロと見回すと何もない場所に話し出した。

「首尾はどうだ?進んでんだろうな、あぁ?」

すると

「大丈夫ですよ、今カラッカが潜入中です」

どこからともなく声が聞こえたかと思うと男の影から一人の青年が現れた。

「カゲヤマか…」

男は現れた青年を見、顔を歪ませたかと思うと

「ひっ!?」

巨大な得物を青年の足元に向かって振り下ろした。男の突然の行動

に青年は腰を抜かせたのだろう尻餅をついている…が、

男はそんなことはどうでもいいと言わんばかりに青年の襟首を掴み取り軽々と持ち上げ、

周りに聞こえないように囁くようにだが、ドスの効いた声を響かせる。

「潜入中とはどういうことだ、あぁ？俺が着いた時には済ませとけっていったよな！
時間が勝負何だよ、この仕事はよ！分かってんのか、もう失敗はできねぇんだよ！」

イラつく男の声によって身を縮ませる青年は震えながら、か細く声を出した。

「わ、分かってますよ。で、でも屋敷が広すぎてカラッカや僕だけでは探すのが大変なんですよ。今までは六人チームでやってたじゃないですか。今日は三人何ですよ…そ、それに…」

男を納得させるために身振り手振りで説明を続けている。

それを黙って聞いていた男は、そんなことは知らないとばかりに投げ捨てると痛がる青年を無視して歩みを進めた。

「人数なんて関係ねぇんだよ、言い訳いってる暇があったら探しにいけ！今回は俺がやる。お前らに任せたら、またヘマするからな」

振り向くことなく言い放ち、それを聞いた青年は了解の返事をするや、いなや急いで自分の影に潜り消えていく。

辺りには男以外に誰もいなくなり、男は盛大にため息を吐いた。

「…はぁ」

（この仕事を始めてから多くの駒がギルドを去っていきやがった。始める前まではギルドで一番のエースと呼ばれる俺を含めて多くの優秀な駒がいたんだがな。

くそが！何でこの仕事の凄さがわかんねぇんだ！今までの仕事が馬鹿らしくなるぐらいの大金が転がり落ちてくんだぞ！馬鹿なやつらが！）

そう考えると、イラついた手でワシャワシャと髪を掻きあげ、自身を明るく照らす月を睨み付けた。

その時、再び影の中から青年が現れる

「…さん！ターゲット見つけました！」

「あぁ…行くか。ショーの始まりだ…お前らは逃走経路を確保しておけ」

青年からの報告を聞くと男はニヤリと笑い先程まで纏っていた雰囲気を消し飛ばした。

そして神経を集中させると真剣な顔になり、男の仲間が開けた窓から屋敷の中に入っていった。今回は絶対に成功させてやる！と心の中で呟きながら…。

神経を集中させ、屋敷を徘徊し始めた男だったが
終始、屋根にいた黒猫が男達を見ていたことには気付くことはできなかった。

男達が消えたことによって辺りには静けさが戻り、月明かりの中、屋根の上にいた猫の鳴き声が響き渡るだけだった。

…

…

…

…

…

（今回の仕事は成功だ！）

静けさを漂わせている屋敷を徘徊していた男は今回の仕事の成功を確信していた。

（情報通り、護衛や魔導士が屋敷の中には一人もいねぇ。今回貰った情報は本当のことのようだな、今まで何回か偽情報を掴まされたからな。）

これでクライアントの信頼が戻ると男は心の中で呟きながら、とある部屋に誰に見つかることもなく侵入を果たした。

部屋の中では何やら高級なお香だろうか、香しい匂いが部屋を充満しており如何にも金持ちの部屋であることを主張していた。

「ちっ」

その匂いを嗅いだ男は顔をしかめると、早く仕事を終わらせようと、すぐに部屋の主を探し、見つけることが出来た。

どうやら、ベットで寝ているようだ。大きなベットの上で上等そうな敷布を被った人の形をしたモノが上下に揺れており

呼吸をしているのが誰の目からでも明らかであった。主は寝ているようだ。

それもそのはずである、時間は深夜なのだから。それを見た男はペロリと舌で乾いた唇をなぞると、躊躇することなく手に持っていた巨大な【鎌】を主に向かって振り下ろした。

ザクッ

（殺った…これで終わりだ）

男が振り下ろした大鎌は見事に主の首と胴を切断することに成功する。主の暗殺に成功した男はすぐさま部屋を後にしようしたが…男はふと気付いた。

「血が噴き出てないだと！」

ビュン

「！？」

異変に気付いた男が振り返った時には遅かったようだ。

切断したはずの主が立ち上がり部屋を後にしようとしていた男の背後から襲い掛かったのだ。

「ちっ！？」

男は何とか転がることによって、首のない主が持った剣を避けることに成功する。

「どうなってやがんだ！？」

男が驚愕の目で見、叫ぶのを関係ないとばかりに主は再び襲い掛かってくる

「クソが！！」

が、男が大鎌を縦に一線すると主は半分に切られ、ゆっくりと倒れると共に暗闇の中に消えていった。

まるで最初から存在しなかったかのように。

「魔法だと…影魔法か！？」

「…ご名答…」

「！？…猫だと…」

そして、男が主の正体が魔法だとわかるとイキナリ部屋に別の声が響く。

男が辺りを見回してみると、一匹の赤目をした黒猫が月明かりに照らされた窓際で横になっていた。

猫は横になったまま男の顔をギロリと睨むと喋り出す。

「流石はギルド【アイゼンヴァルト】でエースと謳われることだけはあるな。魔法の知識をしっかり持ってやがる。

いやはや、何で暗殺なんて馬鹿げたことをするのか…見当もつかねぇな」

「……なんだと…」

男が怒りでワナワナと震えるのもお構い無しと黒猫は喋るのを止めない。

「ちゃんと最後まで確認しないといけねぇさな。お前らアイゼンヴァルトは何時も詰めが甘いんだよ。…だから失敗ばかりするんだ。バカやろう共が…」

黒猫の、その言葉を聞くと男は確信する

「まさか！てめぇか！最近俺たちの邪魔をしている奴は！」

【ストームブリンガー】

今までの仕事を邪魔された苛立ちをぶつけるよう、

すぐに男は魔法を展開させると指で印を結び指から一塊の風の弾丸を黒猫に向けて放つ。

バゴンという音が部屋に響く。どうやら窓際に直撃したのだろう、盛大にモノや窓ガラスが割れる音が聞こえ、辺りは土煙が立ちこめている。

「ザコが…」

そうポツリと呟いた男は割れた窓から外へと逃亡図ろうとする。

しかし

「あ～ぁ、勿体ないなぁ。高級品ばかりの部屋なのによ」

ベットの方から先程と同じ声が聞こえてきた。

すぐさま体ごと反転させるとベットでゆったりと、黒猫がくつろいでいた。

「俺の風魔法を避けただと…ふざけやがって！」

【ストームブリンガー】

【ストームブリンガー】

【ストームブリンガー】

男は何度もベットに向けて魔法を連発した。何度も魔法が命中し、ベットからは羽毛や綿などが飛び散ったことにより、辺り一面に舞い落ちている。

「はぁはぁ…これで…」

「これで？まさか終わりだとでも？だからダメ何だよお前らは」

「！？」

何度も魔法を使い疲れた男は肩で息をつくが、その背後から再び声が聞こえた。

「何故だ！俺の魔法は当たったはずだ！」

男は唾を撒き散らしながら叫ぶ

「いやいや、自分で最初言っていただろうが、忘れてないか？猫にも影はあるんだぜ。…まずは落ち着けよ」

黒猫は言うとアクビをし、大きく体を伸ばした。まるで男を舐めている行動のようだ。

「なっ！？」

怒りで震える男を眠たげな目でギロリと睨むと

「もうお前達は終わりだよ、私達が調べた限り、違反だらけの真っ黒ギルドだ。そして、数回にも及ぶ暗殺未遂行為。私達が止めていなければ何人の犠牲者が出ていただろうかな。

全く…知らないのか？
暗殺は評議会で禁止されているんだぞ。今回ので証拠は十分に揃ったんだ。ギルド解散命令と豚箱の飯を覚悟するんだな。アイゼンヴァルト・死神のエリゴールよ」

そう喋ったが、男はすぐに

「ふざけるな！貴様を殺せば真実は闇の中なんだ！死にやがれ！！」

【エメラ・パラム！】

強力な風を纏わせた鎌を勢い良く振ると部屋の至る所を破壊していく。

「この魔法からは逃れることは出来んぞ！本体は部屋の中にあるはずだ！」

「…ご名答…だけど冷静な判断が出来てないようだな。

…影の中にいれば風なんて大丈夫なんだよ。ちゃんと魔法の相性を考えないとダメだなぁ、風では影に潜った魔導士を傷つけることはで「ちぃ！？」きんよ。

まぁ、風以外も効かないけどね。ただ、こちらからも何もできないのが厄介でね、それをどうし…って無視かよ！？」

再び無傷の姿を確認すると男は黒猫が喋るのを無視して壊した窓から外に飛び出した。

それに気付くことなく喋り続けていた黒猫は、返事がないことを不振に思い顔を上げると、

そこには風に揺らされているカーテンだけだった。ようやく無視されたことに気付くと

「…遂に犯罪者にも無視されるようになったか…はは、泣けてくるな」

にゃーにゃー鳴いていたとか

…

…

「クソが!?ギルド解散命令だと…ふざけるなよ。アイゼンヴァルトは終わら!?ちぃ!!」

外に飛び出した男は逃走を図ろうと、そのまま勢いよく風に乗り飛び立とうとしたが、男を大量の炎の鞭が襲った。すぐに風で打ち消す。

【プロミネンス!】

屋敷の庭で誰か魔法を展開したのだろう。

再び、無数の炎の鞭が襲いかかってくる。炎が男を捕まえようと近付いてくるが、男は逃亡失敗を覚悟することなく

「炎は俺には効かねえよ、見せしめだ!殺してやる!」

そうイラつきながら叫ぶと、無数の炎の鞭を風で打ち消すと下の方から炎の魔法を放ってくる男と横に佇んでいる男に向かって魔法を放った。

【エメラ・パラム！！】

男の大量の魔力を注ぎ込んで作った巨大な風の塊はごぅごぅと音を立て、下にいる男達に向かって勢い良く落ちていく。

「もう避けることはできん！死ね！！ハエ共が！！！」

【影壁】

が風の塊は下の男達に当たることなく漆黒に覆われた壁に塞がれた。

男が魔法を放つと共に下にいる男達の影からずぶりと黒猫が飛び出すと魔法を展開し風を防いだのだ。

「ちぃ！さっきの猫野郎か！？」

「ご名答…って飽きてきたな。そろそろ…だよな？」

「そうだメェーン☆」

「何言ってやがぐあぁぁぁぁあ、な〝ん〝だ！ごれ〝ば！！」

黒猫の言葉に横にいた白いスーツを着た男が☆マークを出しながら答えると、すぐに風使いの男を大量の苦痛が襲った。

そのため、風の制御が出来なくなった男はキリモミしながら地上に落下する。

【オロチ・シャドウ】

風使いが落下すると共に黒猫が魔法を展開させ、無数の蛇を出現させると風使いを襲わせ縛り上げることに成功する。

それを見た黒猫は男達と顔を見合わせ頷くと、魔法陣で体を覆い、眩い光を放ち、光が収まった頃には長い白髪を首筋で纏め漆黒のスーツを着た赤目の少年となっていた。

「まぁ、一丁上がりってヤツだな」

そう呟く少年の胸元で鳥をモチーフとした銀色のネクタイピンが月明かりに照らされてキラキラと輝き続けていた。

…

…　…　…　…　…

風使いの男を捕縛した少年達は、その後は事前に捕縛して気絶している二人も連れてきて、彼らを引き渡すために評議会直属の拘束部隊を待っていた。

そんななか、退屈だった少年達はたわいない話をしている。

青いマントを羽織っている炎使いが髪を掻き分けながら

「匂いって恐ろしいものだね…今後、気を付けないと…」

やれやれと眠たげな目をこすっている少年が

「全くだな…匂いだけで死神を倒すとは…信じたくないが…目の前で見てしまうと信じるしかないな」

1人だけ様々な奇っ怪な行動をとっている男が

「ふっ☆私の【パルファム】からは逃れられないのだメェーン☆
イケ☆メェーン☆」

三人がそんなことを会話している。そんな時、一人だけ意識を回復させていた風使いが牙を向く。

「何故だ！匂いだと！そんなもの俺の風で「いや、いやお前はさっき部屋に入った時に匂いを嗅いだだろう…馬鹿野郎が…はぁ、ねむ…」なっ！？」

「今回の【パルファム】は遅延性のものだメェーン☆」

「残念ながら君たちの行動はすべてお見通しだったのさ」

牙を向いたが即、へし折らた男は
くそが…と唾を吐くと男達が体に身に着けている紋章を見て再び叫んだ。

「何で

【フェアリーテイル】

【ブルーペガサス】

【タイタンノーズ】
が一緒にいんだよ！！ギルド同士が手を結ぶなんて聞いたことがないぞ！」

唾を撒き散らしながら叫ぶ風使いを見て

【タイタンノーズ】の炎使いが言う
「合同での調査依頼だったからね」

【ブルーペガサス】の
匂香使いが言う
「皆、暗殺には敏感なのさメェーン☆」

【フェアリーテイル】の影使いが言う
「まぁ、金持ち達を怒らせるなってことだ。お前達はやりすぎたんだよ」

ギロリと少年達を睨んでいた男だったが、既に逃げることは不可能

と感じたのだろう。

「くそったれが！！！」

大声で悲痛な思いを叫ぶと地面に唾を吐いた。

……

……

……

……

その後、評議会により魔導士ギルド【アイゼンヴァルト】は解散命令を下され、それにプラスして多くの逮捕者が出ることとなった。

しかし、アイゼンヴァルトが活動を停止したと言う話は聞かない。

１０　暗殺（後書き）

今回はアイゼンヴァルトの過去について書いてみましたが如何だったでしょうか…

次回はこの話より二年後の十五歳となったナナシの話の予定です。

それではまた今度お会いしましょう。

感想・ダメ出しもお待ちしております。

11　二年後

とある日のマグノリアにて

太陽は沈みかけており、空からはオレンジ色の眩い光が建物や地面に差し込んでいる。どうやら夜になる時間も近いようだ。

多くの者が帰宅したり、夕飯を作り待っている時間帯である。

そんな時間のマグノリア南口にある公園のベンチにて二人の人影が沈み掛けた光に照らされて地面に写し出されていた。

ベンチを見てみると少し疲れた表情でタバコを吸っている青年と小さな老人が座っている。

何やら青年はタバコを加えたまま喋っている。なかなか器用な奴である。

その青年の横の老人は、青年の話を目を瞑り黙ったまま聞いていた。

「…でだ…これが最後の情報だが、マスターが言ってた通りイワンがギルドを設立していたみたいだ。マスターイワンって呼ばれてたからな。」

老人は目を瞑ったまま青年に催促する

「…ギルド名はわかったか？」

青年の方もタバコを銜え沈む夕日を見たまま言う

「あぁ…【レイブンテイル】だそうだ。」

「…レイブン…テイル…じゃと…」

老人…いやマカロフは目を開き青年を見た。青年もタバコを口から取り、片手で持ち直す。

「あぁ、【大鴉の尻尾】だとよ。鴉…カラスねぇ

…まるで【妖精の尻尾】に対抗するかのような名前だよな。しかし何でカラスなんだろうな…」

「…ふむ…して、奴の居場所は…」

青年は顔をしかめて、頭をワシャワシャと片方の手で掻く。

「すまんが、居場所まで突き止められなかった。転々としているようでな。

一度、それらしき場所に潜入したんだがな、もぬけの殻だったよ。」

「…いや、名前が分かっただけでも収穫じゃよ。よくやってくれたの、ナナシ。」

そう言いながら立ち上がり、軽く肩をポンポンと叩いた。叩かれた青年、ナナシも満更でもない顔をするが、再び顔を引き締める。

「アイツが何考えてんのか分からんが…フェアリーテイルに害になることは間違いないんだろ?今後も、なるべく注意して情報集めするさ」

「いや…それは別の者に任せる。…お主には別のクエストにいってもらいたいのじゃ」

「…イワンより大事なことなのか?」

「と言うよりも、奴のことも入ってるかもしれん」

そう言いながら、懐から出したある紙をナナシに手渡す。

「闇勢力調査?これ前に募集してあった評議会からの依頼だろ?うちのギルドからは誰も行かなかったけど…もうクエストは完了しているんじゃ……まさか…全滅か?」

「いや、事実上の失敗だそうじゃよ…死亡者は極僅かじゃが得られた情報は少ないそうじゃ。無理に、とは言わん、仕事から帰ってきたのにまた送り出すのは忍びないからの、だがお主が行ってくれるなら今よりも情報が多く得られるかもしれん。」

ナナシは目を瞑り数分、思案した後

「……少し、考えさせてくれ」

そう言葉を返し、先に帰っておるぞと言うマカロフが去った後も、ただ座ったまま夕日を見続けていた。

その時、一陣の風が通り過ぎ、とうの昔に灰の塊となったタバコが根元から消え無くなってしまったが、ナナシが気付くことはなかった。

…

…

…

はぁ、どうしたもんかな

今回の仕事は比較的楽だったが、この仕事は…時間が掛かるし骨が折れそうだな。最悪、死を覚悟しないといけないぞ。

それにしても闇ギルドの調査…か。ここ二、三年、コイツらの動きが活発化しているみたいだな。

それを危惧した評議会が一年前に調査を各ギルドに依頼して、ある程度の人数が情報集めに走ったが

…どうやら失敗したようだ。それで二次募集か…。

S級クエストではないが、それぐらい危険度は高いな。しかも先の調査で何人か死人が出ていると言う話だし、どうする。

…アイツらは反対しそうなんだよな。

だがアイツらのためを思なら参加すべきだろう。

内緒でいくか？いや、バレたらヤバそうだ。…やはり説得するしかないか。

それにしても闇ギルドか…そう言えば

アイゼンヴァルトがギルド解散命令を出されてから、既に二年が経った。

しかし、奴らが活動を停止したと言う話は聞いていない。つまり奴らは正規ギルドではなく、闇ギルドとして生きることにしたんだろう。

しかもエリゴール達、つまり私達が捕縛した奴らの殆どが脱獄したらしい。

…簡単に脱獄できんのかよ。何やってんだよ評議会！

せっかく苦労して地道に証拠集めとかしたのによ。何だか私たちがやったことは無意味だったような感じがするぞ。

って話が逸れたな。つまり、アイゼンヴァルトのように最近、闇ギルドに転換する正規ギルドが増えてきているみたいだ。

闇ギルドは一時期は活動を硬直化させていたんだ。だが最近になって活動が流動性を帯びてきやがった。何かヤバいをしている可能性が十分に高い。

それに闇ギルドを纏めている存在も噂されているしな。闇勢力が組織化されつつあるのか？よくわからないな

本当に現時点では詳細がよく分かっていない…まぁ、だから評議会が重い腰を少し上げ動き始めたのだかな。

しかし結果は知っての通り…失敗か。なかなか手強いようだ。もしくは評議会の見通しの甘さか…だな。

しかしこのまま闇の勢力を何の情報もないまま野放しにしておくのは危険だ。元フェアリーテイルのイワン・ドレアーつまりマスターの息子が新しく設立したギルド【レイブンテイル】が魔導士ギルド連盟に加入したという話は聞かない。ということは、奴も闇ギルド

なわけだな。

やはり受けてみるか…危険な仕事だが、闇の勢力＋イワンを調べるには持って来いの依頼だ。

フェアリーテイルに危険が及ぶ芽は早いうちに摘んでおいたほうがいいだろう。

「ふむ、調査依頼受けてみようかな」

そう決心するとナナシは一度立ち上がり、持っていた吸い殻を影の中に落とすと、

長い髪の毛を束ねていた七センチ程の銀の筒でフェアリーテイルの黒色の紋章が刻まれた髪留めを外し、夕日に当てながら考える。

調査するときはコイツとネクタイピンは外した方がいいかな?

素性がバレたら厄介なことになりそうだ。フェアリーテイルになるべく危害が及ばないようにしないとな。

そんなことを集中して考えていると、ナナシの背後から聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「…調査？また仕事にいくのかよ！？」

「あぁ、お前か…ミラ」

ナナシが振り向くと少し息を切らしたミラの姿が視界に入ってきた。

ナナシは久しぶりのミラの姿に、仕事で疲れた体も何のそのと、嬉しそうな顔に変えミラに近付く

が、少し横に視線をズラし、何かを発見すると溜め息を吐こうとしたが、

それより…と考えると視線をミラに戻した。

…

…

…

…

「久し振りだな。マスターに聞いたのか…元気してたか？っとと、訊くまで無さそうだな。」

私が返答を聞く前にミラが勢い良く抱きつき胸に顔を埋めてきた。

半年ぶりだからな。寂しがり屋のコイツは耐えられなかったのかな。

「…おかえり…」

「あぁ、ただいま」

そう言った後、顔を上げてきたミラと軽く唇を合わせる。

「…ん…」

本当に触れ合うぐらいの軽いキス。でもそれで満足したのか、再び顔を胸に埋めてきた。可愛い奴め。

「ミラ…」

「ダメ…私も我慢してるから、家に帰ってからな。…それより仕事は3ヶ月の予定じゃなかったのかよ?

プラス3ヶ月も嘘ついた。ずっと待っていたのによ…」

顔を上げて、潤んだ眼をして、少し怒ったような顔でこちらを見てきた。ヤバいな、一度ぐらい連絡すればよかったかな。

「うっ……予定より情報が集まらなくてな。延ばしたんだよ。半年間飛び回りまくってたからな。…連絡できなくて、すまなかった」

「今だけ許してやる…ちゃんと帰ってきてくれたから…」

「際ですか…」

ふぅ、許してもらえて一安心だ。
しかし、私はまだ信用されてないのか…そんな簡単に私は死なないぞ！

十五歳になっても信じて貰えないとは…悲しいものがあるな。まぁそれより

「ベンチに座らないか」

「あぁ、つうか、何で髪解いてんだよ…付けてやるから早く座れ」

無理矢理、私を座わらせると背後に立ち髪を纏めてくれた。

あぁ、逆らえなくなった自分が嘆かわしい。しかし逆らったら死が待っているからな。

私も成長したよな。二年前に比べたら丸くなってるような気がする。

しかし、私だって男だ！ここはガツンと言ってやるんだ。何時まで

も尻に敷かれるには、いけないのだ。

「ところで、今度は何の調査に行くつもりなんだよ？」

横に座ったミラが内心、意気込んでいる私に寄りかかると再び話を始めてくる。

「いや、別にお前に言うほどのことじゃ…「あぁん？」あのね…闇ギルドの調査に参加しようかと…はい…」

やっぱり無理か…あんな目で睨まれたらな。

そう言った後、ミラを見てみると顔を俯かせていた。はぁ、やっぱりか

「……だめ…」

「あ？なんだって？」

「…ダメ…絶対ダメだから…調査なんて行かせない！」

「いやいや、お前が決めることじゃ「やだ！」っとと」

そう私が言うとミラは顔を上げたかと思うと再び抱きついてきた。

落ちつけよ…

「そのクエストだけはダメだからな！あれで他のギルドの奴らが何人死んだと思ってやがる！」

「いやいや死人は少ないって聞い「それでもダメだ！」…」

ミラは、絶対に私を行かせないとばかりに強く抱き締めてきた。はぁ、全く、何時まで経っても変わらん奴だ。ゆっくりと頭を撫でながら口を開ける。

「…大丈夫、死にゃあしないよ、何回も言ってるけど、調査の仕事とかは私にとって腕の見せどころみたいなモノだからな。そうへマはせんよ。「ダメだ！」…それに二回目だ…一回目の教訓を生かして別の方向からアプローチするに決まっているさ。評議会だって馬鹿じゃないんだ。だから「別のクエストにしやがれ！」聞け！！ミラ！！」

普段はあまり出さない私の大声にビクリと肩を震わせたミラの顔を無理矢理上げさせ、目をしっかり見つめて話し出す。

「…さっきミラが言った通り何人も死人が出ているんだ、つまり何かあるに決まっている。これは絶対調査しないといけないんだ。でもミラが心配するようにこのクエストは相当、危険なものかもしれない…」

「だ、だったら…」

「でもな、これは私自身の道に出来た壁だと思うんだ。これを突破しないと私は自分の道を真っ直ぐ歩けないかもしれない。前に私は言ったよな？」

覚えているか？というような感じで私が聞くとミラは私の目をしっかり見ながら呟いた。

「…自分の道の果て…」

「そうだ…私たちは今、自分の信じた道を歩いている。もし、その道に果てがあり、そこに辿り着けたならば、きっと満足いく幸せがあるだろう。

なんせ私達が自分で悩み、選び、進んだ道だからね。

でもそんな道の途中には必ず色んな難関の壁があるんだ。でもな、だからこそ、その壁を踏み越えていけば幸せは必ず来るはずなんだ。

もちろん、今も幸せだ。だが、それなら最後も幸せになりたいじゃないか

壁に出会って引き返したり、それを避けて進もうとしても決して満足いく最後は迎えられないと私は考えてる。だからこのクエストには行くからな」

「でも死んだら意味がないんだぞ！」

そう怒鳴るミラを落ち着かせるように優しく、優しく綺麗な銀髪の頭を撫でる。

「大丈夫…奴らの中枢には入るつもりはない。何とか外から情報を集めてみるさ」

「…でも…」

ミラはくすぐったいように身をよじらせるが、まだわかってくれないようだ。

イワンのことはあまり言うべきじゃないが仕方ないな…濁して言うか。

「もしかしたら、フェアリーテイルにも危害が及ぶかもしれないんだ。」

「……」

「私はね…ミラを幸せにしたい。いやミラだけじゃない。カナやエルザ、それにギルドの皆を幸せにしてやりたいんだ。…それが私の目指す道だからな。だから、わかってくれないか？ミラジェーン」

そう言い終わると、俯き何やら考えているミラを両手でしっかり抱き、答えが出るまでずっと抱き締め続けた。

…

…

…

数十分するとミラも大分落ち着いたようだな。

「あんまり無茶するんじゃねぇぞ…ナナシは弱いんだからよ」

そう言うとミラは顔を上げた。

よっし！最難関のミラを突破すれば後の二人は大丈夫だな。

それにしても顔が赤いぞ

抱き締められて…恥ずかしかったのか？可愛いなこの野郎

それに今更じゃないのかな、この数年間、ずっとやってきた行為だろうが。

本当に女心は何時まで経っても分からないままだな。よくデリカシーがないとまで言われる始末だ。

まぁ、それは置いといて、とにかくミラを抱き締めてやらねば。コイツも成長したからな。特に胸とか胸とか胸とか。

顔を赤らめ俯きながら顔を胸にすり寄せてくるミラを待たせるのは悪いから、

「いただきます」と、まずはこのイヤラシイ体を作ってくれたミラ神にお礼をいった後、

両手でしっかり抱きしめて、さっきよりも神経を集中させて体を堪能する。

おぉ、柔らかいぞ。

…ヤバい我慢ができん！経った二年でこんなに成長しやがって！

今は頭に手を置いて撫でていたが、ミラの嬉しそうにしている顔を見ているとムラムラしてきたぞ！

「あぁ、心配するな。自分の事ぐらいわかっているさ！」

「あ…」

と言って手で無理矢理ミラの顔を上げて唇を奪…

「でぇきてぇるぅ！」

「ハッピー!?ナ、ナナシ離せ!!!」

えなかった。あぁミラが離れていく…終わったな…キスできる雰囲気じゃない…。

何故、出て来たんだ。馬鹿やろう!!最後まで隠れていてくれよ!

このノンハッピーやろうが!!

「ツバネコぉ!?」

「あ〜また、そんな呼び方して!オイラはハッピーだよ!」

なぁにが!ハッピーだ!飛んでる猫はツバネコで十分じゃ!!せっかくのチャンスを不意にしやがって!

「ツバネコはツバネコで十分だ!!な?ミラ?」

ベンチに座り直し、私から一定の距離を取って服の乱れを直しているミラに聞く。

「いや、その名前はないだろ」

「えぇ！？」

否定されたし…あぁ暖かみも消えて何だか…

「ナナシ！！勝負だ！」

「もぅ、ハッピー！ナツ！…せっかくいい雰囲気だったのに！」

「…ナツとリサーナか」

…隠れて見るぐらいなら、ハッピーをちゃんと見ていてくれよ。夜までお預けになっちまったじゃねぇか！！

「お帰りなさい、ナナシ兄ちゃん」

「あぁただ「そんなことはどうでもいい！ナナシ勝負だ！」…」

「いやいや、挨拶は「ナツ！ナナシは疲れてんだ！今度にしろ！」…」

「いやだ！勝負するんだ！」

「勝負はし「ねぇねぇ、オイラはハッピーだよ！ねぇ？」…」

「わかってい「さっきは惜しかったね。ナナシ兄ちゃん…って聞いてるの？」…」

「……」

「ナツ！」「いやだ！」
「ね？ね？」「聞いてる？」

何だ、このカオス…全員落ち着けよ。喋れないじゃないか。

あぁ…そう言えば、これが日常だったな。半年もいないと感覚が薄れちまうな。

「ナナシやるぞ！！」

…しかし、勝負か…。はぁ…何時分かってくれるのかな…ナツはよ。

私は喧嘩は弱いんだよ。って言っても殴ってくるしな。何時も影の中に沈めているのがダメなのかな？

しかし今回は絶対に切り抜けないといけないぞ。

夜に支障が出るかもしれないからな…

「オイラハッピーだよ！」

「わぁってるよ」

そうだ！あの魔法を試してみるか、いい実験台がいなかったからな。この際ナツでも大丈夫だろ

「…それよりナツに良いもの食わせてやろう」

「なんだ！珍しい食い物か？」

ふふっ、やはり食いついてきたか。しかしナツに取って食い物であることには変わりはないな。

「あぁ、【コブラ・シャドウ】」

私が魔法を展開すると足元の影から、にゅるりと黒色をした普通サイズのコブラ科の蛇が一匹出てきた。

『蛇？』

「疑問はいいからコイツにお前の自慢の炎をぶつけてみな」

私はナツを威嚇するように【コブラ】の体の前部を直立させるとナツに炎を出すように催促をする。

「なんだ？ソイツ焼いたらうまいのか？よし！丸焼きにして食って

やる。行くぞ！」

【火竜の咆哮！】

ナツはごぅと口から灼熱の炎を出してコブラを丸焼きにしようとするが

「ナツ！蛇が火を飲み込んでいるよ！！」「ホントだ、熱くないのかな…」

コブラはあんぐりと口を開けるとナツの出している炎を吸い込み始めた。そしてナツが出した炎を全て吸い込み終わると口を閉じる。

「リサーナ、魔法の蛇だから熱くないさ。そしてツバネコの言う通り、これは吸収してるんだ、そして変換し」

炎を出し終えたナツに向けて、

「放出する！」

私の声と共にコブラもまた、ごぅと口から炎の塊つまり炎弾を打ち

出し、見事にナツにぶつかった

「おぉ！！俺が出した炎が俺でも食える！」

が、ナツを丸焼きにすることはなく、逆にナツも嬉しそうに炎弾をパクリと食べてしまった。ふむ、ナツに炎の魔法は効かないからな。

「変換して炎弾にしたからな、既にお前の炎じゃないのさ」

しかし実験は成功だ、しっかり吸収して、魔力を変換させ弾丸として打ち出せることができたからな。今後、戦力として使えそうだ。上出来、上出来♪

「カウンター用の魔法？」

「おっ、さすがリサーナ。すぐにわかったな。どうだ、いい戦力になりそうだろ？」

「…微妙だね。でもこんな魔法いつの間に作ったの？」

「び、微妙…。す、凄い魔法だろうが！

コイツはな！昔の仕事で、こんな魔法具使っている奴いたから既存の影魔法を弄って作ってみた私の大作だぞ！

この魔法作るのに三か月もかかったんだぞ！」

「え？よく魔法改良する時間があったね（……ナナシ兄ちゃんまさか……）」

「いやぁ、仕事の合間、合間にやってたからな。この半年も情報集める（イワン以外の情報）よりそっちに専念していたんだぜ」

「あ？専念してた？」

「え？あ…やば…」

ヤバい、ミラがいるの忘れてた！

「情報集めるより優先した？…じゃあ、そんな変な魔法考えなかったら本当はもっと早く帰ってこれた？」

「あ…い、いや…つか変って…頑張って作った魔法なのに…」

「また嘘ついたな！……前はカナにはしてないって言ってたのに…本当はしてた…」

「そ、それは解決しただろうが！」

「確かに弱くて、お調子者で、えっちなナナシは私達三人が面倒見ることに決まったけど…

【今度からは嘘を吐きません】…て約束したよな！あぁ？」

「ひっ…あ、あわわ」

あぁ死んだ…今日はもう幸せは、やってこないのだろうか。

「オイラ知ってるよ！これ修羅場ってヤツだよ。そうだよねナツ！」

「すっげぇ！初めて生で見た！皆に教えねぇと！」

「二人とも喜ばないの…はぁ…またナナシ兄ちゃんの自業自得だね…」

てめぇら！人事だと思って楽しみやがって！ハッピー、お前は幸せを呼ぶ猫じゃなかったのかよ！
今だぞ！今こそ名前どお

「聞いてるのナナシ！！！！」

「は、はい！き、聞いてます姫！」

「カナとエルザのとこ行くわよ」

「へい！」

…おわた。

…

…

…

…

数日後

マグノリアの、とあるギルドでは干物のように干からび、グッタリとしている青年の姿が見れたという。

11　二年後（後書き）

ナナシも15歳になりました。

少しは成長するということですね。

また、自分の近くに可愛い女の子がいれば

女性に興味を持つ成長したナナシなら手を出してしまうのが当たり前だと

作者は設定しているので、

当然、ナナシは手を出しています。

彼の性格は草食系じゃなく、肉食系に近いですからね。

それに、これぐらいの性格でないとハーレムは作れないような気がして……

では、また今度お会いしましょう。

感想・ダメ出し、お待ちしております。

12　力

とある日の朝

朝陽が昇り朝霧が出なくなった頃、ある者は出勤し、ある者は店を開け、ある者は食事を取っていた。

それは、街の外れにある青年の家でも同じことで、二人の男女が椅子に座り仲良く？テーブルで食事を取っていた。

広々とした一軒家の中は男の一人暮らしとは思えないほど綺麗さっぱりとした雰囲気の部屋になっており、

めんどくさがりやの青年が掃除したとは、到底考えれない。

しかし、部屋が綺麗になっているというのに食事を取っている青年はどこか不満げな顔をしていた。

青年は私、不機嫌です。構ってくださいと言わんばかりに一緒に食事を取っている少女の方をちらちらと見ている。

そんな青年ナナシを、少女カナは、まだまだ子供なんだから。ホントしょうがないわね。

一応、聞いてやろうかなと考えるとナナシに喋りかけた。

「まだ怒ってるの？もう1ヶ月経ったよ。いい加減機嫌直しな。」

声をかけてきたカナに、待ってました！とばかりにナナシは勢い良く立ち上がり叫んだ

「あぁ？当たり前じゃボケが！どうして私の私物が一切合切捨てられていて、お前たちの私物が置いてあるんだ！」

「あ、この卵焼き美味しい。さすがミラだね。ね？ナナシ」

「た、確かに美味しいけど…」

「それと来月からのクエスト、気を付けて行きなさい。一年間も離れるんだから連絡はちゃんとしなさいよ？」

「あぁ…万全の注意を払って仕事はするし、連絡もするけど…って話が繋がってないぞ！？」

「うまうま♪」

「…また無視……私の愚痴を聞いてくれるんじゃないのかよ…」

見事にナナシの怒りは無視されるという結果となった。

毎回の如く無視されたことによって落ち込み、うなだれているナナシに構うことなくカナは喋り出す。

「そう言えば、エルザが仕事でいないのは分かるけど、ミラはどこ

いったの？」

「…一度、家に帰った。お前がぐーすか寝てる間にな」

ナナシが言うとカナは食事を止め、じとー、とナナシの目を見て「…えっち」と呟く。

「何でだよ！？寝てる時は何もしてねぇよ！？」

それに反応したナナシも再び、立ち上がり反論するが

「…本当に？」

「……さて久しぶりにギルドに行くかな」

ガシッと顔を両手で掴まれ目を合わせられると、目をキョロキョロさせ始める。

そして終いには、カナのジト目から逃げ出そうと懸命に、もがき始めた。

その時

「ただいま…って何してんだよ…」

現在二人が食べているご飯を作ったミラが帰ってきた。

「ぐふっ！？」

「いつものことよ。それよりミラ、朝ご飯ありがとうね。美味しく頂いているわ」

掴んでいたナナシの顔を平然とテーブルに打ち付けると、にこやかに笑いミラに礼をした。

対してミラも、コイツまた何かしたわね。そう考えた後、喜んでもらえてよかったと言い、

テーブルに突っ伏していた変態を床に投げ捨てると、椅子に座りカナと喋り出した。

その後は女同士の話が花を咲かせ、立ち上がったナナシが話に参加できるはずもなく寂しそうに佇んでいたとか、なんとか

…

…　　…　　…

あぁ、何で朝からこんなに酷い仕打ちを受けてるのだろうか…。

つい魔が差してイタズラしただけじゃないか。

それにミラが食べてるご飯、私のなんだけど…。

まだ半分も食べてないから腹すきまくりだ。

「ミラ…お腹空いたんだが…」

「…でね、新人が入ったでしょ？」

「あぁ、リサーナと同い年の子みたいね、あの子喜んでいたから」

「…それ食べたい」

「それで…と」

「…って…で」

…無…視…か…もういいや、外に食べに行こう。女は喋り出したら止まらないからな。

最近のミラの料理は旨くてヤミツキになってたんだが、こうなると手がつけられないからな。

前に隠密系クエストに三人で行った時も女同士でペチャクチャ喋っていたからな。

さすがに仕事の時は静かだったけど…。

うむ、もう店も開いてるだろうし、外に食べに行くことに決めたぞ。全く！クエストから帰ってきたミラはあんなにベットリなのに、長くいると何時もこうだもんな

もっと私に愛情をくれよ！！と叫んだら、たこ殴り確実だな。…前回のクエストの時、ちゃんと連絡すればよかった。

それなら、もっと強く出れるのにな。

…まぁそれより飯だな、今は過去より空腹をどうするか、が先だ。

そう考えるとナナシはお喋りを止めない二人に

私、行ってくると二人に声を掛け、一人寂しく出掛けていった。

…

…

…

マグノリアのとある時間帯。

大通りでは、大きくなったお腹をさすりながら、歩いているナナシの姿があった。

うむ、満腹、満腹。

てか、もう昼かよ。

食べることに夢中になっていて気付かなかったな。

さてコレからどうしようか。

闇勢力調査にいく準備もしたし、他にクエストを受けれるわけがないからギルドに行ってもしょうがない。

…家に戻っても居づらそうだ。…一応、私の家なんだがな。

ふむ、そうだ、どうせ暇なら魔法の練習でもするか。

しかし、ディスペルはまだ理論の状態で発動に成功したことないから無理だな。今は研究する気分じゃないし

そうだな、今日は変身魔法を練習するか。

人間以外はまだ猫にしかなれないが、レパートリーは増やさないで

もまだ大丈夫だろう。

それより今回の調査でも猫を主体として動きそうだから、猫の練習でもしよう。そう考えるとナナシは路地裏に入っていき、ガヤガヤと賑わう大通りから姿を消した。

……

……

……

マグノリアにて

時間はちょうど昼間。

多くの者が昼食に、と行き交う大通りは賑わいを見せていた。

そんな通りとは裏腹に川沿いの橋が掛かっている通りにはあまり人の姿が確認できない。

そんな川沿いをまるで我が物顔のように歩いている一匹の黒猫がいた。

私…いや我が輩は猫である。

名前は知らぬ。

どこで生まれたかも見当がつかぬ

自分が何をしていたかも分からぬ。

ただ、メス達に虐められていたことだけは覚えている。

一度はそのことに恐怖し逃げたこともある。

怯え（暴力に）、虚勢を張り（良いところをみせようと）、偽りの世界（写真集などの二次元の世界）で生きようとしていた

だがそんな我が輩にも光が差した。

暗い暗い暗闇の中に一筋の光が差したのだ。

そう、メス達も成長しているのである。

幼い起伏の乏しい奴らがメスらしい体付きになってきたのである。

ここで奴らを見ないで何を見る！

我が輩は偽りの世界を捨て本当の世界で生きることにしたのだ。

だから我が輩は今生きて歩いているのである。

幸せか？と聞かれたら幸せだろう

不幸か？と聞かれたら不幸だろう

だが、我が輩は今の時代を生きてみせよう。

成長仕切った華麗なるメス達を見るまでは！

そう考えながら、人々が歩く通りの横にある塀を、すたすたと歩く猫の姿があったという。

黒猫はご機嫌なのであろう、左右に千切れんばかりに尻尾を振っていた。

そんな時

「おーい、猫ちゃんおいで～？」

塀の下から黒猫を呼ぶ声が聞こえた。

誰だ？

…なんだまだ未成熟のメスではないか。

しかし我が輩を呼ぶとはなかなか度胸のあるメスだ

今回はそれに免じて遊んでやろう

黒猫は長い青色の髪をカチューシャで止め、後ろに流している少女の足元に降り立った。

「わ！ホントに来た！」と少女は嬉しそうに声に出すと足元に擦りよってきた黒猫を近くで見るため、しゃがむ

「撫でてもいいかな？」

恐る恐るといった感じに聞くと同時に黒猫の頭を撫で始めた。

「わぁ、柔らかい～」

そして少女は何度も撫でたり、抱っこしているうちに黒猫がまったく抵抗せずに、逆に擦り寄ってくることに気付いたのだろう。

「飼い猫なのかな？でも首輪ないし…そうだ、私のうちでご飯食べさせてあげるね」

少女は、黒猫を抱え上げるとスタスタと歩いていった。

黒猫は終始、

ふっ我が輩は猫なのである。このメスを騙しきるのが今回の練習なのだ。それにしても、やはり未成熟のメスの体でも、やわやわのふわふわなのである。

一緒にお風呂に入るまでが練習なのである！！

そんな変態なことを考えながら黒猫は千切れんばかりに尻尾を振っていたとか、なんとか

…

…

…

フェアリーテイルのガヤガヤと騒がしいギルド内には少女の嬉しそうな声も混じっていた。

「ね！リサーナ、この猫ちゃん可愛いでしょ！」

「あ、ははは…そうだね。でもレビィ、抱き締めるのは止めたほうがいいよ」

「…にゃあ（わ、我が輩は何故こんな場所にいるのであろうか）」

「私、ご飯貰ってくるから見ててね」

嬉しそうに少女レビィは言うとギルドのカウンターまで何か食べ物を取りいった。

残されたのは、じと目で黒猫を見てくるリサーナと冷や汗だらだら

の黒猫だけである。
リサーナは一時レビィが戻って来ないと確認すると小声で喋りだした。
「…何やってるの？ナナシ兄ちゃん」
「にゃあ？」
「誤魔化しても私にはわかるんだよ」
「にゃあにゃあ」
「5」「にゃあ」
「4」「…にゃぁ」
「3」「…にゃ…」
「2」
「わ、我が輩は猫である！」
「猫は喋りません」
「ハッピーだって喋っているじゃないか！」
「あの子は私とナツの子供だから喋って当然よ」

「いやいや、全然、意味が分からんぞ！」

「とにかくミラ姉達には報告するから覚悟しといてね。

あんなに尽くしてくれる人達がいるのに浮気はダメだよ。あとレビィには正体を言わないでおいてあげる。

…だけど抱きついたりしたらダメだからね。わかった？」

「…ｏｈ」

そういう会話があり、食事を持って帰ってきたレビィは

先ほどまで元気だった黒猫が一転して静かになっているのを見て不思議がっていた。

…

…

…

夕日が沈む時間

寮で飼いたいというレビィを無理矢理、説得したリサーナによって黒猫はギルドから追い出されていた。

なんてことだ…今日か明日には地獄が待っているかもしれん。とにかく！リサーナを説得しないと！

数分間、悩み考えるとナナシは変身を解き、堂々と建物に入っていった。

建物に入るとリサーナとレビィが座っているテーブルまで脇目も振らずに素早く移動する。

「よぉ、リサーナ…ちょっと今からいいか？」

「…ダメだよ。絶対に言うからね」

「もうしないからさ…頼むよ、アイツらに言ったら私は終わってしまう」

と必死に謝り倒しているナナシと今回は許しませんと考えを変えないリサーナであったが、

「あ、あの」

今まで蚊帳の外だったレビィが話し掛けてきた。

あぁ、そういやこの子とは人間としては初対面だったかとナナシは考えるとレビィと話し始めた。

「ん？お前は新入りか？」

「は、はい。私、レビィ・マクガーデンって言います。先週からフェアリーテイルに入りました。よろしくお願いします！」

テーブルから立ち上がり、礼儀正しく挨拶をしてきた。

うむ、初々しいな。…しかし、この子も染まっていくんだろうな。どんな子に育つのやら…と考えながら

「あぁ、私はナナシだ。これからよろしくな」

ナナシもレビィの方を向き握手をした。

「いやぁ、すまんな、初対面からこんな情けない姿を見せて…とにかくリサーナが許してくれればいいんだがな」

「ナナシ兄ちゃんが悪いのよ。」

「？」

「何でも買ってやるから！」

「えぇ？どうしょうかな？」

このような攻防が続き、その後はナナシが二人にスペシャル・フェアリーテイル・ジュースを買ってあげるということでナナシの首は何とか繋がったのである。

…

…

…

あれから数週間経ち、ある日の昼の時間、ナナシはミラから頼まれた買い物を済ませて帰路に着いていた。

ちょっと公園でタバコでも吸おうかな。家じゃ吸えないからな

そう、悲しいことに私の家ではタバコが吸えなくなったのだ。

ミラとエルザが言うには何か料理に薬草タバコの匂いがついて最悪だそうだ。

はぁ、今まではよかったのにお年頃というやつか？いや、違うな。ただ嫌なだけか？…とにかく、よく分からないぞ。

そう考えながら公園にあるベンチに座るとタバコを吸い始めた。

うむ、やはり婆さんのタバコが一番だな。最近は寄る時間がなかったから自作してたんだが、昨日エルザについて行って正解だったな。

まぁ、すぐ追い出されたけど…

よし、あと一箱吸いだめしておこう

新しいタバコを影から取り出そうとした時、ナナシは遠くのベンチに座っているレビィを見つけた。

何やら落ち込んでいるようなのでナナシは、ここは年長者の出番だな。

そう考えながら立ち上がると、タバコを銜えたままレビィに近づいていった。

…

…

ベンチまで歩くと、何やら俯いて考え事をしていてナナシが近くにいるのにも気付かないレビィの横に、どかりとナナシは座った。

そして一時タバコを吹かし、ようやく自分の横に誰かが座っていることに気づき

顔を上げたレビィに喋りかけた。

「よぉ、少女よ。元気がねぇな」

「あ…ナナシさんじゃなかった、ナナシ。」

「そうそう呼び捨てでいいさ。何たって私たちのギルドは家族みたいなもんだからな」

ナナシは言うとレビィの頭をワシャワシャと撫でた。

「わ！セットが乱れるからダメだよ！」

「おや、これは失敬……ところで何か悩み事か？」

「ぅうん、悩みもあるけど、今は違うの」

「意味が分からんぞ」

「えっとね…」

「あぁ何だよ」

「…黒い猫ちゃん見なかった？」

「い、いや…」

レビィの言葉を聞いた途端にナナシは冷や汗をダラダラと出すとズリズリと一歩ずつ横にズレ逃げようとしていた。

そんなナナシに気付かないのか、レビィは話を続ける。

「前にナナシと初めて会った日に出会った黒猫なんだけどね。リサーナがここらへんで放したっていうから探しにきたんだけど、いないんだ」

「そ、そうか…き、きっと自由気ままに生きてると思うから心配しなくても大丈夫じゃないか？」

「そうかな？」

「そうさ、猫は自由気ままだからな。何時かヒョッコリ現れるさ」

ヤバいな。もう猫のことは掘り返したくないぞ。とにかくだ、話を変えねばならん

「と、とにかく、これで猫の件は終わりだな。あぁ、そうだ。何か悩みがあるんだろう？先輩が聞いてあげようじゃないか。」

「え？い、いいよ。」

すぐに顔の前で手を振り拒否するレビィを見たナナシはあることに気付いた。

「てかお前、本当は猫のことじゃなくてその悩みについて考えていたんじゃないのか？」

「…うっ…」

どうやら図星だったようだ。レビィはナナシの赤い目から逃れるように目をキョロキョロ動かし、指先は服の端をギュッと握っていた。

それを見ていたナナシは大きく煙を吹き出す。

そして、まだ半分も残っているタバコを指で揉み消して、影の中に落とし、再びレビィに話し掛けた。

「悩みを吐き出すだけでも軽くなるぞ。内に溜め込むと、のちのち厄介なことになるからな。

…ちゃんと聞いてやるから話てみな…」

そう言うと、ナナシはレビィが話を始めるまで空を見上げて待っていた。

そして数十分後、レビィはようやく、悩みを打ち明ける決心が付いたのだろうか。俯いていた顔を上げると喋り出す。

「…あのね。エルザやミラとかを見てると私って魔導士として弱いなって思って…」

え?そんなことかよ…私なんて喧嘩では何時も負けてばかりだぞ。

「なんだ…そんなことかよ」

「そんなことじゃないよ!私、真剣に悩んでいるんだから!」

おぉ、おぉ、ムキになっちゃってまぁ。

しかしなぁ、ミラ達を意識しても意味ないと思うがな。そもそも専門が違うだろうがよ。

「…お前は古文書とか解読できるんだろうが、それならミラ達より強いはずだぞ」

「でも…」

「力っていうのはただ闘うモノだけを言うんじゃないんだ。

私も接近戦じゃミラ達には勝てないんだぞ。

ただ、接近戦ではないなら勝てることも可能だ。だから古文書なん

て代物を解読できるという力を
持っているお前はある点においては私と同じようにミラ達より優れ
ているんだ」

「えっと…んと…」

私が言うとレビィは理解したような理解してないような表情になっ
ていた。ふむ、言い方を変えるか。

「だから、つまりだ。自分の得意分野を生かせばいいんじゃないの
か？

お前はお前であって、ミラ達ではないんだからな。

世の中には色んな人がいる。だからそれに応じて色んな依頼がある
んだ。

私に隠密の依頼があるように、お前の豊富な知識が必要となる依頼
が必ずあって、求められているさ」

「…そうかな？ただ頭でっかちの使えない魔導士じゃないかな…こ
んな私を必要としてる人なんていないよ…」

…何でコイツはこんなにマイナス思考になってんだ？明るい性格だ
と思っていたんだが…何かあったのか？まぁとにかく

「私たちの知識というものはな、道具みたいなものだ。道具というものがすべてそうであるように、その価値は道具自身にあるのではない。使う人によって違うんだ。この意味は分かるか？」

「…えっと…どんなに凄い道具を持っていても使いこなせないなら意味がない？」

「そうだ、よく分かっているじゃないか。道具はその能力、つまり人に使用された結果において違うんだ。お前はただ古代語を知っているだけではなく、その知識を使い解読することができるんだろう？」

「一応は……だよ？」

「それで十分だ。それは今までお前が努力して得た力だ。古代語を知っているだけじゃなくて解読できるというのは凄いことなんだぞ？」

「そ、そうかな…」

「あぁ、そうだと私は考えるよ。だからお前は、ただ頭でっかちの魔導士なんて者じゃなくて、周りに誇ることができる立派な魔導士さ。」

そう言うとナナシは一呼吸置き、再び話し始める。

「私も含めてミラ達だって最初から魔導士として強かったんじゃない。頑張って努力し、それでも壁にぶつかり挫折して、また這い上

がり、壁を越えていく。ということを繰り返してきたんだ。

それはお前も同じだろう?そうじゃないと力というものは正しく使えるわけがないんだ。まぁ、一部例外もいるがな。まぁ、それは置いといてだ。これからも、それの繰り返しのはずだ。

人生日々勉強ってな。

それに人は死ぬまで学び成長していくことができる生き物なんだ。お前はまだ若い。これからもっと強くなるぞ。だから、足元見るぐらいなら前向いて歩けよ」

微笑みながら語りかけてくるナナシに、

「…自分だってまだ15歳じゃん」

どこか頬を赤くしたレビィは少しドキッとした自分の気持ちを隠すようにふてくされる様子を見せた。

その様子を見ていたナナシは苦笑いをしてレビィの額にデコピンをする。

「痛!?」

「私は昨日で16歳になったんだぜ。でも私もまだまだ若いさな。だから、もっと強くなるぞ、目指せS級魔導士だな。だからお前も自分の力を伸ばせるように頑張れよ」

「…えっと…頑張ってみるかな？」

「何で疑問系なんだよ！？とにかく、他を気にするなよ。自分は自分だ。いいな。まぁ私から言えるのはここまでだな。悩みは解決したか？」

「…微妙…」

「えぇ！？び、微妙！？」

「あ…でもナナシのアドバイスを参考にして、よく考えてみるね」

「はぁ…へいへい、どうぞ参考にしてくれ。そして自分でゆっくり考えな。マスターのパクリだが、お前の信じた道を進め。誰のものでもない、お前だけの道なんだからな。」

ナナシは、そう言うと、立ち上がり帰路に着こうとレビィを置いて歩き始めた。

「あっ…待ってよ。私も帰る！」

そんなナナシに続きレビィも立ち上がると、スタスタと歩くナナシ

の横に走り寄りナナシの腕に自分の腕を絡ませた。

「ばかやろう！！ミラ達に見つかったら、洒落にならんぞ。離しやがれ！」

「や！」

と言う会話をしている二人がいたとか、なんとか

……　……　……　……　……　……　……　……　……

とある日の朝

マグノリア駅にはナナシ達の元子供組＋レビィの姿があった。

「……よ！」

「あぁ、お前らも頑張れよ。…あとギルドを頼むぞ。私が言えた義理じゃないが、女達ばかりに任せるんじゃないぞ」

「オイラ達頑張るよ！」

「あぁ、無茶するなよ」

少年達と会話が終わったナナシは少女達の方に寄り

「私の家を荒らすなよ。あと酒は程々にしろ。せっかくの綺麗な体が壊れちまうぞ」

「分かってるわよ。あんたも気を付けなさい」

そう会話し、カナと抱き締め合い軽く口付けをすると一時の間抱きしめ合う。

「無理したらダメだよ」

「あぁ」

大分時間が経つと再び口づけをして、一言二言会話するとようやく離れ、横に移動した。

「頑張ってね、ナナシ兄ちゃん」

「……一年は長すぎじゃない？せっかく……」

笑顔で話しかけてくるリサーナと何やらぶつくさ言ってるレビィの頭を笑いながら、一緒に両手でワシャワシャと撫でた。

「「セットが崩れる！」」

「おや、これは失敬。……でもそんなに怒らなくても……やはり幼くても、フェアリーテイルの女だな……将来が末恐ろしいぞ」

「「何か言った？」」

「いやいや、将来が楽しみだ、とな。お前達も頑張れよ。色々とな」

そう言った後、少女達のセットを崩さないように優しく撫でる。

「エルザにもよろしく言っといてくれ。あまり張り切ってS級クエストで無理をするなってな」

少し顔が赤い少女達からの返答を聞くと離れた。そして最後に、横に移動すると終始、俯いていたミラに近づく。

「一年間、私が居なくても耐えられるか？」

俯いていたミラの頭を優しく撫でながら聞く。

「……頑張ってやる」

「大丈夫、連絡もするし、必ず帰ってくる。無茶もしない。それに、私が愛する女を残して逝くわけがないだろう？」

そういうや否や顔を上げ、少し泣きそうな顔のミラを抱き寄せると、返事も聞かずに軽く口付けをした。

「……ん……」

口付けが終わると、そのまま離さないミラを抱いたまま、カナ、リサーナ、レビィの方を見る。

そして口パクで【頼んだぞ】と苦笑しながら言い、少女達の頷きを見て安心するとミラから離れようとした

…が、ミラは強く抱き締めるばかりで一向に離れる気配はなかった。

「……」

「……ミラ」

そうナナシが優しく呟くとビクっと全身を震わしたミラの耳元に口を近付ける

「帰ってきた時には、今よりもっと美味しいご飯を食わせてくれよ。楽しみにしてるからな」

そう言い、ぎゅっと抱きついてくるミラを強く抱き締め頭を優しく撫で続け、返事を待った。

数分後、ミラはようやくナナシの体からゆっくりと腕を離した。

「…度肝抜かせてやるから覚悟しとけよ」

そういうや否や、ミラの方から口付けをし、すぐに恥ずかしそうに離れる。

その行為をされたナナシは可愛いな、この野郎！と嬉しそうな顔になると、

恥ずかしがるミラを再び抱き寄せ、口付けをすると離れた。

その時、列車の出発の汽笛音が駅に鳴り響く

「んじゃ、まぁ、行ってくるよ」

そう言いながら出発直前の列車に乗り込み、皆に手を振って、ナナシは多くの仲間達に見送られながら仕事に出掛けていった。

……

……

……

……

……

……

……

その二年後、フェアリーテイルに

【ナナシ・ネームレス】の死亡通知書が正式に送られてくることを、

この時、誰もが知る由はなかった。

もし、知っていたのならば歴史は変わっていたのだろうか……

青年を愛する少女達は必死で止めたのだろうか……

しかし、ｉｆは有り得ない。

青年は調査終了直前に音信不通となり、

それから一年後、懸命な捜索も介なく遺体は見つからず、正式に死亡したと受理されたのだから…

…

…

…

ＦＡＩＲＹ　ＴＡＩＬ～影～

了

12　力（後書き）

後書き

急展開ですみませんが

ＦＡＩＲＹ　ＴＡＩＬ　～影～は終了です。

今後はＩＦシリーズとして話は進みます。雰囲気が変わるかもなのでご注意ください。

それにしても今回は、急展開で驚きの方もいるかと思いますが、どうだったでしょうか…

本当に今回の話は、急展開過ぎてすみません。

ただ、こんな幕切れの小説があってもいいかなと思い書いて見ました。作者の独りよがりですね。

あと、分けて出そうかと悩みましたが一気に読んだほうがビックリすると思い、纏めて出してみました。

まぁ、死亡フラグを前から何回も立てていたので何となくお気づきの方も居られたとは思いますが…。

元々、作者の予定では

ナナシの物語は、これで終了のはずでした。

ええぇ、作者の文章を見る限りはバッドエンドに近いですね。

今までの話も時々最後には、ナナシは不幸でしたよね。それの究極版でした。

作中でナナシが言っていた通り、

最後が幸せじゃないと、どんなに幸せな生活を送っていたとしても最悪な人生だったと言うことですね。

そして命を掛けて仕事をする者達は一度の失敗で、這い上がるための命が既にない者もいると言うことです。

どんなに過程が幸せであっても最後が絶望では締まりが悪いですよね

だからＩＦとしてナナシの物語は続きます。

よって～影～は色々と予定していた話をカットさせて頂きました。

それを書いてると原作に何時まで経っても入れませんから…。

ただ、作者の書き始めた頃の予定では、ここで終わりなので、恐縮なのですが、一気読みしてる方もＩＦにいく前に感想や評価を書いて下さったら有り難いな、と考えております。

～影～は今まで読まれた通り、飛ばし飛ばしでお送りしました。

スカスカの話で、物足りない方もいるかと思いますが、どうぞよろしくお願いします。

また、これで読み終えても問題はないと思います。

ちまみに～影～で終わられるなら、ナナシは死んだ。

とも考えられますし、

案外、生きていて猫のようにひょっこり帰ってくる。

とも考えられます。ここは読者の皆様の御想像にお任せします。

では、ご愛読ありがとうございました。

以降は

今後のネタバレです。ネタバレは勘弁という人はご注意下さい。

……

……

……

……

……

……

……

……

…

ＩＦは

最初、風の子と出会う所から始まります。

最後はハッピーエンドの予定です。バッドは確実に有り得ませんのでご安心を。

今後は少し過去編をやった後、第一巻の原作に突入していく予定です。

ちなみに、ナナシがどういった内容で行方不明になったかは今後の話で明らかになる予定です。かなり後の話ですが…。

ＩＦは～影～で不遇だったエルザをバンバン出す予定です。

では、また今度お会いしましょう。

2．0プロローグ（前書き）

第二章の始まりです。

短いですよ

では、どうぞ

2．0プロローグ

とある日の夜、

空には雲一つなく、ただ、爛々と輝き続ける月だけが我が物顔のように佇んでいた。

月は丸い形を取っており、今日はどうやら満月のようだ。

多くの場所を眩しくもなく、暗くもない優しい光で地上を照らし続けている。

そんな月の光によって照らされ、木々の間から光が差し込んでいる森の中で、

ランプも持たずに、キョロキョロと何かを探している一人の少女と二足歩行の服を着た白い猫がいた。

少女は濃い青色の髪を肩まで伸ばして、可愛らしいワンピースを着ている。

猫は自衛のためであろうか、小さな、しかし固そうな棍棒を持っていた。

「あ！！」

その時、少女は遠くの方に何かを見つけたのだろう、横にいた猫を置いて木々で入り組む森の中を一人で走り去った。

「ちょっとウェンディ！一人で先に行ったら危ないわよ！！あ！？」

猫は少女を追いかけよう走り出したが、地面から出ていた樹の根っこに足を躓かせ、見事に転んでしまう。

そして、痛たた…と猫が体を起こしたときには、既に周りには少女の姿はなかったのである。

「ウェンディ！！」

猫は左右前後を見て少女の名を叫んだが、猫の声は漆黒の森に吸い込まれるだけで、ただフクロウがほう、と鳴く音が返ってくるだけであった。

…

…

「わぁ～、見てシャルル！月光草が光ってるよ！こんなにいっぱいあるの初めてだね……あれ？シャルル？」

少女、いやウェンディが目的の場所に着き、喜びながらパートナーに喋り掛けたが返事はなかった。

少女は辺りを見回して猫、シャルルの姿を探すがどこにも居なかった。どうやら完全に、はぐれたらしい。

「し、シャルル！！ど、どこ行ったの！！」

戸惑ったウェンディが涙を目に溜めて叫ぶが、
ただ森の中にウェンディの声が響くだけでシャルルからの返事は一向に帰ってくることはなかったのであった。とその時

ウェンディの横にある木の影から【ぐぷぐぷ】と音を発しながら、
ゆっくりと一人の人間が現れ始めた。

「え？」

人間がゆっくり出てくるのを見たウェンディはあまりの突然のことに最初は呆然としていたが

「ひっ！？」

人間、いや青年のある一部を見た途端に腰を抜かし、その場から動けなくなってしまった。

それに加えて、少女は気付いてないかもしれないが、ボロボロの漆黒のスーツは全体が赤黒く染まっていた。

青年が上半身まで這いずり出ると、周囲一帯に酷い血の臭いが立ち込み始めた。

少女が腰を抜かしている間も青年は這いずるように影から這いずり出てくる。

残った片腕だけで傷付いた体を押し上げながら…

「はぁ…はぁ…ぐぞが…」

影から出てきた青年は荒々しい呼吸を繰り返えす。

そして左腕を影の中にぐぷりと入れると、
次に引き上げた時には何かが染み込み緑色に変色した布のようなものを手に持っていた。

そして、苦悶の表情を浮かべながら、血が混じった唾を吐くと、

既に何もない右肩の付け根を布を巻いた左手で押さえると、その場にうずくまった。

「はぁ…はぁ…はぁ」

「あ…あ…」

うずくまった青年の特に右肩があった付け根から大量の血液が溢れ、緑色だった布を完全に赤色に変えると、地面に血溜まりを作り始めた。

それを見たウェンディは唐突に起こった恐怖から
逃げるように顔を左右に振りながら、後ろに一歩ずつ下がっていく…

が、木の枝を踏んだのだろう。パキリという音が辺りに響いた。

「あ゛ぁ゛？」

「ひゃああ！？」

その音で青年は誰かいることに、ようやく気づいたのだろう。

唯一、光が灯っている赤い左目をギョロリと動かすと少女を睨み付ける。

青年は本来、真っ白で綺麗な長髪を持っていたが、今は赤黒く染まっており顔も傷だらけであった。

そんな青年に睨まれたウェンディは小さく悲鳴を上げるが、そこから動けないでいる。完全に腰砕けの状態に陥ってしまったようだ。

「も…う…追っ…き…の…よ…」

荒々しい息を吐きながら、苦悶の表情を浮かべて言うと、動転して敵の見分けも付かなくなったのであろう青年は

「きゃあ！？」

影から、にゅるりと素早く、漆黒の手を一本出すと少女の首を締め、持ち上げ始めた。

「ぐぅ…ぁ…ぁ」

徐々に地面から浮き始めた少女がジタバタと手足を動かし苦しみ、助けをこう、のを見て青年は

「私は帰るんだ！！」

血の混じった唾を飛ばしながら言うと、焦点の定まってない目で少女を見、さらに首を締め落とそうとした。

その時

「ウェンディ！！」

上空から翼を生やした白い猫シャルルが勢い良く降り立つ。

「ぴぎゃ！」

そのついでと言わんばかりにスピードを維持したまま、持っていた棍棒を青年の後頭部に打ち付けることにも成功した。

「ごふっ…」

叩かれた青年は情け無い声を出した後、血反吐し、前のめりに倒れ始める。その時、少女を掴んでいた影の手が緩んだのだろう。二人とも、ドサッと地面に転がった。

「大丈夫！？ウェンディ！」

「ごほっ、ごほっ…し、シャルル！恐かったよ！」

「だから一人で勝手に進んだらダメって言ったでしょ！」

ウェンディは泣きながら怒るシャルルに抱きつくと謝り始めた

「それよりコイツは何なのよ？アンタを殺そうとしていたわよ！？って…アンタがやったの？」

「わ、分からないよ…いきなりだったから…そ、それに最初から傷ついていたんだよ…」

「そりゃそうよね。…まぁ、いいわ。どうせ、このケガじゃ時間の問題だから…帰るわよ」

「え?こんなに血が出てる人がいるんだよ?」

「コイツはもう死ぬわ」

「ダメだよ!放っておけないよ!」

そういうや否や、ウェンディは青年に掛け寄り、手を発光させると魔法を使い治療をし始める。

「コイツはあんたを殺そうとしたのよ!?やめなさない!!」

それを見たシャルルは驚愕の表情を浮かべ、治療をするウェンディを止めようとする。…が

「目の前で人が死ぬのを放ってはおけないよ!」

「でもまた、アンタに危害を加えるかもしれないのよ!」

「…この人は帰るんだって言ってた…。きっと帰りを待ってくれる人がいるんだよ!それに…さっき、この人は正気じゃなかったんだよ。

…だからシャルル…私は大丈夫だと思うの…」

少し疲れた表情で微笑みかけてくるウェンディにシャルルは

「…アンタは大馬鹿よ」

ポツリと呟くと、青年の治療を手伝い始めた。

…

…

…

…

欺くの如し、

青年は優しく、清らかな心を持つ少女と警戒心が強い猫によって、
運良く命を助けられること、となった。

…

そして、再び

名前がない人間の人生、
という名の物語が始まり
を迎えたのである。

2．0プロローグ（後書き）

はい、ウェンディの登場です。

シャルルにやられた情け無い青年でしたね

しかし、ウェンディとシャルルの二人のどちらかが欠けていたならば青年は死んでいたでしょう。

やはり、やられて正解だったのでしょう。

ではまた今度お会いしましょう。

2．1始まり（前書き）

書き下ろしです。

調整とか全くしてませんのでご注意を

2．1始まり

とある集落にて。

とある集落のとある家では青年と少女と一匹の猫がいた。

青年は薄黒いサングラスを掛け、真っ白な長髪を結びもせずに、ストレートに降ろしている。

そして漆黒のフード付きロングコートを羽織っている。ちなみにズボンも靴も、両手に付けた手袋も黒色である。

その青年は何やら必死に四角い物を動かし、少女と猫に言葉を語りかけている。

それを少女はポカンとした表情で、猫は呆れた表情で見て聞いていた。

「そして、再び名前がない人間の人生、という名の物語が始まりを迎えたのである。

そして、その後、目が覚めた青年は新たな力を手に入れて迫り来る敵を千切って投げ、

千切っては投「はい、ストップ」げ……あっ!?あんだよ、シャル。今からいい話に入るとこなんだぞ」

青年は、猫に四角い紙に絵が書かれた物を取り上げられ怒っていた。

「…何がいい話よ。ツッコミ所多すぎなのよ。…駄作ね。」

「だ、駄作!?人が貴重な時間使って書き上げた話を駄作とはなんだ!謝りやがれ!

なっ!お前もそう思うだろ?ウェンディ?」

「え、えっと…あ、あのね…」

ウェンディはオドオドとしながら返答しようしたが

「あ?何だ?…もしかして感動したか?しちゃったか!!

いやぁ~そうか、そうか。頑張ったかいがあったな「行くわよ、ウェンディ」「あっ…引っ張らないでよ!シャルル!」もうね、

頑張りすぎて手にタコが出来てしまってな。いかんな、痙攣してるよ、ほら見……ふぅ、また無視か…」

少女の返答も聞かずに、勝手に舞い上がり一人黙々と喋っていた青年が手を広げ少女達がいた方向を見ると、誰もいなかった。

それを見た青年は、がっくりと肩を落とすと【右腕】で四角い物を手に取ると家の外に出て少女達がいるであろう広場に向かった。

…　…

…

集落唯一の広場にはちらほらと人の姿が見え、その中には先程の二人と一匹もいた。何やら会話をしているようだ。

「…で、まずは何で私達は暗い森の中をランプなしで歩いてるのよ。それと何で私が棍棒なんて持ってるのよ！」

「え？月光草を探しているからに決まってんだろ？武器は必要だし…」

「……アンタ…この紙芝居、実体験に基づくモノなのよね…」

そうさ、と青年は右目でウィンクをしながら自信満々に頷いた

「あのね…ナレス…まず月光草自体、存在してないよ？

それにね、私がもし、月光草を見つけたならシャルルも見つけてるはずだから…迷子になるのは有り得ないと思うの」

「……ちょっと脚色も必要かな…とな。だって物語なんだからさ！」

「１００％作り話じゃない！アンタが一体どこで片目と片腕を失ってきたのよ！

ぴんぴんしてるじゃない！

…それに…私達との出会いはそんなシリアスじゃなかったわよ！」

あ？そうだったか？と青年ナレスが言うと、ウェンディとシャルルはコクリと頷いた。

それを見たナレスは遠い目をしながら

「そう、あれは寒い冬の季節「夏だったよ？」…蒸し暑い夏の日…私達は出会った。」

少女に修正されながらも語り始めた。

…

…

…

夏の暑い日差しが照っている日、ウェンディとシャルルは川の側で涼しんでいたんだよな

「暑いね、シャルル～」

「ホント、頭がどうにか、なりそうだわ」

何て喋りながら、日陰に入り休んでいたと思う

その時

「「きゃ！？」」

その影の中からぐぷりと勢い良く、血を滲ませたボロボロの漆黒の

スーツを纏った掠り傷だらけの私が飛び出してきたのだ。そして

「よぉ、少女達よ。ちょっと聞いていいかな？」

「な、なんですか？」

「ここは一体どこだい？」

…

…

…

「そして私は誰だい？」

…

…

…

「…て感じだったな」

「語り終わるの早すぎよ！もう少し長く言いなさいよ！」

「えぇ？わかったよ。…で、誰だいと言った後、

私はウェンディに襲い掛かってきた盗賊達を千切っては

「ギロリ」

……普通にここに連れてこられて、ナレス・ノーナと名乗りここで既に2年暮らしてます。以上だな！」

「あ！ホントのことだ。よかった、やっと話が進むね♪」

……そんなに私の話はつまらなかったのか、ウェンディよ

「…てか…アンタ本当にセンスないわよね。普通考えるなら、もっとマシな名前なかったの？」

「……格好いい名前じゃないか…ナレス・ノーナ」

「わ、私は好きだよ？ナレスって名前。

最初、シャルルに教えてもらうまでそんな意味があったなんて知らなかったし…」

おぉ、おぉ嬉しいこと言ってくれるね、この子は。とナレスは言うとウェンディを抱き締めた。

「あぅ…は、恥ずかしいよ！離してナレス！」

少女が顔を真っ赤にして抗議するが、

よしよしと、まるで、いや確実に…子供をあやすように頭を撫でるとウェンディから離れた。

…

…

…

うむ、やはり可愛らしい子供だな。それに、やわやわのふわふわであることは変わりない。

しかし、残念ながらお子ちゃまだな。将来は美人になると思うが、まだ１１歳だからな。

１８歳だと思われる私にはちょっと刺激が少ないな。

だが、１１歳と言えども魔導士としては貴重な存在だ。

治療の魔法を使える魔導士は、この子しかいないらしいからな。

初めて出会った時も治療してくれたからな。全くもって優しい子だよ。

治療魔法というのは失われた魔法だ。

この子は何と竜に魔法を教えて貰ったそうだ！

…信じがたいが…。

まぁ治療魔法を使えることには変わりはないから、別に誰に育てられようといいんだがな。

私も記憶に残っていた薬草で薬は作れるが魔法では無理だな。

それだけ貴重な魔導士だ。

もし、ウェンディを狙ってくる輩が来たら、しっかり守ってやらないとな。

一般常識と魔法と薬草の知識以外、何も知らなかった私を世話してくれたんだ。

この子達が幸せな日々を送れるように頑張ろう。

記憶なんて何時か思い出すさ。

別に焦らなくていい。

今はこの恩人達を優先しないとな。

「ナレス！聞いてるの？」

「へいへい、わぁってますよ。姫」

「って言いながらアンタ分かってないでしょ？」

「おぉ、おぉ、言ってくれるね……」

太陽がまだ高い位置にある時間、二人の男女と一人の猫は仲良く過ごしているようだ。

「もう！」「まったく」

「今度は気を付けるさ」

ぷんすかと怒っている少女とやれやれとしている猫を見てナレスは微笑む。

自分の信じた道を進もう。

今の私は【ケットシェルター】の魔導士なんだからな

……

怒っている少女を慰めようと、

性懲りもなく抱き締めた青年は恥ずかしがる少女の頭を右手で撫で続ける。

その右手の黒い手袋には銀色の猫のギルドマークがキラキラと光り輝いていた。

ＦＡＩＲＹ　ＴＡＩＬ　～影～ＩＦ～始まり～

2．1始まり（後書き）

はい、前話は

ナナシもとい、ナレスの紙芝居でした。

１００％、ナレスの作り話ですね

今回が本当のプロローグです

ナレスは記憶を失いましたが、後々思い出しますよ。

性格も変わってませんし

抱き締めグセと撫でグセなどの名残が残っています

思い出すのも時間の問題かもしれないですね。

今回は急いで書いたので文が雑になってしまいました。すいません。

何かダメ出しがあれば書き直します。

では、また今度お会いしましょう。

2．2…眠し…

【ケットシェルター】がある集落にて。

朝、太陽が昇り始めた時間、集落の周りをランニングしている男と少女の姿があった。

二人は走りやすそうに、ラフな格好をしている。

そして

少女は気分良く軽快に走っているのに対し、男は目をショボショボさせながら、ダラダラと走っている。

「…眠し…」

「大丈夫？ナレス？」

「あぁ…」

「よかった♪」

「…ダメだ」

「ダメなの！？」

「…眠すぎだ」

「頑張って！」

そんな風に、ダメダメな会話をしながら走り続ける二人であった。

…

…

…

私いや、私達の1日はとても早く始まる。現在は日が昇り始めた時間だ。

わかるか？日が！昇り！始めた！時間だ…。その時間にランニングをしていると言うことは、まだ日が昇ってない時間に叩き起こされたと言うことだ。

この早起きは二年と少しの期間、続けているが、一向に慣れる気配がない。

きっと私は夜型の人間だったのだ。

あぁ、早くタバコ吸いてぇ！！

てか、集落の奴ら起きるの早すぎなんだよ！

しかも何で、皆一斉に起きて活動を始めるんだ！

おかしいだろうが、一人ぐらい大人で寝坊する奴がいても良いはずだ。

何時も私一人だけ、ウェンディとシャルルに叩き起こされて…私だけがダメな大人ではないか！

そのせいで

せっかく19歳になったばかりなのにシャルルには馬鹿にされる始末だ。

というか、全員、年寄りくさいぞ。

マスターローバウルが早起きするのは分かるんだ。あの人は爺様だからな。それに、あの爺様は…ボケて…

「ナレス、休憩する？」

おおっと、そういやウェンディと話してたんだったな。てか

「休憩していいのか！？」

「今日は、シャルルも居ないし、少しぐらい休憩してもいいと思うよ？」

何と休憩を取っていいとな！

休憩…休める……寝る。

おぉ、休憩という甘美な言葉はまさに今、私が求めているモノだ。

さすがは天空の巫女、ウェンディ様だ。

私の求めているモノがわかっていらっしゃる。

「それじゃ休みに「ダメよ、走り続けなさい」……まじかよ…」

「シャルル！？もう用事はいいの？」

「えぇ終わったわ。それより、そこ！休んでないで走りなさい」

「あんだよ…少しぐらい休憩取ってもいいじゃねぇか…」

「…禁煙にするわよ」

「おら！何やってんだ！ウェンディ！行くぞ！」

「あ、ま、待ってよ！」

そんな会話があり、その後は汗だくになりながらも少女を引っ張り、必死に走る男の姿があったとか。

…　…　…

「はぁはぁ…飛ばしすぎた…キツくてタバコ吸う気力すらねぇよ…はぁはぁ…」

…せっかく頑張って走ったのにタバコを吸えないなんて、また本末転倒なことをしてしまった…。

「ほらっ、次は魔法の練習よ」

「お、鬼猫！！」

「し、シャルル…少し休ませて上げようよ。私の１０倍は走っているんだよ？」

「ダメよ、コイツには今以上に強くなって貰わなきゃいけないわ（ウェンディを私と一緒に守って貰うためにね）」

「じゃあ、一服！せめて一服させてくれ！」

「変身魔法よぉーい」

「無視かよ！」

「頑張って！ナレス！」

「お前は説得諦めるの早すぎだ！」

…

…

…

辺りは既に暗くなり、各家庭には夕飯の準備だろうか…白い煙が家の煙突から立ち上っている。

そんな家のある部屋では、寝間着を着てグッタリとしている男が床の上に転がって、寝ていた。

かなり疲れているようで、全身が時折ピクピクと動いている。

「ナレス～、マスターがご飯できたって…」

そのとき、男の部屋に同じく寝間着を着た少女と白猫が入ってきた。

「あ…もう、また床で寝てるの？…風邪ひいちゃうよ！起きて！！」

少女が男を揺さぶるが、寝ている男の返答は、「…もぅ…魔法は使えねぇよ…ばか…やろう…」と言うものであった。

どうやら、夢の中でも壮絶な特訓をしているらしい。全く持って哀れな男である。

「大事な話があるのに…」

「はぁ…しょうがない男ね。本当に19歳なのかしら…」

少女は悲しみ、白猫は呆れていた。が、もし男が起きていたならば、お前のせいだ!と突っ込んでいただろう。

どうにかして男をベットまで移動させた少女と猫は部屋の明かりを消して男の部屋から出て行った。

…お休みと言いながら。

辺りは暗闇に包まれ始め、本格的に夜がやってきたようだ。

こうして、また1日が過ぎていく。

…

…

…

【むくり】

と思いきや、男の1日は終わりではなかった。

「くわぁ～、よく寝たな…今、何時だよ…10…時か…あぁ、また寝過ぎたな。三十分のハズだったのに、四時間も寝てるじゃねぇか…ちゃんと起こしてくれよな、全くもう！！」

勝手なことを男は言うとベットから起き上がり、いつものように、テーブルに載っていた冷めた夕飯を食べる。

食事も終わると、タバコを銜えながら、テーブルに載っていた雑誌を読み始めた。

「ふむ、やはり週サラーは素晴らしいな。そろそろ街に行って新しいヤツを買いに行かないとな」

…

…

…

さて、週サラー読んだし暇になったな。外に遊びにでもいくか？そ

れとも新しい紙芝居でも作ろうかな…

男は完全に夜更かしする気、満々で考えている。これが何時ものことだと言うなら、朝は眠くて当然だろう。

「よし！街に遊びにいくか！！酒飲みに行こうかな」

そう決めると、服を普段の格好に着替え、フードを深く被り顔を隠すと家から出た。そして転移しようとした、

その時

「なぶら、待つのじゃ」

「あ？何だよ。…爺か」

男の所属するギルドのマスターであるローバウルが、どこからともなく現れ男に話し掛けてきたのだ。

「なぶら、ついて来るのじゃ。大事な話がある」

「あ、あぁ」

…毎回思うが【なぶら】って何語？失われた言葉の一つか？

ただのボケ爺が新たに作り出した言葉か？…実に不思議な爺様だ…。

いやただのボケジジイか？

そんな失礼なことを考えながら男は老人の後を追い、家ではなく、

その横にある猫の顔をモチーフにしたギルドの中に入っていった。

…

…

…

…

男と老人がギルドに入って数分後、静まり返ったギルド内に男の怒鳴り声が響く。

「ウェンディを他のギルドに預けるだと！？」

バンっとテーブルを叩く音と共に男の怒りの声が響く。

「なぶら、もう先方とは話がついておる。」

「おいおい！勝手に決めてんじゃねぇぞ！あの子の意志はどうなる！！」

目の前に座っている老人に食ってかかるように男は椅子から立ち上がる

「…もちろん、ウェンディも了承済みじゃ」

「……何でイキナリ、そう言う話が出てくんだよ…」

「他の滅竜魔導士に会いたいそうじゃ、なぶら」

老人が言うと男は片手でワシャワシャと髪を掻く

「誰がバラしたんだ…他にも滅竜魔導士がいることを…」

「雑誌で読んだそうじゃ…」

…げっ、この集落で雑誌読むの私ぐらいじゃないか…まさか私の週サラーを読んだのか？

ば、バラしたの私のようなものじゃないか！？

ぐわぁ、まだ十二歳の子供が読んでんじゃねぇよ！！

子供には早すぎだろうが

…あぁ、ちゃんと隠しとけばよかった。

「…そうか…あの子には隠して置きたかったんだが、世界がそれを許さなかったか……しかし、あの子が外の世界に出れば必ず何かに巻き込まれるぞ」

「やはり滅竜魔導士は呼び合う関係にあるかもしれないの、なぶら。それが滅竜なぶらの宿命なぶら」

「宿命か…そうなぶら…って！何だよ。毎日毎日、なぶら、なぶらって言いやがって意味わかんねぇぞ！！」

「なぶら、そう言うことだからの。来週からウェンディとシャルル、そしてなぶらを預ける、なぶら」

「おい！なぶらって私か？私のことなのか！？」

「しっかり、ウェンディを守ってやるのだぞ」

「…（私のことか、何がしたいんだ。この爺様は…。）私とシャルルが付いていくなら反対はしない

…あの子一人だったら断固反対だがな。それと一度、先方と話がしたい。どこのギルドだ？」

「なぶら、マグノリアにあるフェアリーテイルじゃ。マスターは有名なマカロフさんじゃぞ」

【ドクン】

「!?」

…何だ…今の胸のざわめきは…。

「どうしたなぶら?」

「い、いや、そうか…マカロフ・ドレアー…聖天大魔導の一人が代表のギルドか…なら安心か?…まぁ明日、一度様子を見に行ってくる」

ウェンディを預けるに相応しいか確認しないとな。

「いや、明日起きたら出発だ、そうじゃ」

「あぁ?何でだ?」

列車でいけば一週間は掛からないだろ?

私?私は転移があるから1日ぐらいあれば、マグノリア?には着くだろうから、確かめに行きたかったのだが。

「アンタの変身魔法でいくのよ」

「!?…何だ…おまえ等か…ビックリさせるなよ…てか起きてたの

か？ウェンディにシャルル」

いきなり背後から声が聞こえたからビクリとしながら振り返ると、扉にウェンディとシャルルが突っ立っていた。

あぁ、そういえば、扉開けっ放しだったな。

「えっとね…明日の準備してたの。ご、ごめんねナレス。私の我が儘で、ナレスまで巻き込んで…」

ふぅ、この子は自分に、もっと自信を持たないとな。

まぁそれより、私はちゃんと話をするためにウェンディの所まで行くと膝を落として、目線を合わせる

「…会いたいか？同じドラゴンスレイヤーに…」

「…うん…」

俯いて返事をするウェンディの顔をグイッと手で上げ、目を合わせて

「絶対の絶対？」

そう聞くとウェンディは目をキョロキョロさせながら

「ぜ、絶対の絶対に…だよ？」とちょっと頼りないが返事を返してきた。

…やはり性格かな。

まぁ、会うだけなら良いだろう。その後、マスターマカロフの所で厄介になるかは、

日が少し経ったら、ウェンディに決めさせよう。

危なくなったら私が助ければいいんだしな。

「…なら、しゃーない。お前が会ってみたいって言うなら会いに行こうじゃないか……サラマンダーによ」

「うん♪」

満面の笑みとなったウェンディの頭をワシャワシャと撫でた。うむ、柔らかい髪の毛だな。

「あ…あのね…」

「もっと優しく撫でなさいよ！」

「おや、これは失敬…ところでシャルル…さっき不吉な言葉を聞いたんだが、私の魔法が何だって？」

撫で方を優しいのに変えながら言う。

「あぅ」

「そのまんまの意味よ。アンタの変身した【九尾】に乗っていくわ。」

「…嘘だろ…陸路だぞ？時間掛かるから、列車でいこうぜ…」

「ホントのことよ。ね？ウェンディ？」

「あぅ」

「…ウェンディ！！」

「きゃ！？し、シャルル？ビックリさせないでよ…どうしたの？」

「明日コイツの九尾に乗って出発するわよ？」

「あぅ」

「アンタ撫でるの止めなさい！」

「バカやろう！手が勝手ぶはぁ！！」

…　…　…

翌日、日も昇らぬ時間に男が変身した、赤い目と漆黒の毛を持った全長7メートル程ある巨大な九尾の狐が、

集落の者達に見送られて雄叫びを上げながら出発していった。

寝ている少女と猫を、もふもふ、とした九本ある尻尾の内、数本を使って落とさぬように包み込んだまま…

そして

「ずりぃぞ！自分達だけ寝やがって！私だって寝たいんだ！！」

雄叫びを上げながら…

九尾いや、男は一路、マグノリアにある魔導士ギルド【フェアリーテイル】を目指す。

2．2…眠し…（後書き）

変身魔法【九尾】

作者の乏しい知識では

…ウェンディとシャルルが長時間、楽に乗ったり、寝ることできるような動物を考えたらコイツしか出てきませんでした。

ここで皆様にお尋ねです

今後、ナナシもとい、ナレスは影魔法と変身魔法を駆使して原作を渡り歩く予定なのですが

変身魔法は上級以上になると能力を変えたり、戦闘力を変えられるそうです。初めて知りました！

猫は影魔法だとして

どうしましょう…九尾になったら、九尾独特の技を出させるべきですかね？

【九尾のホウコウ】や

【狐火】とか

それとも影魔法を使わせるべきでしょうか…

参考程度にアドバイスを下さると有り難いです。
期限は八月十日の夜１１時過ぎまでになります。

ちなみに他にも、いい技があったら、書いて下さると有り難いです。
もし九尾独特の技を使っていいなら、技の募集は無期限です。

また変身魔法は、
猫や九尾以外は何がいいですか？

作品に取り入れるか分かりませんが、参考にさせて貰います。

それでは、また今度お会いしましょう。

2．3　もふもふ♪

「もふ、もふ♪」

現在は、太陽が昇り植物に付いた朝霜が溶け、露となりキラキラと光り輝いている時間である。

そんな時間、軽快そうに道沿いを走る一匹の九尾がいた。

「ぜぇ…ぜぇ…」

失礼、どうやら九尾は今にも倒れそうである。

「ぜぇぜぇ…もぅ…もぅ…限界だ…途中の街で休憩しよう…ぜ……な？」

大きな体を地面にへたり込ませ、舌を出し激しく息をする九尾は、自身の尻尾の上で寝転がっている少女と猫に問い掛けた。

「もふもふ～♪」

「あら、もう限界なの？オシバナ街まで頑張りなさいよ」

「もふ…もふ…」

「馬鹿やろう！！もう5時間、走ってんだぞ！さすがに限界だ…私にも休憩時間をくれ！…それに魔力が限界に近い」

「……」

「…魔力が足りないんじゃ、しょうがないわね。いいわ…この先の街で一旦休憩よ」

「すぅ…すぅ」

「おぉ、やっと睡眠時間が取れるのか。…てか、起きて早々に、人の尻尾で遊んでいるウェンディはどうした？返事がないぞ」

「…また寝始めたわ…アンタの尻尾に埋もれながら…」

「ぐおぉ、ズルいぞ…何で私だけが疲れているんだ…私にも睡眠をくれ！」

「…街に着いたらね」

「…うみゅ…」

「もう一踏ん張りだな」

そう会話した後、九尾は震える四肢に力を入れギギギっと立ち上がる。そして再び、ゆっくりとだが、走り出した。

「なぁ…【黒狼】になった方が、段違いに早く走れるんだが…」

「今はウェンディが寝てるから無理よ」

「はぁ…起こせないのかよ…」

「……無理よ、子供なんだから寝かせて上げなさいよ。…あと私も寝るから付いたら起こしなさい。」

猫はそう言った後、少女と同じように尻尾の中に入り込んで寝始めるのであった。

それを羨ましそうに見ていた九尾は頑張りますかと呟いた後、最後の力を振り絞り

「■■■■ーー!!!」

九尾独特の雄叫びを上げると、全力疾走をし、一路、街を目指すのであった。

…

…

…

あれから2日後

すでに辺り一面暗くなった時間のオシバナ街のとある宿屋にて。

「くかー」「♪」

何時もの格好ではなく、お風呂上がりのようなラフな服を着ている男と少女が部屋の中にいた。

男は少女に膝枕をされた状態で、気持ちよさそうにソファで寝ている。

ソファの前にあるテーブルには、男達が食べたであろうピザやサラダなどが少し残っていた。

「可愛い♪」

ソファに座っている深い青色の長髪を持った少女は、顔を下に向けたことによって、

垂れてきた髪を耳に掛けながら、嬉しそうに寝ている男を見ている。

そんな時、ガチャリとソファの後ろ側にある扉が開くと一匹の服を着た猫が入ってきた。

「ただいま」

「あっ…お帰り。シャルル～」

「はぁ…コイツはまたベットで寝ないで…」

部屋に入ってきた猫は少女達の方に行き、ソファーを見上げるとため息をつく。

「ご飯食べたら、すぐ寝ちゃったの」

「……子供ね」

「ホントだね♪それに寝てる時のナレスは可愛いんだよ！ほら見てよ」

少女は嬉しそうに、横になって寝ている男の頬を撫でながら猫に言う。

「…幸せそうに寝ちゃって…」

「ナレスって不思議だよね。優しい時や格好良い時もあるし、ダメダメな時やこんな可愛い時があったりするんだもん。

あっ…それよりシャルルもご飯食べなよ。」

「まぁ…コイツは二年経っても、掴めないわね…ただ分かることは自由気ままな人間なのよ。

…コイツの方が私より猫みたいね…」

呆れながら、そう言うと猫はテーブルに座り食事をしながら、少女と会話を続けた。

その間も、そして部屋に一つだけあるベットに少女と猫によって運ばれた時も熟睡男が起きることはなかったのである。

…

…

【パチリ】

うわ…真っ暗じゃないか。

ん?…何だ…この柔らかいのは…ぷにぷに、さらさら?…あぁ、ウェンディか。

てか何時の間にベットに来たんだ。私は確かソファーで寝たはずだが…

はぁ、またか…ホント自分が恐ろしくなるぜ。私の体にはベット探知機が付いてるんじゃないのか。

いやはや、私の寝相は凄いな。ふむ…もしくは無意識に転移でも使っているのか…。自分の才能が恐ろしいぜ。

このように、毎度のごとく勘違いすると、男はもぞもぞと起き始めた。時間は既に深夜だ。

はぁ…何とか2日でオシバナまで来たな。よっと

「うみゅ…なれ…す？」

「あ～はいはい、まだ夜だから寝てな。ほら、シャルルでも抱いてな」

「…ぅん♪…すぅ…すぅ」

いかん起こしてしまったな、まさか服を掴んでいたとは…。

ふぅ、やっとベットから出れた。今は…一時か。結構遅い時間だな。

まぁ、あと2、3時間したら集落だったら叩き起こされるんだが

…たぶんウェンディもシャルルも朝まで起きないだろうな。

旅ってやつはただ、座ってるだけでも疲れるもんなんだよな。

今回の長旅で実感したぜ。…ウェンディ達がな…

私より、コイツらの方が疲れてやがるからなぁ。

…まぁ、まだまだ子供だからな。いっぱい食っていっぱい寝ないとな。

そんなことを男は考えると寝ている少女の頭を優しく撫でた。

「…ん…」

「少し出掛けてくるからな」

その後、少女が掛けてくれたであろうロングコートをハンガーから取ると、寝間着の上からそのまま羽織りフードを深く被る。

そして、まだ火を付けていないタバコを銜え、部屋の外に出て行った。

…

…

うむ、まさに静寂のごとし…ってやつだな。

私は今、宿から出て街にある橋の上で月明かりに照らされた水を見ながら、薬草タバコを吸っているところだ。

水の流れる音が何とも心地良い。

ふむ、今日は三日月か…水に月が反射して映って綺麗だな。

水の流れを眺めながら、ボケッとしている男に、一人の人間が近付いてきたようだ。

「おい、そこの貴様、こんな夜更けに何をしている」

「あ?…【ドクン】…っ!?」

「?…何をしているのかと聞いているんだが…」

何だ…今の…前にも合ったような…確かマカロフの時か?それにこの声…どこかで…

「おい!聞いているのか」

「っ!?私に触るな!!!」

「あ、あぁ…すまない…しかし…そこまで怒鳴ることはないんじゃないのか?」

「誰だって知らない奴に掴まれたら同じ反応すると思うぞ…」

私は言いながら、後ろに振り返った。

「……ふむ、これはなかなか…」

やはり勘違いだな…こんな美人見たことがないぞ。長い赤い髪をしている美人は知らないからな。

大人っぽい服を着ているが、どこか少女のあどけなさを残しているな。

それに胸がいい感じの大きさだ。揉みごたえがありそうだ。

ふむ、これは言わねばならん！！

「妻から始めましょう！」

「断る…それに、そこは友達ではないのか…」

即、撃沈だと！？もう、この女は嫌いだ！

どうして私のナンパは成功しないのだ！ルックスは良い方だぞ！…たぶん…。

「り、理由は…」

「既に私は別の男と契りを交わしている。…それに、人に告白する

ぐらいならフードは取ってはどうだ？」

「…こ、これは…私のアイデンティティだ！これがないと私は私と言えないのだ！」

フードを取れだとぅ！？出来るか！ドアホぉが！

「…むっ…この匂い！？…薬草タバコだと！？」

もし、記憶喪失前の私が犯罪者だったら、どうするのだ！

イヤだぞ、豚箱行きなんてのは！

「お、おい貴様！そのタバコをどこで手に入れた！！」

あ？何だ、いきなり。胸揉むぞ、この野郎

てか、そろそろ寝ないとな。明日…いや今日か…鬼猫に殺されちまうな。禁煙と言う方向で…。

「自作だ…」

そうポツリと言った後、何度も静止するように言ってくるウザイ女

を振り切り、路地に入るとすぐに転移した。追尾はできまい。

そして

「…ただいま～」

ウェンディ達を起こさないように慎重に扉を開けて部屋に入る。

うむ、実に可愛らしい寝顔だ。…この子は将来、誰と結婚するのだろうか…。

チャラチャラした奴には絶対、うちのウェンディは渡さん！！

お兄さんは認めませんからね！！

そんな馬鹿なことを考えている男はベットに入らず、ソファに横になると

ものの数分で眠りについた。

…

…

…

翌日、オシバナ街の外では真っ赤な目に漆黒の毛をたなびかせる２メートル強の狼がいた。

もふもふとした尻尾は三本ある。

その内、真ん中の尻尾で少女の膝に座る猫ではなく、狼の背中に座る少女の体に、優しくグルリと巻きつけ、落ちないようにしていた。

「ちゃんと乗ったか？頼むから、振り落とされてくれるなよ」

「乗ったよ♪黒狼も、もふもふ～だね」

「こっちは大丈夫だからハルジオンまで急ぎなさい」

「あ？ハルジオン？そこは港町だろうがよ…目的はマグノリアだ。それに、ハルジオンはマグノリアより奥にあるんだぞ？」

「何でもサラマンダーはそこにいるらしいわ…噂だけど…」

「…（はぁ…噂ねぇ。まぁ、まだ期限までは時間はあるからな。…ついでに観光するか。）

わぁったよ。ウェンディ、出だしのスピードを速めたい。サポートしてくれ」

「うん、行くよナレス！天を駆ける俊足なる風を！」

【バーニア！】

少女が魔法を唱えると狼の体全体を光が包む

「駆けるぞ！振り落とされるなよ！！」

狼は雄叫びを上げ、体をバネのように縮こませたと思うと、ドンっと言う音と共に風のように速く走り去っていった。

彼らがいた場所には、ただ砂埃が吹き荒れるだけである。

「…ナナシ…なのか？」

と、その場所に昨日男が会った女が上半身に鎧を付けたまま、どこからともなく現れる。

そして、ポツリと呟くと黒狼が去った方向を、ただ見つめているだけであった。

かくして

男達一行はマグノリアではなく、港町ハルジオンへと駆ける。

2．3　もふもふ♪（後書き）

フードを被ると、顔が見えない！！

何とも、都合の良いことですが、アリでいいですよね…

ちなみに他人から見るとフードの中は暗闇になっております。

ナナシもといナレス特有の赤目すら見えません。

だから、エルザは最後の時に確信が持てませんでした。

それに加えて三年経っているので、身長も伸びてますし、声変わりもしています。

現在の身長は大体１６５～１７０センチぐらいかな。声は皆様のご想像でお願いします。

今回は、変身魔法【黒狼】を登場させました。

影魔法を主体に使います。

黒猫が隠密用なら

黒狼は戦闘用ですね

他にも黒狼独自の使えそうな技がありましたら
アドバイスを下さると有り難いです。
次回はハルジオンに到着の予定です。
ついに原作に入りますね。
それでは、また今度お会いしましょう。

2．4　偽り（前書き）

今回は一度書いていた文章が消えてしまい、悲しみながら、大ざっぱに書いた文章です。

読みにくかったら、すみません。

では、どうぞ

2.4 偽り

港町ハルジオンにて

街を一望できる断崖絶壁に、猫と狼と少女が佇み街を見下ろしていた。

ふむ、着いたな。ここがハルジオンか…

見事に港町だ、つまらなすぎる。どこにも観光する場所はなさそうだな。唯一は灯台ぐらいか？

【くいくい】

ん？何だ

「サラマンダーさんが、どこにいるか分かる？」

おっと…そういやサラマンダーを探しに来たんだったな。

「待ってな、今から捜してきてやるから…」

そわそわとしているウェンディに返事をすると三本の尻尾の影から一匹ずつ、合計で三匹の尻尾サイズの小さな黒狼を出す。

そしてすぐに、サラマンダーを捜すために出動させた。

「■■ーー！」

おぉ、おぉ、元気良く崖から飛び降りて行きよる…影じゃなかったら死んでいるぞ。

しかし、実に便利な魔法だ。頑張ってサラマンダーを捜してきてくれ。

そんなことを考えながら、ボケっとすること二時間。

何時まで経っても、発見の報告がないことに痺れを切らしたシャルルが喋り掛けてきた。

「…ねぇ、アンタ…サラマンダーの姿見たことあるの？」

「いや、全く見たことないね。でも影狼達は私と考えが同じだから、大丈夫だろう。きっと見つけるさ」

「…ホントかしら…」

「シャルル！ナレスは頑張って捜してくれてるんだよ！」

「そうだ、そうだ！もっと言ってやれ！」

「…影狼達が頑張ってるんじゃないの？」

《……》

まぁ…そうだけどさ。魔法使ったのは私だし…と、いじけようとした時

「■■ー！！」

街の方から一匹の影狼の鳴き声が聞こえてきた。

よし！どうやら見つけたらしいな。

「見つけたの？」

「あぁ、そうみたいだ…よし街に降りるぞ」

「うん♪」

私はすぐ、ウェンディとシャルルを乗せ崖を飛び降り

…ることなく迂回して街の入り口までトコトコとゆっくり進んだ。

そして入り口付近に着くと影狼達を呼び戻し、変身を解くとフードをしっかり被り、街に入った。

…

…

…

「ふむ、どうやらこの魔法店にいるらしいな」

現在、私達はこの街に一件しかないという魔法店の前に来ている。

ウェンディは先程から緊張しているのか、びくびくしてるな。

「あわわ、き、緊張してきたよ。どうしようシャルル！」

おぉ、さすが私だ。やっぱり緊張していたか

「普段通りのウェンディでいいんじゃない？変に笑いかけたりしないのよ。男は、コイツみたいに皆、狼なんだから」

「失敬な、子供に興味はない！私は変態ではないぞ！！」

ん？何でウェンディは悲しそうな目をしているんだ。

…シャルル…何だ、その目は…

まぁ、それよりサラマンダーに会うのが先だな。そう考えを変えると、私はウェンディとシャルルをおいて店の扉を開けた。

【ガチャ】

「…素敵なオジサマ♪」

【バタン】

が、すぐに扉を閉めることになった。何だ…アレは…絶対、ウェンディには見せられないぞ…

「どうしたの？サラマンダーさん居たの？」

「どうやら、人違いだったようだ。腹が減ったな、飯食いに行くぞ」

緊急回避発動！

私は急いで、この場から離れるためにウェンディの手を取り

「え？え？」

この店から離れようとする！！

…が…

「怪しいわよ！店の中に誰が居たのよ！」

「あっ…バカ猫！止め」

【ガチャ】

「まけてよ～♪」

【バタン】

シャルルよ、よくぞ閉めた。私は振り返ったシャルルと頷き合う。

うむ、アレはまだ子供は見ちゃ行けないものだ。

…しかし…あの女…場所をわきまえろよ…ここは公共の場です！！

「行くわよ、ウェンディ」

「だ、誰が居たの？変な声が聞こえたけど…」

「知らなくて良いことだ。お前にはまだ早すぎる」

「同感よ…情操教育に良くないわ」

「全くだ！さぁ、飯を食いに行こう！」

「え？え？」

こうして、私達はファミレスで食事することになった。

サラマンダー？

すぐ見つかるさ。

影狼？

まだまだ練習が足りなかったのさ

初めて実践で使ったから失敗して当然だね。

…

…

…

とあるファミレスにて。

多くの人で賑わう店内の、とある席では、大量の皿が積み重なっているテーブルがあった。

「いっぱい食べるね♪」

「…何時もコイツは食べ過ぎなのよ…」

「まだ足りないな…すいませーん…●●と●●を…あぁ、皿は全部下げてくれ、邪魔だ」

「ま、まだ食べる気!?もう昼よ!!」

ん?おぉ、もう昼時か…食べるのに夢中になってたな、知らない間に昼になってたようだ。

うむ、店はえらく混雑しているようだ。

「すみません…お客様…他のお客様と相席をお願いしてもよろしいですか?」

ん?相席だと?

どうする?と私が二人に聞くとOKの返事をしたので、どこかの誰かさんと相席することになった。

「あ!こっちだって!すみません、相席お願いしますね(うわっ…怪しい人…子連れ?…)」

「「ぶうぅ!!」」

こ、この女は、さっきの!!

私達と相席するのは、どうやら先程、魔法店にいた女のようだ。金髪のナイスバディを持っている女である。

先程の先入観が強くて手を出そうとは思わないが…間違いなく美人であろう。

「もう!ナレスにシャルル、汚いよ!…あっ…どうぞお座りください」

「いえいえ、(あたし何かしたかしら?)あっ、ナツにハッピー!ここよ!」

「おぉ、ハッピー!あっちだってよ!」

「あい!待ってよナツ!…キュピーン!!!」

私達のテーブルに女が呼んだ青年と空飛ぶ青猫…シャルルと同類じゃねぇか…初めて見たな。

まぁとにかく、そいつらが来た瞬間に何と青猫はいきなり、目をハートマークにさせたのだ。

これが恋する瞬間か…

しかし、シャルルに恋をしたらいけないぞ、猫よ。

将来、確実に尻に敷かれること間違い無しだ。男なら亭主関白を目指さないとな。

まぁ、私なら目指すことは簡単だ。女なんてチョロいもんさ。

そんなことを考えていると青猫がシャルルに近づいていた。

「お、オイラと結婚してください！」

「いやよ」

「即答きたー！残念だったな。ハッピー」

桃色の髪を持った男が言うようにフラれていた。オシかったな、あと少しで成功していたと思うぞ！

「ていうか！ハッピー！プロポーズ早すぎよ！？」

「あれ？オイラ、前に教えてもらった通りにやったんだけどな」

ふむ、なかなかにおもしろい奴らだ。しかしウェンディが毒されてしま

ん？…ぐぉぉ、腹の調子が…ヤバいぞ…食い過ぎたか？

はぁ…トイレ行くか…しかしウェンディ達をここに置いていっては、

ヤバいな。

「すまんが…私はお手洗いに言ってくる。ウェンディ、私はもう食べないから会計を済ませておいてくれ。外で合流だ。いいな？」

影から財布を取り出すとウェンディにお金を渡す。

「魔導士！？」

「あ、ちゃんと払っておくね」

「よろしくな。あと領収証もらっておけよ。後でギルド宛てに請求書送るからな」

その後、うん、と返事をしたウェンディを見ると急いでトイレに向かった。

「あなた達、魔導士だったの？」

「は、はい」

「オイラの魚いらない？」

「結構よ」

「…あの魔法…」

後ろから何か会話が聞こえてくる。早く店から出ておけよ、ウェンディ。毒されるぞ。

…

…

…

…

…

ふぅ…長かった…まさか一時間以上格闘するはめになるとはな。

「って！何でまだ店に居るんだよ！出ていろって言ったよな！」

私がトイレから出て、店の外に出ようとすると、ウェンディ達は相席になった奴らと未だに席に座り、ペチャクチャお喋りをしていた。

「あっ！ナレス！サラマンダーさん見つけたよ！」

「あ？この女か？（それはないな…となると…この男か…）」

「あたし！？」

「ううん、違うよ。その隣の桃色の髪の人だよ。ナツさんって言うの」

やはりこっちの男だったか。コイツが噂のサラマンダーか…普通の人間だな。

「それでね…」

…

…

ふむ、私がトイレに行っている間に色々と話をしたみたいだな。

・お互いに滅竜魔導士であることを確認

ウェンディが嬉しそうだから、ファミレスに来て正解だったな。よかった、よかった。

・これからフェアリーテイルで厄介になる発言

まぁ、これは当然か…女の方もこれからフェアリーテイルに入る予定らしい。

ふむ、しかしフェアリーテイル…何か…何かあったような…大事なことがあったはずだが…何だっけ？

結構重要なことなのだが…思い出すんだ！私！

もしかしたら、以前の記憶が戻るかもしれないぞ！

…フェアリーテイル…マカロフ・ドレアー…聖十大魔道…マグノリア…

ん～何かが足りないな。あと少しで出そうなんだが…

おぉ…そう言えばマカロフ・ドレアーの顔と声をし

「ナレス！聞いてるの！」

「ん？あぁ聞いているさ…魚を食べたいんだろ？今から注文してやるから待ってな」

「違うよ…あのね…」

…

…

・噂のサラマンダーは偽物で魅惑の指輪を使い、女を誑かしていたとな！…けしからん…実に、けしからん！

「私が成敗してきてあげよう！」

「アンタ…魅惑の指輪が欲しいだけでしょう。」

「何を言っている！私の曇りなき眼（まなこ）を見てみろ！」

「…真っ黒ね…」

この鬼猫の目は曇っている！私の曇りなき赤目が見えないのか！

「ウェンディ！お前は見えるよな！」

「え、えっと…真っ暗…だよ？」

「何だと！？」

（…フードを被ってるからじゃないかしら…ツッコんで上げたいわ！…でもこの人、恐そうなのよね。）

「それに偽サラマンダーは王国兵士に捕まったそうよ」

「マグノリアに行こうか」

（諦めるの早っ！？）

さすがに詰め所まで行ってカツアゲはヤバいさな。

欲しかったんだが諦める他ないな。はぁ…残念

…　…　…　…

それから数時間後、男達は、再び街が見下ろせる断崖に来ていた。

「遂にフェアリーテイルに行けるのね！」

そう意気込む女、名前はルーシィだそうだ。

「おい、お前ちょっと面見せろや」

その隣で、何度も私のフードを取ろうとするナツ・ドラグニル

いい加減ウザくなってきたな。

「いいか？ナツ・ドラグニル…このフードは私のアイデンテ［ケッ
トシェルターのナレス・ノーナ！
マスターマカロフよりお手紙です。マスターマカロフよりお手紙で
す。」

あ？…手紙だと…」

私が諭そうとした時、上空から手紙を銜えた鳥が降下してきやがった。

…

…

…

「おっ！じっちゃんからだ」

「まぁ、待て。これはケットシェルター宛てだ。お前らには見せられん。ウェンディ、シャルル、コイツらを見張っておけ」

そう言うと、ナレスはナツ達から離れ、手紙を開けると浮き出てきた老人の話を聞き始めたが、

「！？」

手紙から老人の立体映像が出てきて喋り出してからの、ナレスの様子はどこか変であった。

そして数分後、手紙を読み終えたナレスは手紙をその場に捨てると、ウェンディ達に近付き

「思い出したんだ！！」

「え？ナレス…どう「思い出したんだよ！私のやるべきことが！！！そうだ！そうだったんだよ！！！！」

「ちょっとアンタ！落ち着きなさいよ！」

普段よりも不可思議な行動を取るナレスに戸惑うウェンディとシャルルはナレスを落ち着かせようと体を掴む。

しかし、ナレスは、無理矢理ウェンディ達の腕を振り解く。

「私は先にマグノリアに行く！お前達は列車で来い！！」

そう叫ぶと崖から勢い良く飛び降りた。

「待ってナレス！」

「うそ！？飛び降りた！？」

「ハッピー！！！」

「あいさー！！！」

崖から飛び降りたことに驚いたルーシィは、ただ叫び、ナツはハッピーに助けるようにお願いをするとハッピーか翼を展開させ向かおうとした。

が、その時

「■■■■ー！！！！」

3メートル程の真っ黒な羽に真っ黒な体、赤目の大鷲がナレスが飛び降りた所から現れた。そして翼を羽ばたきながら大きく雄叫びを上げると共に、マグノリアの方向に飛び立っていってしまった。

…体中を赤い紋様に覆われた状態で…

「何アレ！？」

「ナレスよ…アイツは変身魔法の使い手なのよ。…それより、あの紋様は何？（…それに思い出したって…昔の記憶？…）」

「シャルル！ナレスの様子がおかしいよ！！それに変身した時にあんな赤い線出てこないはずだよ！！」

「わかっているわ…とにかく追うわよ…マグノリアまで持ちそうにないけど…」

翼を展開したシャルルはウェンディを掴むとナレスを追うために飛

び去っていった。

「俺達も行くぞ、ハッピー！」

「あい、何だか悪い予感がするもんね…それにしても変身魔法とリサーナの接収魔法ってどう違うんだろうね？」

「さぁな！帰ったら聞いて見ようぜ」

「ちょっと！あたしはどうするのよ！！」

ウェンディ達に続き、ナツとハッピーの二人も飛び立ちその場にはルーシィただ一人だけが取り残された。

「ちょっとあたしはーー！？」

その後、一人寂しく叫び続けるルーシィがいたとか。

…　…　…　…

…

…

…

大鷲が飛び立った頃、

どこかの暗闇に支配された部屋の中で男と女が会話をしていた。

「影法師の暗示がようやく発動したようですわね」

「あぁ、そう言えば…以前にそんなことをしたか…暗示をかけてから2年。……少しキーワードを掛け過ぎたようだ。

やはり、記憶を封印したのが悪かったか。…こんなに時間が掛かるとは思わなんだ」

男は自身のヒゲを撫でながら、あまり興味なさそうに答える。

「…でも、影法師では正面から、マカロフを殺せるとは思えないわ。…彼の能力なら暗殺の方が確実にマカロフを……」

「いいのだ。これは単なる余興なのだからな。それに……」

そう喋る女を遮るように男は再び喋り出す。その後も、暗い部屋の

中で二人の話し声が響いていた。

…

…

…

…

「そうだ！そうだ！思い出した！思い出したんだ！！

私は！！

マカロフ・ドレアーを

殺害しないと

いけないんだ！！！」

そう雄叫びを上げながら、大鷲はぐんぐんスピードを上げ、マグノリアを目指す。

…暗示によって植え付けられた偽りの記憶を信じながら…

「■■■■ーー！！！」

2．4　偽り（後書き）

ボラは通報により、普通に王国軍兵士に捕まりました。

大体、違法魔法具を使ってるのをルーシィが気付いたなら、通報しているはずでは…と解釈し

逮捕させました。

まぁ、一度目に書いた文章じゃ戦わせたんですが…

二回も書く気力が出ませんでした。

それと急展開ですね

フェアリーテイルは時々急展開な話があるので、いきなり出して見ました。

まぁ前から、ちらほら

、それらしきモノは出していたんですが

作者の表現力じゃ、これが精一杯です。

で、今回の急展開ですが

はい、二年前に暗示と記憶封印を掛けられていたナナシもといナレスですね。

人間が、そう何度も簡単に記憶喪失になるわけがないのです。

人為的だったんですね。

主人公なのに不幸な奴です

調査に失敗して捕まったんですかね？

まぁ、そこは、おいおい出します。かなり後になりますが

次回は戦闘になりますが期待しないでください。

戦闘を書くのは非常に難しいのです。

では、また今度お会いしましょう。

ちなみに技の募集はしております。

2．5　強し（前書き）

戦闘は期待しないでください。

あとシリアスではありませんから気をつけて！！

では、どうぞ

2.5 強し

光を発する太陽に空が支配されている時間
透き通る水色の空を駆け抜ける一羽の大鷲がいた。

「■■■■ーー！！！」

大鷲はただ独特の雄叫びを上げ、何度も大きく翼を羽ばたかせるとスピードを速め
山を、川を、畑を越え、前方で大鷲を見てくる小鳥をも無視して追い越す

「…マスターやエルザの言う通りナナシ兄ちゃんだ…」

そう、小鳥が呟く声も聞こえずに大鷲は一心不乱にマグノリアにいるマカロフ・ドレアーを殺害するために飛び続けた。

（あと、あと少しだ、この荒野先の森を抜ければマグノリアだ！！私は殺らないといけないんだ！！！）

大鷲、いや男は暗示によって自らに植え付けられた偽りの記憶を信じ飛び続ける。

（私は殺るんだ！！！）

「■■■■ーー！！！」

再び大きな雄叫びを上げた男は、よりスピードを上げようと、これまた大きく翼を動かそうとした

その時

【サークルソード！】

「あ？剣だと！？ちぃ！」

大空を羽ばたいていた大鷲に向けて無数の艶光する長剣が襲い掛かってきたのである。

何とか回避するが、その間も無数の剣群は大鷲に降りかかってくる。

「くそが！！」

そう言い放つと共に、地上に向けて急降下すると変身を解き、人間の姿になり

再び変身して黒狼の姿になると地面に勢い良く降り立った。

「私の邪魔をするのは、どこのどいつだ！このクソ野郎が！！」

そう言い放ちながら、ドンっと言う音と共に地面に着地した狼は、土埃を立てながら、前方に立っていた人間を睨みつけた。

前方にいた人間…いや鎧を着込んだ女は背後で１１本の剣を円のごとくぐるりと回したまま、狼の言葉に応える。

「…フェアリーテイル所属・エルザ・スカーレットだ。この先は我がギルドがある場所！

誰であろうと、そのような殺気を出す輩を近付けるわけにはいかない！」

「！？…妖精女王か！？ちょうど良い！！貴様も殺さねばならん！」

【螺旋影波！！】

狼は話し終わるや否や、一度大きく空気を吸うと、口の中から真っ黒で螺旋の渦を巻いている影の衝撃波をエルザに向かって吐き出した。

「影の波動！？…くっ！」

イキナリの衝撃波に対してエルザは地を転がると微かに腕に当たりながらも避けることに成功する。

そして、そのまま地を駆け、衝撃波を出し続ける狼の側面に近付くと、無数の剣を突き刺すために放つ。

「やはり貴様は！」

「そんな剣はきかん！」

が、衝撃波を止めた狼がすぐさま地面から出した影の手によって、すべての剣は叩き落とされる。

【影狼！】

そして叩き落とすと共に、尻尾の影から三匹の影狼を出すと近付いたエルザを襲わせる。

「はぁ！！！」

「「「きゃん！」」」

が三匹はすぐさま切り捨てられ、ゆらりと消えていった。

「こんなのが私に効くと思ったか！ナナシ！！」

「誰のこと言ってんだ！あぁ！？私はナレスだ！」

エルザは影狼を切り捨てると、すぐに狼に近づき、手に持った剣で横から斬りつけようとするが、ガキンっという音が周囲に響く。

剣は狼の凶悪な歯によって噛み砕かれていた。

「ちっ！近すぎだ！（体当たりするか…いや、ここは引く！）」

攻撃を止めた狼だが、お互いの体が触れ合う距離までエルザが近付いたことによって不利を感じ、

剣を吐き出しながら、距離を取るために後ろにジャンプした。

が、

【黒羽の鎧！】

この好機をエルザが見逃すわけがなかった。

「やはり、その術式がお前を狂わしているようだな！」

機動性が高い鎧に瞬時に換装すると、狼の体にある紋様を斬りつける。

「ぐあぁ！！」

ザシュと言う音と共に狼の体の至る所に傷をつける。

「くそったれが！」

【影槍！】

しかし、狼も負けじとエルザから離れると共に再度攻撃をしかけてくるエルザの足元から一本の槍を突き出し剣を弾く。

「な！？剣が！？」

「まだだ！」

そしてそのまま槍を横に振ると、見事エルザの横っ腹に当たり吹っ飛ばすことに成功する。

「ぐぅ！」

エルザは体勢を崩しながらも、何とか地面に着地しようとするが、

【影舞踊！】

エルザが着地すると共に地面に出来た影の中から、にゅるりと三本の尻尾が出てくると、エルザを絡め取る。

「何だこれは…」

エルザは抜け出そうともがくが、逆に強く締め付けるばかりであった。

「し、しまった、これは捕縛用の魔法か！？」

「御名答！！！これで貴様は終わりだな！」

自身の尻尾で絡め取った、狼は大きく息を吸うと勢い良く衝撃波を放つ

【螺旋影波！！】

【ドゴォォン！！！】

……

……

……

……

一方、大鷲となって飛び立っていった男を追う二人と二匹は、猫達の魔力切れのため、途中で拝借した魔導四輪に乗って後を追いかけていた。

魔導四輪車は、魔力はナツが提供し、操縦はハッピーがしているようだ。

「な、なぁ、うぷっ、あ、アイツのどこがおかしかったんだ？い、何時もと、どう違ったんだ？」

「あ！それオイラも知りたい」

気持ち悪そうに運転席に横になりながら後ろの席に聞いてくるナツと、その横でグッタリしたハッピーが会話を始めた。

それに合わせて後ろの席で心配そうに服の裾をぎゅっと掴み、俯いているウェンディは

「ナレスは自分一人でなら、鳥にならなくても移動できる【転影移】って魔法を持っているんです。」

そう話し、その隣でグッタリとして窓から外を見ているシャルルは

「普段は私達がいるから使ってないのよ。今回は一人でマグノリアに行くって言って飛び出したのに変身した…」

「…ナレス…どうしちゃたんだろう…」

心配そうに震えるウェンディを見てナツはハッピーと頷き合うと意を決して話しかけた。

「…な、なぁ、うぷっ！あ、アイツってフード取ったら白髪に赤目じゃねぇのか？気持ち悪！？」

「ナツ！頑張って！……それにプラスしてネーミングセンス悪い？」

「…あ、当たってるわ」

「は、はい、その通りです。」

二人の返答を聞いたナツとハッピーは確信する

「…ねぇ、ナツ…ナレスってやっぱり…」

「あ、あぁ…間違いない…ナナシだ！

【転影移・ナレス】

なんて安直な名前使う赤目に白髪の名前無しはアイツしかいねぇよ！おぇ！」

気持ち悪がりながらも、イキナリ騒ぎ出した二人にウェンディ達は戸惑いながらも質問をする。

「ナナシ？ですか？」

「ナナシ…名無し？…まさかアンタ達！ナレスの過去を知ってんの？」

「過去ってことは…やっぱり、今のナナシは前の記憶がないんだね」

「アイツはな…フェアリーテイルの魔導士なんだ！俺達の仲間なんだよ！」

「え…」

仲間…と聞いた瞬間ウェンディは再び顔を俯かせ悲しい顔になった。

そんなウェンディのことに気付かず、ハッピーが説明し出した。

「ナナシ・ネームレス…別名、影法師のナナシ。オイラ達と同じ、フェアリーテイルの魔導士なんだ。

三年前に闇ギルド調査の仕事に出掛けて、その一年後、仕事中に姿を消したんだ。そして去年、死亡認定された…」

「で、でもやっぱり生きてた！！ミラが正解だったな！アイツはナナうぷっ！……シで間違いない……みんな喜ぶぞ！」

「あい！！ミラ絶対帰ってくるって、ずっと待ってるもんね。記憶

なんてオイラ達で元に戻してあげようよ！」

「お！いいな！」

そんな風に、顔色を青くしたまま楽しく喋るナツとハッピーをよそに、後部座席では

「どうしたの？ウェンディ」

「…ナレスは記憶が戻ったらケットシェルター辞めるのかな…私…離れたくないよ…」

ウェンディは落ち込み、沈んでいたが

「…わからないわ…それはアイツが決めることよ…それより、まずはアイツを止めないといけないわ。」

そうシャルルから言われると、「…そうだよね…今のナレスを止めなくちゃ！」と考えを切り替えるウェンディであった。

…　…

…

…

…

一方、

マグノリア近くの荒野にて。

【螺旋影波！！】

一匹の黒狼の口から、とてつもない魔力が込められた衝撃波が、捕らえられたエルザに向かって放出された。

ドゴンっという大きな音と共に土埃が舞う。

「…まずは一人目」

それを見た狼は自ら巻き添えにさせたボロボロの尻尾を影の中から引き上げようとした。

「！？」

が、いくら引っ張っても尻尾はビクともしなかったのである。

徐々に土埃が晴れていく

「な!?新手だと!!しかも三人…厄介な」

エルザがいた方向には、赤いドレスを着たミラと狼の尻尾を離さぬように掴んでいる、何かを接収した状態のリサーナ。

ラフな格好をしてカードを展開させ、魔力の防御壁を作っているカナの三人がエルザの前にいた。

「大丈夫かい?エルザ」

「あぁ…何とかな。まさか、ナナシがここまで強くなっているとは思わなかったな」

「そう…やっぱり、あれはナナシなのね…体にあるのは術式?」

「あぁ…たぶん、マスターが教えてくれたように、暗示と記憶封印の術式だろう…」

「ミラ姉!早くして!もう持ちそうにないよ!」

リサーナが無理矢理、抑えていた尻尾がビタンビタンと跳ね動く。

「えぇ、早く起こしてあげましょう。ホント、昔からしょうがない人なんだから

…お仕置きの時間よね」

「あんまり無茶するんじゃないよ。アンタは久しぶりの実践なんだから」

「平気よ、愛は強しってね♪」

「おい！馬鹿やろう共！！何、ペチャクチャ喋ってんだよ！そこのクソアマ！いい加減に私の尻尾から手を離しやがれ！！その胸、揉みし抱くぞ！馬鹿やろう！」

離れた所からピーチクパーチク叫ぶ狼を見た女達は何だか安心したように、ほっと胸を撫で下ろす。

「あぁ、コイツは完全にナナシだね。少し混乱してるみたいだけどね」

「やっぱり生きてたんだね、ナナシ兄ちゃん。待っててよかったねミラ姉♪」

「うん♪」

「あの術式を解除すれば元に戻るだろう、とのことだ。マスター達が言うには…」

「だぁ！無視か！埒があかんぞ！！クソアマ共が！！！」

呑気に喋るミラ達を置いて、我慢できずに黒狼は再び口から衝撃波

を放とうとした

【螺旋影【サタンソウル～♪】ひょ！？】

その時

ミラがサタンソウルを発動したのだ。

「こ、これはやばし…」

辺り一面が膨大すぎる魔力に押され、空気が振動し地面が揺れ動いている。

「や、や、やばし！？」

あまり魔力量に狼は体全体を震わし尻込みしている。

その姿は非常に情けない。先程の狼の荒々しさは微塵にも感じないのである。

そんな怯える狼に

「や～ま～ね～こ～ポーン！！！」

そう、一声鳴いたミラは全力疾走をし、一瞬で狼に近付く

「はやっ！？」

「何年待たせるのよ！ナ・ナ・シ！！！」

【バゴン！！！！】

「ぐぶぅ！！！！！」

強烈な音と声を出しながらまともに、顔面に飛び蹴りを喰らった狼は後方に勢い良く飛んでいく

…

…はずだった…

が、

ガクンと

「ギャン！！（尻尾がもげる！）」

涙目の狼は途中で止まるとグルリと半回転しながら戻ってきた。尻尾を基点にして…

「一年って騙したわねパーンチ！！」

「ぐほぉ！！」

「待ちすぎて涙も出ないわよキーック！！」

「やめっぶぅ！！！」

「このダメ男パーンチ！！」

まさに真っ黒で赤い線が入ったサンドバックのようだ。

ミラが攻撃するたびに徐々に赤い紋様が消えていく。

「ぐふぅ…そちらの姫様方！お願いだから尻尾離してくれ！！私死んでしまう！」

少し正気を取り戻したナレスは泣き叫ぶが、その言葉は虚しく響くだけで、

リサーナだけでなく、巨人の鎧に換装したエルザとマジックカードから鎖を出したカナが尻尾に巻き付けたことによって掴んだ尻尾は絶対に離されることは、ついになかったのである。

その後、数十分も、ミラによるナナシお帰りリンチは続いたのであった。

そして、パリンと言う音と共に狼を覆っていた術式の赤い紋様がすべて取れた。

「もう離してもいいだろう全くアイツはいつも世話をかけるのだから困ったものだ

…やっぱり私達がいてあげないとな！」

「ん～疲れたね…でもミラ姉嬉しそう♪お帰りなさい、ナナシ兄ちゃん」

「そうね…ホント生きててよかったよ…おかえりナナシ」

尻尾を離した三人はナナシに近付きながら会話をしていた。

一方、尻尾が戻ってきて、ようやく狼から人間の姿に戻れたナナシは

「ずっと待ってたんだからパーンチ！！！」

「ふぐぅ、ちょっ…頼む…もう止めろ！私のライフはゼロだ！」

「本当に記憶戻ったのパーンチ！」

「戻った！もう記憶戻ったから！！止めてミラ！

（…何で記憶無くしたのか覚えてないけど…）」

「会いたかったパーンチ！！！！」

「痛！？（今のは地味に痛かったぞ）本当にすまなかったよ。嘘ついてごめんな。エルザもカナもすまん。だから許してくれ！」

ナナシは情けない声を出して必死に嘆願している。

しかし、サタンソウルを解いた後から、少し涙を目に溜めたままで笑顔でいるミラがお帰りリンチを止めることなかった。

フードが取れ、ボロボロの服を纏ったままのナナシに、今までの鬱憤を晴らすかのように馬乗りになりナナシの体をぽかぽか叩き続けていた。

それもようやく、落ち着いたのだろう。段々とパンチの威力が落ちていき

「もう絶対！離さないんだから！！馬鹿ナナシ！！」

そう言うと少し涙を頬に伝わせるとナナシに抱き付いて、ぎゅっと抱き締め始めた。

「ば、バカってひど…

おぉ柔らかい。ぐへへ、ボインボインですな

って力強すぎ、ほ、骨が折れる！リサーナ！ヘルプ、ヘルプミー！！！

お前の姉ちゃん、やりすぎだ！」

「ダメだよ～！私達を心配させた罰だと思いなさい！」

「ミラ緩めろ！「イヤ！絶対離さないんだから！」折れうむっ「ん…ちゅ…んあ…ん…ちゅ…」」

（（…家に帰ったら私もしよう））

（うわぁ～ミラ姉…大胆…いいな…私もナナシ兄ちゃんと…ん？違う違う！何でナナシ兄ちゃんが出て来るのよ！）

その一時間後、ようやく、解放されたナナシはご機嫌なミラから膝枕をしてもらい、地面に横たわっていた。

ボロボロの状態で…当然ながら、息も絶え絶えである。

「お・か・え・り♪」

「た…だた…いま…ミラ（腹と腰が折れ死んだ、それに明日は唇が腫れてそうだ…）」

かくして

満を持して？のナナシ復活である。

しかし、この後やってきたウェンディに泣き抱きつかれたナナシが、再び地獄を見るとは誰も想像していなかったのである。

…

…

「ナレス！いっちゃヤダ！」

「ウェンディ大丈夫だって、私はお前を守うぶぅ！？」

「「「浮気？」」」

「ち、ち、ち、違う、断じてちぎゃ！？」

「……ナナシ兄ちゃん最低」

「あれ？記憶戻ってるよ」

「俺も戦いたかった！！」

「…コイツ…記憶戻っても変わらないのね…」

2．5　強し（後書き）

はい、ナナシ復活です。

マカロフと戦えずじまいで終わったナレスでした。情けない男ですね。

まぁ、世の中こんなものですよ。

あることで直談判しに
校長に会いに行ったのに、
鬼の風紀委員達に会って成敗されました。みたいなもんです。

それにしても

やっとフェアリーテイルに帰って来れました。

長かった…

やはり第一章の、あのラストから続けるのは大変でした。

まぁキンクリすればよかったですけど…

作者の自己満足に付き合わせてしまい申し訳ありません。

今後、本格的に原作に入ります。

まぁ既にキャラクターの時点で原作崩壊してるんですがね

ちなみにケットシェルターのナナシ・ネームレスとしての参加です。

ウェンディとシャルルの影法師に対する呼び名はナレスとなります。

略してナレスですからね
あだ名みたいなもんです。

ちなみに猫・九尾・黒狼・大鷲のほか変身魔法と独自の技を随時、
無期限で募集中です。

知識が乏しい作者に是非ともアドバイスを下さると有り難いです。

ではまた次回お会いしましょう。

2．6　頑張りますか（前書き）

今回のは実験で書き下ろしです。

読みにくいかもしれないので、ご注意下さい。

。

原作のルーシィ到着まで一週間あると思ってください。

無理矢理、調整です

あと山なし落ちなしですのでご勘弁を。

2．6　頑張りますか

陽が昇り出し、また1日が始まる。

それは物語の舞台となるフィオーレ王国でも同じことであった。

当然、その王国にあるマグノリアという街でも、また陽が昇り始めていた。

そんな街の外れにある一軒家から物語は始まる。

二階建ての一軒家にある1つの部屋では大きめのベットの中に3人の人間が寝ていた。

三人は一つの大きな高級そうなシルクの布をかけて、薄めの服を着て寝ているようだ。

【バン！】

「ナレス、訓練の時間よ！！」

その部屋に翼を生やしたシャルルが突入し、真ん中でエルザとカナに腕枕をしているナナシの顔をペチペチと叩き始める。

「起きなさい！」

「……くかー…」

「ナレス！」

がナナシが起きることはなく、シャルルが声を荒げて起こしていると

「…ぅ……どうした…まだ早い時間ではないか…」

ナナシの左側にいたエルザが先に目を覚ましたようだ。

エルザは体に掛かっていたシルクの布を体に纏わせたまま、上半身だけ起こし上げた。

ちなみにナナシとカナは熟睡中である。ピクリとも動かない。

「あ…起こしてしまったようね」

「まだ早い時間だ…寝ていてもいいのではないか？」

「エルザとカナの二人はそれでいいんだけど…ナレスは今以上に強くなるために特訓しないといけないのよ」

「あぁ…ナナシが強くなっていたのはシャルルのおかげか…礼を言うぞ。よくこのダメ男を鍛えてくれた」

「いいのよ…（ウェンディのためにもなるしね）」

「コイツを起こすのは苦労したんじゃないのか？」

そう言いながら、エルザは熟睡しているナナシの頬をクニッと掴む。

「……うっ……散れ」

掴まれたナナシは痛みを顔に浮かべると、散れと言いながらすぐにエルザの手を左手で払い、横を向き右にいるカナを抱き締め始めた。

「…おぉ…やわやわ…」

そんな寝言を呟く変態は非常に幸せな顔をしている。

その様子を、しょうがない奴だな。と見ていたエルザはシャルルに「すぐに起こしてやるから待っていろ」と言うと、ナナシの耳に口を寄せ小さな声で囁いた。

「今日の訓練は休みだそうだ」

【ガバリ】

エルザの声に反応したナナシはすぐさま上半身だけ起き上がると、

「なんと!?休みとな!これは遊びにいかないと!!」

ワクワク、キョロキョロしていた。

「……子供ね…（何時も苦労してウェンディと起こしてたのに、こ

んなに簡単に起きるなんて…）」

「まぁコイツの思考回路はこんなものだ…うむ、三年前から何も変わってないな。…こら！揉むんじゃない！」

「エルザ！今日は休みなんだぜ！昨日の続きを…」

「今から訓練だそうだ。私はもう一眠りするから頑張ってこい！あと絶対に揉むんじゃないぞ！」

「え…うそだろ…さっき言ってたじゃねぇか」

「夢でも見たんじゃないのか？…では私は寝るからな…ん…」

エルザはナナシに軽く口付けをすると、再びベットに横になると寝始める

「……シャルル様？」

「早くリビングに来なさい…ミラが朝ご飯作ってくれてるわよ」

そう言うとシャルルも部屋から出て行く。一人残されたナナシは考えるように顔をしかめている。

「…夢だったのか？…むぅ…しかし…ふむ…やわ」

「ナナシ…エルザがダメだからって私のを揉むんじゃないよ…」

「…カナ…起きていたのか……ダメか？」

「ダメ」

あぁ残念という感じにナナシはカナから手を離す。

「…それに、さすがに騒ぎすぎね。うるさくて適わないわ…ほら…一回シャワーでも浴びて目を覚ましてから頑張りな…」

横になったまま、眠たそうに目を擦るカナはそう言い終わると再び寝始めた。

「…むぅ…そうだな…しっかり訓練してミラに勝てるぐらい強くなればな」

ナナシは意気込むと、まだ眠たい目を擦りながら、ふらふらとチドリ足で浴室へと向かった。

…

…

…

おぉ、さっぱりした…うむ、新発見だな。朝シャンすると目が覚め

るとは。カナに感謝せねばいかん。

…しかしまだ日の出の時間じゃないか。さっきまで眠くて当然だな。

はぁ…まだ一昨日の傷が少し痛むのだがな。まぁ強くなるためにはしょうがないか。

そんなことを私は、何時もの動きやすい服に着替えながら考えを続ける

ふむ、記憶を取り戻して2日が経った。

ミラ達のおかげで、私こと【ナナシ・ネームレス】はフェアリーテイルに帰ってくることができた。

本当に感謝している。

一昨日、ウェンディのことで一悶着あった後、何とか事情を説明し、納得してもらった所でナツ達が乗ってきた魔導四輪でマグノリアまで帰ったのだ。

ナツとハッピーはルーシィを置いてきたらしく、「ナナシ！今度ぜってぇ！勝負するからな！」と言い残して、ハルジオンまで戻っていったよ。

もちろん、絶対勝負なんてしない！

あれは勝負という名の喧嘩だからな。やってられるかよ

まだギルドには顔を出していないから、今日マスターに会いにいかないとな。

昨日は一日中４人で家に籠もっていたからな。色々と話し合ったよ。

ミラとリサーナは私を待つために、ギルドのカウンターで働いてたみたいだ。

非常に申し訳ないな。ミラなんて１６歳で、Ｓ級魔導士になったのに半年もせずに仕事を辞めて

私の帰りを待っていたんだと。

エルザやカナも情報集めに奔走していたらしく、二年間ノウノウと暮らしていた自分が情けないな。

…これに関しては、本当に頭が上がらん。絶対に幸せにしてやらないとな。

そのためにもミラに勝てるぐらい強くならねば！

ちなみに、ウェンディ達は、今はミラの家に泊まらせてもらっている。リサーナと仲良くしているだろう。

しかし、それは昨日までの話しだ。

今日からは、この家の二階の部屋をウェンディ達用にあげる予定だ。

二階の掃除も昨日で終わったからな。

我が家の一階は、どうやらミラ達が定期的に掃除をしていてくれたから、すぐに住むことができた。

しかし、今日はやることがいっぱいである。

早朝は訓練、朝に買い物、マスターと話し　昼はまた買い物…

まぁ買い物はしょうがないんだ。

スーツを新調しないといけないし、新しいネクタイピンと髪留めも作って貰わねば…

昼はウェンディ達の生活用品買わないとな。

ここで当分厄介になるからな。

あぁ…ちなみに私はフェアリーテイルには戻らない。

今の私が在籍しているギルドはケットシェルターだからな

このことも今日、マスターと話さねばならん。

命の恩人（ケットシェルターの皆）は無碍にはできんよ。

どちらにせよ、当分フェアリーテイルにいるから大丈夫だろう。

っと、よし、着替え終わり。

リビングに行くか

…おおっと、その前に寝ている二人の…ぐふふ

「…んぁ…」「…やぁ…」

…

…

…

…

ふぅ…二人とも、ようござんした。

意気揚々と部屋を出た私は少し移動すると扉を開け、広々としたリビングに入る。

するとすぐに、美味しそうな匂いが漂ってきた！

昨日と一昨日とミラの手料理を食べたが、凄く上手になってたんだよな。朝ご飯も楽しみである！

「おはようミラ」

オープンキッチンで、食事を作っているミラに挨拶をしながら近づく。

ミラは、女達お揃いのピンクのパジャマの上から可愛らしいエプロンを着けている。あぁ、全く持って可愛いらしいな。

そして近付くとギュッと抱き締め、おはようの口付けをする。

うむ、すべてが柔らかい。ごちそうさまです。

「…ん…おはよう、ナナシ♪ご飯できてるわよ。」

「おぉ！うまそうだな！」

そう言う、ミラが手を向ける食卓テーブルには大量の美味しそうなご飯が載っている。

ふむ…やはり帰ってきてよかったぞ。

向こうでは爺さんが作った飯を食べていたからな。

あ…そうだ。集落に帰って爺達にも挨拶に行かないとな。

…しかし、何だか今回のは作為的なものを感じるな。実は爺…気付いていた？

だからマスターに根回ししてくれたのか？

いや今回の預かりはウェンディが言い出したことだったらしいし…分からんな……ふむ、直接聞くしかないか…

「おはよう…遅いわよ」

「おはようシャルル」

「早くしないと時間がないわ。前と違って朝と夜ぐらいしか訓練する時間がないんだから」

「へいへい…すまんな。ちゃんとノルマは達成出来るように頑張るさ」

キッチンとテーブルより奥にあるソファに座っているシャルルに返答しながら食事を開始する。

「おぉ！うまし！！」と言いながら終始、ご飯を食べ続ける私であった。

…

…

「美味しい？」

「あぁ、最高だ。」

「よかった♪頑張って作ったかいがあったわ」

途中から前の席に座り、食事をしている私を頬杖をついて嬉しそうに見ているミラと会話を続ける。

「それより眠くないか？昨日も遅かったんだ…私は馴れているがキツいだろ？（朝シャンは偉大だな…眠気が飛んだぞ）」

「大丈夫よ、ナナシを見送ったら寝直すわ。それより、あんまり無茶しないのよ？」

ふむ、ミラも昔と比べたら丸くなったな。まぁ私にとっては、少しだけだが…。

この2日間で二桁は殴られたぞ！完全に尻に敷かれている。何とかせねばならん！

「あぁ…それこそ大丈夫さ。ほぼ休み無しで二年間やってたんだ。かなりキツいけど怪我はしないように頑張るよ。」

「頑張ってね♪」

そう会話し続けながら朝食を食べ終わる。その後は軽く柔軟をしてめ合い、口付けをしてから家を出た。

「いってらっしゃい♪」と玄関まで見送りに来たミラと再び抱き締

「…バカップルね…」

「おぉおぉ、それは褒め言葉だね。さぁって、もっと幸せになるためにも頑張りますか！

ミラもカナもエルザもウェンディも他の皆も、守れるぐらい強くなるためにな！！」

こうして、再び私の1日が始まる。うむ、家の目の前には海…周囲は山と野原…周りにはチラホラとしか家が見えない。

素晴らしく環境が良い場所だ。よし、走るか！

2．6　頑張りますか（後書き）

ナナシの長い1日は次回も続く予定です。

今回から、このような日常の山なし落ちなしを多く書く予定ですがどうだったでしょうか…

アドバイスをくれると有り難いです。

皆様の意見で方向性を変えるかもしれません。

それと、お盆明けから仕事が忙しくなるので更新は遅れます。

ご了承ください。

では、また次回お会いしましょう。

ちなみに

猫（影）狼（影）
鷲（？）九尾（炎）

と決めました。

鷲の属性は何がいいでしょうか…風かな？

何時ものごとく変身・技を含めて募集中です。

気長にお待ちしております。

2．7　ズボラ

【ズドォン！】

太陽も姿を現し、今日は雲一つない晴天の日である。

【ズズドォン！】

そんな朝の時間、マグノリアのとある場所からは、大きな地響きが打ち鳴らされていた。それに加えて辺りには、むわっとした熱気が立ちこめている。

そんなはた迷惑な音とイキナリの気温上昇に安眠を邪魔されたのだろう。

寝室から出てきた一人の女が皆が食を共にする場所であるリビングの中へと入ってきた。まだ眠たい目を擦りながら…

「…さっきからうるさいわね…何してんの…それに暑い…」

「あっ…カナさん、おはようございます。…寝癖凄いことになってますよ？」

リビングに入ってきたカナに、家の外にある庭にいたウェンディが近付いてきた。

「おはよう…ウェンディ…髪はいいのよ、今からシャワー浴びるし…それより何よ、この音と熱気…」

「えっと、ナレスの訓練が原因です…今エルザさんと…」

「あら、カナ起きてきたのね。まだ寝ていても大丈夫よ？」

ウェンディが喋り続けようとした時、これまた家の外からミラが顔を出す。

「…この音と気温じゃ普通は起きるわよ。…ナナシが修行してるんだって？何でこんな音とかが出るのよ」

「見てみればわかるわ」

「そうですね…見た方が早いかもしれませんね」

「？」

少し困ったような顔でそう言うミラとウェンディに即されて、カナは窓の外にあるサンダルを履き庭先に出る。

「あっ…カナ。起きたんだ…今凄いことになってるよ！」

少し楽しそうにワクワクしているリサーナに即されて、カナが生け

垣の先に広がる野原を見ようとすると

「…わっ！？」

ごぅとイキナリ熱風が吹くと共に大きな影が一瞬カナ達を覆う。がすぐに影は消え、

【ズドォン！！！】

ドでかい音がした。

そんな音がした場所と反対側の少し離れた開けた場所に全身を漆黒の毛に包まれた赤目の大型の狐が佇んでいた。辺り一面は焼け野原となっている。

また、この狐はただの狐ではなく、九本の尻尾を持っていた。九尾は顔を上に向け口から青白い炎の残りかすを出すと荒々しく息を吐いていた。

「…何アレ…九尾？…ドラゴンぐらい珍しい奴がどうしてここにいんのよ？」

あまり興味なさげに疑問を浮かべるカナにリサーナが

「ナナシ兄「エルザ！炎帝の鎧はねぇだろうが！手加減しろ！！」…ちゃんだよ。」

リサーナの声を遮って九尾からナナシの声が辺りに響く。

「九尾にもなれたんだ…。しかも影魔法じゃないわね…火の魔法か…この三年間で相当、変身魔法のレベルが上がってるね…」

カナが呟きながら、九尾がその赤い目で見ている方向を見ると、炎帝の鎧を着込み剣を構えるエルザの姿がある。どうやら模擬戦をしているらしい。しかし九尾は戦う気力が既にないようだ。そんな姿を見て肩を震わせたエルザが

「何を言っている！手加減しては訓練の意味がないではないか！！この軟弱者がぁ！！！」

「ひぃ！？」

そう怒鳴ると、エルザの強い怒気に当てられた九尾はもう許してくだされ～

と泣き言を言いながら尻尾を巻いて、仁王立ちするエルザから逃げ始めた。

「どこへ行く！」

「ギャン！？」

しかし、エルザは九尾を執拗に追い掛け、刃引きされた剣で滅多う

ちにしていた。

「…あ～ぁ、さっきまで格好良かったのにな。」

呆れたように見るリサーナと手を頬にあて、やれやれとしているミラが

「ホントね。さっきまで結構良いところまで行っていたんだけど…ナナシの心が折れたようね。

…そろそろご飯の準備しようかな。お腹空いてるだろうし、いっぱい作ってあげなきゃ♪」

「あっミラ姉！私も手伝うね」

ミラとリサーナは会話すると「ヘルプミー！」と叫ぶナナシを無視してリビングへと戻っていった。

「レベルが上がってもナナシはナナシか…」

そんなナナシを見てカナも呆れていた。

が

「でもさっきまで格好良かったんですよ！エルザさんを追い込んでいたんです！」

横にいたウェンディが必死になってナナシの援護をする。

「ふふっ…大丈夫よ。どうせ炎帝の鎧に代わった瞬間に弱気になったんでしょ？」

髪を掻き分けながら笑い、必死なウェンディにそう尋ねると

「そうなんです！エルザさんが炎帝の鎧？に代わってからナレスったら、すぐに弱気になっちゃって。勝てるわけがねぇだろうがぁ！とか言いながら…」

「ウェンディ、朝ご飯作るの手伝って」

ウェンディはカナに説明しながら、その小さな体を大きく動かしナナシの真似をし、再びナナシを見ようとするがリサーナから呼ばれると

「あ、わかりました。すぐ行きますね。…頑張って！ナレス！」

大きな声で九尾に言うとリビングへと戻っていった。それに続き

「…あたしもシャワー浴びよう…」

そう呟くとカナも家へと戻っていった。

…

一方、家から離れた焼け野原にいる二人は

…

「エルザぁ…もう終わりにしようぜ…さすがに炎帝の鎧には勝てねぇよ」

「私達を守るために強くなりたいのだろうが！私に勝てないでどうする！」

そう叱咤されると、一瞬考え込んだ九尾だったが、すぐに

「…む！…そう言えばそうだった…守りてぇ女にそれを言われたら終わりだな！もう一回やるぞ！」

「望むところ！」

再び九尾対エルザは続いたのであった。その後、辺りは再び地響きなどが起こり、男の特訓は続くのである。

…

…

…

あれから2時間後
二人が戦闘をしている場所はほぼすべてが焼け野原となっていた。

「はい、時間よ。この近接練習で終わりね。」

既に人間状態になってボロボロのナナシと、鎧を着けてない状態で剣を持っている傷一つないエルザの元に、シャルルが降り立ってきた。

「やっと…やっと終わりか。さすがに近接は苦手だな」

はぁ…それにしても普段より疲れたな。今日からもっと頑張ろうと張り切って、最後に模擬戦をエルザに頼んだのは間違いだった。
すっかり忘れていたな

「何だ…もう終わりか」

…コイツが手加減する女ではないと言うことをな。しかし、ミラとコイツに勝てないと逆に守られる側になるからな。
頑張って強くならなければ…

「…エルザ…ありがとよ。手伝ってくれて…」

「あぁ…だが不利になるとすぐに逃げ腰になる癖は直したほうがいいぞ。」

座り込んだ状態のナナシが礼を言うと、剣を空間に転送させながらエルザがナナシの欠点をアドバイスする。

「あ～何か逃げたくなるんだよなぁ」

「そんな弱気でどうする。そんなことで私達を守れると思っているのか？」

「へいへい、よっと…強くなるために改善して行くさ…自分の愛する女ぐらい守れる力をつけないとな」

立ち上がると赤い目でエルザの目を見つめながらそう喋った。

「ま、まぁ朝練は時々付き合ってやる（あ、愛する……ほ、ホントにこの男は恥ずかしいことをズバズバと…ば、馬鹿者が…）」

ん？何でコイツ顔赤くしてんだ？。さっきまで堂々言っていたのによ。

…まさか…

「何だ？愛するとか言われて嬉し恥ずかしくなったのか？あっはっは、可愛いな。あのエルザがベット以外で恥ずかしがぶぅ！？」

「もう貴様のことは知らん！！」

エルザは調子に乗ったナナシを腹パンすると恥ずかしさをうちに秘め、怒りを顕わにしながら家へと戻っていった。

…くそぅ…今日一回目の理不尽な暴力を受けてしまった…別にいいじゃないか…少しぐらいバカにしても…何時もは私のことをあーだこーだ言ってる癖に…

「…アンタは一言多すぎなのよ」

「あ？何だよシャルル？聞こえねぇよ」

「何でもないわ…とにかく…二回目の朝ご飯だそうよ」

「おっ！早くシャワー浴びてこないとな～」

シャルルに即されると、先程のことはなかったかのようにケロッとして皆と同じように家へと入っていった。

…

…

おっ！結構な量が出来てるじゃないか。美味しそうだな。

「よぉ、ウェンディ。ミラ達の手伝いか？」

「うん、そう…あ…」

おぉおぉ、手伝いとは良い子だ。てか固まっているが大丈夫か

「おぃ、ウェンぶぅ！？」

「ナナシ！！昨日も言ったでしょ！汚れた格好でリビングに近付くのは禁止よ！」

「み、ミラ。そ、そんな怒らなくても…大丈夫だってちょっと横切るだけだからさ」

ミラに叩かれた頬を抑えながらナナシが反論しようとしたが

「もう！とにかく一旦外に出なさい。いい？ちゃんと玄関から入ってくるのよ？」

そう言われながら外に出されたナナシは諦めずに「いや…このまま突っ切ったほうがはや「玄関よ、わかった?」…はい」と再びリビングを突っ切ろうとしたが、素敵な笑顔を浮かべているミラに即され、とぼとぼと玄関を目指し歩いていった。

なんでぃ、なんでぃ

いいじゃねぇか…少しぐらい汚れていても…気にしすぎなんだよ

「あ…来た来た。蛇口よぉーし、ホースよぉーし、うん、放水開始♪」

そうさ!大体ミラは考えすぎなんだよ…そんなに汚れてな

【ビシャー!】

「うおっ冷た!?あにすんだ!リサーナ!!」

あぁ、放水されてくる水のなんと冷たいことか。

そう、イキナリ、じゃじゃ馬姫が私にホースを向けて水を浴びせてきたのだ。私はMじゃありません!!

「ナナシ兄ちゃん泥だらけじゃない…バッチぃよ。

だから先に泥を落とそうね」

「だからってイキナリ水かけるのは酷いだろうが！」

「ビックリするかなって思って…とにかく浴室に行く前に少しでも汚れを落として上げて

って、ミラ姉に言われてるから、ドンドン行くよ～」

「…なんか冷たいし…子供みたいで虚しいな…それに我が家をミラに支配されてる気がする…」

俯きながら、心で泣いていたナナシにリサーナは

「今更、何言ってるの…昔から掃除とかミラ姉達がやってたんだよ。ナナシ兄ちゃんにこの家のことをとやかく言う権利は…たぶんないよ」

そう言われる始末であった。

「…う…確かに…しかし、今度からちゃんとミラ達もここに住むんだから家の所持者としてだな。もっと威厳を持ってだな」

「あっ…そのこと何だけど私も二階に住むことになってるからね」

「はぁ？聞いてないぞ？お前らの家はどうすんだ？」

てか服が水で重くなって来たな。

「エルフ兄ちゃんが一人で住むんひゃ！？」

あ？水でも掛かったのかバカな奴だ。よっと、そうかエルフマンがな。昨日会ったが立派に育ちやがって。

まぁ確かにアイツも年頃だ、一人の方が楽だわな。うわっ絞ったら水出て来やがる。って…当たり前か…

「な、なんでここで脱ぐのよ！？私がいるんだよ！」

「あ？……いや…お前…男の裸ぐらい…ナツやグレイで慣れてんだろうが…しかも上着だけだろ」

何言ってんだコイツ…

しかも手で隠しても、そんな広げてたら見えてるだろうが…

「い、いいから早く着てよ。セクハラだよ！」

うそだろ…これでセクハラなら昨日会ったグレイはどうなるんだよ…猥褻物陳列罪じゃないか…グレイ逮捕だな。

「へいへい、うぇ冷た…てか…お前ナツの家に住めよ」

「?…なんでナツが出てくるの?」

おぉ、とぼけやがって

「いやいやお前ら、17歳なんだから、さすがに付き合っているだろ。もう同棲していいんじゃね?」

「付き合ってもないよ!!!!」

「うわっ…イキナリ大きな声出すなよ。…ん?ナツと付き合ってない?お前ら別れたのか?」

「…ていうか…私…誰とも付き合ったことないんだけど…」

「そんなバカな!?ナツは馬鹿なのか!!こんな可愛い子をほおっておくなんて!」

「か、可愛い…本当に?私可愛い?」

「あぁ、当たり前だろうが、ミラの妹なんだぞ。可愛いくないはずがないに決まってんだろ。」

「…(むかっ)…私、ミラ姉のおまけじゃないもん」

「感謝しろよ、今度ナツに言っといてやぶ！？おい！顔に水を飛ばすな！」

「…ふん」

コイツは何で怒ってんだよ。あぁ…さてはナツと喧嘩しているな。

…うむ、ここは、ほおっておくのが一番だな。
勝手に入って荒らすと双方に良いことないからな。
とばっちりを受けるのはごめんだ。とにかく宥めなければ

「まぁ…そんなにふてくされるなや（落ち着けぇドードー、ドードー）」

そう言いながら抱き締めて

「きゃ！？」

頭を撫でる。おぉ柔らかい。

「…あぅ…」

うむ、もう怒ってないな。そして颯爽と去る。

ふっ…たぶん今の私は輝いているな。ふふふ。

「だ、抱き締められちゃった……は！？…ふ、服が、それに髪も…」

これでリサーナには強く出れるな。あっはっは、ふむ、次は難関の三人をどうするかだな。やはりプレゼント攻撃か

…しかし、買い物の後で金は残っているだろうか…一度、銀行寄ってみるか

「…ナナシ兄ちゃん…」

あ？…何だよ、礼はいらないぜ？

「髪と服が濡れたんだけど…」

「え？」

「私…着替え持ってきてないんだけど、どうしてくれるの？」

あぁ…そうだ、今の私…濡れ濡れのビチョビチョだった。そりゃ、濡れるわな。

「うむ、じゃあミラに取りに行ってもらう間、一緒に風呂入るか？暖まるし、胸も成長するかもしれんぞ。あっはっは」

私は手をワキワキさせながら言うが

「……」

リサーナの方はただ、私をジト目で見てくるだけであった。…何そのジト目…しかし、私は屈しない！

「…あ～そうだな。濡れていい女に見えるぞ。そのまんまでいいんじゃないのか？…私だったら襲っているぜ。何ならベットに行くか？」

「……」

「あ…うん…何なら私が取りにいってあげようか？お前の部屋に入るけどな、ぐへへ」

「……」

「言いすぎちゃいました♪」

「……」

ぐふぅ…もう限界だ。これでは飲み会で酔ったセクハラオヤジでは

ないか。

「ごめん、ごめんよ、調子に乗りすぎたよ…バスタオル取ってくるから待ってろ」

バスタオル美少女の完成だ。やったね。ファインプレーだ。

「……ナナシ兄ちゃんの服貸して」

えっ？

「あ？私の服？びしょ濡れだぞ？だから…」

「影の中から出せばいいんじゃないの？」

ちっ…

「じゃあバスタ「服貸して！」

…わぁったよ。たく…お前に合う服なんて持っていないぞ

…バスタオルの方がエロいのに…何かファインプレーした後にミスした感じだ。ちくそぅ」

グチグチ言いながらナナシは影の中に、ぐぷりと手を入れると漆黒のフード付きのロングコートを出し

「ほれ、少し大きいがこれでいいだろう。髪は自然に乾くだろ」

リサーナに投げ渡す。

「わわっ、いきなり投げないでよ」

そう言いながら受け取ったリサーナはコートを嬉しそうに抱きかかえる。

「♪」

おや、何でか知らないが、機嫌がよくなったな。そのコート、予備だから安物だぞ
まったくと言って、着心地良くないからな。

だから私としてはバスタオルをお勧めするぞ！

「ほら、早く家に入ろう。風邪引いちゃうよ」

「あぁ…って引っ張るなはっくしゅん」

あぁ、もうバスタオルは諦めよう。めんどくさくなってきた。寒くなってきたし…

「ほら、クシャミまで出てきた、早くお風呂入っておいでよ。はい、床が濡れるからスリッパ履いて。」

玄関に上がったリサーナは私にスリッパを勧めてくるが、めんどいだろ。それに家の中で履き物を履くのはイヤなんだよな。

「いらん、いらん、直ぐに乾くさ。ほんじゃな」

そう言ってナナシはスリッパも履かずに自室にある浴室へと向かった。床をびしょびしょにしながら…

「…ホント、ナナシ兄ちゃん適当よね。あぁ床が水だらけだ…早く着替えて拭かなきゃ。

（…なんかミラ姉の気持ち分かったかも…格好良いときや優しい時もあるけど、こんなズボラやえっちな時もある。

まぁ、殆どズボラなんだけど。ホントに子供みたいな人なんだから。

…でも、だからかな？何か私が傍にいてあげなきゃって思うんだよね。これって好きってことなのかな？それともただの…）」

他の女達同様に母性本能をくすぐられているリサーナであった。

経った数日で、いや昔からの蓄積かもしれないが、

ここまで女性を惹きつけるとは素晴らしい才能を持った男である。

一方、女を幸せにすることを目標としているダメ男は鼻歌を口ずさみながら浴室への扉を開けてる所であった。

「～♪～よっと」

【がらり】

「な！？」

「おや、エルザじゃないか。何だ、お前も入っていたのか。」

ふむ、素晴らしい肉体の持ち主だ。眼福、眼福

と驚き固まり立っているエルザを無視して、ナナシは広い浴室にどかどかと入ってくる。

「ば、馬鹿者！は、早く出ていけ！」

「出ていけだと！？馬鹿やろう！！そんな勿体無いことできるか！模擬戦の続きやるぞ！始め！！！」

「きゃっ！？…あ…やめ…ん…ぁ…んぁ」

「こっちの近接戦は得意なんだ！！」

…まだまだ朝だ。どうやら変態の1日は長くなりそうである。

2．7　ズボラ（後書き）

今回も日常編の実験です。短くないのに内容が薄かったですね。次回か次々回でこの1日は終わる予定です。

さて、初っ端から話は変わりますが

補足説明をしたいと思います。

第一章で様々なことを語って真面目だったナナシは稀な時だと考えてください。

第一章はスカスカの話でしたから

普段のナナシはこんな感じでダメ男です。

幼い頃、ミラが【弱くて、えっちで、お調子者】と発言している通りの男なのです。

ただ、時々、人が変わったように語ったり真面目な時もあるわけです。

不思議な奴なんですよ。

だから

母性本能をくすぐられたり、時々の普段とは違う様子のギャップに女は惹かれていくと考えていただければ。

プラス、少なからずですが、なで癖と抱き締め癖、エロ全開も要因の一つと。

これで女は惚れていくと言うご都合主義でありますので、何とぞ宜しくお願いします。

あとエロは１５Ｒの基準が分からないので小学生レベルに抑えてあります。
ナナシはもっと凄いことをしております。まぁ普通の１９歳の性欲なら当たり前のことを…ですがね。

今回は何だか、作者の表現力が足りなさそうに感じたので、後書きでいちよう補足として説明してみました。

ちなみに
ルーシィはハーレム入りしません。ナツと仲良くやるでしょう。

女性のツッコミ役（ルーシィ）は貴重な存在ですからね

作者の力量上、惚れさせたらツッコミが正常に機能しなくなる恐れがあるので、今の所、ハーレムから除外です。

ルーシィファンの皆様、申し訳ございません。

まぁ、予定ですので先のことはわかりませんが…

では、また次回お会いしましょう。

あ…大鷲は風属性に決めました。

アドバイスありがとうございました。

今後も募集中です。

2.8 むぅ

朝、とある家のリビングにあるオープンキッチンには二人の人間と一匹の猫が立って何やら作業をしていた。

「ごめんね。手伝わせちゃって」

「いえ、私もご馳走になりましたから。是非、手伝わせてください」

二人は話す間にもカチャカチャと食器が奏でる音を出しながら大量の泡によって食器を洗っていた。

「ふふっ、ありがとう…それにしてもナナシとエルザの二人は遅いわね…」

ミラが隣で一緒に皿を洗っているウェンディと会話していた

その時、ガチャと勢い良くリビングの扉が開くと

「ご飯〜♪ご飯〜♪」

ご機嫌な様子のナナシがタオルを首に掛けたまま、ラフな格好で入ってきた。

「あら、ようやく来たの。お風呂長すぎよ、もうご飯食べちゃったんだから。今日の朝ご飯はお預けよ」

「えぇ!?…ま、マジだ…パンの欠片すらない…天(ミラ)は私を見放したのか…うぅっ…」

ミラに指を向けられ、めっ、とされながら言われたナナシは、何も載ってないテーブルを見た後、涙を流しながら膝から崩れ落ちた。

それを食器を拭きながら見ていたシャルルが

「アンタ、オーバー過ぎよ」

呆れた顔で言ったとか。

…

…

まさか…まさか朝ご飯が食べられないとは…今日一番の私の失態だ!!

「嘘よ、あっちのテーブルにあるから…」

早朝からのシャルル先生による厳しい訓練、エルザとの激しい模擬戦を何度も、そして最後に再びエルザと風呂での数回にも及ぶ模擬

戦…

「…ナレス聞いてないですね…」

「また…自分の世界に入ったようね…ちょっと離れるから、食器お願いね」

「は、はい」

いや…本番戦だったな。

これらをしてきたのだ。腹が減らずして何が減ると言うのだ！

くぅ、やはり風呂での戦いは短めにしておくんだった。

「ほら、こっちよ。」

いや…しかし、短めにしていたならば、今の充実感は得られていなかったはずだ！

あのエルザのやわやわの、ふわふわできつきつの…

「何？ナナシったら、また変なこと考えてんの？」

「ナナシ兄ちゃん……またえっちなこと考えているのな？」

「この顔は確実にそうね。てかエルザが来ないね……まさか……」

食事が先か…えっちが先か…

「はい、パンよ。あ~んして♪」

「あー、もぐもぐ」

まさに卵かニワトリのどちらが先かと、同じように輪廻の中をグルグルしているな。むぅ…しかし、やはりえっちが先か…

「ふふっ、可愛い♪」

あの快感に勝るモノなど無いに等しいからな。いやしかし、食事をしないと体力が…

「あっ…私もやりたいです！」

「ミラ姉！私もやる！」

「何か久しぶりに見る光景ね…私もしてあげようかな」

「…ホント、コイツは子供ね（ここにいたらコイツはもっとダメになるんじゃないかしら。少し甘やかしすぎのような…）」

むぅ…だが一人の男としてだな。やはり食事よりも…いや…ここは発想の転換が必要だ。

「指まで食べられないように気を付けてね」

「は、はい！」

…そうだ！ここは食事をしながらえっちと言うサンドウィッチを開発した人並みの荒業をだな…

「は、はいナレス、あ、あ～んして」

「あー、もぐもぐ」

「わぁ、ホントに食べた！」

そんな変態なことを考えながら、鳥の餌付けのように、ミラ達に朝ご飯を食べさせてもらうナナシであった。

…

あれから数分後

…

「はい、ナナシ兄ちゃん。あ～んして」

「あー、はっ！？…私はもぐもぐ…ひぃったいひゃにお！（一体何

を！）」

「ナレス、全部食べてから喋らないとダメだよ。」

「あぁ…すまんな…ってご飯あるじゃないか！？ミラ！嘘ついたな！」

「さて…残りの食器を洗おうかな。ウェンディ、また手伝ってくれる？」

「あ、はい。勿論ですよ♪」

私がミラに聞いたのに

「…また無視か…」

ウェンディとミラの二人はキッチンへと行ってしまった。まったくもって虚しいものであるな。

しかし、結局、どっち付かずで終わってしまったな。やはり輪廻の中をぐるぐる回る運命なのか…

おっと…それより今は無視されたことの方が重要だ！何で私は何時も何時も無視されるんだ。私だって頑張っているんだぞ

大体、この家の主は私であってだな

「何だ…まだご飯は残っているようだな。私も頂くとしよう」

ナナシが再び考えに入り込もうとした時、リビングにエルザが入ってきた。その姿を見たナナシは

「おっ！もう立っても大丈夫なのか？さっきまで部屋で腰砕ぶぅ！？」

「だ、黙っていろ！ほらっ今日は買い物に行くのだろう、早く食べないか！！」

再び、頬を叩かれたナナシであった。

…

…

「今日の予定はしっかり決めたのか？」

正面に座ったエルザが朝食を食べながら私に尋ねてくる。

現在、私とエルザは何時もの椅子に座るタイプのテーブルではなく、床にしかれたカーペットの上に、座るタイプのテーブルで食事を取

っている。

ちなみに、ミラとウェンディ、シャルルは食器の後片付けをしている。

一方、カナと私のコートを着ているリサーナはソファに座り何やら会話をしているようだ。てかリサーナ…服を取りに帰れ。それは私の服だぞ。

「聞いているのか？」

おおっと、また理不尽な暴力を食らうところだった。

「聞いてるさ。今日はだな、昼までに服とかを注文して、マスターと会ったらそのままギルドで昼食の予定だな…そして…」

私が昨日の訓練中に走りながら考えた最高の計画を鼻高々に説明してやると

「…はぁ…」と溜め息を吐かれた…

何その…あぁコイツ、やっぱりダメだなって顔…腹が立つぞ…さっきまではあんなに可愛かったのに…

「マスターは今、ギルドを離れているから会うことはできないぞ」

「はあ!?聞いてないぞ!!予定が早々にして崩れちまったじゃねぇか。何でもっと早く教えてくれなかったんだ!!」

「…ちゃんと私は一昨日の夕食中に言ったぞ。」

聞いてないぞ。確実にそんな話は聞いておらん!はったりだ!…た、たぶん…

「…う、うそだ…カナ!聞いてないよな?」

「私もちゃんと聞いていたわよ」

「……そんなバカな」

「大体、マスターがマグノリアにいるなら初日から会って色々と話をしていたはずよ。」

ソファに座ったままカナは話し、隣にいるリサーナもうんうんと頷いていた…

「カナの言う通りだ。元々マスターがナナシに術式がかけられていることを教えてくれていたんだ。

それがなかったら、今頃どうなっていたか…だから最初にマスターに会うのは当たり前のことなんだぞ」

うっ……カナとエルザの言うとおりじゃないか…

そうだ、そうだよな。私を私として戻してくれたのはマスターが知らせてくれたからじゃないか…

しかも普通は記憶が戻ったら、すぐにマスターに報告しに行かなきゃいけないはずじゃないか

…それもしないで、のうのうとミラ達とにゃんにゃんしたり、訓練して汗水流していたなんて…

私よ…バカすぎるぞ…

何が幸せにしてやりたいだ。社会の礼儀も知らない奴が人を幸せにできようか！

しかもだ…私は生きていたのだから、クライアントの評議院にも行って最後の2ヶ月分の情報を提出しないと…それに最終報告書も書かないといけないじゃないか…

いやいやまだやることはいっぱいあるぞ

評議院の仕事関係なしに今まで集めた情報が三年も古くなっているんだ。集め直さないといけないじゃないか

ぐおぉ、ホントにやることでいっぱいじゃないか。幸せボケをして

いたんじゃないのか、このバカ私！

早速考えねば…

…

…

…うむ、この際、三年分の情報更新は評議院の機密文書をコピーするか

そっちの方が走り回るより早く終わりそうだ

てか確実に早く終わるな。多少の情報の誤差はあると思うが確実だな。

また忍び込ませてもらおう。

あそこは警備がザルだからな。侵入して文書を婆さんから貰ったサングラスにコピーするぐらい楽勝だ。

ということは

「…むぅ…評議院に赴く必要があるな…」

私が呟くと何時の間にか横に座って私に寄りかかっていたミラが

「あら、ちょうどマスターも評議院に出頭してるのよ。ちょうどよかったじゃない」

そう言ってくるが、マスターが評議院にいるだと…あそこはマスターが好んで行く場所じゃないからな。つまりは

「…相変わらずのようだな。フェアリーテイルは…」

「ふふっ、皆元気なだけよ」

顔を上げたミラは笑顔でそう言うが

「いや、やりすぎにも程がある！今日、説教をしてやらねばならん。」

食後のコーヒーを飲んでいたエルザが怒気を荒げていた。

…お前も結構やりすぎているんだろうがな。とツッコミたいが言ったら叩かれそうだ。

って!?エルザが食事を終えてるだと!?それに私も完食しているだと!?

どんだけ考えていたんだ

くそぅ、また集中し過ぎたようだな。食べた感じがしないぞ!勿体無いことをしたものだ!…おっとそれより話しは途中だったな。

「まぁ、アイツらも自分の信じた道を進んでんだ。そんなに怒らなくても大丈夫だろ。それより私の問題の方が重要だ。急いで報告書を書いて評議院に行かないとな。今日いや明日行くかな」

そう話していると、ミラとは反対側にリサーナが座ってきて「服はどうするの?私が着てるコートは渡さないよ」と言いやがった。

バカやろう、もう上着はそれしかないんだよ!

「あ?それしか外用ないんだから早く脱げ!」

もう中に着ている服も乾いているだろう。無理矢理脱がせても問題はあるまい

「あ、だ、ダメ!」

嫌がるリサーナを無理矢理、抱き寄せると瞬時にボタンを外し

「あ、やだ!」

…奪いさ…うむ…まさか…そのまま着用とな…これは…コイツ着や

せするタイプか。よく実っている。
やはり女の成長はあなどれん。

「あぅ」

「ふむ、それになかなか可愛らしい下着じゃふごっ！？」

「ナナシ？リサーナにも手を出す気なの？」

「ち、ち、違！？」

「ギルドに行く前に説教が必要な奴がいたようだな」

「あぅ（ナナシ兄ちゃんのえっち）」

「話しを聞いて…お願い…知らなかったんだ…だかぶはぁ！？」

こうして何時も通り、ナナシの朝は終了を迎えた。

…　…　…　…　…

……

……

……

……

現在は太陽が燦々と輝く時間が終わり、夕陽となっている時間である。

そんな時間帯、マグノリアのとある洋服店では、楽しそうに喋っているナナシと店の主らしき男がいた。

ナナシは真新しい卸し立ての漆黒のスーツを着ている。どうやら話の方は終盤に達しているようだ。

「ホントにこのスーツ、ピッタリだよな、すげぇぜ、おっちゃん。マジで仕事早いな。さすがは職人だよ。それに女の子用の方もありがとよ」

「そうだろ、そうだろ。おめぇが生きて帰ってきやがったからな。今日は店のもん総出で作ってやったんだ。感謝しろよ」

「あぁ、あんがとよ。んじゃ、連れが待ってるんで今日は帰るわ。今後も世話になるからよろしくな。」

そう言い、店主と握手するとナナシは手を振りながら店を後にした。

途中、別の店に寄り同じく店主達と笑いながら話すと超特急で作って貰っていたネクタイピンその他を受け取ると店を去った。

次にまた別の店、今度は家具屋のようだ。そこに入る。

そして、とある家具の前でうぅ～んと必死に考え、頭を悩ましているウェンディとシャルルの二人に近づいた。

「よぉ、決まったか？」

「あっナレス…わぁ！スーツ姿って新鮮だね（か、格好いい！）」

「ホントね、…何かできる奴に見えるわ」

「こっちじゃこれが当たり前だったんだがな。てか私は仕事はできる奴だ！失礼な！おっと、それよりウェンディ達の新しい服も出来てたから貰ってきたぞ」

「ホントに！？凄く早いね。まだ半日しか立ってないよ？」

「ちょっと早すぎじゃない？」

「頑張って作ってくれたんだとさ。もう、あの店は閉まる時間だから今度服を着て挨拶行こうな。」

「うん♪」「えぇ♪」

「おぉ、いい笑顔だ。」

そう言いながら、袋から出した猫のギルドマークが入った銀色のネクタイピンを着ける。

そして、同じく黒縁で銀色のマークが入った円筒形の髪留めを着けようとしたところ

「あっ…私が着けて上げるね。ほら、そこの椅子に座って座って」

「コレ売り物だぞ？いいのか？」

「それは私達が買うことにしてるから大丈夫よ」

シャルルにそう言われると、それなら安心だなと頷き、どかりと椅子に座る。

そして背後で髪を整えてくれるウェンディ達と再び話をし出した。

「後、どれぐらい掛かりそうだ？」

「ごめんね、私達の方はもう少し掛かりそうなの」

「いいさ、待っててやるよ。今頃、帰ってきたミラ達が夕飯作り始めてると思うから、まだ時間はあるさ。

それと、家具は部屋を彩る大切なパートナーだからな、後悔しない

ようにいっぱい悩んで考えな。」

「うん♪一生懸命、考えて選ぶね……はい、出来たよ」

「あぁ、ありがとよ。んじゃ私は外で待ってるからな」

ナナシは立ち上がりウェンディとシャルルの頭を撫でると外に出て行った。

外に出たナナシは壁に寄りかかると影の中からタバコを取り出し、吸い始める。

口から吹き出した紫煙がゆっくりとオレンジ色の空に上がり、すぅと消えていった。

その光景を見ながらナナシは考える。

……

……

ふむ、ミラ達による折檻から数時間が経った。既に時刻は夕方だな。

あれからミラ達はギルドに出掛けて私とウェンディ・シャルルは買い物に、とマグノリアの街に出ている。

途中で何人も顔見知りに会ったから声を掛けてやったら皆驚きやがるからな。

まったく失礼な奴らだ。ゆ、幽霊が出た！とか叫ぶ奴らもいたからな。

幽霊…ってひどっ

私は死んでいないっつうの。しかも体とか、ちゃんと成長してんだろうが…

昼は服とかの注文が終わった後、ギルドに顔を見せに行ってウェンディ達の紹介もしたからな。どんちゃん騒ぎで楽しかったぜ。まぁ、途中で買い物のため抜け出してきたが…。

ちなみに、コートはリサーナが手放なさなかったから家に付いていって、洗濯する！とかほざくリサーナから、ぶんどった。洗濯とか待ってたら買い物できねぇよ。

その後、コートを着てマグノリアに出たんだが、さすが安物。今着ているスーツが何と着心地の良いことか。やはり職人が作る服は一味違うね。

ふむ、しかし、当分コートの方は仕事以外で着なさそうだから新調しないでいいだろ。ん？何時も仕事の時はスーツの上からコートを着るのか？だって？

コートを着るのは隠密とかの仕事だけだな。フード付きコートってのは人相がバレないからな。

隠密には持って来いなんだ。意外に重宝するんだよな。だから正体を隠したい時に着るのさ。

それにしても、やはり今回の買い物は金がかかったな。まぁ当たり前か。

色々買ったし、ミラ達にプレゼントも買ったからな。もう財布の中はかなり軽くなっているぞ。

…事前にウェンディ達にお金渡していてよかった…渡してなかったら、今頃、家具は買えてないからな。…私の無駄遣いで…

しかし金が銀行に残っていて本当によかった。まぁ、銀行に私の顔見知りがいなかったらアウトだったんだがな…

もし誰も知り合いがいなかったら、永久凍結されるところだった。死亡認定されてたからな。

危ない危ない、私の今までに貯めた金と昔買った宝石が泡と消える所だった。

感謝せねばな

ちなみに評議院には明後日行くことに決めた。マスターもまだ滞在しているようだし大丈夫だろう。ちゃんと会って礼とギルド諸々のことを言わないとな。

今日はもう間に合わないし、一度情報を整理してみると明後日まで

に報告書が書ければいいかなと言うレベルだったからな。

今日の夜も訓練は無しにして書かねばならん。しかも明日はリサーナとウェンディ達の引っ越しを手伝わないといけないし…予定が詰まってるなぁ。

はぁ…大変だが、頑張ろう…報告書の方はヤバいがな。色々と抜け落ちているんだよな、…まぁしょうがないんだよ。

二年ものうのうと暮らしていたんだから細かい情報は忘れても無理はない。

何とかごまかして…いや…正直に書いておけばいいか。変なことを書いておくと後でボロが出そうだ。

…

…

しかし、久しぶりのマグノリアは良いもんだ。店はあんまり変わってないし、活気に溢れている。皆、笑顔だ。

ギルドもメンバーが増えていたし、皆、三年間で変わったり変わらなかったりしてるしな。やはり時間は大切だな。これから2年分を取り戻せるように楽しんで生きないとな。

「ナレス、全部買ったよ」

おっとウチの姫さんが来たようだ。

「へいへい、ちゃんとお金は払ったか？」

「私、そこまで子供じゃないよ！（また子供扱い…バカナレス！）」

「あ～すまん、すまん」

ナナシは適当に謝りながら、店に入りウェンディ達が買った家具を影の中に収容していく。

影魔法は便利だからいいよな。魔導士辞めて運び屋でも食っていけるぞ。

よし、買い物終了、帰るとするか。金も残ったし、万々歳だ。

「ナレス、ミラさん達にお土産買って帰ろうよ」

え？

「金が「あら、いいわね。確かあそこに高級ケーキ屋があったはずよ」…もう閉まってんじゃね？」

「あっ！？あそこだね。まだ開いてるよ。買ってきたらミラさん達喜ぶよね♪」

「えぇ、きっと喜んでくれるわよ」

…言えない、きゃっきゃっと嬉しそうに話してる二人に金を残しておきたいなんて…ここで言ったら男が廃れるもんよ！私はダメ男じゃないんだぜ！

「よ、よぉーし、い、いっぱい買ってミラ達を喜ばせようぜ！！！」

「わぁ、ナレス太っ腹だね♪」

「…（そう言えば、お金あるのかしら）」

「ウェンディ隊員！こ、この財布の有り金全部でケーキを買ってきなさい！！！」

「了解しました！ナレス隊長！」

「…（…ヤケクソになってわね）」

さようなら、私のお金…

その後、嬉しそうにワニ製の黒皮縦長財布を持ってケーキ屋まで、とことこと歩くウェンディとシャルルをゆっくりと追いかけるナナシの姿があったそうな。

…

…

まぁ、いっか…金なんか働けば手に入るからな。幸せを作るより簡単なことだ。

それに私が働いて得た金で大切な奴らを幸せな気持ちにできるのなら安いもんだ。

「ナレス！早く！」

「おいおい、そんなに、はしゃいでると…」

「きゃっ！？」

「ほ～ら、また転けた。危なっかしいったら、ありゃしねぇよ。」

「うぅ～」

ナナシは口に銜えていたタバコを吹かしながら、ウェンディに駆け寄り手を差し出す。

「ほれ、大丈夫か？」

2．8　むぅ（後書き）

はい、終わりませんでした。

次回は日常編プラス評議院での話となる予定です。

その次はルーシィ加入の話かな？

ちょいと、また補足です。毎度すみません。

ナナシはバカではありません。ダメ男なだけです。

ですから一様、昔から仕事はできてました。二つ名を持っていますから、周りに認められるぐらいの力量はあったと考えていただければ…

以上です。

まぁ、今回、実験と称して話を展開しているわけですが

批判やダメ出しがないようでしたら、

今後はこのような形で文章は書いていき、原作をちょいちょい入れると言う形にすると思います。

ちなみに原作はイレギュラーであるナナシやウェンディ達がいるの

で、話が変わる部分もあるし、変わらない部分もあると思います。

まぁ、ナナシ視点と第三者視点でしかお送りしませんが…

ではまた次回お会いしましょう。

ちなみに色々募集中です。

ご意見・ご感想お待ちしております。

2．9　ニヤリ…（前書き）

今回で日常編の実験は終了です。

ちなみに日常編＋αです。

では、どうぞ

2．9　ニヤリ…

日が沈み月が空を支配している時間、多くの家では夕食中もしくは夕食後であろう。

そんな時間、とある家では歓喜の声が上がっていた。

「あそこの店のケーキを買ってきただと!?ち、チーズケーキはあるのだろうな!?」

食後の紅茶を飲んでいたナナシにエルザが立ち上がり詰め寄る。

「大丈夫だって、ウェンディとシャルルがきちんと買ってくれたさ。だから、まずは落ち着け」

「…こうしてはいておれん。ミラ、私も手伝おう!」

エルザはナナシの言葉を聞くやいなや、すぐにキッチンで食後のデザートの準備をしているミラ、ウェンディ、シャルルの元に素早く移動していった。

…

…

はぁ…まったく…ケーキのことになったら、すぐコレだ。まぁ、あの店は貴族御用達の高級店だからな。普段は食べられない味が味わえるだろう。

「…ワンホールじゃなかったの？」

「あ？…当たり前だろ？単品さ。一人２つずつしか買えなかったから早い者勝ちだ。急いで行かないと自分の好きなモノがなくなるぞ」

ニヤリと笑ってみせる。すると斜め横に座っていたリサーナは

「やばし！？」

顔色を変えながら、そう言うと、これまた素早くキッチンまで移動していった。

まさに今の我が家はケーキに攻め落とされているな。…てかリサーナ…私の真似をするな。

「エルザ、四個もダメだよ！あっミラ姉、私コレがいい！」

「大丈夫だ、問題ない」

「え、えっとエルザさん、一人で二つまでですよ？」

「二人とも、ウェンディ達が買ってきてくれたのよ、先にこの子達

に選ぶ権利があるわ」

「ミラ…本来、ケーキは１４個ないといけないはずだ、それなのに今は１２個…コレはどういうことだ！」

「…さ、ウェンディ達も選んでいいわ」

「【も】って言った!?ミラ姉、今【も】って言った、自分だけズルいよ!」

「あら、そんなこと言ってないけど…リサーナの聞き間違いじゃない？」

まさに、我が家の女共の頭の中にはケーキのことで頭がいっぱいのようだ。

ん?

「カナ、お前は選びに行かないでいいのか?」

私は何時までも椅子に座り、酒を豪快に飲んでいるカナに聞く

「あたしは最後に残ったヤツでいいよ。どうせ、どれを選んでも美味しいと思うしね」

確かに…貴族御用達なんだ。それはさぞ、美味しかろう。ふむ、私もアノ闘争に入るつもりだったが余り物で構わないか。

「それにしても、これからの生活は賑やかになりそうだね。」

「まぁ…こんだけの人間が住めば自ずと賑やかになるさ。」

女6に対して男1、やったね、ハーレムだ！まだ結婚もしてないと言うのに何たる幸せか！？

…あっ……そういや忘れていた。

…コイツには重要なことを聞かないといけなかったんだ。これの返答しだいで私の生き道は変わるぐらいの…

「…お前、今回の同棲…親父さんから許可はもらったんだろうな？」

絶対、もらってるよな

「お父さんに許可？もらってないわよ？」

「はぁ！？おまっ、ちょっ！？」

「そんなに慌てることないじゃない。私も何時までも子供じゃないのよ。

それにお父さんは今、長期任務に行っているから許可なんて取れな

いし、例え居たとしても許可してくれてるわ。ちゃんと私の考えを尊重してくれるはずよ」

カナはそう言うが…

「…いや…確かにそうなんだが、あの人はお前が考えている以上に厄介な人なんだぞ。……クエストから帰ってきたら私はバラバラにされる…」

「頑張れナナシ♪」

「ガキ扱いするんじゃねぇ、はぁ…ホントに厄介なことになったな。…カナ、私にも酒くれ。自棄酒だこの野郎!!」

もう忘れてやる!これは逃げじゃないんだ。どうせクエストからあの人が帰ってきたら、

熾烈な戦いが待っているのだから今だけは自暴自棄になってもよかろう!!!

私がカナから酒を奪い取った時

「ナナシはお酒飲んだらダメ、今からあっちのテーブルでお仕事なんだから」

何時の間にか近くにいたミラに酒をひょいと取られた…返してくれ。今は飲まずにはいられないのだよ!

「…いや…酒飲みながらでも仕事はできるからよ。てか今から?…私もケーキ食べたいんだけど」

「はいはい、ナナシ兄ちゃんはこっちでお仕事頑張ろう」

「あぁ、そうだな。ナナシはケーキを食べなくても問題はないだろう」

…どうやらケーキは女達のモノらしい…

これが家の主、そしてケーキを買う金を提供した者に対する行いだろうか!?

「ちょっ待てよ!もう我慢の限界だ、いいか『何?』ひっ!?…は、はい、私はこちらで仕事をしておきますね。

あっ姫様方…そちらはプレゼントとして買ってきましたのでどうぞ。」

「…アンタ…情け無いわよ。」

うむ、仕事しよう、仕事

…

…

…

…

…女達がきゃっきゃっ騒ぐのを聞きながら報告書を書い「ナレス」ていたが…やはり…どこの誰が私に暗示を掛けたのか「ナレス！」手掛かりすら記憶には残ってないようだな。

「ナレス！！」

「うぉ…何だよ、耳元で大きな声を出すなよ。そんな声出さなくても聞こえてるってぇの」

「…（むっ）」

「で何だよ？今少し考え事してたんだが」

私が聞くと何やらご立腹状態のウェンディは…てか何でそんなに、ぷんすかしてんだ…

「…私のケーキ分けてあげようかな…って思って持ってきたんだけど…忙しいようだからいらないよね……じゃあね」

と皿に載せたケーキを持ち直しながら、ほざきやがった。何て！何て！優しい子だ！！

「ごめんよ！」

そう言いながら、

「きゃ！？」

立ち上がったウェンディを抱き寄せ、あぐらを掻いていた足と太もも上に乗せる。

「どうせだ、一緒に食べような。」

喋りながら、頭を優しく撫でてやる。ホントにこの子は優しい子だ。他の女は私に一欠片のスポンジでさえくれなかったのに…

「…あぅ……じ、じゃあ、私が食べさせてあげるね」

真っ赤にした顔をあげ、上目遣いで見てくる……ふむ、可愛らしい。襲ってしまうかもしれん…

「ナレス、あ、あ～ん」

…何だ、それは…

「……あー、もぐもぐ」

「♪」

…

…

…

ぐはぁ！？ここは天国か！？

何だ、いつそんな芸当を覚えてきたんだ！この子の将来が恐ろしくなってきたぞ

…それになんて可愛いんだ、ウチの娘は誰にも渡さないからな！

「…あ…そ、そんなに抱き締めたらケーキ食べられないよ…ぁ…ナレス…ん…そんなとこ触ったら…ん…ぁ…やぁ」

天国だ…やわやわのふわふわである！

それから変態がウェンディを離したのは数分後であった。

…

…

…

…

あれからウェンディと一緒にケーキを食べ終わった後、そのまま胸元に顔を寄せ抱きついてくるウェンディの頭を片手で撫でながら、ペンを動かしていた。

どうやら向こうのテーブルでは私が皆に買ってきたプレゼントを開けているようだ。

「何を買ってきたの？」

目をとろんとさせ、少し顔を赤くしたままのウェンディが聞いてくるが
こういうものは自分で見るからこそ楽しいものだ。

「自分で見てきた方がいいぜ、ほら、行ってきな」と言ったが

「…離れたくない…」

…とまぁ、離れないウェンディであったのだ。何かミラに似ているぞコイツも寂しがり屋だからな。全く持っ『ナナシ！！』

「きゃっ！」

「…お前ら、落ち着けよ。」

そう、いきなり背後からミラが左腕にエルザ、右腕にカナが抱きついてきた。ウェンディがビクついているじゃないか

それにしても、実に体中がやわやわで最高だ。しかし、ここまで突発的にされるほどのプレゼントは買っていないのだが…

「コレ、お揃いの指輪なのよね♪」

首に腕を回してきたミラが嬉しそうに右手の薬指につけた銀色のシ

ンプルな指輪を見せてきた。

「あぁ、ちゃんと皆の分があるだろう？てか事前にサイズ聞いていたんだから、何買ってきたか分かっていただろ」

そうなのだ。私がミラ達のご機嫌取りプラス権力を取り戻すためにプレゼントとして全員、お揃いの型の指輪を買ったのだよ。

うむ、どうやら作戦は成功のようだ！このまま、夜だけでなく朝と昼の権力も取り戻してくれよう！

…しかし、ここまで喜ぶとは思わなかったな。女心はわからんものだ

「ナナシが形あるものをくれるのは初めてだからな。大事にするぞ♪」

「…まぁ、シンプルすぎるけどね。でもナナシらしいね♪」

エルザとカナも喜んでくれている。あれ？プレゼントしたことなかったっけ？

「ナナシ兄ちゃん、私のもありがとね♪ほら、ウェンディのもあるよ」

「わぁ！…あ…でもこんな高価なモノ、ホントにいいの？」

右の小指に同じ型の指輪を付け嬉しそうにしていたリサーナが、私とウェンディにそれぞれの指輪を手渡す。

が、ウェンディは躊躇して指輪を付けられないようだ。

「大丈夫だって、そんなに高いものじゃないし、これは家族の証なんだ。
ウェンディもこの家に住むんだから私としては付けて欲しいぞ」と言うと

「わかった♪ありがとうナレス♪」

すぐに指輪を付けた。実に嬉しそうだ。プレゼントしたかいがあったな。

ちなみに私はカナに付けともらった。この体勢はじゃ動けないからな

「あぁ、いいさ。あっ…そうだ、シャルルは自分一人で付けられたか？何なら私が付けてやろうか」

そう、シャルルには指輪は付けられないから最高品質のリボンをプレゼントだ。

「い、いいわよ。自分で付けたから。で、でもありがとう…」

そっぽ向いて言ってるため、顔は見えないが真新しいリボンを付けた尻尾が左右にブンブン揺れているから喜んでいると考えていいだろう。素直じゃない奴め

『♪』

ふむ、皆に喜んでもらえて何よりだ。しかし、コレほどとは思わなかったから、ホントに思わぬ収穫だな。

、プレゼント攻撃はそう連発できないからな。成功してよかった。これで私に権力が戻ってきたと考えていいだろう。

では、権力発動！！

「皆、家族だからな、だから家長である私の言うことはちゃんと聞くように。…ふむ、今日は皆で飲むぞ！酒を持って来い！！」

女どもよ！我に従え！！仕事は明日でいいんじゃボケ！！！

「調子に乗らないの。仕事があるでしょ。私達はこっちで飲むから、ナナシは向こうのテーブルでやってね♪」

え？

「ほら、早く移動しないか。ふむ…私はつまみでも作ろう」

あれ？

「ウェンディ、シャルルはジュースでいいよね。ほら、ナナシ兄ちゃん邪魔だよ」

…ちょっと

「あ、はい。エルザさん、私も手伝います！」

「むっ、すまないな」

…私の権力は？

「はいはい、どきな。酒で書類を汚すことになるよ」

…ホントに女心はわからないぞ

それに私が得た権力が通じないだと！？

くそぅ！こんな使えない権力じゃなくて権利が欲しいぞ！誰か、保障してくれ、私が家長として動ける権利を！！

「調子に乗るからよ。アンタは何時も一言多いのよ、少しは自重しなさい」

…ふっ

「…私…あっちで仕事してくる…」

その後、楽しい、楽しい飲み会があったそうな。

…

…

…

…

…

…

…

多くの雲によって太陽が地表を照らす光を遮ってくれている、とある日。

「…マスターと会うのは明日か…」

とある街のオープンカフェには、漆黒のスーツを着た白髪の男がいた。

男は紅茶を飲みながら、行きゆく人々を見ていた。そんな男の右手の薬指には銀色の指輪がしてある。

男がいる場所はガヤガヤと多くの者で賑わいを見せる大通りである。様々な店が立ち並び、様々な人種がいるようだ。それらを何やら真剣な顔で見ていた男は

「さて…情報更新をせねばな」

そう呟くと勘定をテーブルの上に置き、火を付けたタバコを口に銜え、大通りを歩き始めた。

が

すぐに大通りの横に繋がっている細い路地の中に入っていく。

そして暗い路地裏に出ると

「評議院でな」

ニヤリと頬を上げながら呟くと暗闇の中に、すぅと消えてしまった。

男は姿を消したが、依然として街は賑わいを見せている。

…まるで始めから男は居なかったかのように…

2．9　ニヤリ…（後書き）

はい、実験終了です。

日常編はいかがでしたでしょうか

ダメ出しがないようでしたら、このまま原作と混ぜ入れていきます。

色々と募集しております。

ではまた次回にお会いしましょう

2.10 猫

とある部屋にて。

高級感あふれる調度品や家具などが設置されている部屋の中では複数人による話し合いが行われていた。

「マスターマカロフは我々を馬鹿にしているのか！？諮問中に居眠りなど…これでは明日の諮問会でも同じことをするぞ！」

一人の老人がそう叫び、多くの書類が積み重なった机をドンっと拳で叩く。

それを境に椅子に座って書類を見ていた者達が喋り出す。

「フェアリーテイルは問題が多すぎる…」

「先代からの頭痛のタネだ。そろそろ解散させる必要があるやもしれん」

「あら、お年寄りなんだからしょうがないのじゃなくて？」

「ウルティアよ、例え年寄りと言えど聖十大魔道のマカロフ・ドレアーじゃぞ。居眠りなどありえん行動だ」

４人の男女が話すと一人の老人が立ち上がり皆を見渡して

「あやつは我々、評議員を舐めているのだ！即刻、聖十大魔道の資格を取り上げるべきだ！」

そう声を荒げて言うが

「議長が席を外している今、そんな話を口にするべきではないだろう。」

青髪の若い男に口を出されていた。

「ぐっ…だったら今すぐ、フェアリーテイルは解散させるべきだ！」

と言い直した老人は

「それこそ性急すぎじゃと思うがの。暫く様子を見るということでよいじゃろ」

他の小柄な老人にも口を出されていた。

「くっ…」

渋々、席に座った老人を見ていた青髪の男は話し出す。

「それよりも、三年前に評議院が行った闇勢力調査の生存者が帰ってきたそうだが？」

「…三年前とか随分前の話ね…」

「正確には二年間ほど行方不明だったらしいがな。死亡認定もされていたようだ」

そんなことを男と女が話している間

「あぁ、今から話す予定だった。書類をこちらに持ってきてくれ」

老人が言うとともにパンパンと手を叩くと、一つの扉から、カエルのような顔をしている者が複数人現れ、全員に書類を渡しまた扉の外に戻っていった。

渡された書類を黙々と読んでいた評議員達だったが、途中でまたもや一人の老人が声を荒げた。

「またフェアリーテイルの者ではないか!?しかもコイツは!!!」

「だが、コヤツは優秀な魔導士だ。フェアリーテイルを解散させたら評議院直属の魔法騎士団・ルーンナイトに入るように強制する必要があるぐらいのな。…小奴が闇に落ちたら大変なことになるからの…」

「影法師……生きておったのか。どうせなら死んでくれていればよかったものを…解散させたら強制入団もしくは正規ギルドに加入させなければ…」

「うむ、各自、警戒を怠るな。どこにコヤツの耳があるか、わから

ないからな。」

「影があるところには、いると思ったほうがよいの」

そう話している者達の中で、ずっと喋っていなかった猫のような顔をした老人が喋り出す。

「まぁ……とにかく、今は影法師が持ち帰った情報を話し合う必要がある。未確認の情報もあるようだからの。フェアリーテイルの馬鹿者共の話はその後でよかろう」

その後も評議員達による会議は続けられた。

……

……

……

あれから数時間後、

カツン、カツンと手に持った杖を突きながら、猫のような顔をした老人は評議院と外を繋ぐ通路を歩いていた。背後にはカエル顔の人を二人連れ立っている。

「まったく…フェアリーテイル、フェアリーテイル！他にも議題にすべきことはあろうに…確かにフェアリーテイルは危険分子の集まりだが…ん？」

そう憤慨していた時、とある樹木の前で何やら猫と戯れている小柄な老人を発見した。

「ここは評議院へと繋がる道。ここでペットと遊ぶのは止めてもらおうかの、マスターマカロフ」

「…ミケロか…残念じゃが、小奴は儂のペットではない。どうやら野良のようでの。ここに迷い込んだようじゃ」

「ならば話は早い、お前達、その猫を外に連れ出せ」

ミケロが命令すると二人は猫を捕らえようとするが、するりと猫は二人の手をかわして評議院の入り口へと駆けていく。

「馬鹿者が！早く追いかけんか！！」

「「は、はい！」」

ミケロに一喝入れられた二人は、慌てて猫を追いかけていく。

二人が居なくなるまで呆れた目で見ていたミケロに、マカロフは近

付き小声で言う

「時間通りじゃの。周りには誰もおらん。もう解いてもよいじゃろ？」

「いいや、完全に外に出ないといけねぇ。どこで見られているか分からないからな」

いきなり口調が変わったミケロは小声でそう返すと、マカロフはそうじゃなと頷く

「外で一緒に食事でも、どうじゃ？」

「…いいだろう。少し、フェアリーテイルのことで話さねばならんこともあるからの」

再び普通に会話し、二人は評議院の外にある店へと歩いて行った。

…

…

とある店の個室には二人の老人が入り、席に座っていた。

「まさか…ミケロに扮してるとは思わなかったぞ」

マカロフは座っていたミケロを見ながら言うと

「会議もついでに聞いてきたぜ。あ～腹減った、アイツら会議長すぎなんだよ。」

そう言った後、ニヤリと笑うと、いきなり淡いの光がミケロを包んだかと思うと次の瞬間には、別人に変わっていた

「マスター、評議院はヤバすぎだ。穴だらけで簡単に潜入できたぞ」

先程の笑いから一転して真剣な顔で言うナナシへと…

…

…

…

…

現在、私はとある店の個室でマスターと飯を食べている。一仕事終えた後の食事がなんと美味しいことか…しかし

「ナナシ…ミケロに成り変わるのは危なすぎるぞ」

マスターに説教されながら食事してるから、ちょっと美味しくない。

本当は成り変わる予定じゃなかったんだよな。一通り情報を眼鏡にコピーした後、

マスターと落ち合う場所で猫になって寝ておこうかなと移動してたんだ。

だが、その途中でフェアリーテイルの悪態を吐いてるミケロが居たもんだから、つい影の中に埋めちゃった。

いやぁその後、評議院のカエル達が来たからビビったね。急いでミケロに変身したんだぜ。

この爺さんは昔からフェアリーテイル嫌いで有名だったからな。何度か会ったこともあるから真似するのは楽勝だったな。

さすがに動物のように、その人の能力まで真似はできないがな。しようと思えばできるんだろうが

人を訓練する時間がないんだよ。今の私じゃ動物達で能力を操るのは手一杯だ。

まぁ話は戻るが、成り変わったもんは仕方ないしカエル達も勘違いしていたから

ついでに私が会議に出てやろうと思ってバレること必至で出たんだが…

誰にもバレなかった…ヤバくないか現評議員達よ。変身魔法ぐらい見破れよ。

昔の評議員達の何人かは見破れたと思うぞ…いや私の隠密性が上がったのか？

わからんな。まぁとにかく今の評議員はダメダメだと言うことだな。

それに若い奴が二人も居やがった。ウルティアにジークレインか…

ジークレインの方は聖十大魔道の一人らしいが、思念体での会議出席はいかがなものか。

ここは、協議院の支部ではなく本部だぞ！

実体で出席しろと言ってやればよかった。どうせ若くで大陸随一の魔導士に認められたから図に乗ってんだろ。

べ、別に羨ましくないぞ。若くして選ばれやがって！クソヤロウ共が！

私なんてS級にすらなっていないのに……それにしても思念体にしては……

「ナナシ！話の途中なのだが？」

おっと、マスターと話してたんだった。えっと、何の話していたっけ？

…

…

…あぁ…ミケロね

「大丈夫だって。あの爺さんなら、成り変わられたことを公にしねぇよ。
表沙汰になったら自分が椅子から降ろされる可能性があるからな。
絶対、保身に走るさ」

そうさ、ミケロは評議員の椅子から降りたくはないだろう。と言うことは今回の成り代わりは公になることはない。せいぜい少数の評議員達だけの話になるだろう。それにな

「…しかしのぅ…」

「公になってもいいんじゃねぇか。私の姿は見せてないからバレることはないしな。

…てか大体、私から言わせてもらえば無防備すぎなんだよ。もうちょっと堅牢にしないとヤバいぜ。今回のことを期にしっかり対策を練ってくれると有り難いね。」

簡単ではなかったが一様1日半を掛けて機密文書他もコピーできたし、ホントにヤバいぞ評議院…

「それはお主だから侵入できたのじゃ…昔よりも強くなってるようじゃしな。じゃが…もしも、お主レベルの隠密性を保持した魔導士がいるなら…」

「評議院にある情報は漏れているだろうな。それに私レベルの魔導士ぐらい大勢いるんじゃないのか？」

「いや隠密にとって言えば、今のナナシほどの魔導士はそうはおらんだろう。…やはり情報は漏れていると考えていいのじゃな？」

おぉ、マスターにそこまで言われるとは…自慢してもいいな。帰ったらミラ達に教えてあげよう。
これで私を仰ぎ見るようになるかもしれん。脳内メモメモ。よし、話の続きだな

「あぁ、既に私もコピーさせてもらったからな。あとで書き写しとくよ。
まぁ、だから重要すぎる情報は地方ギルド連盟で止めておく必要がありそうだ。」

ていうか、わざと見てくださいと言わんばかりのひどさだ。昔以上のずさんな管理体制と言っていいだろう。

「よかろう、儂の知人も評議員をしておる。伝えておこう。もちろんお主のことは伏せてだがな」

「あぁ、いいと思うぜ」

当分、評議院に潜入することはなさそうだしな。是非とも堅牢になってほしいものだ。

よし、もう評議院の話はいいだろう。後でコピーした書類もちゃんと読もう。

そして書き写したらマスターに提出するとして、それより今は早く礼をしないとな。

「…それより、遅くなったが…今回は世話をかけた。私のことをミラ達に伝えてくれてありがとう。マスターのおかげで私は戻ってくることができたよ、ホントに感謝している。ありがとう」

私が頭を下げながら言うと、マスターはよいよいと言った後

「それにしても、よぉ、生きておった。一時期は死んだものと覚悟しておったがの。…今後はケットシェルターに属するのじゃな？」

私の服に付いているネクタイピンを見ながら真剣な顔でマスターが言ってくる。すっかり忘れていた…

「あ…すまねぇ。そのことも話さねぇとな。私はな…」

慌てて話そうとした時

「待て、話さずとも良い。ただし、フェアリーテイルを抜ける者には三つの掟があるのは…まぁ知っておろう」

それは知っているだろう。私だって曲がりなりにもフェアリーテイルの魔導士だったんだ。

「あぁ、勿論だ。

一つ、フェアリーテイルの不利益になる情報は生涯他言してはならない。

二つ、過去の依頼者に濫りに接触し個人的に利益を生んではならない。

三つ、たとえ道は違えど強く力のかぎり生きなければならない。

決して自らの命を小さなものとして見てはならない。愛した友の事を生涯忘れてはならない…」

この掟は絶対に破られないな。…いや破ろうと思っても早々に破れるようなものじゃないだろう。

フェアリーテイルは私の家であり誇りだからな

「そうじゃ、このギルドの精神があればお主は大丈夫じゃろう。自分の信じた道を進むとよかろう。」

「あぁ、今までホントに世話になった。この恩は忘れねぇよ。何時かフェアリーテイルに危険が及んだ時は出来る限り助力することを誓おう。

ケットシェルター、ナナシ・ネームレスの名においてな」

ふっ…決まった。これは名言だ。いかんな、名言すぎて爺さんが泣いてしまうな

「…期待せずに待っておこうかの」

おぉおぉ、なんて悲しいことといいやがんだ。ちくそぅ、やけ食いしてやるぜ！

ここは子供の成長を見て泣くとこだろうがよ！！

…

…

…

とまぁ、その後評議院での会議の話をしながら私と爺さんが食事を終わらせようとした時、

「…ところで誰に魔法をかけられたか覚えておるか？」と尋ねてきた。

しかしなぁ、そのことは…

「いや残念ながら覚えてねぇんだよ。グリモアハートの調査をしていたことまで覚えてんだが…」

「闇ギルド三大同盟の一つ…グリモアハートか…ならば、そやつらに捕まった…と？」

「わかんねぇ。まぁ思い出したら、話すさ。それより、よく私を見つけることができたな。あんな辺境の森の中にいたのによ」

覚えてないモノは覚えていない。何時か思い出したら話すから、今は別の話に逸らそう。飯が不味くなる。

「……お主のことはマスターローバウルからドラゴンスレイヤーのことで連絡を貰った時に発覚しての。おっ、そうそうマスターローバウルよりお主に手紙じゃぞ」

「は？…何で爺さんが持ってんだよ」

疑問に思いつつも手紙を受け取り、爺さんに渡したと言うことはここで開けても大丈夫だろうと思い、その場で開ける。

まぁ、長ったらしい手紙を要約すると

・できるなら、ウェンディはナツと一緒に仕事に行かせること

・マスターの代理として定例会に出席すること
・ギルド交流の期間は未定だということ
の以上三つであった。
一番目は…
「やはり…ドラゴンスレイヤー同士で組ませるのか…アイツらには何かあるのか？」
「儂にも分からん。ただ、ポーリュシカが言うには運命が動き出そうとしている…そうじゃ」
あ…婆さんにも会いに行かないといけないじゃないか。それにしても
「運命……何かが始まるかもしれないか…。これは色々と調べる必要がありそうだな。何か手掛かりになる痕跡や予兆があるやもしれん。
フェアリーテイルのリクエストボードから依頼は取っていいんだろ？」
「うむ」

よし、ケットシェルターは依頼が少ないからな。フェアリーテイルの依頼を取らせて貰おう。

「…だがの…実は今のお主はブランクがあるから…」

まぁ、その何かが解るとは思えないが、何もしないよりマシだろう。ドラゴンスレイヤーは謎に包まれているからな。

「まぁ、評議院に潜入するほどの力を持っておったから儂は良いと思うんじゃが……あの子達がのぅ…どうするかって聞いておるのか!?」

大体、ドラゴンなんて見たことないぞ。九尾は見たことがあるから、ドラゴンもどこかに居るんだろうが…

「…また人の話を聞いておらんのか…相変わらずな奴じゃ」

まぁ、何にせよ。この社会に取って不自然なことは依頼で来ることが多いからな。

今回コピーした情報の精査となるべく、そう言う仕事を選んで調べてみよう。

金を稼ぎつつ、動かないとな、このままでは事実上のヒモになってしまうからな。

それにウェンディとの仕事も両立させないとな

…忙しくなりそうだ…

「よっしゃ、飯も食ったし帰るか。んじゃ爺さん、私は先に帰っておくぜ。残りの諮問会頑張れよ。いやぁ、これから忙しくなりそうだ！」

よし、早く帰って調べモノ！調べモノ！

【転影移！】

そう声に出し、すぐさまナナシは自身の影の中にぐぷりと沈むと姿を消してしまった。

それを呆れて見ていたマカロフは「…ホントに自由な奴じゃ…変わっとらんのぅ」と呟き、くいっと酒を飲んだとか

2．10　猫（後書き）

はい、これでようやくナナシの身だけでなく心の中も、正式にケットシェルターの魔導士となりました。

今後マカロフのことは爺さんと呼ぶでしょう。

代わりにローバウルのことをマスターと呼ぶようになります。

ナナシはマスター代理に昇格です。

ちなみにナナシは隠密性で言えばS級ですね

まぁ、全体的な強さはまだ決めてませんが…

次回からルーシィが登場する予定です。

ではまた次回お会いしましょう

2．11　早く

【カリカリ】

フェアリーテイルのギルドの地下には倉庫とは別に、多くの魔導書や記録書などが専用の棚に保管されている部屋がある。

その部屋の中では一人の男が大量の本が積み重なった四人掛けの四角いテーブルに座り、何やら書き物をしているようだ。

【カリカリ…ピタ…】

よし、この項目は終了だな。

あぁ、それにしても疲れた…一旦休憩だ、休憩…

…

爺さんと別れてから2日が経った。あの後、私は婆さんとマスターの二人に会いに行き、昨日フェアリーテイルに戻ってきた。

そして現在、私は訓練や入浴等以外はここに籠もって色々と作業をしている。

どうして家じゃないのかって?…そんなことはミラ達に聞いてくれ。

私は一時の間は部屋に籠もるはずだったのに、フェアリーテイルでしろってうるさくてな。

カナやエルザに助けを求めたらコイツらも…フェアリーテイルでするように言ってきたし全く何なんだ?

別に家でやったっていいじゃないか

まぁ…ここには色々な蔵書があるから調べものには最適なんだがな。

ちなみにエルザは今日の朝に魔獣討伐のクエストに出掛けて行った。

しかし…やはり痕跡や予兆を探すのは難しいな。

まず何がドラゴンスレイヤーに関係するのかがわからないしな。

そうさ、私は書庫に来た最初の頃は世の中の動きを調べていたんだ。だが行き詰まってしまってな

現在は、気分転換にと爺さんに見せるためにコピーした文書を書き写しているところだ。しかしこれが思っていた以上に重労働だ。

昔もよくやっていたんだが、やはり暗号化にして書くのは疲れるな。久しぶりだから尚更だ。

コピーしたヤツをそのまま見せることができるなら良いんだが、

あいにく今掛けている記憶魔法内蔵型サングラスはポーリュシカ婆さんと私にしか扱えないようになっている。

今も私がテーブルに出しているコピー文書は、他の人にとっては見えないようになっているからな。防犯性は抜群なんだが…

うむ、考えても仕方がない。どうせやらないといけないんだ。

それよりきちんと休憩を取らないとな

一服しよ、一服。

そんなことを私は考えながら、影の中から、にゅるりとタバコとマッチの箱を握っている漆黒の手を出す。

そして、その手から二つの箱を受け取ったら一本ずつ出し、すぐさまマッチで火を付けタバコに灯し大きく吸い上げた。

「ふぅーうむ…やはり薬草タバコは良いものだ。この爽やかすぎるメンソールが何とも…」

…

…

…

よし、あと一本で終わりにしよう

「ナレ…うわぁ、薬草の匂いが凄い充満してる…鼻がもげそうだよ!?」

「アンタ吸いすぎよ!もう止めなさい!」

そう言いながらウェンディとシャルルの二人が一階からの階段を下ってきた。騒がしい奴らだ

「あぁ?タバコはもう吸ってないぞ」

「その口にあるのは何よ?」

「これはアレだ…まぁ……そうだな……ふむ…ただの薬草が詰まった棒だ」

「それを薬草タバコって言うんじゃないの?」

ふっ

…その通りだ、ウェンディ。立派に育ちやがって

しかし、そんなに部屋に匂いが充満しているのか?私にはわからないな。全く…敏感な奴らだ。

「うぅ…くちゃい…」

「…換気が必要ね」

二人とも鼻を摘むほどの匂いだと…

「ほれほれ、匂いがキツいなら一階に行け。私は一時ここを出ないぞ」

「……やっぱりお仕事大変なの？」

「あぁ…まぁ時間と根気がいる仕事だな。それよりどうした？ミラ達の手伝いはいいのか？」

「あっそうだった…もうお昼だよ。ご飯食べないの？」

「なんと…」

もうそんな時間だと…確か休憩に入ったのが１０時過ぎだったから…

「行かないの？」

「いくいく。そろそろ行こうと思っていたんだ」

「アンタさっき一時出ないとか言ってなかった？」

は？んなこといってねぇよ。何を言ってるのかね

それより飯だ、飯

「ほれ、早く行くぞ」

…

…

…

その頃、一階では…

「たっだいま～♪」

「あら、おかえり」

「おかえり、レビィ♪…それにジェットとドロイ」

「「ただいま（（俺おまけ扱い！？））」」

三人の若者がクエストから帰ってきたようだ。

レビィはカウンターに立っているミラとリサーナの二人と楽しくお喋りをしている。ジェットとドロイは蚊帳の外のようだ。

（（さびしい…））

「ねぇ、何かあったの？二人とも何時と雰囲気が違うよ？（ミラが指輪してる！？…もうナナシのこと諦めたのかな…）」

どこか何時もと違うのだろう二人にレビィは気付いたようだ

「そう？」

「うん、ミラなんか特に…なんて言うだろう？…綺麗になった？う～ん違うよね、何だろ？（だったら私が待っていてあげよう）」

（（レビィの方が綺麗だし、可愛いぞ！））

「あっ…そっか、レビィ達はまだ知らなかったんだ…あのね実は」

リサーナが話そうとした時

「ミラ、腹減った。飯くれ飯」

「「「え？」」」

サングラスをかけたままでタバコを銜えているナナシがレビィの隣にどかりと座ってきたのだ。

「…ナナシ…なの…？」

…

…

「ほれ、ウェンディ達も座りな。」

「うん♪」

「その前にタバコ止めなさい」

シャルルなんて無視、無視

「……うそ…」

「本物よ、やっと帰ってきたの♪」

ご飯～♪ご飯～♪もう背中とお腹がくっつくぜ！

早くこな……い？

「おい、私はご飯を下さいと言っているんだが？」

何やってんだ二人とも…早く私にご飯を恵んで下され！パンでも何でもいいからさ！

「ほ、本物？」

「うん、一週間前に帰ってきたんだよ」

ん？何か横の奴らから視線を感じるぞ…またか…また説明してやらないといけないのか

…めんどくさいな。だが私も昨日から正式にマスター代理になったんだ、きちんとしないとな。

「お隣のお嬢さん方、我々は決して怪しい者ではない。ケットシェルターより派遣されってなんだ…レビィ達か、元気にしてたか？」

なんだ…レビィにサルスケにドロイじゃないか。私を知ってるヤツに律儀に説明してやる必要はないな

てかレビィよ…何だその幽霊でも見たかのような顔は…お前もか、お前も私を幽霊と言うのか…目を覚ましてやろう

「…うそっ痛っ！？」

はい、デコピーン

「ほれ、目が覚めたか？私は生きてるぞ。足もちゃんと付いてるぜ」

「……あ…」

「ナナシ兄ちゃん！レビィにひどいことしたらダメじゃない！」

「いやいや、ただのデコピンじゃないか…って!?、泣くほど痛かっおっと」

危なっ。レビィよ、ここで抱き付くのは危ないぞ。しかし、デコピンで泣くとは思えん、と言うことはコイツも私の帰りに喜んでくれているのかな？

そういうことならば、ホントに私は果報者だ。こんなに多くの人が私のために涙を流してくれるとは。

「お〝がえ〝り〝」

「あぁ、ただいま…レビィ」

やはりフェアリーテイルはいいな。まぁケットシェルターも負けてはいないがな。

それにしても可愛くなりやがって…リサーナといいレビィといい、女らしくなったな。

（（俺達は？…まぁお帰りナナシ…））

…

…

その後、私はレビィが落ち着くまで抱き締め続けた

「…ぁ……ゃ……ゃ……ん」

（（手付きがエロいぞ！レビィから離れろ！））

かったのだが

「ナナシ？」

「ナレス？」

「ナナシ兄ちゃん？」

「ほ、ほら何か知らないがウチの姫様方が怒っているから、もう離れろ」

「や！！」

や…ってお前…私が殺されてしまうよ。あぁ、ミラの顔が怖い…こ、これはドSの顔じゃない。本気で暴力を振るう前の顔だ！

てかウェンディとリサーナは何で怒ってるんだ。抱き締められたいのか？

そんなもの後でいくらでもしてやるよ。それより今はミラを落ち着かせねばならんのだ

「ち、違うんだよ、見てわかるだろ？感動の再会だから仕方がないんだよ」

そうだ、仕方ないんだ。分かってくれるよな？

「そのことは別に構わないわ。でも、どうして手がイヤらしく動いているの？それは関係ないわよね！今すぐ離れなさい！！」

「イエス、マム！」

「…あ…」

「また浮気しようとしたの？」

「ち、ち、違う！こ、これは男として当たり前のことなんだ。こんな可愛い子がいたら誰だってぎゃ！痛い痛い痛い！頭は止めて！潰れてしまぁぁぁあああ！」

…

…

「ぐふぅ」

「全く、ホントに節操がないんだから…ほらカナのとこに行くわよ」

「もう許して…頼むからカナには言わないでくれ」

「ダ・メ」

うぅっドナドナ～

と悲しむ姿を見せかけて逃げてやる。私だってやればできるんだ、
もう折檻はコリゴリだ！

肩を落とし暗い雰囲気を漂わせる…そして

「……ご、ごめんな…ミラ…そんなつもりじゃなかったんだ…」

どうだ？私の渾身の演技…おっとタバコを銜えていたらサマにならないな

「…ホントに反省してるの？」

あと一押しか

ミラには見えないようにタバコを指でもみ消して…苦悶の表情を浮かべる！

「…もぅ絶対…誤解させるようなことはしないから…許してくれよ…」

どうだ？

「…もう、しょうがないわね…今度から絶対にしたらダメよ？」

ふぅ～勝っちぃ！早く退散しないと

「あぁ、わかっている。じゃ私は書庫にもど」

「カナちゃん、自分から来ちゃった♪」

「げっ」

「逃がさないよ」

おぉ、やわやわ…後ろから抱き付かれてしまった…あぁ幸……はっ！？…退路を断たれた…ヤバいぞ

「カナ！わ、私は何もしてないぞ。ミラの勘違いなんだ、ただレビィと感動の再会をしていただけなんだ。な？レビ…居ないだと！？」

アイツらどこに行ったんだ、さっきまで横にいたじゃないか！？

「ウェンディ・マーベルです。ケットシェルターから来ました。今回はウチのナレスが失礼なことをしてすいません。」

「私、レビィ・マクガーデン。よろしくね♪…ナレスってナナシのこと？（この子もリサーナも付けてる所は違うけどミラと同じ指輪してる…）」

「そうだよ。ナナシ兄ちゃんは…」

別のテーブルで仲良くお喋りだと!?助けろよ!

「ずっと見てたよ。あんたがイヤらしくレビィを抱き締めるの。その後ミラを騙そうとしてるとこ……わかっているわよね?浮気と嘘はダメだって…ねぇ?」

「やばし…」

に、逃げないと…

「…また騙したの?」

前と後ろ断たれた!?

左右は…あぁミラも抱き付いてきたから…もう逃げられない…くっ…どうにかして

(美女二人から抱きつかれるとか…うらやましい…)

「ち、違うんだよ。それこそカナの勘違いだ。大体、見てなかったくせによくもそんなことが言えるな!私はホントに反省しているんだぞ!」

ホントに見ていたのかよ…どうせ、はったりだろ

「タバコを揉み消して苦悶の表情を作り上げていたわね…それにミ

ラが許した後、後ろ手でガッツポーズしてた…どう?ホントのことよね」

一部始終を見られていただと!?

「「まだ言い訳する?」」

「…それでも私は無実だ!」

何とかして逃げないと…

「「書庫に行くよ」わよ」

「あっちょっと待ってくれ。革靴のヒモが……」

「「靴ひも?」」

(よし下を向いたな!今だ!)」

【小型閃光ラクリマ!】

「「きゃっ!?」」

ふふん、何時までも殴られてばかりの私じゃないのさ。私も学習しているのだよ。

説明しよう!閃光ラクリマとは、まさに名前の通りで眩しい光を出

すことが出来る魔法を内蔵したラクリマのことだ。

今回は対個体用だから周りに影響は無しだ。ちなみに別名もあるが、私が付けた閃光ラクリマの方がわかりやすい。まったく世の中の人間はセンスがないのだから困ったものだ。

これは逃げる時には必須のアイテムだな。

今の私はサングラスをしているから眩しくないのさ。おっと使い捨てではないから後で回収しておかないとな

それよりダッシュだ、ダッシュ！

転移で逃げたら発動する前に捕まる可能性があるからな

走って逃げ切ってやんぜ！

「ナナシ、待ちなさい！！」

ふっミラよ、待てと言われて待つ奴がどこにいるんだ馬鹿やろうが！

ほとぼりが冷めるまで婆さんの所で厄介になろう

「あばよ「ただいまー！！！！」がっ！？」

……ナン…デ…イキ…ナ…リ…トビラ…ガ…

「ここがフェアリーテイル！！（凄い！あたし本当に来たんだ！）」

「ようこそ！オイラ達のギルド、フェアリーテイルへ！！」

グォオ…アタマガァ…

アァ…ソレヨリ…ハヤク…ハヤク…ニゲナイト

…アレ…ナンデ…ニゲルノ？…ワカラ…ナ…

2．11　早く（後書き）

はい、最後にちょっとだけ原作に入りましたね

今後は原作に入りますがセリフとかは一々調べるのがめんどくさいので

物語のキーになるセリフ以外はオリジナルでいく可能性が高いです。

作者は原作本をレンタルで読んだだけで自宅にある資料としてはアニメだけが頼りですからね。

ちなみにこの作品どうでしょうか…

作者はこのまま書き続けていいのか不安になっております。

感想などお待ちしておりますので宜しくお願いします。

ではまた次回にお会いしましょう

補足

ウェンディ達はまだ新しい服に着替えてません。次々回ぐらいに新調だと思います。

3．０　???（前書き）

新たな話…三章に突入です。

と言うより本格的に原作の時期に入ったので切りもいいかなと考え、
無理矢理、三章にしました。
では、どうぞ

3．0　???

とある晴れた日のマグノリア駅にて。

「やっと着いたぁ！！もう列車なんか乗らねぇぞ！！」

と叫びながら桜色の短髪と首に巻いている鱗模様のマフラーが特徴の青年ナツは、駅の構内をふらふらしながら闊歩していた。

「ナツ、それ何時も言ってるよ」

それに続き青色の猫ハッピーが魔法で背中に翼を展開させ、ナツの頭上を飛びながらツッコんでいる。

「へぇ～ここがマグノリア…あぁ～緊張してきた！私も今日からフェアリーテイルの魔導士かぁ。信じられない♪」

そんな彼らの後ろから付いて来ている長い金髪のの女、ルーシィは、初めての街とこれから入るであろうギルドのことでワクワク、キョロキョロとしていた。

そして三人が駅を抜け街の中を歩き始めて大部、時間が経った頃

「あっそうだ。ねぇナツ、フェアリーテイルに入るためには何か試験あるの？」

「さぁな、俺は知らねぇよ」

「何で知らないのよ…ハッピー！あんたは知ってるわよね？」

「ねぇねぇ、シャルルは居るのかな。居たらオイラどうしよう～」

「話違うし！？あたしの質問の答えは！？」

一人ツッコミを入れるルーシィを置いて二人はスタスタと歩く

「たぶん居るさ。ナナシも居るだろうから楽しみだな！アイツには魔法込みの勝負で勝ったことがねぇからな！帰ったら勝負だ！」

「シャルル…女…結婚…魚…告白…シャルル…女…女…恋人…女…魚？」

ナツは拳に炎を纏わせながら歩き、ハッピーは何やら考えながら、ふらふらと空を飛んでいる。

「あたしの質問ー！？ってダメだ…アイツら聞いてないわ。あ…海が見えてきた。ナツ達の話じゃそろそろ着くじゃないどうしよう！」

「魚…たくさん…女……女たくさん……たらし？……たらし…ナナシ…はっ！？そうだよ！ナナシにまた教えて貰えばいいんだ！」

「くっくっくっ…待ってろよナナシ！帰ったら……あ…その前にぶっ飛ばさなきゃいけねぇ奴がいるじゃねぇか！危ねぇ忘れる所だった！」

「う～ん…ギルドに入るならまず面接かしら？なら第一印象が大事ね。

おほん…

［こんにちは、ルーシィと申します］

…いやぁ堅すぎるかな。

［やっほ～ルーシィでぇす♪］

ん～何か違うなぁ…もっと元気よく、かつ印象的に！

［俺が！ルーシィだぁ！！！］

って違う～！！あぁんどうしよう～」

そのように各々が何やら独り言を言いながら歩いているが、三人は…いやルーシィは気付いていないのだろう

【ひそひそ】

「フェアリーテイルの子達だよ」

「元気な奴らだ…いいねぇ若いもんは…」

「頼むから騒ぎは起こさないでくれよ…」

「ママーあれー」

「見ちゃいけません！」

「今年のファンタジアも楽しみだな」

「お！あの子可愛い！」

と、マグノリアの市民達から見られていることを…

そして三人は市民達の視線に気付くことなくギルド・フェアリーテイルに到着したのであった。

「よぉーし、着いたぞ」

「あい！やっと休めるね」

「ここが…（緊張してきたぁ！）」

「ただいまー！！！！「がっ……」」

ナツはそう言いながら勢い良く扉を開きギルド内へと入っていく。

「ん?今何か当たったような…まぁいいか…そんなことより…」

ナツに続きハッピーが、そして恐る恐ると言った感じでルーシィが入る。

(緊張してきた~!!)

そんなルーシィの目にギルドの光景が映る。

「わぁ♪」

フェアリーテイルのギルド内は街の酒場をだだっ広くしたような形を取っており、一番奥にカウンターとリクエストボードがある。

そして、奥までの道程には大量の四角いテーブルと椅子があり、そこでは多くの魔導士達が酒やジュースを飲み、ガヤガヤと語り笑い合っていた。

「ここがフェアリーテイル!!(凄い!あたし本当に来たんだ!)」

「ようこそ!オイラ達のギルド、フェアリーテイルへ!!」

(ママ…あたし…)

ルーシィが感慨に更けようとした

その時

「てめぇ！！サラマンダーの情報、嘘だったじゃねぇか！！！」

「俺はただ小耳にはさんだぶはぁ！？」

先行していたナツが椅子に座っている一人の男を殴る。

「なんで！？」

いきなりの行動に驚き呆然とするルーシィを先おいて喧嘩はヒートアップし、そしてその行為を発端として

「おらぁ！」「ヤロウ！」

「ナツが帰ってきたってぇ！？」

「おっ！やんのか！たれ目野郎が！」

「ざけんじゃねぇぞ！ナツ！」

「漢足るもの拳「「邪魔だ！！」」ぐはぁ！！」

「私のロキロキはどこ行ったのよ！また居なくなったわ！」

「知らないわよ！アンタが嫌で出て行ったんじゃないの！」

「何ですって！？」

「消えた…まんまと逃げられたね…（転移でも使われた？）」

「……（許さないんだから）私…追いかけるわ」

「あれ？…ねぇリサーナ…あの挟まれてるのナナシじゃない？」

「え？…どれ？」

「ほら…扉のとこ…白い髪が見えるでしょ？」

「あ…ホントだ…髪だけ見えるね（何で扉と壁に挟まれてるんだろ…）ナイスレビィ！カナ、ミラ姉！ナナシ兄ちゃん…あそこでたぶんノビてるよ」

「ナレス！？」

「何やってるのよアイツは…」

ギルド上げての大喧嘩？が始まった。

…ただ一部では始まる前からノックアウトされ壁と扉の間に挟まっている白髪の男がいたとか…

そして、大喧嘩の行く末をただ呆然と見ていたルーシィは、

「は！？あまりのひどさに現実逃避してたわ。ってちょっとハッピー！」

横を飛んでいたハッピーにどうするのよコレ！と詰め寄る

「うぱぁ！！」

「いや…うぱぁじゃなくて！止めなくていいの！？」

「何時ものことだからね。放っておいても大丈夫だよ。」

（何時もって…こんなことが日常茶飯事なの！？どんなギルドなのよ！？）

呑気に言うハッピーにまたもや驚いたルーシィはよろめき、開いたままだった扉にぶつかる

「ぐふっ」

「え？…何か今この奥から声が…って大丈夫ですか！？（何でここに人がいるのよ！何このギルド！？あれ？この人見たことがあるような？）」

ルーシィが考えながらナナシを介抱していると

「あら、新人さん？私、ミラジェーン。よろしくね。そこの人は私に任せて♪（また知らない女の子がナナシに…）」

「あ、はい！わ、私ルーシィです。フェアリーテイルに入りたくて

来ました！（うわぁ、綺麗な人…ミラジェーンさんかぁ…こんな綺麗な人もいたんだ）」

「ちょっと待ってね。全く、逃げるからこういうことになるのよ。よいしょっと」

「…え？…あ、あの何でグルグル巻きにしてるんですか？」

「え？逃げないようによ？」

「あ…そうですか（さも当たり前のように！？え？何？これが日常茶飯事なの？）」

ルーシィが驚いている間もミラは手馴れたように気絶しているナナシをロープでぐるぐる巻きにしている。

「うん…これでいいわ。ごめんね、待たせちゃったかな？」

「い、いえ…あの…それよりいいんですか？この人あたしが見つけた時には…」

「いいのよ♪自業自得みたいなものだから」

二人が話していると床で放置されているナナシの目がゆっくりと開き始める。

その瞳は普段よりも濁りきった色をしていた

「？？？…？…！？？？？？…？…？？？？！？！？…？？？！？？？？？！…？？？？」

扉と壁に思い切り頭をぶつけ、意識が混濁しているのだろう。

ナナシはとにかく、ここから逃げなければ…とだけ考えると

【？？？】

魔法陣を展開し眩しい光がナナシを包んだかと思うとロープを無理矢理ぶちぶちと引きちぎりながら

「■■■ーーー？？？？」

赤目と漆黒の毛を持つ二メートル強の狼へと変身した。そして雄叫びを上げるとふらふらと危なっかしく扉へと向かい始める。

「えぇ！？あぶな！？（この人もナレスさんと同じで変身魔法の使い手？ってふらふらしてるけど大丈夫なのかしら…）」

それを見たルーシィは驚いた後心配し、ミラは俯き肩を震わせていた。

「何…変身までして…そんなに私達から逃げたいの？

…私はただナナシに、浮気や嘘なんてしてほしくないだけなのに…

…もう絶対許してあげないんだから！！」

【サタンソウル！！】

「えぇ！？ミラジェーンさん！？」

こちらも多少冷静ではないようだ。膨大な魔力を解き放つと共に悪魔をテイクオーバーする

その異常な魔力に気付いたのだろう多くの者達が喧嘩を止める

「何だ…この魔力…入り口方向？」

「おい！ミラジェーンがテイクオーバーしたぞ！？」

「はぁ！？…てかあの狼は何だよ！？」

「ありゃあ…ナナシか？」

「ナナシ？…あぁ…ケットシェルターのハーレム男か…俺達のアイドルを根こそぎ食い尽くしてるという！！」

「ちょっと魔法まで使って喧嘩が始まったわよ！？」

「あい！！」

「あいじゃない！ヤバいわよ！？」

そんなことを喋りながら、名もないギルド構成員達とルーシィが騒いでいた。

「???」

一方、狼になったナナシはふらふらしながらも一瞬で外に出ようと、体を縮こまらせるとすぐに勢い良く飛び出す

「ふん、甘い」

だが外に出ることなく入口付近で悪魔を纏ったミラに頭から止められた

「■■■ー!??」

二人がぶつかった衝撃でギルド内にゴゥと大きな突風が吹き荒れるだが

「ナツ!服返しやがれ!」

「ぷぷぅ、何時も服着てないだろうがよ」

「本当の漢は俺以外にいないのかー!!」

「「うるせぇんだよ!!」」

少数の者は気にせずに喧嘩をしているようだ

「ひゃあ!?な、何このギルド!マトモな人がいないじゃない!?」

ナナシとミラの近くにいたルーシィは軽く吹き飛ばされ床を転がっていると、カウンターの方からウェンディがひょこりと姿を現す

「ルーシィさん!こっちに来てください!」

「ウェンディ!!よかった。あんたもいたのね。もう何なのこれ、めちゃくちゃじゃない!?」

そう言いながらルーシィはカウンターの中に入った。一方ナナシとミラの攻防はヒートアップしているようだ。辺りの構成員達を巻き込みながら、ギルド内を縦横無尽に飛び回っている。

「あなたがルーシィね。フェアリーテイルへようこそ、私はリサーナ。ウェンディから話は聞いてるよ。フェアリーテイルに入りたいんだよね?」

「あ、はいよろ【ドン!!】きゃっ!?」

「!???」

「ナナシ!!」

「あ、あれ止めなくていいの!?(こっちまで来ちゃってる!?)」

「…二人ともヒートアップしてるからそろそろヤバいかも…ていうかナナシ…暴走してる?」

レビィが冷や汗を流していると隣で同じく冷や汗を流しているカナが

「えぇ、たぶん正気じゃないね。…ミラ!!ナナシを早く止めな!!」が叫んだ

その時

「■■■■ーー!?!?!?!?!?!?」

狼は首を上に向け一度大きく雄叫びを上げると口元に何重もの黒光りする魔法陣を展開する。

その瞬間

「あれは!?」

「シャルル?ひゃ!ナレス!?」

「地震!?(何なのよ、このギルド〜)」

「違うわ!あの馬鹿ナレス!魔力を解放したわね!?」

狼が幾重もの魔法陣を展開すると辺りは大気が揺れ床が凹み出す。

その時、ギルドで唯一喧嘩をしていた者達の動きも止まる。

「ナツやばいよ！」

「おい何だこのやべぇ魔力！」

「ナナシさんが姉ちゃん相手に喧嘩してるだと！？まさか！？」

「嘘だろ…ありえねぇよ…誰かナナシを止めろ！アイツ混乱してるぞ！」

グレイの声も虚しく、狼は再び何重もの魔方陣を展開する。

そして大きく息を吸うと口内に漆黒の螺旋の渦を何重にも展開させる。

それにより螺旋は混ざり合い徐々に口元で一塊の球となり始めた。

「…ナナシ？（そんな魔法使ったら…まさか…意識が混濁してる？）」

ナナシの行動と濁りきった目を見たミラはようやくナナシが正気じゃないと気付いたようだ。

「ヤバいぞ…ナナシさん…」

「おいおい…やべぇってもんじゃねぇぞ……俺も混ざりてぇ！！」

「バカかお前は！？あれに近付いたら消し飛ぶぞ！」

「そんな！？このままじゃオイラ達のギルドが危ないよ！？」

「ちょっとナナシ！？そんなのギルドで使ったら！」

カナが止めようとした

その時

「止めんか！！馬鹿たれが！！」

【バゴン！！】

「！？！？！？」

いきなり巨大な手によっと狼は弾き飛ばされる。それにより口元にあった構成中の漆黒の球はパキンと音を立て崩れ去った。

「がはっ！？」

そして狼は天井に勢い良く頭からぶつかると、バフンと言う音と共に強制的に変身が解け人の姿に戻った。

狼は、そのまま落下し床にぶつかりそうになったが

「まったく…」

寸前にミラによって受け止められ、それと共にミラもテイクオーバーを解除する。

「もう…ホントにしょうがない人なんだから…混乱して魔法使うなんて魔導士失格ね」

(あれ?さっきまでミラジェーンさんも冷静じゃなかったような…)

ミラはナナシを床に横たえると安堵の溜め息をついていた。

一方助けられたナナシは

「……んぁ?……痛てて……ミラ?」

「そうよ、立てる?」

「あぁ…何とかな…てか頭がズキズキしやがる。何があったんだ?…おっ…何だ帰ってきてたのか爺さん」

意外にピンピンしていた

3．0　???（後書き）

はい、今回は何だか滅茶苦茶でしたね

この作品では原作の話はフレームだけで、今回のように中身が変わることが多いと思います。

時々、原作完全崩壊をする可能性もありますが…

補足

ナナシの魔力量は高いですよ。

ただチート・最強の男ではありません。

フェアリーテイルにはもっと凄いオヤジやマカロフがいますからね

ただケットシェルターではローバウルの次に強いかもですね（作者はローバウル・ウェンディ・シャルル以外の構成員は名前しか知らないですから…）

ちなみに今の所、ナナシ以外のオリキャラ登場予定はありません。

ただ名前が付かないモブキャラは出ます。

長々と失礼しました。

ではまた次回お会いしましょう

3．1　自由…（前書き）

今回は調整しましたが、ストーリー構成が変かもしれないです。

何時も通り話は亀です。

では、どうぞ

3．1　自由…

フェアリーテイルのギルド内にて。

「……よっと……」

ギルドの真ん中で横たわっていたナナシはミラに支えられながら立ち上がる。

そして光の灯った赤い目をギロリと動かし入口に立っている小柄な老人を見て喋り出した。

「爺さん、何時帰ってきたんだ？」

「今し方、帰ってきたところじゃ」

「お帰りなさいマスター♪」

「うん♪」

そう話しながらマカロフはナナシ達の所に歩いてくる。

「どうでしたか、諮問会は？」

「もうコリゴリじゃわい」

「まぁ、アイツらの相手は疲れるからな」

「えぇ!?（この人達、何事もなかったように会話してる!?）」

ルーシィが驚いている間に他のギルドメンバーも、最初は唖然としていたが既に普段通り会話をし始めていた。

やはりこのような喧嘩は日常茶飯事のようだ。ただ少しだけイレギュラーもあったようで、今日はナナシとミラの話題が多い。

そんな一人驚いているルーシィにマカロフが気付く

「おや、新人りかの？」

「ルーシィ、この方がフェアリーテイルのマスター、マカロフさんよ。」

「あ、えとルーシィです。よ、よろしくお願いします！（忘れてた！？試験は何があるの！あぁん～どうしよう～）」

「うん、これからよろしくね」

マカロフはカウンター近くにいたルーシィに気軽に答えると、隣で頭を押さえているナナシに話しかけ始めた。

（え!?こんな簡単にギルド入れるの!?面接は!?）

…

…

…

…

…

…

…

??…一体何があったんだ?何でこんなに頭が痛いんだよ…確かレビィと会話してから…?…その後どうしたんだっけ?

「ほれ、ナナシ。評議院からお前さんにじゃ。それとこれは魔導士ギルド連盟からだの」

「おぉ、ありがとよ」

まぁいいか…てかコイツらまた随分暴れたなぁ。ギルドの中が滅茶苦茶だぞ…床凹んでるし

…まったく何時までも変わらない奴らだ。昼飯の前に片付けを手伝

ってやらないとな

「地方ギルド連盟の定例会までに提出するようにな」

そう言うと爺さんは手に持っていた書類の束の半分を私に渡すと二階にある手すりへとジャンプした。

今から説教と説法か？まぁ…私はこの書類を読まないとな。定例会までに提出なら時間がないからな。

だが、ギルドの真ん中で読むのは流石に引けるな…壁側に移動しよう…って

「何だミラ？もう大丈夫だから離していいぞ」

腕を掴まれては動けないじゃないか…

「…どこ行くの？（忘れてた…私怒ってたんだ）」

「いや、あっちの壁際辺りまでだ。一緒に行くか？」

「ふん（まだ許してないんだから）」

ふんって…何で…コイツは怒ってんだ…意味が分からないぞ……ふむ…だが……それにしても

「やっぱりミラは可愛いな。むくれている顔も最高だ」

「な!?そ、そんなこと言っても許してあげないんだから!!」

「ぐふぅ!?」

いきなり腹パンだと!?バカ野郎!空きっ腹にその拳はキツいぞ!
てか私は何かしたのか!?

……むっ……ふむ…だから頭が痛いのか?

つまり何かミラを怒らせるようなことをしてアイアンクローをされたんだな。

気絶するまでアイアンクローって…ミラ…恐ろしい女!?

…しかし何だか理不尽に感じてきたぞ…可愛いと誉めたのに殴られるとは!?

今回は私が何をしたか覚えてないから尚更だ…その対応はあんまりだろうが…

「ちっ…痛てぇな…いきなり殴りやがって……許してくれないならそれで結構…もうお前のことは知らん…離せ…」

「…ぁ…ゃ……やだ……いや!」

私はふてくされた顔から一転して泣きそうな顔に変わって嫌がるミラの手を無理矢理、腕から放す

「さようならだ…」と言って壁際へ

「…うそ…やだ!行っちゃきゃ!?」

移動する振りをして駆け寄ったミラをお姫様だっこ…ふっ勝った。見たか!我が演技力!

「ふむ…やっぱりミラは可愛いな。近くから見ると尚更だ」

「ぁ…ぁぅ…(ま、また騙された…ばかばか…あ…皆見てる!?)」

しかし周りの視線が熱いぜ…殺気がビンビン飛んでくる…ここフェアリーテイルだよな?

それに…何故カナ達からも飛んでくるんだ!?

爺さん!見てないで早く話を始めろ!

「や!?ナナシ!お、降ろして!やだ!」

HAHAHA、顔真っ赤で恥ずかしがる姫様の誕生だ!うむ、眼福、眼福

私を殴った報いを受けよ!

「ほれ姫様、壁際まで連れて行ってあげよう。ちゃんと掴まらないと危ないぞ」

「ば、バカ…」

それから私の首に両腕を掛け、恥ずかしそうに首元で顔を埋めるミラを降ろすことなく壁際まで移動した。

いやぁ…周りからの視線は耐え難いモノだったがやったかいはあるな。ミラなんてまだ顔真っ赤だぞ、可愛いなぁ

「……（ばかばかばか）…」

と言うか降ろした後から無言でポコポコ叩いてくるんだが…地味に痛いから止めてくれないか…

「ま～たやってくれたの。貴様ら…見よ評議会から渡された文書の量！」

おっやっと始まったか

皆の視線が爺さんに向いたな。よし、いや待て…一様…魔法を使って

【影壁】

上下左右を漆黒の壁で包み込む

「いただきます」

散々可愛らしい姿を見せつけられて私が我慢できようか！？

「え？…ん…ちゅっ…ぁ…ナナんむぅ…ちゅぷ…は、んむっ…ん、ん、んぅぅ…ら…めぇ…みられちゃ…」

「誰も見えねぇし音も聞こえることねぇよ。だからいいよな？」

「ぁ…は、むっ、ふっ、んぅぅんっ！んく…んっ…あ、んちゅ…ちゅぷ…は、んっ…ぁ…ちゅぅぅ…ぁぁちゅ…ぁ…んちゅぷ…んむっ…ん、ん、んんんん～！！！」

…

…

…

「はぁ…ん…はぁはぁはぁ…ナナシのえっち…」

「うむ…御馳走様」

ふぅ…今はこれだけにしておこう。今日の夜が楽し……はぁ…書類を処理しないといけないんだった…ミラも服をちゃんと着たようだし、魔法を解除してっと

「我々の内に流れる気の流れとそして自然界に流れる気の波長が合

わさって初めて具現化されるのじゃ。」

おぉ…説教は終わって説法の時間に入っているな

さて

魔導士ギルド連盟から貰った書類でも読むかな。評議院の方は後で一人の時に見るほうがいいだろう…影の中に入れてっと…よし

ふむ…これが魔導士ギルド連盟への加入書か……この書類の量を定例会までに提出だと!?多すぎるだろうが…

…いや書類の割りには書くことは少なそうだな。これならすぐに終わるか?

まったく……まさかケットシェルターがギルド連盟に加入していないとは思わなかったぞ。事実上、闇ギルドじゃねぇか!

マスターめ、何が申請するの忘れていただ!しかも私がこの仕事をしなきゃならんだと!?

やることがいっぱいで頭が…って既にズキズキと痛かったな。さっきまでは痛みが消えていたのにまた痛み出してきやがった。くぅ…意識すると…また…

「ナナシ…」

むっ…私に寄りかかって惚けていたミラが復活したようだ。

しかし…まだ目はとろんとしているな。それにどこを見てるんだ?

「ん？どうしたミラ？」

「…それ…何？…クエストの話？もうクエストに行くの？（絶対行かせないから）」

「あぁ…ちげぇよ。心配するな、そんなもんじゃねぇ」

「…ホントに？」

心配そうにミラがこちらを見てきた。てか私はまだ信用されてないのか

…いや当たり前か…二年も待たせたんだ…信用なんて０％に下がっているだろう。

それより何て顔してんだよ。書類を影に入れてっと

「ほれ来い」

「……ん……」

ミラの細い腰に手を回し抱き寄せる。よほど心配？しているのか。すぐさま、ぎゅっと抱き締めてきた。

「……もう居なくなったら……ダメよ……」

「っ！？……あぁ大丈夫だ……さっきはすまなかったな……冗談が過ぎた。私はずっと側にいるから安心しろ」

「……絶対よ？」

「わかっている。もうお前を二度と一人にはしないさ。死ぬまで一緒だ」

そう言いながら軽くミラと口付けする。

「……ん……今回は許してあげる……」

あぁ……さっきはちょっとやり過ぎた。別のやり方にすればよかったな

反省せねばな……

そう考えながら私は抱き付いてくるミラの頭をゆっくりと撫で続けた

「それは精神力と集中力を使う……いや己が魂すべてを注ぎ込むことが魔法なのじゃ。」

しかし定例会か……

と言うかマスターよ、初参加なのに代理に行かせるって…どんだけ興味ないんだ。まぁ任された限り頑張るが…

しかし問題がある…ナツとウェンディをどうするか…だな。私は色々と忙しくて一時クエストに付いて行ってやれないぞ。ナツとハッピーだけではウェンディとシャルルは任せられない…どうする…

「上から覗いている目ん玉気にしてたら魔道は進めん。評議員の馬鹿者共を恐れるな!!」

婆さんの言うように運命が動き出そうとしているなら、自ずとドラゴンスレイヤー同士は引かれあう…のか?

…ならそれまでギルドに留守番させる?
それとも誰かとチームを組ませる?

「自分の信じた道を進めぇ!!!それがフェアリーテイルの魔導士じゃ!!!!!!」

【おおぉぉぉぉ!!!!!!】

「ナレス!…ぁ…(ミラさんまた抱き締めてもらってる…いいな…)」

っと……皆が声を荒げる中、ウェンディが近付いてきた。しかし固まっているぞ?

「あ…?どうした?」

「あ…えと…ま、マスターマカロフって凄いね！私はケットシェルターだけどフェアリーテイルの皆のように自分の信じた道を頑張らないと…って思ったの！」

……はぁ……私は馬鹿だ……大馬鹿者だな……今日は反省することが多いぞ

「……あぁ…頑張ろう。お前が困った時は私が助けるからな。やりたいようにやればいいさ」

「うん（撫でられちゃった♪）」

ウェンディの道だ…ウェンディによるウェンディだけの……そうさ…私はただ…この子の歩く手伝いをすればいいんだ。

私だってマカロフ爺さんやポーリュシカ婆さん…ミラやカナ、エルザ達に手伝って貰いながら自由に歩いてきたんだ…

何を勝手にこの子の道を決めてんだよ。ナツと仕事にいかせる？留守番させる？

自惚れてんじゃねぇぞ私よ！この子の道はこの子だけのモノだ！

マスターもできる限りと言っていた…なら私はウェンディを見守ろう。

私だって自由に自分の思うままに生きてきたんだ……そうさ、私も大人になったんだ…次は私が…

それにギルドを出る時に決めたじゃないか

危なくなったら助ければいい…ってな…

……しかし……

「……運命か……」

「ナナシ？」「ナレス？」

「おっと…何でもねぇよ。ほらウェンディ…皆の片付けを手伝うぞ。

それとミラ、終わるまでに美味しいご飯作っていてくれよな…腹が減ってしょうがねぇ」

抱き締めるミラを離しながら言う。

「えぇわかったわ♪」

「うん♪」

……運命か……

この先に何が待っているのやら……

まぁ当たり前だが平坦な道程ではないだろう

しかも…婆さんの予感が当たるなら…この子達ドラゴンスレイヤーの道は

……その時…一介の魔導士にすぎない私は……

「ナレス、早く片付けしようよ?私もお腹空いちゃった」

「……あぁ……」

まぁ深く考える必要はないな…今はやれることをやればいい。

とにかく…後手後手にならないように情報収集と訓練を念入りにやらないとな

「ナレス!聞いてるの!」

「おっと!どうしたウェンディ君…そんなぷんすかして!顔にシワができるぞ〜」

「し、シワなんて出来てないもん！」

なんと…何時の間にやら、ぷんすかしているぞ。うむ、ならばウェンディの頬を両手で

「あぅぅぅ～いひゃいよ～」

「おぉおぉ、伸びるね。次はそんなに怒ったらダメだぞ」

さぁ早く片付けを終わらせて飯でも食うかな

腹が減っては何も出来ないからな

3．1　自由…（後書き）

はい、今回の話はこれで終わりです。ナナシの考えが大半でしたね。しかも反省ばっかりの回でした。

まぁナナシは完璧超人じゃないですから……ってそんなことは分かり切っていますよね

それと今後ちゃんと活躍しますよ。

魔導士としては優秀でやる時はやる男と言う設定ですから

感想等お待ちしております。

今回は作者も果たしてこれで良いものか……と悩みながらの執筆でしたから纏まりが悪かったですね。

ただマカロフの説法の所はマカロフがセリフを言っている間にミラと会話したり考えごとをしていると思っていただければ幸いです。

どう書けばいいか分からなかったですからね

マカロフのセリフを細かく飛び飛びに入れてもよかったんですが…：何だかナナシの考えの途中に入ってくるのは読みづらいし、うざったらしかったので……

次はバルカン編か、行く直前で終わるかですね

毎度、亀ストーリーですいません

ナナシやウェンディ、シャルルと言うイレギュラーを物語に上手く参加させようとしたら、作者の力量じゃ上手にキンクリできないんですよね

特にナナシはオリキャラですから、今回のように彼の考えを書かないと薄っぺら人物になりそうで……

作者の自己満足に付き合わせてしまい申し訳ございません。

今回は本当に長々と申し訳ございませんでした。

ではまた次回お会いしましょう

3.2 信用

あれから一時間後

現在はギルドメンバー総出で行われた片付けが終わり、ギルド内がいつも通りの騒がしさを取り戻している昼過ぎの時間である。

そんなギルド内の一番奥の端っこにあるテーブルには三人の男女がいた。

テーブルには大量の料理が並べられ唯一の男であるナナシが美味しそうに食している。

「うまし！！」

…

…

いやぁ、やはりミラの作った料理はうまい。マグノリアにある料理店の中でも、ここは上位に入るぞ。隠れた名店だな。それを家でも毎日食べられる私は幸せ者だ

しかしマグノリアにも三年前より名店が増えている可能性がある。一度食べ歩きを敢行しないといけないな……だが今は金がない…切実な問題だ。

評議院よ、早く契約金を振り込め！それが来ない限り外で買い物することもできないじゃないか！

おっと…それより今は飯だ飯を

「ナナシ……がっつきすぎ。もう少し落ち着いて食べな」

むっ…誰だ……

「なんだカナか……あれ？何でお前が隣に座っているんだ？ウェンディはどうした？」

「ナナシ、私もいるよ」

隣には酒をチビチビと飲んでいるカナが、正面にはレビィが座って頬杖を尽きながら何やら嬉しそうに此方を見ていた。

何で嬉しそうなんだ？

あぁ…腹が満腹になったんだな。あるある、あの満腹時の幸せな気分といったら……

「ウェンディ達はカウンターの方にいったよ。あんたが夢中になってご飯を食べてる間にね」

何だと……そんなに時間が経っていたのか？

「それよりちゃんと反省したの？ミラが許しても私はまだ許してないよ」

な…に……カナも怒っているのか？私は一体何をしたんだ……そう言えばミラをお姫様だっこした時、コイツらからも殺気が出ていたな。

やはり…あのやり方は不味かったか。さすがにずっと待っていてくれたミラにする演技ではなかったな

「あぁ…ちゃんと反省しているよ（別のにすればよかった……）今では後悔している」

「…ホントに？（珍しく反省してる？……ならここできっちり言っておけば当分、私達に嘘や浮気することないね）」

「当たり前だ！ホントのホントだ！今回のことはすまないと思っている。今後は絶対しないさ」

今後はしっかり考えないとな。冗談が過ぎると愛想をつかされるかもしれない。

気を付けなければ

そんな見当違いなことをナナシは考えながら、隣に座っているカナの方を向き真剣な目でカナを見つめた。

「ま、まぁ、そ、それなら許してあげる…」

するとカナはナナシの曇りなき眼……ではなく曇りある眼で見つめられたにも関わらず、顔を真っ赤にすると目をキョロキョロさせ簡単に許してしまった。

「そうか！わかってくれたか。さすがはカナだな（何で顔真っ赤なんだ……可愛いぞ、この野郎！）」

嬉しそうにナナシは言うとカナを抱き寄せすぐさま口付けをしようとする

「ちょっ…ぁ…ここじゃダメ…帰ってから…」

「大丈夫だって、ここを見るやつはいないからさ。魔法も使うし」

「…もう…ち、ちゃんと魔法を使いなさいよ」

「あぁ…わか「お、おほん！！二人とも私がいるんだけど？」……oh…ナンテコッタイ…」

忘れ去られ、尚且つイチャイチャしている姿を見せつけられたレビィはもの凄い見幕になっている。

それを見たカナはすぐさま、ナナシは名残惜しそうに手を離しなが

ら離れた

「……ふ、二人ともイチャつくなら家でやってよ（ナナシのバカ）」

「何だ？羨ましいのか？だったらお前も彼氏を作れぶぅ！？」

「バカナナシ！もう知らない！」

ナナシのデリカシーのない言葉を聞いたレビィは一発、頬にお見舞いすると怒りを露わにしてどこかへ歩いていった。

な…何故だ…何故、私が叩かれなきゃならないのだ。

「…なして？」

「はぁ……レビィもなの？（ナナシ……何時引っ掛けてきたのよ…）」

と一時の間、頬を押さえながら考え事をしているナナシとその姿を呆れて見ていたカナの姿があったそうな

しかし、時間が経つと

「まぁ気が立っていたんだな。（女はコロコロ変わるからな）」

そう結論付けると食事を再開するナナシであった。
そしてまた時間が経ち
食事を終えたナナシは書庫に戻り黙々と作業をしていた。

その時

「…ナレス」

何やら決心した顔のウェンディがやってきたのである。

…

…

食事を終えてから書庫に戻った私は評議院から届けられた書類を見ている。

そんな時、何やら真剣な顔をしたウェンディがやってきた。

「ん？ウェンディか…どうした？」

「い、今からお仕事に行ける時間ある？」

「ないな。やることでいっぱいで手が離せねぇよ。クエストに行きたいのか？それなら昼間に言ったようにミラから」

「ぅうん違うの…えっとね…マカオさんがね…居なくなって…それ

でねロメオ君が探してきてくれって…」

??…マカオ?そういや会ってないな。と言うより話が見えないんだが……

てかロメオクンって誰だ?……あぁ…ロメオ君か。ウェンディが君と付けることから同い年もしくは年下の…男……ま、まさか…

「か、彼氏ができたのか……ダメだ!お前にはまだ早すぎる!お兄さんは認めませんよ!連れて来ても会いませんから!」

「ち、違うよ!」

なんだ違うのか…よかったよかった。しかしロメオ君とやらは要注意人物に格上げだな。脳内メモメモ

それにしても

「話が見えないぞ?もうちょっと落ち着いて話してみな。ほれ隣に座るか?」

「ぅ、うん」

私の隣の席に載っていた蔵書を床に放り投げウェンディを座らせた。

……怒ってこないな。何時もなら［本を手荒に扱ったらダメだよ］とか言うんだがな。

それだけ真剣だと言うことか？もしくはちゃんと思考できてない？

…いや、さっきはキッパリと否定したからな。思考はできているか

「あのね…」

おっと、ちゃんと聞かねばな

…

…

…

「……と言うことなの」

ふむ……なるほどな。マカオが3日で戻ると言った仕事から一週間も帰ってこないのか。

それで心配したマカオの子供であるロメオとやらが捜索を願いでて、それをカウンターに座って聞いていたウェンディが探しにいきたいと…

既にナツも出発したらしいな

ただなぁ……クエスト内容がハコベ山でのバルカン狩りだ。通常、ハコベ山まで半日掛かる……そして狩りをすると1日もしくは2日って所？

だが何らかのアクシデントがあれば討伐に一週間掛かってもおかしくはない

相手も生き物だからな、何時も同じ場所に現れるとは限らないのだし…

これが月単位での未帰還なら捜索隊を送ってもいいんだがな。

だからロメオとやらには厳しいが、ここはマカオを信じて待っていよう……と言いたい所なんだが

「……行くか、マカオを探しに…」

「ホントに!?」

「あぁ…ウェンディは探しに行きたいんだろ？だったら行こうじゃないか。」

この子が自分から言うのは良いことだ。まぁ…自分と重ねているんだろう。

理由はどうであれ、ここに来て初めてのクエストとしては最適だろう。近いし…まぁ正規の依頼ではないがな。

「うん♪…ぁ…で、でもお仕事はどうするの？」

今回は着いて行くことにしよう。心配だからな

「大丈夫だ、移動中に処理するよ。それよりもシャルルと家に帰って着替えてこい。ハコベ山は極寒の地だからな。その服じゃ凍え死ぬぞ」

今、ウェンディが来ている服はノースリーブのワンピースだ。その格好でウェンディがハコベ山に登るのは自殺行為だろう

そうハコベ山は一年中、雪が吹き荒れる極寒の地である。まぁそれでも山頂まで登れば雲の上だ、御来光を眺めることが出来るから意外に登山者が多い。

まぁだからこそフェアリーテイルにバルカン討伐依頼が来たんだろう。奴らは人間を…

「じゃあ、すぐに着替えて来るね！……きゃあっ！？あぅぅ～」

……また転けた……

本当に今後、ウェンディとシャルルだけでクエストに行かせていいのだろうか……非常に心配になってきたぞ。

まぁクエストを承認するのはマスターかミラだから危ない仕事はさせないだろうが……自分の身を自分で守れるのか？

しかも貴重なドラゴンスレイヤー＋治癒魔導士だと知られたら攫われるんじゃ

……はぁ…薬草学だけじゃなくて攻撃手段も教えるべきだったかな。

「ほれ、大丈夫か？上まで一緒に行くぞ」

「うぅぅ～」

むっ……そう言えば今回はナツがいるんだったな。ならばナツに教えて貰えないだろうか

ドラゴンスレイヤー同士教えあえば昇華できるかもしれない……たぶん…

扉を開けてっと

ふぅ、相変わらず騒がしいギルドだ

「どうやら行くことに決めたようね」

「ん？おぉ、シャルルか…ほれウェンディを連れて家に一度戻れ。私はここで待っているからな」

「どうして帰らなきゃいけないのよ？」

「それはウェンディに聞くがいいさ、じゃあ待ってるからな」

「うん、行こうシャルル」

とウェンディとシャルルの二人を見送った私はカウンターへと行く。
ちょうどミラとカナがいるからな、出掛けることを言わないと……
後で地獄を見そうだ。昔、何も言わずにクエストに行った時は酷かったからな。

い、今でも思い出す……あのトリプル攻撃はヤバいぞ。ガクガクブルブルレベルだ…

早く出掛けることを言わねば……って誰かと喋っているな。ありゃ確かルーシィだったけ?
何かどこかで見たことあるんだよな。それも昔に見たような……
まぁいいか…話している途中で悪いが割り込ませてもらおう。

「あら、泊まるとこがないならウチに来る?家が決まるまでは居ていいわよ?」

「いいんですか!」

「えぇ、ハコベ山から帰ってきたら一度ギルドに寄ってね」

む…どうやらルーシィもマカオを探しに行くみたいだな。ちょうどよかった…ルーシィは女だからな、ウェンディとシャルルの二人と

話が合うだろう。

おっと目的を忘れる所だった

「ちょっくらごめんよ。ミラ、カナ今いいか？」と私はルーシィとカナの間の席に座り二人に話し掛ける

「あ…（ミラさんの彼氏さんだ。さっきはちゃんと顔見てなかったからわからなかったけど…凄く格好いい人ね。ミラさんいいなぁ…あれ？でも週サラのイケメンランキングで見たことない…）」

「どうしたの？」

「何？」

「マカオを探しに行ってくるよ」

「……」「……」

え？どうして考えこんでいるんだ。まさか……

「却下って言いたいところだけど「ちょっと待ちな」

却下が候補に上がっているだと……それにどうしてそんなに真剣な顔して話し合っているんだ

……まさかクエストに行かせて貰えないほど私の信用は下がっているのか……一大事じゃないか、自由に飛び回れないかもしれないぞ

と私がうなだれていると…なんと…目の前にスペシャル・フェアリーテイル・ジュースがあるではないか。懐かしいな

「うむ…うまし」

「あたしの!?」

「ん?あぁ…ほれ、返してやろう」

「我が物顔で何言ってるんですかって全部飲んでるし!?（この人、自由過ぎるでしょ!?）」

「御馳走様」

まったく…一々うるさい女だ。しょうがないではないか、私の目の前のちょっと横に置いてあったのだから…間違えて当然だ

「あぁ～高かったのに～ってちょっと待って…これって間接…」

「ルーシィ?……大丈夫か、顔真っ赤だぞ?」

コイツ酒に弱いのか?顔が赤くなってるぞ。まぁカウンター辺りは酒の匂いが強いからな。

「…ど、どうしよう…あたし…」

匂いだけで酔う奴がいると聞いたことあるが本当にいるとは……あぁ……だからジュースなんて飲んでいたのか。

「おいホントに大丈夫か?何なら向こうに連れて行ってやるぞ」

「あっ（近い近い近い）…大丈夫ですから少し離れてください！ってどうして、あたしの名前知ってるんですか?」

は?……ハルジオンで挨拶しただろうが……あぁ……そうか、コイツは知らないんだったな

…

…

…

「えぇ!?ナレスさんだったんですか！（フードを取ったらイケメンってどこの御伽噺よ！）」

「まぁそう言うわけだから今後もよろしくな」

と言いながら驚いているルーシィの頭をワシャワシャと撫でてやる

うむ、柔らかい

「ちょっ撫でるの強すぎ！し、しかも何で撫でるの！？ここは握手じゃ…」

「おや、失敬。まぁ挨拶は人それぞれさ。おっ…そうだった…お前もマカオ捜索隊に参加するんだろ？ウチのウェンディとシャルルも参加するからよろしくな」

私？私は今ゴーサイン待ちだ。まぁダメだったとしてもルーシィがいるから何とかなるだろう。新人でもフェアリーテイルの魔導士なんだからな

「あ…やっぱりウェンディも行くんですね……」

「あぁ…あの子も何かしら思う所があるのだろうよ……てか敬語は止めろ。まぁ、お前もウェンディみたいに使いたいと言うなら別だがな」

二人は会話し続け、その後、ルーシィは何やら考え事をし始めたようだ。

その様子を見るのに飽きたナナシは

「…ミラどうする？」

「ハコベ山でしょ？大丈夫だと思いたいけど…」

隣で何やらコソコソと会話しているミラとカナの会話を聞こうと動き出した

が、その時

「…それにしてもドラゴンスレイヤーか……」

ルーシィが話し始めたため、ナナシは後ろ髪が引かれつつもルーシィとの会話に専念する

「あ?ドラゴンスレイヤーがどうした?」

「いやね…ドラゴンに育てられたって想像できないなって」

「あぁ…確かにな。初めて聞いたらまずはそこに疑問を持つよな。私もそうだった」

だがな…とナナシはそこで話を切る。

そしていつものひょうひょうとした顔ではなく、どこか寂しそうな顔になるとルーシィを見て再び話し出した

「実は私の育て親もドラゴンではないが九尾の狐でね…だからナツ達がドラゴンに育てられたことは本当だろう」

「え!?」

いきなりのカミングアウトに、驚くルーシィを置いてナナシは語り始める

「昔は私もドラゴンスレイヤーと対をなすキュウコンスレイヤーとして名を馳せたものさ…まぁ昔の話なんだがな」

そう言うと何かを思い出すかのように目を閉じる

その姿を見たルーシィは

「キュウコンスレイヤーなんて居たんだ……世界って広い……あたしの知らないことだらけだ……」と呟く。

そんなルーシィに再びナナシが話し掛けようするが邪魔が入った。

「ルーシィ、ナナシの話は全部嘘。騙されちゃダメよ。キュウコンスレイヤーなんて世界のどこにも存在しないわ」

「え？」

「嘘？」

「九尾が親とか初耳だしね。また新人を騙して…ナナシ…いい加減にしな」

「ふっ」

「何そのどや顔!?（騙された!?）」

ふむ、ルーシィは騙しやすいな。これからが楽しみだ…ふっふっふ

「そう怒るなよ私なりの歓迎の挨拶なのさ、さっき言っただろ。挨拶は人それぞれなのさ。それと今の私はケットシェルターだがあえて言わせて貰おう…」

「な、何?」

警戒するルーシィを見てナナシは苦笑する。

そしてルーシィの右手に付いているギルドマークを見て少し目を細めるがすぐにニヤリと笑う顔になり

「ようこそ、フェアリーテイルへ…今日からよろしくな。ルーシィ」

そう言って優しく、優しくルーシィの頭を撫でた

その後、顔を真っ赤にするルーシィと般若のごときオーラを放っているミラとカナが居たそうな

（（そろそろナナシの撫で癖をどうにかしないと））

3．2　信用（後書き）

はい、今回はこれで終了です。相変わらずの亀ストーリーですね

しかも今回は眠気と戦いながら書いたので、話がごちゃごちゃになっていたと思います。

次回はバルカン編ですね1話で終わる予定です。

感想等お待ちしております。

では、また次回お会いしましょう

3．3　極寒の地（前）（前書き）

亀ストーリーで展開している本作品

……1話でバルカン編が終わるわけなかったんです。

と言うわけで、すみませんが前後に分かれます。

では、どうぞ

3．3　極寒の地（前）

とある晴れた日

マグノリアの街から山の麓までは太陽が燦々と輝き、蒸し暑い夏を象徴していた。

しかしその山の麓より上は一年中雪が積もり、登れば登るほど多くの雪が吹き荒れる奇っ怪な場所となっていた。

そんな雪山に一人の……いや一匹の九尾がいた。
その九尾は赤い目に漆黒の毛を持っており、特に暖かそうな漆黒の毛は極寒の地での行動を助力しているようだ。

どうやら何かを探しているようでキョロキョロと頻繁に顔を動かしている。

「どこいったんだー！！子供が待っているんだぞー！！！」

九尾は大きく叫ぶが、ただ山彦が返ってくるだけであった。

「本当にここにいるのかよ。……一度帰って……いや……そんなことをしていたら……くっ、こうなったら最後の手段だ」

何やら独り言を呟くと九尾はおほんと咳払いした後

「使いたくなかったがしょうがあるまい。私が唯一知っている呪文だ。」

九尾は呪文を口ずさみ出した。

「るーるるるる♪るーるるるる♪」

「るーるるるる♪るーるるるる♪」

と、九尾が唱えると

なんと、どこからともなくもう一匹の九尾が現れ

「お父さんだコン」

「やったコン。成功だコン」

親子は再会できたのである。

ナナシ・ネームレス作ー「東洋の呪文」第一章　完

……

……

……

……

ある目的地を目指して平坦な道を走る馬車の中では、４人と二匹からなる男女がいた。

裸の上にベストを羽織り鱗模様のマフラーを巻いた男の一人ナツは気持ち悪そうに床に寝転がり、一匹の青猫ハッピーに介抱されている。

それに対して、もう一人の漆黒のスーツを着た男ナナシは必死に四角い紙を動かし残りのメンバーに語りかけていた。

その中で一人の少女ウェンディは髪型こそ同じであるものの、何時ものワンピースではない。

赤を基調としたジャケットを羽織り胸元にはオレンジ色のリボンをしている。

そして下には太もも中間までの黒色のスカートと、まるで乙女の柔肌を守るかのように下半身を覆い尽くす黒いストッキングを履いていた。

実に暖かそうな格好である。また白色の猫であるシャルルも同様に白いYシャツにオレンジ色のネクタイ、黒いスカートに黒いストッキングをしている。

それに対して、もう一人の女ルーシィは白色を基調としたノースリーブの服に青いミニスカートという薄着の格好である。

彼らは実にバラバラな格好をしている者達の集まりだ。

だが女達は揃って呆れた表情である。

「第二章の始まり始まり～～それから変幻自在の九尾達は親子揃っ

て美男子に変身し、人間の女達を騙しては□□し騙しては□…」

「はい、止め止め」

「あっ…あにすんだよ。シャルル！今からめくるめく世界が…」

「駄・作」

「ひ、ひどい！？」

…

…

ナナシとシャルルが口論している間、ルーシィとウェンディの二人が話し出す

「えっと……つまり今のは何だったのかしら……本当に実話？……いや…違うわよね」

「はい、所々に変な箇所があったのでナレスの嘘話ですよ。時々やるんです。まったく……」

「真剣に見て損した気分だわ……ホント…ミラさんの言った通り話半分に聞く必要があるわね」

二人から呆れた目で見られたナナシは狭い馬車の中で立ち上がり拳を握って反論する

「ちげぇよ！実話も入っているんだ！物語風だから脚色しただけに決まってんだろうが！」

「一体どこが事実なのよ」

これまた呆れた顔のシャルルに聞かれると

「最後あたりの呪文は本当らしいぞ。東洋の書籍に書いてあった」

ナナシはどや顔で言う。

だが

「「９９パーセント脚色じゃない！それって実話じゃないわよ！」」

ルーシィ、シャルルの二人から厳しくツッコミを入れられるのであった。

…

…

なんでぃ、なんでぃ

いいじゃねぇか……物語なんだから脚色してもよ

「あれ？あたし達なんで紙芝居とか聞いていたんだっけ？」

おいおい目的忘れてるんじゃねぇのか…私達はマカオ捜索隊だろうがよ

「マカオさんを捜索するにおいて効率の良い探し方はないかという話からですね」

うむ…さすがはウェンディだ。よく覚えていたな

「まったく……懲りない奴ね…全く役に立ちそうにない話をして！時間の無駄よ。それよりギルド連盟に提出する書類を仕上げなさい」

…酷い言い張れようだ。

「もう終わったよ…お前達がぐーすか寝ている間にな。」

そう、現在は昼だ。昨日、六人で出発した後、日が沈むと共に野営してまた朝出発という形を取り今にいたる。

そして私はウェンディ達が寝ている間にギルド連盟の書類を書き終えるという大業を成し遂げた。

おかげで非常に眠い。書類の方はマスターに見てもらい修正したら終わりだろう。

よく頑張ったよ私…。早くマカオを見つけて寝たい……てか、そろそろだな

……それよりルーシィはその服で大丈夫なのか？薄着過ぎないか？

ちゃんとミラからマカオの話を聞いたんだろうか……

私がそう考えていると今まで順調に動いていた馬車が歩みを止める。

「止まった！！！」

それと共に床でグッタリと沈んでいたナツがガバリと起き上がった。

ホントにコイツは乗り物に弱いな。

ウェンディが【トロイヤ】と言う、乗り物酔いに効く魔法を使えば馬車の中でも元気になるんだろうが

シャルルが使うことを止めていたな。まぁ馬車の中は危険がないしな。使わなくてもよかっただろう。

それに今回はもう乗ることはないから大丈夫だな。あぁ…やっと着いたか

「どうやら着いたみたいだぞ」

私はそう言いながら外へと繋がる扉を開ける。その瞬間に大量の雪と共に冷気が室内に入ってきた。

おぉ！目が一瞬で覚めたぞ！

「ナナシ！着いたのか？」

覚醒した私に元気いっぱいのナツが話しかけてくるが

「あ「うぉぉ！ハッピー！マカオを探すぞ！！」……」

私が返事をする前に外へ飛び出していった……人の話は最後まで聞きやがれ！

「あい！！……ところでシャルル…魚いる？」

「結構よ「じゃあ、オイラと」ふんっ」

「…オ、オイラの何がいけないんだよ～うわ～ん！ナツぅ！」

そう言いながら、またもやシャルルに拒否されたハッピーは外に飛び出していった。

シャルルよ、魚ぐらい貰ってやれよ。ハッピーが不憫すぎる

「さぶっ！？雪！？」

「あれ？ルーシィさん知らなかったんですか？」

「え？何コレ！？いくら山の方とはいえ、今は夏季でしょ！？こんな吹雪おかしいわ！！」

ウェンディ達も外に出たがルーシィが何やらキーキー騒いでやがる。ミラから聞いたんじゃなかったのか

…新人よ…出かける前に情報は集めておこう。って私が言ってやれ

ばよかったな。まぁ今更遅いか……そろそろ私も出るかな

ふむ…ルーシィは非常に寒そうだ。必死に手で体を暖めているな。
ウェンディとシャルルは……大丈夫そうだなって

「ウェンディ、ちゃんとバックは持って行けよ」

私は馬車内に置かれていたピンクが基調のオシャレな肩掛け用のポーチをウェンディに放り投げる

「あ！忘れるとこだったよ。ナレスありがと♪」

うむ、ナイスキャッチ
結構重いはずなのに難なくキャッチとは……成長したな
そう考えていると何やら怒っているルーシィがやってきた

「ナナシ！どういうことよ！聞いてないわよ！」

「いやいや、さっき紙芝居で極寒の地だって話をしたじゃないか。
人の話はちゃんと聞いておけよ」

「あんな話で分かるわけないでしょ！？さ、寒すぎる～！」

ったく、ナツを見習えよ。元気にハッピーと喋っているじゃないか。

「我慢しろ…と言いたい所だがサービスだ、ほれ」

「わっ!?投げないでよ!」

私は影からフード付きコートを出すとルーシィに放り投げた。

何やら文句を言っていたが無視だ。

てかお前ら、勝手に進むな。

まだ業者に金払ってないんだぞ

「すんません…これ以上は進めませんわ…オラはどうしていれば…」

「あぁ、ここで十分。それに帰りは結構だ。自分達で何とかするからな。ここまでご苦労様」

そう言って運送代金を手渡し業者には帰って貰った。

運送代金?ナツの金に決まっているだろう。私は無一文だからな。

昨日の内に接収しておいたのだ。

しかし私が出さない代わりに帰りは九尾で送ってやらないと行けなくなった。

さて、帰りのことはもう考えなくていいな…真面目にマカオを探すか。

……ふむ…すぐに見つかると思うが一様、保険を掛けておくか

ナナシはそう考えると

【影蛇】

足元に黒光りする魔法陣を展開し、数十匹にも及ぶ漆黒の通常サイズの蛇を出す。

にゅるにゅると地面から蛇が出てくる姿を一般女性が見たら顔をヒクつかせるだろう。

ウェンディやルーシィも多少動揺すると思われるが既にナナシからは離れナツ達に続いて山を登っているので、この光景を見てはいない。

そんなワラワラと出てきた蛇を赤い目でギロリと睨んだナナシは

「まずはマカオを探せ。人間の男だ。それとバルカンはチェックしていろ。分かったな……では行け！」

ナナシが命令を下すと蛇達は頷き、すぐさま散開する。ずりずりと素早く地面を這いながら

「…これで大丈夫だろう」

「ナレス、早くマカオさん探しに行こうよ！！」

完全に蛇達が居なくなるまで見ていたナナシに山を登り始めていたウェンディ達から声が掛かる。

「へいへい、それじゃあ行きますかね」

声を掛けられたナナシはそう呟くとゆっくりと歩き出しメンバー達に合流する。

ナナシ達は歩き始めるが依然として辺りは雪が吹き荒れ、ごうごうと風の音が鳴り響いていた。

3．3　極寒の地（前）（後書き）

はい、続きはまた次回です。

バルカン編に1話以上も掛けるなんて、長々しく書きすぎですかね？

もっとポンポン飛ばしたほうがいいですか？

感想等お待ちしております！

ちなみに言い訳になりますが、原作フレームの話と言えど違和感なくイレギュラー（ナナシ達）を話に入れようとしたら長くなるんですよね

亀ストーリーで非常に申し訳ないです。

次回はどうなるか……特に戦闘は苦手ですから…

では、また次回お会いしましょう

3．4　極寒の地（後）

私達が山を登り始めてからすぐに

「や、やっぱり寒い～」

私が渡したコートを着ていたルーシィが叫ぶ。寒くて当たり前だ、それ安物だから……頑丈なのはフード部分だけだからな。

そしてルーシィは懐から一本の鍵を取り出すと、それを空に差し込み

「ひひ…ひ…開け…とと…時計座の扉」

【ホロロギウム！】

そう言いながら鍵を回した。すると突然、空から柱時計の形をした星霊が現れる。

「おぉ！見ろハッピー！」

「時計だぁ！」

「わ！ホントですね！」

「…何をするつもり？」

ふむ……ルーシィは星霊魔導士だったのか。ウェンディ達が驚かず

に、はしゃいでいるところを見ると私だけが知らなかったようだな。
しかしシャルルと同じだが、柱時計なんか呼んで何をするつもりだ。
ナナシとシャルルの二人が疑問に思っていると、ルーシィはホロロギウムの体内に入り、座ると膝を抱えるようにして暖を取り始めた。
そして
〔「あたし、ここにいる」と申しております〕
ホロロギウムがルーシィの声を代弁する
それを聞いてナナシとシャルルは溜め息をついた。
（（コイツ…））
その後、マカオのクエスト内容を聞いたルーシィは尚更ここに居たいと言い出すが
「お前は死にたいのか？」
呆れた表情のナナシがルーシィに問い掛ける。
そしてルーシィの返事を聞く前にナナシは足元で魔法陣を展開させると
漆黒の手を何本か、にゅるりと出し直立しているホロロギウムに絡みつかせる。そして水平にして高く持ち上げ始めた。

〔「な、何するのよ!?降ろしてよ!」と申しております!?〕

ナナシのいきなりの行動に驚いたルーシィとホロロギウムは動揺しているが、それを気にせずにナナシはまたもや喋る

「現在、私達は凶悪モンスターと呼ばれているバルカンが生息する山に来ている。

お前は柱時計の中に入っていて、突然現れたバルカンと戦えるのか？逃げることが出来るのか？

出来るなら結構だが……出来ないようなら外に出てこい。まだ死にたくはないだろう？

……まぁ決めるのはお前自身だ。よく考えるんだな」

そう言うとルーシィは思考したのだろう数十秒後

〔ごきげんよう～♪〕

ホロロギウムがそう言うとボフンという音と共に消えルーシィが現れた。

「きゃっ!?」

そして空中から現れたルーシィをナナシは漆黒の手で優しく抱き止め、自分の近くまで寄せる

「賢明な判断だ」

そう言ってナナシはルーシィの頭を撫でた。

「……はぅ……」

その行為にルーシィは顔を真っ赤にさせ

「どうしても寒いなら私に抱き付いていてもいいぞ（冗談だがな）」

目を見つめながら言われると

「抱きっ!?」

ルーシィはさらに顔を真っ赤にする。それを見てナナシは

……む…赤くなってやがる。コイツ…ウブだな。ふふふ……からかいがいがありそうだ。ん…そういや騙しがいもあったな。

……何て逸材だ!?ということを考えていた。

だが

「痛っ!?」

いきなりナナシの足が誰かによって思い切り踏まれる

「ナレス!早くマカオさんを捜そうよ!!」

その誰かとはウェンディであった。ウェンディはルーシィを降ろして痛がるナナシの腕に抱き付き

「早く行こうよ！早く！」

「お、おい落ち着けよ、今の私は足が！足が！」

痛がるナナシの腕に抱き付いたままウェンディは無理矢理ナナシを引っ張るのであった。

…

…

…

ルーシィがホロロギウムから降りて小一時間が立つ。

しかし未だにマカオは発見できずにいた。私の蛇達も同様だ。バルカンなら何匹か発見できたんだがな。

「マカオー！バルカンにやられちまったのかー！！」

「マカオー！！！」

先行しているナツとハッピーが叫んでいる。

やはりバルカンにやられた線の方が強いか?…もしくは行き違いになり下山しているかだ

望みは薄いが下山してくれているといいんだがな。

……だが今は最悪のケースを考えて動かなきゃな…

……ふむ…その前に

「なぁ…二人とも腕を放してくれないか。ちょっとナツ達のところに行きたいんだが…」

私の両腕にしがみついている二人に話し掛ける

「む、無理!離したらまた寒くなるじゃない!?」

…左腕にしがみついているルーシィは顔を赤くて本当に寒そうだ…しかし腕に当たる胸が最高だな!ボインボインじゃないか!ぐへへ

「や!私も寒いもん!」

ウェンディも少し顔が赤い……二人とも寒さで顔が霜焼けになってるな。帰って風呂に入ったら染みること確定だな

しかしウェンディよ……お前は掴む力が強すぎだ…その小さな体からは信じられないぞ

……お願いだからいい加減に離してくれ!私の右腕は限界だ!痙攣しそうだよ…と何度言ったことか。だが全く離してくれずに今に至

るわけだ……

……とにかく二人とも寒いんだよな。何かいい考えは……

おぉ！素晴らしい案があるじゃないか

…

…

「ほれ、二人でくっ付けば寒くないぞ。ついでにルーシィにはシャルルちゃん人形をプレゼントだ。これで暖まるだろう」

そう言ってルーシィにウェンディとシャルルを抱きつかせてあげた。

「ちょっと私は人形じゃないわよ！？」

「暖かい～！」

「むぅ…」

ウェンディは最初、嫌がったが何とか説得して離すことに成功した

よし、これで進めるな

おぉ、ちょうど別れ道だ。

「マカオー！いるかー！いたら返事を「ナツ、ちょって待て」ぐぇ！？何すんだよ！？ナナシ！」

私は先程から大声を上げてマカオを探しているナツのマフラーを掴み歩みを止める。くっ…私の右腕が…限界に近いぞ。

「ここから前方と上に登った方にバルカンがいるようだ。まぁどちらとも遠いがな……私が言いたいことは解るな？」

「あぁ！この際、サルにマカオのことを聞くしかねぇな！ハッピー！」

「あいさー！！ナツ、行くよ！」

私がそう言うと拳を拳に打ち付け気合いを入れたナツは背中に翼を生やしたハッピーと共に駆け出す

お前ら……落ち着けよ！

「ぐぇ！？」

「ぎゃび！？」

影からにゅるりと漆黒の手を出した私は二人のマフラーと尻尾を捕

まえ元の位置に引きずり戻す

「もう少し落ち着け。どっちに行くか。皆で決めるぞ」

その後、ナナシは追い付いてきたウェンディ達の全員で話し合いをするのであった。

その結果

「ではまたニ時間後にな」

ナナシだけ上へと登っていく。

それから数十分後、ナツ達は未だにマカオともバルカンとも会っていなかった。

先行しているナツとその次に続くハッピーを抱き締めたルーシィは何時までもバルカンが現れないことに辟易している。

「ちょっとハッピー！この道で合ってるの？」

「猫は鼻が聞くんだ。オイラを信じてよ。絶対この先にバルカンがいるよ！（今のオイラ輝いてる！シャルルは見てるかな？）」

ハッピーがそう言いながら後ろを振り返りルーシィの肩越しから見ると

「ナレス一人で大丈夫かな」

「そんなに心配しなくて大丈夫よ。普段のアイツはダメだけど、魔導士としては強いのよ？」

「…ぅん…」

何やら心配そうな顔のウェンディと話しており先程のハッピーの発言は聞かれてない。

「そんなぁ！？オイラ頑張ってるのに！？」

「ていうか鼻が効くのは犬の話じゃないのかしら？」

「まだバルカンは出ねぇのかよ！！」

そんな話をしながら歩く一同であった。

それから数十分後、マカオもバルカンも捜しても捜しても見つからない

ないことに腹を立てたのだろう

「もういい！こうなったら最後の手段だ！ハッピー！あれをやるぞ！」

「あいさー！！」

ナツはそう言いハッピーと共に何かを行使しようとする。

「え？何をするの？」

二人の真剣な顔を見たルーシィ達は固唾を呑んで見守っている。

そしてナツとハッピーの二人は

声を合わせて

「「るーるるる♪るーるるる♪」」

ナナシ直伝の呪文を唱えた

「そんなのでマカオさんやバルカンが出てくるわけないでしょ！？」

期待していたのに馬鹿なことをしている二人に呆れた女性陣を代表してルーシィがツッコんだ、その時

上の方から何やら音がし雪が落ちてくる。そしてルーシィ達から少し離れた前方に何かが飛び降りてきた。

「ウホッ！」

「バルカンだー！！！」

「サルぅ！！」

「「え！？ウソ！？」」

「ホントに出た！ナレスが言ったことホントだったんだ！」

その何かはバルカンだったようだ。白色の毛が全身を覆っている大猿である。

「ってそれより！」

バルカンだと分かるとすぐさま距離を取りながらルーシィ達は臨戦態勢に入る。

「ウェンディ！」

「わかってるよシャルル！ナツさん、いきますよ！天を切り裂く剛

腕なる力を…」

【アームズ！！】

シャルルに即されたウェンディが魔法を使うとナツを光が包み込む

「おぉ！！これは！？」

「攻撃力強化の魔法です！私にはこんなことしか出来ませんが頑張ってください！」

「おう！ありがとよ！！ウェンディ！！！」

ウェンディがナツをサポートしている時、隣ではルーシィが事前に準備していた鍵を空に差し込む

「開け！金牛宮の扉…」

【タウロス！】

声を出しながら、鍵を回すと巨大な両斧を背負った二足歩行の牛が、何処からともなく出てくる。

「MOー！！！」

「牛出たぁ！」

喜ぶハッピーを無視してルーシィは喋る

「あたしが契約してる星霊の中で一番パワーのあるタウロスが相手よ！覚悟しなさい！バルカン！」

格好良く片手を腰に当てもう片方をバルカンに向けたルーシィが

「タウロス！お願…」

横に佇むタウロスに攻撃をお願いしようとした、その時

「サルぅ！マカオはどこだー！！」

ウェンディのサポート魔法で体を光に包まれたナツがバルカンに駆け寄り殴りかかる

「ウホッ人間の女だ！」

がナツのことなど眼中に入れずルーシィやウェンディを見て興奮しているバルカンは

ヒョイとナツの拳を避けるとルーシィ達に飛びかかろうと雪が積もった地面を蹴って駆け出す

「女！女！お…ウホッ？ウホッ！？」

しかし、何故か途中でバルカンの足は地面に吸い付いたかのように動かなくなってしまう。

そんなバルカンの足元にできた影が、ぐにゃりと動いたことには誰も気付かなかった。

そして立ち止まったバルカンとその影の異変に気付いていないナツは、拳に火を纏わせると再び駆け寄りバルカン目掛けて殴りかかる。

「逃げんじゃねぇぞ！サルぅ！」

「おん【火竜の鉄拳！！】ヴボォ！？」

一歩も動くことのできないバルカンは見事にナツの拳を顔面に受ける。そして吹き飛ぶこともなく雪が積もった地面に沈み気絶してしまった。

「ナツがバルカンを倒したー！！！」

それを見たハッピーは気絶したバルカンの周囲を喜びながら翼を羽ばたかせグルグルと飛ぶ

一方、ナツはウェンディに駆け寄り

「よっしゃ！やったぞ！ウェンディ！」

「はい！さすがナツさんです♪」

お互いの手を合わせてパチンとハイタッチをしている。また、その横では

「よわー！！！あたしの出番は！？」

「さすがルーシィさん、相変わらずいい乳ツッコミをしております な♪」

バルカンの余りの弱さに驚愕しているルーシィと、目をハートマークにさせルーシィの胸を見ながら喋っているタウロスが横に佇んでいた。

その光景を見ていたシャルルが

「ちょっと！気絶させてどうするのよ！マカオの居場所を聞くんじゃなかったの！？」

そうツッコむのは当たり前のことだろう。

その言葉を聞いたナツ達は

「「「「あ！」」」」

バルカンにマカオのことを聞くという目的を思い出したのだろう。
冷や汗を掻き始めていた

「そ、そうよ！ナツ！どうするのよ！」

タウロスを星霊界に戻した後、冷や汗を流し続けているルーシィがバルカンに近付く…すると

「ひゃ！？」

「おぉおぉ、見事に一匹倒したな。（……私のを合わせたらこれで１４匹目か……いい加減にコイツが当たりだといいんだがな）」

突然バルカンの影の中から、ぐぷりと音を立てながら、分かれる前と何ら変わりない姿のナナシが頭からゆっくりと現れた。
それにルーシィだけが驚き地面にへたり込んでしまう。

「び、ビックリした～」

「ん？何やってんだ……寒い寒いと言ってた割には雪の上でリラックスタイムか？……まぁ今は休んでいてもいいぞ」

「ち、違うわよ！ナナシがいきなり！」

ナナシに勘違いされたルーシィはぷくっと頬を膨らまし顔を背ける

「違うのか…なら話は早い……ほれ」

「あっ…」

ナナシはルーシィの手を掴み引っ張り上げる。勢い良く引っ張り上げたものだから、そのままルーシィはナナシへと抱き付く形となる

「あ…ありがと…」

「あぁ別に構わんさ（ぐふふ、胸が柔らかい）」

変態に捕まったルーシィはより強く抱き締められようとした、その時

「ナツ！バルカンが光り出したよ！」

突如バルカンが光に包まれ始め次第に光が強くなっていると思ったら、バフンと言う音と共に次にはバルカンが煙に包まれる

そしてその煙が晴れると

「サルがマカオになったぞ！？」

「バルカンにテイクオーバーされていたんだ！」

バルカンがいた場所にはボロボロの白いロングコートを着た中年男性が倒れていた。

それを見たナナシは

「ビンゴだな」

そう言いルーシィから離れマカオを介抱し始める

…

…

ふぅ……やっとマカオを発見することができたな。ナツ達がどれぐらいバルカンを倒したか知らないが

約束の2時間が経ったため、私が下ってきた時にちょうど戦闘をしていたから

軽く手助けをしたんだが…あまり必要はなかったみたいだ。

まぁ…とにかく今はマカオを治療する方が先だな

どうやらバルカンにテイクオーバー……つまり体を乗っ取られることなんだが、

その前にかなり無茶をしたようだな。至る所傷だらけだ……特に脇腹が酷いな

「……ウェンディ…コイツには治癒魔法が必要のようだ」

…

…

…

あれから数分後、雪が積もった地面の上には毛布が敷かれている。その周りには漆黒の壁が四方八方に出現しており、吹き荒れる雪風を遮っているようだ。

そして、その上で怪我をしているマカオがウェンディ達によって治療されていた。

最初、マカオの容態を見たウェンディは一番酷い傷である脇腹の傷を治癒魔法で癒やすと、その後は持ってきたポーチから瓶詰めの薬を出して治療を始めていた。

「シャルル、ポーチに入っている薬とって」

「わかったわ。でもどの薬を使うのよ？」

「ウェンディ、私も手伝おうか」

「ふんっ（ナレスのバカ！またルーシィさんだけ抱き締めて……帰

ったら絶対ミラさん達に言い付けるんだから…）えっとね、三番かな」

また無視だと……

「死ぬんじゃねぇぞ！マカオ！」

ナツ…お前は大げさだ。既に峠は越えてるよ…たぶん…

「ねぇナナシ」

「あ？何だよ」

影壁を出す以外、何も手伝わせて貰えずに佇んでいた私にルーシィが尋ねてきた。

無理矢理に手伝えば…と思うだろ、やってみたら何か凄い目で睨まれたんだ。

あれは怖かった…凄く怖かった……つい悲鳴を出してしまったよ

あの子……フェアリーテイルに来てからミラ達に染まり始めてる。

昔は睨むことなどなかったのに……お兄さんは悲しいぞ！一体お前に何があったんだ！

「どうしてバルカンがマカオさんになったのよ？」
おっとルーシィが質問してきているんだった
「…あぁ…そんなことか…バルカンっていうのは」
「人間の体をテイクオーバーしてして生き繋ぐモンスターだったんだ！ちなみにテイクオーバーは体を乗っとる魔法だよ！」
「と…まぁハッピーの言う通りだな。わかったか？分かったならウェンディを手伝ってやれ…」
もう何もすることなくなったし、周りを警戒しながらタバコでも吸っていよう
「手伝うけど…どうしてウェンディは最初みたいに治癒魔法を使わないのよ？そっちの方が早く終わるんじゃないの？」
またもやルーシィが尋ねてきた。コイツは質問が好きだねぇ。その問いに私は火を付けたタバコを銜えながら喋る
「治癒魔法ってのは大量の魔力を喰うんだよ。だからある程度の怪我を治したら使わない方がいいんだ。解ったか？」
「え～と…ぅん？」

私の言葉がわかるような、わかってないような顔をルーシィがする

「まぁ…大雑把に説明すると温存するためだ。これは予測の問題で絶対にあるとは限らないのだがな……もし全魔力を使って治療した後、別の怪我人が出たらヤバいだろ。それにウェンディ自身の負担が半端ないんだよ。……治療魔導士が倒れたら最悪だからな」

「なるほど…そうよね…」

「だから…今は応急処置だけでいいんだ。まぁ薬もちゃんと持ってきているから今回の応急処置は完璧だな」

これは私が薬草学をウェンディに教えた時にウェンディ自身が自分で考えたことだ……いやはや…ウチの姫様はすげぇな

まだ子供だっていうのによ。私が１２歳の頃はそんなこと考えてなかったぞ。森に引きこもって自堕落に生きていたからな。

まぁ薬については微々たる効果しか発揮しない。だがしないよりマシだろう。

「…ナレス…終わったよ…」

おっ治療が終了したようだ。何時の間にかルーシィも手伝っていたようだな。

それにマカオも目が覚めたみたいだ。ナツ達と何か話している。おっとそれより

「あぁ…頑張ったな。マカオはお前のおかげで助かったようなものだ。アイツを治療してくれてありがとうな」

そう言って私は近寄ってきたウェンディの頭を撫でる

「…（撫でられちゃった♪…あっでもルーシィさんにもしてた…）ふんっ」

すると、ウェンディはぷくっと頬を膨らませると顔を背けたまま抱き付いてきた

「？…どした？治癒魔法を使いすぎたか？」

「…何でもないもん」

ふむ…疲れてる様子はないな…てか怒ってる？…さっきも何で怒っているのか分からないから今回も分からないぞ？私…何かしたか？

……覚えにないな……

まぁとにかく

「お疲れ様、ウェンディ」

そう言って私は抱き締め頭を撫で続けた。

「えぇ!?ホントに九尾に変身出来たの!?」

その後、九尾に変身した私を見て驚き、目を見開くルーシィ

「うぉお!ふかふかだ!」

「あい!こんなに気持ち良かったら寝ちゃいそうだね!」

ナツとハッピーは尻尾にダイビングして楽しそうに遊んでいる

「ぐがぁー!」

「ってナツ寝てるし!?てか寝るの早っ!?」

…訂正だ…どうやら寝たらしい。まぁナツは寝ていいだろう。尻尾の中で酔われたら洒落にならないからな。

とまぁ騒いでいる奴らとウェンディとシャルルを乗せる。

そして一本の尻尾を動かし寝ているマカオを包み込んで元の位置に戻…

「てか生きていたのかナナシ!?それに九尾に変身って……お前…」

あ?何だよ…マカオ……てか、そんなに喋る元気があるのかよ

…尻尾を戻そうとしたらマカオが話し掛けてきたから私の顔の所までマカオを運ぶと包み込んだ尻尾から顔を出したマカオと喋る

「当たり前だろうが！私は簡単には死なないぜ。」

「そうか……カナ達も喜んだだろ」

「あぁ」

頷いた私を見たマカオはそうか、よかったなと言う

…ったく、人のことより自分のことを考えろよ

「私のことより自分の心配をしろ。お前を早く連れて帰らねばならん…ロメオクンがお前の帰りを待っているからな……それにギルドの皆もだ」

そう言うとマカオは頬を緩ませて照れくさそうにしている

「あぁ…すまねぇ……いや…ありがとうよ」

「私は何もしてねぇよ。礼ならウェンディ達にするんだな。それじゃ行くぞ」

と話した後、尻尾を元の位置に直し全員を尻尾で包み込む。そして山を下りマグノリアへと帰るためにゆっくりと立ち上がる。

「やっぱりもふもふだね♪」

ウェンディは抱き締めた後から機嫌が良くなったんだが…結局何が原因だったのだろうか……

も、もしや…こ、これは反抗期の前触れか！？

そんな馬鹿なことを考えながら九尾は雪山を下り始めた。

【■■■■ーー！！！】

一度大きく雄叫びを上げて……

3．4　極寒の地（後）（後書き）

はい、バルカン編終了です。

日常以外の時は意外にやる男……でも少しだけ変わらない……と言うナナシをお送りしたつもりです

そのため原作とは中身が違いましたね

しかも今回の戦闘でもナナシがあまり活躍しませんでした。

ナナシとバルカンの戦闘を書いてもよかったんですが長くなりそうだったので…カットしました。

というのも、今回のバルカン編はウェンディとシャルルをナツ達のチームに入れるためキッカケの話としたかったからです。

少し無理矢理ですが、

これでウェンディ達はナツ達とチームを組みエバルー屋敷に行きます。

ナナシは定例会があるので行きません。

今後はウェンディ達は原作路線

ナナシは定例会路線に乗ります。

まぁウェンディ達の話は所々しか入れませんが…

次の話は…悩んでおります。そのため更新は自ずと遅れますよ。

現在は定例会の話にするか…日常編にするか…で悩んでいますね

感想等お待ちしております

では、また次回お会いしましょう

3．5　はぁ…（前書き）

今回は難産でした。

しかもアイゼンヴァルト編に繋げるための状況説明のような話で飛ばし気味です。

かつ三人称だけの話になります。

＋ダメ男描写は殆どありません。

よって期待せずにお読みください

3.5　はぁ…

マカオが救出されロメオと再会を果たした日から数日後のこと…

太陽の燦々と輝く光が、多くの雲によって遮られている曇り空のある日。現在の時間は朝である。

「だーかーら!!何度も書き直しをさせるなら自分で書けって言ってんだよ!!!」

そんな朝、とある辺境にある集落の建物の中では一人の男の声が響いていた。

部屋の中には民族衣装を着込んだ老人とスーツを着た男がいた。

男は手に持っていた書類の束を目の前のテーブルに打ち付けると、目の前で椅子に座っている老人を、宝石であるルビーのような赤い目でギロリと睨み付けた。

その睨みには多くの者が尻込みしそうなぐらいの怒気が込められていたが、それを向けられている当の本人は

「なぶら、早く書き直すのじゃ」

平然として、そう言いながら書類を男へと突き返す

「私の話は無視か!?もう何回目だと思って…」

「早く書かねば定例会に遅れるなぶら」

「……」

しばらく睨み付けていた男は何時までも動きそうにない老人を見ると観念したようだ。

「ちっ…わぁったよ……書きゃいいんだろうが……あぁ…マジで時間がねぇよ…」

男は老人の手から書類を引ったくり、隣にあるテーブルで作業を始める。

その目の下には隈が出来ており、かなりの疲労が蓄積されているのが分かる。そして作業をしながら男は老人と話を続けた

「…他にもやることがあるのによ……はぁ……マスター」

「なぶら?」

「分かってんだろうな。あの案件についても考えないといけないんだぞ……時間が足りねぇよ」

「心配しなくてもよい……あれには我々ケットシェルターも……」

それから男が書類を書き終えたのは、その日の夕方だったらしい。
しかし男は休憩することなく、
また別の作業へと取り掛かる。そして仕事を終えた男が我が家へと帰宅したのは5日後のことであった。

一方、その5日の間、フェアリーテイルに残っていたウェンディとシャルルは、ナツとハッピー、ルーシィと共にチームを組み、本を回収するというクエストを無事に完了させていた。

……

……

……

……

とある日の夜、マグノリアの外れにあるナナシの家にて

時間は深夜に近い。ウェンディとシャルルは二階にある自室で眠っている。

また一階にある部屋でもカナが既に寝ていた。どうやら泥酔していたようだ。酒瓶を片手に寝ている

しかし、寝ている者ばかりではない。一階にあるリビングには光が灯っており話し声が聞こえる。

「やっぱりミラさん家は落ち着くわね～」

「そう？（ホントはナナシ兄ちゃんの家なんだけどね）」

広いリビングでは、ピンク色の寝間着を着たルーシィとリサーナがいた。

二人は椅子に座り、テーブルにあるお菓子を摘みながらお喋りをしている。

「うん、それにカナやウェンディ達も住んでいるから寮みたいで楽しそうなのよね」

「寮みたいか…確かに楽しいかな。それにね、あと二人住んでいるんだよ」

「へぇ～二人もかぁ。誰なの？あたしの知ってる人？」

「あら、何の話？」

二人が喋っているとリビングにミラが入ってきた。これまた同じくピンク色の寝間着を着ている。

「あ、ミラさん。えっとですね、この家に「ちょっと待って！ルーシィ！」…え？何？」

「どうしたの？リサーナ？」

「な、何でもないよ！ミラ姉…あのね…」

テーブル近くまで来たミラにルーシィが残りの二人について聞こうとすると、慌ててリサーナが止める。

「えっとね…その…」

「ぅん？どうしたの？」

何かあるのだろう、リサーナが何とか誤魔化そうと話を考えている。するとルーシィが何かを思い出したかのようにポンと手を手に打ち付け話し出した。

「あ！そう言えばナナシはどこに行ったんですか？最近見ないですよね」

その瞬間、部屋の雰囲気が変わる。ミラは俯き、リサーナは

「あちゃー」と声に出し、手を顔に当てていた。

「え？何？（あたし何か失礼なこと……もしかしてナナシのこと禁句だったのかしら……この前みたいに喧嘩？）」そんな二人を見てルーシィはそう思うばかりであったが

「わ、私、もう寝るわね」

ミラは俯きながら二人から離れて自室へと向かった。

そしてミラが完全にリビングから離れるとリサーナとルーシィは話し出す。

「も、もしかしてナナシのこと話したらダメだった？」

「ダメってもんじゃないよ…もう毎日、大変なんだから……私だって…」

首を傾げるルーシィにリサーナは話を続ける

「あのね……ナナシ兄ちゃん…随分前から帰って来ないのよ…」

「え！？（完璧にミラさんとナナシ喧嘩してるし！？）」

「だからね…」

少し落ち込んだ様子のリサーナが喋ろうとした時

【ガチャ！！！】

「はぁ…きつ…」

荒々しく扉が開いたかと思うと、話の中心人物であるナナシが入ってきた。

その姿はスーツを着ており、尚且つサングラスを装着している。何時もと変わらない姿であったが、大変疲れた顔をしていた。

そんなナナシを見た瞬間、リサーナは先程の雰囲気を微塵に感じないほどの笑顔に変わる。

「ぁ…帰ってきた♪ナナシ兄ちゃんお帰り♪」

「あぁ……ただいま…」

「お帰り？もしかしてナナシが二人の中の一人？」

「そうよ」

「へ、へぇ～そうだったんだ…（タイミング悪！？どうして、あたしが居る時に帰ってくるのよ……）

対してルーシィはこれから起こるであろうミラとナナシの喧嘩を想

像して戦々恐々としていた。

普段のミラとナナシの関係を見れば喧嘩など起きるはずがない。確実にナナシが折れるか被害に合うからだ。

だから恐れることはない。だが、ルーシィにとってはフェアリーテイルに
来た時のイメージが強いのだろう。びくびくと震え始めていた。そんなルーシィを見たナナシは

「ん？ルーシィが居たのか。久し振りだな…マカオを助けた時以来か……そう言えば…お前、噂になってたぞ」

そう言いながら近付き、どうして噂になっているか分からず、キョトンとしているルーシィの頭をポンっと叩く

「お前、一人で隣国の権力者を潰しただろ……すごい早さで情報が回ってたぞ…やりすぎだ…」

「え！？違うわよ！ナツやウェンディも一緒に行ったんだから！」

「あれ？…ミラ達は？」

そう反論するルーシィをナナシは無視してリサーナと話し始める

「もう夜遅いんだから、皆寝ちゃったよ。それより大丈夫？顔色悪いよ？」

「大丈夫、大丈夫。最近忙しかっただけさ」

「…ってあたしの話を聞きなさいよ！誤解よ！ナナシの聞いた話は嘘よ！」

「はいはい、聞いてるよ」

スーツの袖を引っ張り催促するルーシィの頭をポンポン叩きながら、リサーナと会話を続けるナナシであった。

「……あ、ちょっ……」

軽い力で叩かれているルーシィはくすぐったそうに身を竦ませている。

「あぁ、もうこんな時間か…確かに寝てるよな…って、何でお前らは起きてんだ。早く寝ろ」

「そ、それは……えっと…あのね…ナナシ兄ちゃんを…」

「あたしの話聞いてないし！？…ってか頭叩くのやめてよ。くすぐったいのよ」

ナナシは疲れているのか淡々と喋り、リサーナは恥ずかしそうにどもっていた。一方ルーシィは叩いてくる手を掴んでキーキー騒いでいる。

そんな時、リビングの軽いカオスな状態を打破する存在が現れた。

「ナナシ！！！」

ナナシの声が聞こえたのだろうか、もしくはリビングで騒ぐ声が聞こえたのだろう。どちらかは分からないが開いたままの扉をくぐり、ミラが声を荒げて駆け寄る

（あっ…忘れてた…ヤバいって！ぜってぃ、喧嘩が始まるよ！？）

思い出したルーシィがリビングから退散しようと準備をしていると

「お帰りなさい♪明日から定例会なんでしょ？帰ってきていいの？」

「あぁ、ただいま…ホントは帰って来るつもりはなかったんだが…爺さんを連れて行くことになってな……」

ルーシィの予想とは裏腹に、先程の顔とは打って変わり満面の笑みを浮かべたミラがナナシに勢い良く抱き付く。

そしてお互いの背中に手を回し、ぎゅっと抱きしめ合いながら何かを会話し始める。

「今から行くの？」

「いや明日の早朝に出ることになっていてな。だから、それまではここに居るぞ」

「そう♪」

ミラは余程嬉しいのか終始ご機嫌な様子だ。喋りながらナナシの顔を上目遣いで見たかと思ったら、顔を真っ赤にさせたり、胸元に顔を擦り寄せたりしている。

対してナナシの方もミラのそんな姿を見て、疲れなんて何のその…と疲れた表情から一転して嬉しそうな表情に変わる。

そして片方の手でミラの頭を撫で、もう片方で体を抱き締めていた。

「あれ？喧嘩は？てかラブラブだし…」

「……私だって……待ってたんだもん…」

一方、その光景を見たルーシィは予想とは全く違うことにただ驚き呆け、リサーナは羨ましそうにミラを見ていた。

そんな二人に気付かないのか、ナナシ達は会話を続けている。

「ご飯どうするの？お腹空いてるなら作ってあげるわよ？」

「ふむ……そうだな…先に風呂に入ってくるか……それまでに飯を作ってくれていると有り難いな」

「わかったわ♪」

そう話し、ナナシは自室にある浴室へと向かおうと動き出したが

「？…何だミラ？」

ナナシが手を離すとミラも手を離した。しかし、ナナシがリビングを立ち去ろうとすると、

「……ゃ……」

すぐにスーツをぎゅっと掴み離そうとしないのであった。それを見たナナシはすぐに合点がいったのだろう。

「きゃっ！？」

すぐさまミラをお姫様だっこすると、悠々とリビングを後にした。

そんな二人を黙って見ていたルーシィ達も会話を再開する

「凄まじいほどラブラブよね……あの二人…」

「そ、そうだね…（二人でお風呂かな…）」

「結局……ミラさんは何で怒っていたのよ？」

「怒る？違う違う、ミラ姉はナナシ兄ちゃんに会いたかっただけなの」

「え！？それだけ！？」

リサーナから衝撃的な発言が飛び出し驚くルーシィだったが、

「ふふっ…ルーシィって…本当に好きな人できたことないでしょ？」

「な！？そ、そ、そんなことない。あたしだってあるわよ！」

リサーナにそう言われると顔を真っ赤にして言いながら椅子から立ち上がった。

そんなルーシィを見てリサーナは軽く笑いながら話しを続ける

「本当に好きな人ができたら、唐突に会いたくて会いたくて、たまらない時が来るらしいよ？ミラ姉はそんな状態だったのかな…」

「恋患いみたいなもの？確かに本で読んだことはあるけど…」

「あ～やっぱりないんじゃない」

「あ…ち、違うのよ！」

軽く自決を掘ったルーシィを再びリサーナが笑う。そんなリサーナを見て顔を真っ赤にさせたルーシィは反撃にと話を振る

「そ、そういうリサーナこそ、どうなのよ？」

「私は……ん～どうだろうね……あっ！それよりナナシ兄ちゃんのご飯を作って上げなきゃ！ルーシィ手伝って」

しかし、話をはぐらかされた挙げ句、何故か料理の手伝いをするハメとなった。

「えぇ！？あたしも～」

「はいはい、立って立って、あの人は信じられないぐらい食べるんだから

（私は……会いたかった……やっぱり好きなのかな……わからないよ……ナナシ兄ちゃんのバカ）」

その後、リビングにあるオープンキッチンで料理を作る二人の姿があったとか。

そして、リビングに戻ってきたナナシは二人が作った料理を全て食べきる。ちなみにその間、ミラ達と様々な会話をしたようだ。

…

…

…

それから数時間後、ナナシは自室に戻っていた。
そしてベット近くにある一人用の机で、サングラスを掛けたまま、小さな明かりの中、何やら必死に作業をしている。

その横のベットではミラとカナが幸せそうに寝ていた。

ちなみにナナシにしか視認できないが、机の上には大量の書類が並べられており、それを見て何やら探している様子である。

そして

「ん?……あった…これだ……やっと見つけたぞ」

目的のモノを見つけたのだろう。ペン先が光輝く魔法具と思わしきペンを走らせる。

そして新たな紙に文字を刻むと、全ての書類を机の上からすぅと消し、光を消す。

「やっと終わったな。はぁ…寝るか」

そして疲れた体を引きずるように歩きながらベットの中へと入った。
ナナシは余程疲れていたのか、入るとすぐに寝ているミラとカナの二人を抱き寄せながら眠りに落ちていったのである。

【ガチャ】

「やっぱり帰ってきていたのね。ナレス、訓練の時間よ」
しかし、数十分もせずに、シャルルから叩き起こされるのであった。

「勘弁してくれ……」

「ほら！風魔法よぉーい！」

日が登り始めた時間、マグノリアの外れでは大きな突風が何度も吹き荒れたと言う。

…

…

…

そして朝6時頃

起きてきたミラとリサーナの二人にしばしの別れを済ませると

【転影移】

フェアリーテイルのギルド前に移動する。そこでは小柄な老人であるマカロフが扉の前に佇んでいた

「待たせたな、爺さん」

「んじゃ、よろしくね」

「へいへい」

そう会話すると、足元に漆黒の魔法陣を展開し、

【大鷲】

眩しい光がナナシの体を覆ったかと思うと次の瞬間には漆黒の羽と、赤目を持った大鷲に変わっていた。

その姿は足の付け根から頭の上までは3メートルほどある。嘴と爪は共に曲がり、荒々しい獰猛さを象徴していた。

そして特有の赤目は両眼とも鋭く、翼は長大であった。翼を広げた時の横幅の状態は8メートルに近い大きさだろう。

そんな大鷲の背中にマカロフはヒョイと軽々しくジャンプして乗る。

「んじゃ、行くぞ」

それを確認した大鷲は翼を羽ばたきながら、滑走すると勢い良く大空へと飛び出していった。

その後は別れを惜しむかのようにマグノリアの外れ辺りを大きく旋回し、

「■■■■ーー！！！」

多くの者が寝静まった早朝だと言うのに、構わず一度大きな雄叫びを上げると街を離れていった。

その後、大空では

「返答を聞こうかの」

「あぁ、我々…ケットシェルターも参加させてもらうよ」

「あい、わかった……では向こうにつく前に少し話でもしようかの」

そんな会話がなされていたとか

大鷲は一路、地方ギルド連盟の定例会が開催されるクローバー街を目指す。

3．5　はぁ…（後書き）

はい、これで終わりです。

今回は落ちなし山なしの説明話でした。

次回もナナシは真面目な描写が多そうですね。なんせ定例会には女性が僅かしか出ませんから……

ちなみに次回からアイゼンヴァルト編に突入します

…が……エルザ達の描写はかなり簡略化させて書くつもりです。

ではまた次回お会いしましょう

ちなみにルーシィはハーレム入りさせた方がいいですか？

ストーリー構成・変身魔法・技共々…ご意見、アドバイスを頂けると有り難いです。

気長にお待ちしております。

3．6　定例会

雲一つない青く澄み渡った空、そんな空には大きな大きな鷲が背中に一人の老人を載せて飛んでいた。

「ＺＺＺ……」

鷲の飛行する下には大渓谷が広がっており、地表が隆起した間には幾つもの谷ができている。

その谷は底がないぐらい深く細長い大峡谷を形成しているようだ。

そんな大渓谷には一本の線路が各街まで繋がっている。そして現在は一台の蒸気機関車がモクモクと特徴的な煙突から煙を出しながらゆっくりと走っていた。

そのような場所を、バサバサと翼を羽ばたきながら飛ぶ姿は端から見れば空の王者と言えよう。

そんな悠々と飛んでいる鷲であったが、心の中は酷く荒れており遂に我慢出来なくなったのか、口に出して叫び始めた。

「眠すぎるーー！！！まだか！！ずっと同じ景色で飽きてきたぞ！ゴラァ！！！」

「ＺＺＺ……」

「てか爺さん！何一人で勝手に寝てんだ！！振り落とすぞ！くそが！！！」

そう荒々しく叫びながらも鷲は老人マカロフを振り落とすことなく律儀に飛び続けた。鋭い目をしばしばとさせながら…

…

…

…

現在、私は地方ギルド連盟の定例会が開催される街、クローバーまで急ぎ飛んでいる。

後少しで定例会が始まるからな。

もっと早く動ける黒狼などに変身すればいいんだが大渓谷のせいで移動手段が列車しかない。

線路の上を走るわけにはいかんからな。もし見つかったらフィオーレ軍に捕まってしまう…

そう、この先にあるクローバー街は大渓谷の向こう側にあり列車以外の交通手段はないのだ。

まぁ空を飛べる魔法を習得している者には関係ない。だから今回は最初から鷲に変身したのさ

まぁ、そんなこんなで空を飛んでいるんだが、オシバナ街を過ぎてからの、この大渓谷の風景には非常に飽きてきた！

くそぅ…眠い！眠い！非常に眠い！！ずっと同じ景色はキツいんだよ！！

それにしても本当にデカい渓谷だ。何処までも続いてそうに感じる。

はぁ…それが今は非常に苦痛なんだがな。まったくシャルルめ……

今日ぐらい訓練は無しでいいじゃないか。

ケットシェルターで仕事をしている時もきちんとやっていたのだから……1日ぐらい……って、既に終わったことをグチグチ言っても意味はないな。

そんなことより評議院よ……早く契約金を支払え！いい加減に堪忍袋の尾が切れそうだ。金、金、金、今の私は金が必要なんだよ！

今日から始まる定例会は5日間開催される。その5日の間に地方から集まったギルドマスター達は定期的な報告をし、

情報交換をするというのが定例会の目的なのだが……老人が多いから最終日以外は毎日、昼過ぎで終わる。

そう、昼過ぎで終わるのだ。それが4日だぞ……4日間、昼から自由時間になるのだ。しかし調査に出る時間としては短すぎる。だから訓練をするか…書類を読むしかすることがないのだが、私だって若者だ！遊びたいのだよ…

…しかし…しかしだ…遊ぶための金がない。それどころか…週サラーを買う金すらないのだ…

先週、ケットシェルターのギルドに行く前にミラ達に貸してくれと頼んだら

《お金？……どうせ、碌でもないことに使うからダメよ》

の一点張りで一銭も貸してくれなかった。むしろ叩かれた……何故だ……週サラーを買いたいと言っただけじゃないか…

しかし、私は諦めずに二階にいたウェンディに今度こそは！と気合いを入れて土下座しながら縋ったら

〔めっ！〕

……って言われた……

実に酷い話だ！！１０００Ｊぐらい貸してくれてもいいじゃないか！

とプライドの欠片すらないことなどを考えながら鷲に変身しているナナシが飛んでいると、ようやく大渓谷を抜け出したようだ。

大渓谷の先には木材や煉瓦を使用して出来た家々があり、人の姿もちらほらと見える。そしてようやくマカロフも起きたようである。

「む……どうやら着いたようじゃの。ナナシ…ナナシ！！！…聞いておるのか！！！！」

何だよ…うるさい爺さんだ…人が色々と考え……何だ、クローバ

ーに着いてるじゃないか

「……定例会はどこであるんだ？」

その後、爺さんに定例会の場所を聞いた私は、最後の力を振り絞り、会場に辿り着いた。

今は変身を解き、建物中に入っている。てか雨が降り始めたな。降る前に到着することができてよかった。

しかし中々、立派な建物だ。三階建てとは凄いな。外観はすべて煉瓦で出来ていたな。中は木材も使用してあるが……それにしてもだだっ広い。

まぁ各ギルドマスター達が４日間も滞在する部屋も存在するんだ。当たり前か。

「ナナシよ」

ん？私がキョロキョロと周りを見ていると真剣な顔の爺さんが話しかけてきた。

「４日目の定例会が終わった昼からは、ブルーペガサスのマスターボブの部屋で例の話し合いじゃからの」

「？…あれは定例会の時に話すんじゃないのか？」

「まだ確証は持てない情報ばかりじゃ……わかったかの」

ふむ…確かに……大勢に話せば情報が漏れる可能性もあるし、評議会のように一蹴されるかもしれないな。

確証が持てるまでは内密か……

「了解だ。ではまた後でな」

爺さんの頷きを見た私はケットシェルターのために用意にされた部屋に赴く。ふむ…なかなかに…広いな。さすがはギルドマスターが泊まる場所だ。それにしても４日目に話し合いか…。

…バラム同盟が一つ…六魔将軍（オラシオンセイス）か……それに…ニルヴァーナ……

奴らは何をする気だ?それにニルヴァーナとは一体、何だろうか…

もしやゼレフ書の悪魔か?……いや、そんな名前は聞いたことないな。だとすると……

…まぁ…今は考えなくていいか。どうせ後でわかることだ。

ウチのマスターも何やら知っているようだったから爺さん達も何か知っているだろう。

まったくマスターめ……出かける前に教えてくれていても良いものを……

そう考えながら、部屋を隅々まで確認したナナシは一階にある大ホ

ールへと足を進めた。

【ザワザワ、ザワザワ】

「おぉおぉ、ギルドマスター祭りだな……ふむ、私の他にも代理人が多くいるようだな。安心したな」

ホールの中には大勢の老若男女が集まっており、ざわざわと話し声が響いていた。しかし、

「あらぁ、ナナシちゃんじゃないのぉ。お久しぶり♪」

オカマ言葉を使いながら恰幅が良い老人がナナシの名を呼ぶと

【…！？…ザワザワ…】

ホールにいる半数の者が一瞬、時を止めたように固まる。そして再び…しかし先程より興奮した様子で喋り始めていた。

「影法師じゃと……」

「彼奴は死んだはずでは…」

「生きておったか…よかったよかった」

「見たこともないギルドマークをしておるの…どこのギルドに取られたのじゃ……」

「ウチに来てくれんかのぅ」

そう言う言葉が辺りでは出されていた。それはナナシにも聞こえているはずだが、あえて聞こえていない振りをしながら

「おぉマスターボブ、久し振りだな。食事会以来か？」

この方は久し振りに見たが変わらないな。

「そうねぇ、あの時以来ね。エルザちゃんは元気？」

「元気元気、逆に元気すぎて困るくらいだ」

ホントに勘弁してくれよってレベルだ。定例会が終わった頃にはクエストから帰ってきていそうだな。

とお互いに笑いながら会話を続けていた。そんな二人に一人の長身の老人が話し掛ける

「おぉ、ピンピンしてんじゃねぇか」

ん？マスターゴールドマインか。確か…クワトロケルベロスのマスターだったな。

「当たり前だ。そう簡単にやられたりはしねぇよ」

「その割には操られていたそうじゃねぇか。えぇ？」

ぐっ…そ、そこを突いたらダメだろ。ていうか何故知っている……
爺さんか！喋りやがったな！

「もうぉ、ナナシちゃんをイジメちゃダメよ」

さ、さすがはブルーペガサスのマスターだ。ナイスホローだ。し、
しかし抱きつかれるのはちょっと…

【リンリンリン】

ん？何だ？この鐘の音？いや鈴か？

「ようやく始まるみてぇだな。ナナシよぉ、確か今のおめぇはケッ
トシェルターだったな。自分の席はわかるか？」

ふむ、遂に始まるのか

「あぁ…それは大丈夫だ。」

そう言いながら私は頷き、マスターゴールドマインの配慮に礼を言
うと、二人とは別れ移動を開始する。

他のギルドマスター達も移動を開始し自分の席に座り始めているな

そう考えながら、私は会場内に多数設置してある丸型のテーブルの
一つに辿り着く。一番前の左端か…中々いい場所だ。真ん中とかは
疲れそうだからな

「爺さん、マスターゴールドマインに私のことを話しただろ」

そこには既にマカロフが座っておりナナシは喋りながら、その横にある椅子にどかりと座った。

「さて、どうだったかのぅ」

とぼけやがって…

「いいか爺さ「これより！地方ギルド連盟・定例会を開催致します！！」…はぁ…」

会場の入口から一番奥に設置された壇上では一人の白いスーツを着た男により開幕の宣言がなされる

「今回の司会はブルーペガサス所属、全ての女性の味方【白夜のヒビキ】ことヒビキ・レイティスがお送りします♪…では…」

ヒビキと名乗った男はウィンクをしながらポーズを決め、定例会を進行させていく。

それを見ていたナナシは

ヒビキよ…女は婆さんばかりだから、それはしないほうが…それに全ての女性って守備範囲が広すぎだろう。

……それにしても…後ろの奴らウザいな……

まぁいいか。どうせ無名ギルドがフェアリーテイルの横に座ってる

のが珍しいんだろう

……それより遂に始まったな……さてさて、真剣に聞いておくか。いい情報があればいいんだがな。…寝ないように頑張ろう！

そう考えるとナナシは真面目な顔になり話を聞き出した。しかし時間が立つと徐々に目は閉じていき、様々なギルドマスターの話し声をＢＧＭに安らかな眠りに入るのであった。

「ＺＺＺ……」

「コヤツ…自由すぎじゃ…（儂が隣でよかったのぅ）」

話は戻り、ナナシが寝る前のこと。

会場内のナナシ達より後方の席では一人の男がいた。そして男の後ろには一人の女が立っている。

「しんしんと……あれが……フェアリーテイルの影法師……」

「ノンノンノン♪今はケットシェルターという無名ギルド所属のようですぞ。それとあまり見ては気付かれます。ご注意を……」

雲一つない青く澄みきった空は既になく、大空を埋め尽くすほどの

黒がかった雲からシトシトと小粒の雨が降っていた。

「ＺＺＺ……もう魔法は使えねぇよ…バカやろう……Ｚ
ＺＺ……」

3．6　定例会（後書き）

はい、今回はこれで終わりです。

当たり前のことですが、定例会は捏造の話ですね。

次回は定例会を一気に四日目まで飛ばす予定です。
それが終わったらエルザ達の話かも

まだ予定なので決まってませんが…

ちなみにルーシィは、ツッコミが正常に機能しそうならハーレム入りさせたいと思います。

ストーリー構成他、何かありましたらお書き頂けると幸いです。

気長にお待ちしております。

では、また次回お会いしましょう

3．7　食事（前書き）

前回も合わせて今回もアイゼンヴァルト編じゃなく完璧に定例会編ですね。

今回は短いし、休憩中の話みたいなものです。

読まなくてもいいかも？

では、どうぞ

3．7　食事

定例会、会場にて

現在は昼過ぎ、今日の定例会が終わりを告げた時間だ。残るは後１日だけである。

そして、終了と共に定例会が行われている大ホールには色とりどりの美味しそうな料理が運ばれていた。

それを各々の席に座ったままで、多くのギルドマスター達が舌鼓を打ちながら料理を食している。

「うまいのぅ！」

「……う～む…微妙だな。ミラやエルザ、カナの料理の方が旨いな…早く家に帰りてぇ…

……おっ…そう言えばリサーナとルーシィのも旨かったな。ウェンディは……うぷっ（か、考えただけで！？ウェンディ……恐ろしい子！？」

しかしそんな中、漆黒のスーツを着た男ナナシだけは眉をひそめ、不機嫌そうに食していた。

だが愚痴を言いながら食べている割には食事の量が信じられないぐらい多い。

既にテーブルには十枚以上の皿が積み重なっており、遠目から見れば美味しそうに食していると思われるだろう。そんなナナシを見た小柄な老人マカロフは

「…恋人自慢はもう結構じゃ…散々聞かされて耳が痛いわ…」

呆れていた。どうやらナナシの食事量については日常茶飯事なのか許容しているようだ。

「まだ雨が降ってんのかよ。もう4日連続だぜ」

「小奴……また人の話を聞いておらんな…」

…

…

「まだ雨が降っているのか」

そう呟いたのは誰だろうか。いや…まぁ私もそうだが……他の人だって呟いたに違いない。

そうさ、周りを見渡すと……うむ……窓の外を眺めた人はうんざりとした顔つきをしている。

そうだろ、そうだろ。ここは老人が多いからな。雨の日は関節や古傷がジクジク痛むんだよな

そう言う私も…古傷が……

おっと話が逸れたな。まぁ、何を言いたいのかと言うと…定例会が始まってから既に4日が立った…と言うことだ。

そして初日は爆睡という素晴らしい行為をやってしまった。だが、信じられないことに怒られなかったのだよ。

【何だ…寝てもいいのか…】

私の心はそう考えてしまったのだろう。そして体も味を占めたのだろう。今日まで、見事にだらだらとしてしまっていた。いやぁ、しっかりしたかったんだがな。

真面目に聞こうと思っていた私は……雨と一緒に洗い流されたようだ。

そう考えながら一心不乱に食事を取っていたナナシだが、テーブルに置かれていた大量の料理が無くなると

うむ、腹3分目くらいには届かないがこれぐらいにしておこうと考え、席を立つ

そして真剣な顔をしてマカロフを見ると

「ちょっくら、行ってくる」

「今日はボブの部屋でじゃぞ……あまり……」

「わぁってるよ…すぐに終わらせるさ」

「無理をせんようにの」

「あぁ…生きて帰ってくるよ…」

そう言いマカロフと握手をすると、さながら戦場に赴く兵士のように歩き始めた。

…

…

私はこの４日間、昼からは部屋で書類を読むか、軽い訓練をするかの毎日だった。あとは気晴らしにタバコを吸ったりヒビキと喋るぐらいだな。

何ともつまらない日常を送っている私であった。だから暇あるごとに、何とかして金を工面できる方法はないものか

…と考えていたのさ。誰にも借金はしない方向でな。

しかし、それも昨日の昼までの私だ！！

何と昨日の夜、ヒビキが金になる有力な情報を提供してくれたのだ！

何でもクローバー街名産、羊のラム肉5キロを完食したら5万Jらしいのだ！食べるだけで金が貰える……失念していた！！

……今日のマグノリア近郊においての賞金付き大食いチャレンジ店では

私は入店禁止になっていたからな。その存在をすっかり忘れていたぜ。

実に懐かしいな……昔はぶいぶい言わせ、幾つもの店を廃業に追い込んでやったものだ。

…まぁ…殆どの賞金は一緒に来店したカナ達にむしり取られて服や小物に変わっていたが……

今回は絶対にバレないぞ。なんせクローバーだからな、私の金になるんだ！

…いやぁ…全て私の金になるのは初めてのことかもしれない！テンション上がってきたぁ！

そんなことを考えながら、口にタバコをくわえたナナシは大ホールを後にした。今のナナシに尻尾が付いていたら千切れんばかりに振られていただろう。

待っていろよ！ラム肉！そして週サラー！今週号はグラビアカード付きらしいのだよ！！絶対に手に入れなければ！！！

…

…

ガヤガヤと喧騒が立ち込む大ホールを出てから数分後、ナナシはタバコを吹かしながら、ふらふらと歩いていた。

…

「興奮＋ラム肉を想像しただけで腹が減ってきたな。それに満腹にならないと……力が……」

多くの者は食事中のため大ホールから外に出ておらず、外は閑散としていた。しかし、全く人がいないわけではない。

「あれは……」

複数の人が談話をしており、それを見たナナシは眉を寄せると談話をしている者達へと向けて移動を開始する。

「美しい…あなたのような美しい方は初めてです」

「あ、あのジュビアは…」

「さぁ…長話でお疲れでしょう。今夜は僕とフォー「よぉ」おや、ナナシじゃないか」

…

…

既に腹が減ってきている私が大ホールの外を歩いていると、ヒビキが青髪にコートを着た女の手を握って口説いている光景が目に入ってきた。

真っ昼間から何やってんだ…コイツは

「何やってんだよ…」

「なに、可憐な花が咲いていたのでね。摘み取りにきたのさ♪」

「はいはい……お前にはカレンがいるだろうが…浮気したらヤられるぞ……私みたいに…」

「……やっぱりカレンのこと…聞いてないのかい？」

「…何のことだ？」

私がカレンの名を出すと、ヒビキの雰囲気が変わった。良い方ではない…

…まさか…別れたのか？

「…カレンはもういないんだ…」

「っ！？……す、すまん」

居ない…死んだということか……あぁ…やらかした……しかし、カレンほどの魔導士が死んだだと……信じられん

「いや…いいよ。もう三年も経つんだ。それに今日の夜に話すつもりだったからね。そうだ…」

そう言うとヒビキは何やら書かれた一枚の紙を渡してきた。

これは…

「カレンの墓がある場所だよ。星と滝が見える絶景の場所に作ったんだ」

「あぁ…参りに行かせてもらうよ…」

カレンが亡くなったことは非常に残念だ。有能な星霊魔導士だったんだがな。

……ん?そう言えばカレンの契約星霊達はどうなったんだ?

レオは?……いやいやレオなんてどうでもいい!モコモコ、アリエスはどうなったんだ!!!

「大丈夫なのか!?（アリエスは!?）」

「あぁ、心配しなくても大丈夫だよ（そんなに心配してくれなくて

も大丈夫だよ。僕は新しい恋に生きると決めたんだ）」
「何だ…よかった…」

ブルーペガサスの仲間に引き継がれたのかな。いやぁ、よかったよかった。あのモコモコが味わえなくなる所だった

「心配してくれてありがとう（僕は本当に良い友を持ったな）」
？何故ヒビキが礼を言うんだ？意味が分からないな……まぁいいか…

「今度、（アリエスの所まで）連れて行ってくれないか？」
「あぁ……一緒に行こうか（久しぶりに参りに行くかな）」

お互い勘違いしたまま、そんな話を続けた二人であったが非常にヒビキが可哀想である。そして、ヒビキと同じく可哀想な人は隣にもいた。

「あ、あのジュビアの手を離して…」

そう、ナンパされてヒビキに手を掴まれたままだったジュビアである。

ようやく会話が終わった二人に顔を赤くさせモジモジしていたジュビアが話しかけると、

「あぁ、何てことだ。僕が女性に失礼なことをするなんて……お詫びと言ってはなんだけど、お食事に行かないかい？まだ食べてないよね？」

「か、帰る予定だったので、まだですが……ジュビアが一緒だと楽しくないですよ……」

そう言い、何やら暗い雰囲気になり顔を俯かせるジュビアだったが

「何言ってんだ。楽しいか楽しくないかは行かないと分かんねぇだろうが…ほれ、行こうぜ。羊達が私を待っているんだ」

「そうだよ、さぁさぁ♪」

「え？え？で、でも…ぁ……」

そう言って先行するナナシに続き、戸惑うジュビアをヒビキがエスコートして会場の外へ出て行った。

その後

クローバー街のとある高級店でラム肉１０キロ完食、という生涯に渡り破られることがない奇跡的記録が打ち出されたとか

「うぉぉぉぉ！！！１０万Ｊゲットだぜ！！！」

「ナナシさん凄いです！！！」

「…君は食べ過ぎだよ（絶対、腹壊すね）」

3．7　食事（後書き）

はい、今回は短かったですね。

ジュビアを出したのだから、少しだけ絡ませようかな…と考えたら今回のような話になりました。

ムッシュ・ソルは……出さなくても別によかったですよね？

ちなみに定例会編はこれで終わりにして次回はエルザ達と少しナナシの話の予定です。

では、また次回お会いしましょう。

それにしても

……何てアクの強い主人公なんだ……

と最近思ってきました。いや設定を考えた時から薄々感じてましたが…

3．8　魔導士（前）

定例会四日目の昼過ぎにて。

今だにクローバー街にはポツポツと小雨が降っている。

そんな街の、とある高級店の中を二人の男と一人の女が闊歩していた。どうやら食事を終えた後のようだ。

彼らは普通の客に見えるが一点だけおかしい点があった。

それは

「ちょっ引っ張るなよ！まだ！まだ締めのアイスクリームを食べてないんだぞ！ジンギスカンの後はあれを食べないと…」

三人の内、白髪の男が茶髪の男によって襟首を掴まれ引きずられていたのである。

「高級アイス～！！」

白髪の男はまだ食事をしたいのだろう懸命に元いた場所に戻ろうとするが

「え！？まだ食べるつもりだったんですか！？ジュビア……信じられない…」

「いい加減にしないか。もう時間がないんだ。マスター達は首を長

くして待っているはずだからね」

そう言われながら引きずられたため白髪の男は最終的には目的のアイスは食べれなかったのである。

そんな会話をしながら三人は…いやジュビアとヒビキだけが会計を済ませる

「ありがとうございましたー（白髪の男はもう来ないでくれ!!大損だよ!ちくしょう!!!）」

表面上はにこやかに笑い、内心では号泣している店員に見送られながら三人は店を後にした。

それから数十分後、クローバー駅の構内では

「僕達との食事は楽しかったかな?」

「はい!とっても♪……それではジュビアは帰りますので……えっと…ナナシさん?」

「帰るのは後にして私の話を聞け。いいか、締めのアイスクリームは神聖な儀式にも勝るほどの行為なんだぞ。それに焼き肉を食べた後、お前らは口直しにガムを噛むだろう?それと同じだ!つまりだ、つまり何を言いたかったのかと言うとアイスはガムにも勝る口直しの……」

「は、話が長いです…」

ジュビアは店から出て大部経つのに一人うんたらかんたらと喋り続ける、うざいナナシに困惑し視線でヒビキに助けを求める

「あぁ…彼は時々こうなるんだ。何時もは止めてくれる女性達がいるんだけどね」

「そ、そうなんですか…」「ナナシにもちゃんと伝えておくよ。それじゃあ気を付けてね」

「よろしくお願いしますね」

そう言い、発車直前の列車に乗り込んだジュビアはヒビキに見送られながら自分のギルドもしくは家へと帰っていった

一方、それを見ていたナナシは

「私の話は無視か!?くそぅ…ジュビアは逃げやがったのか…いいか…ヒビキ!食事において重要なのは食べるタイミングなのだよ。だから…」

まだ喋り続けており、ヒビキは溜め息を付くと

(あれしかないかな)

そう考え、魔法陣を展開させるとナナシの目の前に一瞬だが何やら画像のようなものを展開させた。

すると

「食と言うのぶぅ！？……な、何故お前がそんなモノを持っているんだ！！」

「落ち着いたかい？……このアリエスとの画像は昔、カレンに貰ってね。そろそろ落ち着きを取り戻さないと……彼女達に見せるよ？」

「や、やばし…」

それを一瞬だけだが見せられたナナシは顔を青くし冷や汗を流す

「高級アイスは今度でいいな。何時までも終わったことをグチグチ言っても、つまらないからな」

そう言い何事もなかったかのように普段の表情に戻ると歩き始めた。

その変表を見たヒビキはやれやれ「まったく…」と溜め息をつこうとしていると

「ヒビキ、何やってんだよ！早くマスターボブ達の所に行くぞ」

何故か怒られてしまったヒビキであった。実に自由過ぎる男ナナシである。

……

……

……

その後マスターボブの部屋では

先程の雰囲気は微塵もなく、マカロフ、ボブ、ヒビキ、ナナシの４人が椅子に座り四角いテーブルにある書類を見ながら、何やら真剣な顔で会話をし始めていた。

……

……

……

一方、マグノリアにあるフェアリーテイルのギルド内にて。

カウンターの横にあるリクエストボードの前では

「う～～ん……魔法の腕輪探しに…呪われた杖の魔法解除。占星術で恋占い希望!?火山の悪魔退治!

……今の所、全部無理ね…はぁ……ウェンディ…次は、どのクエスト受けよっか?」

「ん～悩みますね……」

「危なくないヤツにしなさいよ」

ルーシィとウェンディ、シャルルの3人が頭を悩ませながら話し合っていた。

その背後には何時もリクエストボードの前を彷徨いているナブというがっちりとした肉体を持った男がいたが、3人の話には参加してないようだ。

「ルーシィさんの家賃代は確保しないといけませんから……あっ！これなんてどうですか？ルーシィさんにお似合いだと思います！」

「あら、ほんとね」

「え？何々？…えっと……コスプレ喫茶の手伝い！？」

（この前のメイド服のせいであたし勘違いされてる！？た、確かに着替えた時はノリノリだったけど……）

見せられた依頼書を見て愕然とするルーシィをウェンディは何かおかしかったかな？とシャルルと二人で首を傾けている。

しかしルーシィはあることに気付く。ウェンディやシャルルのことではない。今現在、自分が手にしている依頼書のことについてであ

る。

（…あれ？ちょっと待ってコスプレ喫茶？）

「てか魔導士関係なくない！？ミラさん！！変な依頼書がありますよ！」

そう言って依頼書にケチを付けるとカウンターで酒を大量に飲んで泥酔しているカナと喋っていたミラに話しかけた。

「変な依頼書？あぁ…これね。大丈夫よ、これは立派とした魔導士ギルドへの依頼よ」

そう言いながらミラはカウンターの席に座った三人に説明を始める。

「ここはね…魔導士だけで運営しているのが売りの店らしいわ。まぁ、これは変身魔法が得意な人が行く依頼だからルーシィ達には関係ないんだけどね」

「へぇ～こんな変な依頼もあるんだ……」

「変身魔法……ナレスなら行けたのかな？」

「止めなさい……考えただけで吐き気がするわ。その依頼書はナレ

スに絶対見せちゃダメよ……アイツ悪乗りしそうだから……」

（確かに……変身魔法の使い手であるナナシだったら達成出来そうな依頼ね

……考えただけで、おぞましいけど……あれ？そういや…この前からまたナナシを見ないわね…ミラさん大丈夫なのかしら？）

そのように各々、喋ったり考えたりしているとミラがルーシィに話し掛ける

「それと、マスターは定例会に行ってるから気に入った依頼があったら私に言ってね」

「定例会？何ですか、それ？」

「定例会っていうのは……」

…

…

…

「へぇ～魔法界って、そんな風になってたんだ。定例会っていうのも大事なんですね…それに闇ギルドって…関わりたくない～」

あれからミラから定例会の話の後に、魔法界全体や闇ギルドことを聞いたルーシィは、勉強になったなぁと考えていた。

「おい、ルーシィ」

「あい、聞いてる？」

その横では、いつの間にやらナツとハッピーの二人がいたが

「…今ミラさんと話してるから、ちょっと待っててよ」

呼びかける二人にルーシィはそう言うと、再びミラと話し始めた。

「そういやナナシはどこいったんですか？（今日は大丈夫よね。何時ものミラさんだし…）」

そんなルーシィにミラではなくウェンディが、まるで自分のことかのように自慢げに話し出す

「ナレスは定例会に行ってるんですよ♪」

「え？ナナシも？（あっ…だから居ないのね……ん？）でもナナシってギルドマスターじゃないわよね？」

「はい！マスターの代理としての参加だそうです！ナレスって凄いですよね♪」

質問をしてきたルーシィにウェンディはえっへんと胸を張って話すが

「まぁ…暇なヤツがナレスしか居なかったからじゃないの？」

「違うよ！ナレスはマスターの代理に選ばれるぐらい凄いんだもん！」

シャルルが水を指すような発言をし、それを聞いたウェンディはぷくっと頬を膨らませ怒っていた。

その時

リサーナが地下から上がってきた

「あっいたいた。ウェンディ！ちょっと手伝って」

「あっはい、…でも何するんですか？」

「書庫の整理！……ナナシ兄ちゃんが荒らしたまんまだからね」

「うっ……すいません…うちのナレスが…」

どうやら書庫を使っていたナナシが適当に片付けていたようで、現在の書庫は整理が必要のようだ。

少し書庫を覗いて見ると何故か本が入っていない棚や隙間がないほど詰め込まれた棚もある。かなり雑なのか…神経質なのか、判らない光景だ。

「いいの、いいの。ナナシ兄ちゃんは昔からダメだから。整理整頓という言葉があの人の頭にはないのよ。だから今回はギルドでやらせたんだよ」

「あぁ…なるほど…家の書庫でやらせたらもっと酷いことになりそうですもんね……もぅナレスったら、帰ってきたら叱って上げないと…」

ウェンディはリサーナと仲良く？お喋りをしながら地下へと降りていった。

「結局…ナナシって凄いんですか？彼女として、どう思います？」

そんなウェンディ達を見送った後、ルーシィはミラと話を再開させる。

だが突然、隣で泥酔してカウンターに寝そべっていたカナが起き上がり

「全然、凄くない！！弱いし、えっちだし、お調子者だし……帰ってきたと思ったら人のこと無視してまた居なくなったし……」

そう勢い良く喋った後、

「ナナシのバカ！！！！」

カナは全ての鬱憤を晴らすかのように大きな声で叫んだ。

（えっと…何でカナがナナシのこと怒ってるのよ？状況が掴めないんですけど！？）

あまりの突然のことにカナを見て驚くルーシィを置いてカナとミラの会話は進む

「もう……明後日には帰ってくるんだから我慢したら？」

「…ミラはいいね……」

そう呟いたカナは憤怒の顔から羨ましそうな顔になる

「そんな「だってこの前、ナナシが帰ってきた時、会って喋って抱き締めて貰ったんでしょ？…ズルい…私だって一緒にお風呂入りたかった…」…」

「…それはカナが起きなかったからよ。ナナシは起こしてたわよ？（安眠の邪魔して何回も殴られてたけど…）」

「……覚えてないから一緒だよ。私も会いたかった……ミラはズル

い…何時も何時も…かまって貰って……私だってナナシのこと大好きなのに…」

そう言った後…カナはふてくされたのか、浴びるように酒を飲み始めた。

ミラはそんなカナと話を続けるが、ルーシィは

(爆弾発言!?まさかナナシ……カナに手を出していたのかしら!?…た、確かに小説とかだと同居してる男女は、あれよあれよとなる時があるけど

てかミラさん怒ってない?つまりカナとナナシの関係認めてる!?

た、たらし……ナナシはたらし野郎で決定ね!信じられない!卑猥だわ!)

そう考えていると、隣にいたハッピーが

「それがナナシなのです!」

さも当たり前のように発言をする。ルーシィは何故か自分の考えに合わせてきたハッピーをジロリと睨む

「何、勝手にあたしの心を呼んでるのかな、この猫ちゃんは!」

両頬をぐにぐにし始めたが涙目のハッピーは理不尽だよ!と言うと

反論を開始する

「だ、だって全部口に出てたよ！だからオイラ、ルーシィに合わせて上げただけなのに！！」

それを聞いたルーシィはあら……と赤面しながら手を離した。

（うそ！？口に出てたの！？恥ずかしいって！）

そんな恥ずかしがるルーシィを無視するかのようにナツとハッピーは

「つーか早く仕事選べよ」

「あい！早く7万J支払わないとオイラ達の家が無くなっちゃうよ」

「あたしの家だから！？何時からあんた達の家になったのよ！？……ってそれに！！」

そう急かしてくるナツ達にツッコミを入れたルーシィは何かを思い出したのか、ナツ達をギロリと睨む

「冗談言わないでよ！！あたしはウェンディ達と組むことにしたのよ。だからチームなんて解消よ！解消！！」

「何でだ？ウェンディ達も俺らとクエストに行くんだぞ？」

「あい！シャルルもだよ！ね？シャルル？」

「ふんっ！気安く呼ばないで頂戴！」

「そんなぁ…もうオイラ……師匠に頼るしかないよぉ！」

もう何度目か分からないほどシャルルから冷たい態度を取られたハッピーは泣きながらはどこかへ飛んでいった。

「師匠って誰なのかしら……って、話が逸れたわ！あたしはウェンディ達と組むのはいいけどナツ達とは嫌よ！

大体、この前のクエストは、あたしじゃなくてもよかったんでしょ！！」

ルーシィが怒りながらそう言うと

「なに言ってんだ……その通りだ」

さも、当たり前のように返答したため、ルーシィは「ホラーーー！！！」と声を上げていたが

「でも、ルーシィを選んだのは…いい奴だからだ」

「…うっ…」

ナツに恥ずかしいセリフをこれまた、さも当たり前のように言われ、

そのセリフにルーシィは顔を赤くし始めている

その時

「なぁに…無理にチームなんて決める事なんかねぇよ」

近くのテーブルでだらだらと過ごしていたグレイが話し掛けてきた

「聞いたぜ…大活躍だってな。きっと今から嫌ってほど誘いがくるぜ」

グレイがそう喋っている時、計算されたようなタイミングでサングラスを掛けた茶髪の男がルーシィに近づき

「ルーシィ…僕と愛のチームを結成しないか?今夜二人で…」

「え〜……イヤ…」

早速、ルーシィは誘われ始めていたが、その男を見てシャルルが疑問の声を上げた

「あれ?あの人は誰よ?」

既にふて寝を始めたカナを介抱していたミラがその疑問に言葉を返す

「ロキよ、見るのは初めて?」

「えぇ、たぶん初めてね」

「そう言えば私も久しぶりに見るわね…（ちょうどナナシが帰ってきた日から…ちょくちょく居なくなってる？）」

ミラとシャルルの二人が見ていると、ナツとグレイの二人は何時もの喧嘩を始め、

「うぉぉっ！！き、君、は星霊魔導士なのかい！？…ゴメン！僕達はここまでにしよう！！！」

ルーシィが星霊魔導士だと知ったロキはそう言うと逃げるように走ってギルドから出て行った。

それをただ呆然と見ていたルーシィは呆れた口調で

「あたし達…何かが始まっていたのかしら……てか何あれ？」

ポツリと呟いた。それを見て、ミラはくすっと笑う

「ロキは星霊魔導士が苦手なの」

「はぁ？訳ありですか？」

「昔、こっぴどくやられたらしいわ」

「あっ…なるほど…」

ルーシィは納得していた

その時

【バンっ！！！！】

荒々しく扉が開かれたかて思うと、話の中心人物であったロキが再び慌てながらギルドに入ってきた。

そしてギルドメンバー全員に聞こえるように大声で叫ぶ

「み、皆、大変だ！！！！！

え、エルザが帰ってきた！！！！！！！」

【ガヤガヤ…っ！？…】

その瞬間、何時もの賑わいを見せていたギルド内が閑古鳥が鳴く店のように…しん…と静まり返った。そして、静まり返ったギルド内に

【ズシィン　ズシィン】

何やら地響きが伝わってきたかと思うと開いたままだった扉をくぐり

「只今、戻った」

巨大な角で出来た重そうな装飾品を片手で軽々しく担いだ、上半身だけ鎧を着た赤髪の女、エルザ・スカーレットが入ってきた。

…

…

…

ギルドに入ってきたエルザはメンバー達に見られているのもお構いなしと言わんばかりに、

ズシィン、ズシィンとカウンター辺りまでキョロキョロしながら歩くと

「ミラ、今戻った、マスターはおられるか？」

（ナナシが居ない？……ふむ…書庫か？）

ミラと話し始めた。

エルザはそう言いながら巨大な装飾品を床に置く

【ズドッ】

と鈍い音がし、それを見たギルドメンバー達はざわざわと騒いでいる。

「何だ…あのバカでけぇ…角？」

「討伐クエストの帰りと言うことは…」

「討伐したモンスターのか……おっかねぇ」

が、持ち込んだ本人とミラは何事もなかったかのように会話をしている。

「お帰り！マスターは定例会よ」

「そうか……ナナシは？聞きたいことがあるんだが…」

「？…定例会よ？ナナシから聞いてなかったの？」

「ぁ……し、しまった…失念していた！！」

（ど、どうする…今すぐ手紙を送るか？いや…それでは間に合わん。しかし…）

しばし考えこんだエルザは顔をあげると

「ふむ…一応、手紙を送るか…」

考えが纏まったようで、次の行動を取り始めた。

エルザは自分を遠巻きに見てくるギルドメンバー達を見渡すと

「お前たち！旅の途中で噂を聞いた！また問題ばかり起こしているようだな。マスターが許しても私は許さんぞ」

そう喋り始め、次々にギルドメンバー達のダメ出しと説教をし始めた。

それを終始、黙って聞いていたルーシィはエルザのダメ出し・説教が終わると

「ふ、風紀委員か、何かで？」

「エルザ様です！」

「様って…でも綺麗な人ね…フェアリーテイルって美人な人多いわ～」

ルーシィが何時の間にか戻ってきていたハッピーと話していると

「ハッピー、ナツとグレイはどこだ？」

「って、こっ」

（ちに来てる!?…危なぁ～声に出すところだったわ）

何時の間にかルーシィの近くにいたエルザが、ハッピーに何やら尋ねていた

すると

「あい！あっちでございます！」

ハッピーは訓練された兵士のように即答して二人の方を指す

（ハッピー調教されてるし!?）

その兵士ハッピーが指差した方向を見ると

「や…やぁエルザ…お、俺達今日も仲良し……よ、良くやっているぜ…」

「あ゛い」

ナツとグレイの二人が冷や汗をダラダラ流しながら肩を組んでいた。

その光景は普段では見られないだろう。

端から見れば仲良くではなく怯えているナツとグレイである。二人の怯えを見る限り

如何にエルザが幼いときからナツとグレイの喧嘩を暴力で止めてきたかが分かる

「そうか…親友なら時には喧嘩もするだろう……しかし私はそうやって仲良くしているところを見るのが好きだぞ…それと……」

「あ…いや…親友ってわけじゃ…」

「…あい…」

一方、エルザが二人にくどくどと話しているのを見たルーシィは、

「こんなナツ見たことないわ!!（ナツがハッピーみたいになってる!?）」

「ナツもグレイもエルザが怖いのよ…ナツは昔…」とミラの話を聞いていると

「実は二人に頼みたいことがある……」

何やら含みのある間を置いていたエルザがナツとグレイに話し出す

「仕事先で厄介な話を耳にしてしまってな。

……本来ならマスターやナナシの判断を仰ぎたいところなんだが、早期解決が望ましいと私は判断した……二人の力を貸してほしい」

「え…」「な…」

エルザの言葉にナツとグレイは言葉を失い固まっている。一方、周りでも

「ど、どういうこと!?」

「あのエルザが誰かを誘うとこ初めて見たぞ!」

「こんなでけぇ角を持った怪物を倒す女だぞ……何があるんだよ…」

若い魔導士達は次々に騒ぎ出すが、昔ながらのメンバーであるマカオ達は

「いや…昔はよく仕事から帰ってきたナナシが連れて行かれていたぞ……首根っこ掴まれてな」

「おぉ懐かしいね…さっきの角のような感じで抱えられて連れ去られていたんだよなぁ」

そう喋り、その隣でパイプを吸っていた中年男ワカバも同意して笑いあっていた。

一方、ルーシィは

（マスターは分かるけど、ナナシに判断を仰ぐって……やっぱり凄いのかしら？ん～でも普段の言動から凄そうに見えないのよね。でもハコベ山の時は意外に頼りになったし、本当にナナシって掴めない奴よね……何者なのよ）

そう考え込んでいると隣にいたミラが

「エルザと……ナツに……グレイ……今まで想像したことなかったけど…」

「？どうしたんですかミラさん？」

「これってフェアリーテイル最強チームかも…」

「えっ！？最強！？」

そう呟き、それに反応して驚くルーシィがいたとか

3．8　魔導士（前）（後書き）

はい、中途半端で終わりです。

何かダメ出しがあるようでしたら改訂します！

今回は原作を入れましたが、次の後編はオリジナル話を入れてエルザ達の話は終了の予定

ただギルド内での話になります。

何かありましたらご意見・アドバイスを下さるとありがたいです。

では、また次回お会いしましょう

3．9　魔導士（後）（前書き）

忙しく、久しぶりに執筆したので文章、その他諸々、変になっている可能性が高いです。

ご指摘を受けたら改訂させていただきます

では、どうぞ

3．9　魔導士（後）

ミラの発言にルーシィが驚いてから数十分後のフェアリーテイルのギルドにて。

ギルド内を覗いて見ると、魔導士達は何かに怯えるように、何時もより落ち着いた様子を見せていた。

そんなギルドのカウンターの横には馬鹿でかい角の装飾品が置いてある。

そして、それの主であるエルザはカウンターにある椅子に座りミラと何やら話していた。

「エルザ、明日には出るのよね？」

「あぁ、そうだ。早めに行動した方が良さそうだからな」

そう言葉を返したエルザは終始、気になっていたことを解決しようと横に視線を向ける

「ところで……どうしてカナは寝ているんだ？それにこの臭い……普段より飲み過ぎじゃないか？」

自身の隣でカウンターに体を預けて寝ていたカナを見て眉を寄せながら疑問を口に出した。それを聞いたミラは苦笑すると

「ナナシがね……」

エルザが居なかった間の出来事を話し出したのであった。「つまり……ナナシが悪いんだな。帰ってきたら説教をしてやらねば」

その話を終始、黙って聞いていたエルザだったが手をダンっとカウンターに打ち付けながら怒りを露わにする。

「ん～今回は説教をするのは違う気がするわ」

だってね、と手を頬に当てたまま、ミラは続けて話す

「さっきも話したけど定例会の準備やケットシェルターの仕事とかで忙しかったのよ？」

「しかしだな……もう少し、私達に構ってくれてもいいじゃないか。帰ってきてから、まだ1ヶ月も経っていないんだぞ」

ミラの発言に苦言を呈したエルザは頬を赤らめたり、怒気で顔を赤くしたり大忙しである

「三年も待たせておいて、私達のことは、ほったらかしで仕事仕事仕事。昔と変わらないではないか！！」

（カナが寂しがるのは当たり前だ！私だって事前にクエストを受けていなければ……ずっと側で……）

「大丈夫よ。定例会が終わったら一時、仕事はないはずだから。それにクエストには当分行かせないしね」

「むっ……それはそうだが……」

「それよりカナを書庫に連れて行ってくれる？ここじゃ風邪を引いちゃうわ」

「書庫に？」

ミラは、疑問を浮かべるエルザに微笑みかけながら話す。

「えぇ、ナナシが使ってたベットがあるはずだから、そこで寝かせておいて♪」

「ふむ、わかった」

その言葉を聞いたエルザはカナを抱き抱えると、ミラに見送られながら書庫へと下っていった。

…

…

…

エルザが寝ているカナを抱きかかえ、書庫へと下っていくのと代わりに

カウンターには少し疲れた様子のルーシィと普段と変わらないシャルルが腰を下ろしてきた。

「疲れたぁ」

「アンタは緊張し過ぎよ」

「あら、どうしたの？」

「いや、ギルドの雰囲気が何時もと違うじゃないですか……なんか緊張しちゃって…」その返答にミラは微笑み

「今日だけだから大丈夫よ。明日になったら、皆コロッと忘れて騒ぎ出すんだから」

「エルザさんは怒らないんですか？」

「ん～そうね。たぶん今日だけよ。エルザだって何時も何時も怒っているわけじゃないわ」

「なるほど……」

（時々、引き締めのような形で説教とかするのね。さすが風紀委員……でもそれって逆に考えれば恐いかも!？何時取り締まれるかわからないとか……）

体をぶるりと振るわせながら、そう思考するルーシィを放ってミラはシャルルとも話す

「あの三人でチームを組ませても大丈夫なの？」

「心配することないわよ。フェアリーテイル最強チームよ？」

そう呑気に言うミラだったが

「逆に最強だからヤバいんじゃないの？特に男、二人は仲が悪いし……」

シャルルの言葉を聞くと、微笑んでいた顔が少し困った表情に変わる

「確かにそうよね。あの三人が組めば素敵だけど、仲がギクシャクしてるトコが不安なのよね」

（ん～どうしよう）

そう思考するミラの代わりにルーシィがシャルルと話す

「ナツ達が暴れたら大変なことになるわよ。エバルーの時も大変だったし……ナナシには誤解されていたし……」

「屋敷全壊だったものね。次は街とか壊しそうね」

「あり得そう……」

その会話を考えながら聞いていたミラだったが

「あっ！名案を思いついたわ」

そう言うと、ルーシィを見て微笑み

「ルーシィ、着いてって仲を取り持ってくれる？」

「あたしが！？」

「お願いね♪」

ミラにそう言われたルーシィは日頃、お世話になっているからか

（うぅ～行きたくない……でも、ここで断ったら、あたし最低な奴じゃない……）

そう考え悩んだ末、ミラの頼みを了承するのであった。

しかし

（あの三人の仲を取り持つなんて無理よぉ。ナツだけでも大変なのに……

グレイのことはあまり知らないし、ましてやエルザさんとは喋ったことも…）

そこまで考えて、ふと気付く

（あ……そうだ）

「シャルル達も付いてきてよ。あたしだけじゃ仲を取り持つなんて無理よ」

「……そうね……」

話を振られたシャルルはしばし、思考し

「まぁエルザもいるし……私はいいわ。でもウェンディにも聞いて決めるから」

「やった♪よろしくね」

「勝手に舞い上がっているとこ悪いけど、ウェンディが了承してからよ。わかった？」

「うんうん♪」

「はぁ……」

（頭の中じゃ私達は行くことが決まってるようね……）

シャルルの返答に、喜んでいるルーシィ。そんな姿を見て呆れた表情を浮かべるシャルルを見て

「これで三人の仲は大丈夫そうね♪」

喜ぶミラがいたとか。

その後、三人はたわい無い話をするのであった。

……

……

……

一方、書庫へと下ったエルザは

「やはり、こうなっていたか……」

カナを抱えたまま、書庫の惨状を見て嘆いていた。

（これでは調べものも碌にできなさそうだな。ララバイについて調べたかったのだが、諦めるほかないか……）

現在、書庫の中は棚からすべての本が取り出され、床や机に大量に本が積み重なっている状態である。

様々な色の背表紙をした本が積み重なっていることから、順番通りに入っていなかったようだ。

一応、予想していたとはいえ、その散々たる状況を見たエルザは

（ナナシ……帰ってきたら……お仕置きだ！！！

仕事にまで支障が出たんだ。これまでにないほどの説教をしてやらねば！）

そう決意をし、体を震わせていた。

そんなエルザに気付いたのか。本棚で作業をしていたリサーナが声をかける。

「あっ……エルザお帰り♪……ってカナ、どうかしたの？」

「あぁ、ただいま。カナは、寝ているだけだから大丈夫だ。それよりベットは場所を移したのか？」

「それならこっちよ。本を踏まないように気を付けてね」

エルザの意図がわかったのだろう。リサーナは一旦作業を停止して、ナナシが使っていたというベットまで誘導する。

ベットは意外に奥にあるらしく、その間に二人は歩きながら会話を続けた。

「あのバカの後片付けをさせてすまないな。私も後で手伝おう」

（全く……何度言っても適当にするのだから困ったものだ。やはりナナシには私が側に居て上げないとな）

「昔もよくやってたから慣れっこだよ。それにナナシ兄ちゃんには、ちゃんと！この分は請求するから大丈夫！」

両手で拳を作り気合いを入れるリサーナを見てエルザは、うんうんと頷きながら

「うむ、しっかり払って貰え……それにしても……一人でやっているのか？」

「違うよ。ウェンディとレビィに手伝って」

そう言っている時

隣にある棚からバラバラと何かが崩れるような音がしたかと思うと

「「きゃあ！？」」

二人からなる悲痛な叫び声が上がった。その叫びに顔を見合わせたエルザとリサーナはすぐさま駆け寄る

「「うぅぅ～」」

そこには大量の本に埋もれたウェンディとレビィの二人がいた。端から見るとケガはしてないようでエルザはホッと胸を撫で下ろし

「ベットは奥だな。カナを寝かせたら、すぐ戻ってくる」

そう言って素早くその場を後にした。一方、頷いたリサーナは本を掻き分け二人へと駆け寄る

「二人とも大丈夫？」

「リサーナさん、棚の上にも本が大量に有りました……」

「ナナシ……適当過ぎだよ」

「あちゃ～、やっぱりあったのね。ちゃんと見ておけばよかったね。頭とか打ってない？」

そう言いながら本の山から、二人を救出したリサーナであった。

幸いにも二人はケガをしておらず、階段近くの椅子へと移動して腰掛ける。

「うわぁ～、遠くから見ると凄い状況」

「そうですね。もう！ナレスったら、どうしてあんな変な場所に置くのよ！」

書庫の惨状を改めて見て溜め息を漏らすレビィに、頬をぷくっと膨らまし憤慨しているウェンディの二人であった。そんな二人を見て呑気に

「昔に一回だけしかなかったから忘れていたのよね～。ちょっと休憩しようか？」

そう言うリサーナがいたとか

その後、三人が会話しながら休憩を取っていると奥からエルザが戻ってきた。

カナではなく様々な色を背表紙とした5、6冊の本を抱えたままで

……

エルザはウェンディ、レビィの二人に挨拶をすると持っていた本を近くのテーブルへと載せた

「その本、どうしたんですか？」

「ベットの中に入っていてな」

エルザがそう言うと4人は盛大に溜め息を漏らす。

「ねぇエルザ……」

「レビィ……皆まで言うな。帰ってきたらお仕置きだ。それより聞きたいことがあるのだが、いいか？」

……

……

……

「ララバイ？」

「そうだ。何でも封印されている魔法らしい。何か知らないか？」

現在は、書庫での片付けを一旦停止し、エルザを中心に話がなされていた。

質問されたレビィは何やら思考し始める

（ん～ララバイ……子守歌？眠りの魔法？安直過ぎるよね……ララバイ

どこかで聞いたことがあるんだよね。きっと呪歌の一種……封印されるほどの魔法……古代魔法？う～ん……）

レビィが考えに耽っている間、エルザとリサーナ達は会話が進める。

「ララバイ？がどうかしたの？」

「その封印を解こうとしてる魔導士達がいるらしくてな」

「解いたらダメなものなんですか？」

「そうよ。魔法解除の仕事じゃないの？」

「分からない。だが、その封印を解こうとしている奴らが闇ギルド

なんだ」

その発言に二人は驚き、納得する。

「うわぁ、絶対マトモな魔法じゃないね」

「ですね……悪いことをしてる人達ばっかりらしいですもんね」

リサーナはうんうんと頷きながら、ウェンディは眉をひそめながら喋った。

「あぁ、だから明日、そのギルド討伐に行く予定だ。何の魔法か分からないから気を付けねばならん」

そう言いながら、拳を握って気合いを入れるエルザ、その隣では何やら悩んだ顔になったウェンディが再度尋ねる

「ララバイって別名、子守歌だから眠らせる魔法じゃないんですか？」

「あっ！それだよそれ♪きっとミストガンが使う魔法みたいなモノなんだよ！」

リサーナの発言にウェンディが疑問を口にする

「ミストガン……さんですか？」

「うん、エルザと同じくS級魔導士なの。とっても強力な眠りの魔法を使うんだよ」

「へぇ～フェアリーテイルって凄い人ばっかりなんですね♪」

そう、ウェンディが感心していると、エルザも、リサーナの発言に感心していたようだ

「ふむ……なるほど。その線は高いな。誰かを眠らせて、その内に何か良からぬことをやるつもりだな！」

「絶対そうだよ♪」

そんなことを会話しているとウェンディが突然、立ち上がる

「エルザさん、私も連れて行ってくれませんか？治療魔導士ですからお役に立てるかもしれません！」

その言葉を聞いたエルザは

（ウェンディを……か。私達だけで守りきれるか？……しかし、今回みたいなケースだと、治療魔導士の存在は心強い……ララバイという名前からして、眠りの魔法じゃなくても、人体に何らかの作用を持った呪歌の可能性が高い……）

しばし思考して

「むぅ……確かに私達が眠らされては適わないな。危険な仕事だが頼めるか？」

（ナツにグレイもいるんだ。いざとなったら私が守ればいい）

そう考えるとウェンディにも協力を要請した

「はい！シャルルにも聞いてきますね」

（ナレスを安心させるためにも頑張らなくっちゃ！）

エルザの要請をすぐさま了承したウェンディは、自分も役に立てる仕事かもしれないと気合いを入れながら書庫を後にした。

その後、ウェンディが居なくなった後も、随分長いこと考えていたレビィだが

「ん～やっぱり分からないや。喉まで出掛かっているんだけど……リサーナの言うように強力な眠りの魔法だと思う……かな？」

「いや、ありがとう。意見を聞けただけでも十分だ」

自信なさげにそう言うレビィにエルザは礼をいう

そんな中、リサーナが何かを思い出したのか、手と手をポンと打ち付けた

「あ！ナナシ兄ちゃんなら何か知ってるかもよ」

「それは私も同意見だ。後でマスターとナナシ宛てに手紙を送る予定だ。……返信が間に合いそうにないがな」

リサーナの言葉に同意したエルザだったが、確実に返信のための時間がないことを嘆いていると

「通信用のラクリマ使えば？マスターならともかく、ナナシは持ってるんじゃない？影の中に入れてそうだよね」

次のレビィの言葉に愕然とした。

（あ……また失念していた。そう言えば、評議院から借りたと言っていたな。

最新型でレアモノだと自慢していたじゃないか……今日の私はボケているんじゃないのか）

「とりあえず私を殴ってくれないか？」

エルザの考え事が分かるはずもない二人に、いきなり突拍子もないことを言い、

素直に頭を差し出すエルザだが、それを見た二人は目を互いに合わせ、溜め息を漏らした。

（（殴ったら、殴り返すくせに……））

そう心の中で呟き、結局二人は何もしないのであった。

その後、エルザは何事もなかったかのように、二人に礼を言うと、急いで階段を駆け上がり一階へと向かった。

一方、書庫に残された二人はカナの様子を見にベットまで歩くと

「ん？」

「どうしたの？レビィ？」

レビィがぼんやりと光り輝く球体を発見したようだ。

その球体はベットの足元に転がっており

「……ねぇ…あれって」

「うん……ナナシ兄ちゃん……それはないよ」

呆れた顔のリサーナが恐る恐る拳大のラクリマに触れると

「やっと繋がっ……」

ラクリマ部分にはエルザが写し出され

「……か、か、帰ったらお仕置きじゃすまないな！！」

そう言い残してラクリマから光が消えた

「ナナシ……やっぱり変わってないね」

「……ホント世話がかかる人……一人にさせたらダメね。今度から書庫でも、私が付いていて上げよう」

その後、当たり前のことだが、結局、ナナシとは連絡が付かず、渋々と手紙を出すエルザの姿が見受けられたとか

そして次の日

マグノリア駅から列車に乗り

エルザを筆頭にナツとグレイにハッピー。それとルーシィにウェンディ、シャルルの

総勢、５人と２匹からなる魔導士チームが闇ギルド討伐へと旅立っ

ていった。

3．9　魔導士（後）（後書き）

はい、これでエルザ達の話は終わりです。

次回からナナシの話に移る予定です。

皆様からのダメ出しがないようでしたらの予定ですが……

一応、お見苦しいですが、説明をさせていただきます

闇ギルドの名前はあえて出していません。

ナナシのラクリマについても今後の話に出てきます

以上です。

ストーリー構成や他にも何かありましたら、お書き頂けると幸いです。

勿論、感想も切にお待ちしております！

長々と失礼しました。

ちなみに当作品は不定期でございます。

では、また次回　お会いしましょう。

3．１０　会合（前書き）

少し書き方を変えて見ました。

読みにくいかもです。

あとナナシの顔は女顔ではありません。端正な顔立ちなだけです。

では、どうぞ

3．10　会合

時は遡り、エルザが帰ってきた日。

太陽が傾き、煌びやかなオレンジ色を醸し始めた時間である。

クローバー街には独特な趣を持った巨大な洋館が存在する。

そんな洋館三階の一角には窓が開かれた部屋があった。白いカーテンが靡いていることから、涼しげな風を室内に運んでいるようだ。

（もう夕方だと……）

その部屋の開かれた窓から、くゆらせたタバコを銜えたまま、一人の男が姿を現した。

（……道理で体が重いわけだ）

気怠そうにして、窓際に片腕をついた男は外を眺めながら、紫煙を吹き出した。

紫煙はゆっくりと上昇し、部屋の内外に出て行く。

「ふむ、エルザがクエストから戻ってくるのは今日辺りか……怪我はしてないよな……」

誰に伝えるわけでもなく、ただ独り言を呟き、片手に持っていたタバコを再び銜えた。

（定例会は明日までか。早く帰りてぇ）

眉を寄せ、気怠そうな表情の男、ナナシはそう思考しながら、自身の腰まである長い白髪を束ねていた銀色の髪飾りを手慣れたように外す。

その瞬間、解き放たれた髪が、ゆっくりと広がりナナシの背中を覆う。

そんなことには、気を止めずナナシは目を閉じて、そよそよと流れてくる風を気持ちよさそうに受けると

再び、その赤い瞳を露わにすると、薄暗いサングラス越しに、洋館の周りを流れている川を眺め思考し始めた。

……

……

……

はぁ…疲れたな。

会合を始めて４時間が経った。窓の外は黄昏の空に包まれている。

時間にしてみれば、あと一時間ほどで夕食に適度な時間帯だろう。

今日は何を食べようか

……うむ、昼は羊だったからな。夜はベジタブルで行くか

この会合が終われば……の話だがな

果たして今日までに終わるだろうか。

まぁ半日で、今後の方向性を決めようと言うのだから、時間が掛かって当たり前か。

古代魔法、【ニルヴァーナ】

何とも恐ろしい効果を秘めた魔法のようだ。

『古代の奴らめ、負の遺産を残しやがって、ふざけんじゃねぇよ！！！』

そう怒鳴っても意味がないので真面目に会合に取り組むしかあるまいな。

まぁ元々、闇ギルド【オラシオンセイス】がニルヴァーナを狙っているという情報はブルーペガサスが入手したものだ。

だから今回、私と爺さんはヒビキとマスターボブの話を聞くのが大半だったので、究極的なまでには疲れていないのが現状である。

そんな私に比べてヒビキは非常に辛そうだ。朝は司会、昼はナンパ、今は会合。中々のハードスケジュールだから疲れて当たり前だろう。

明日、週サラーを買ったら見せてあげよう。元気になるはずだ。

おっと、考え事が逸れてしまったな。今は会合のことに集中しなくては。

……今回、ヒビキ達の話を聞いて分かったことは、あまりにも情報が少ないと言うことだ。

ニルヴァーナは発動体の形と魔法の効果だけしか判明しておらず、どこにあるのか、判かっていないらしいのだ。

まだ私も魔法効果だけで発動体は見せてもらっていない。果たして、どのような形をしているのだろうか……。

まぁ魔法効果自体、信じられないからな。後で再度、頃合いを見て質問することにしよう。

それにしても……自信が無くなってきたな。

過去、魔法屋や本屋で様々な魔導書や魔法関連の本を購入し読みふけり、

『魔法のことなら私に任せろ！！！』

……そう自負していた私もニルヴァーナの存在は知らなかった……。

どうやら過去の栄光は露と消えたようだ。魔法博士は廃業だな。

やはり、めんどくさがらずに古文書にも手を出しておくべきだったか？

しかし、古代語は読めないしな。レビィがもっと早くにいたら……

いや、それでも古代語なんて簡単に読めるようになるわけないか。

数種類もあるみたいだからな。

ヒビキが会得している

【古文書（アーカイブ）】

という古代の様々なことが記録されている魔法？だっけ？

それも私の頭じゃ魔方陣すら解読できなかったし、いやはや、実に魔法は奥が深い……。

まだまだ世の中には、私の知らないことが沢山あるということだな。

明日、週サラーを買うついでに新たな魔法書を探すとしようか

むむっ、そう考えたら何だかワクワクしてきたぞ！！！

そう思考しながらナナシは、ニヤニヤすると、サングラスを外し、ギラギラと光を反射する川を見て

（明日は魚料理がいいか……いや麺類か）

そう自由気ままに様々なことを考えボケッと見ていたが、ふと気付いたようだ。

ん？あれ？何か話が変わってないか？

私は……魚料理……でもなく、本……でもなく……あぁ、ベジタブルか。

今日は根菜系がいいな。特に……違うな。ベジタブルの話ではないぞ。

う～む……あっ……ニルヴァーナ。

そう、ニルヴァーナだ。どこで考えが逸れたんだ。

どこまで考えたっけ？

確か……ニルヴァーナの安置場所を知らない所までだったか。

ふむ、この古代魔法は実に困ったちゃんだ。安置されている場所が分かっていたならば、すぐさま回収、もしくは破壊をすることができたんだがな。

判明してないんだよな。

まぁ、私達も知らないが、オラシオンセイスも知らないと見ていいだろう。

場所が分かるなら、既に回収行動及び、魔法発動を行っているはずだからな。

そこの所は安心して……

……いや待てよ……

もしくは最悪の可能性として、封印を解く方法がわからないだけで、既に発見・入手はしているかもしれないな。

そのことも考慮に入れなければいけないか。爺さん達も分かっているかもしれないが、休憩が終わった後で一応、進言しよう。

しかし、今回のニルヴァーナという魔法は見つけ次第、回収よりも破壊を優先したほうがいいだろう。

今の魔法界は、回収した後の管理体制に【難あり】だからな。

特にここ何年かの管理体制は非常に酷いことが、今日の朝に再認識できた。

3～4年前に、古代魔法の遺物であるゼレフ書の悪魔【デリオラ】が盗まれたことは知っていたが、

2日ほど前に同じくゼレフ書の悪魔【ララバイ】が、どこぞのバカに盗まれたそうだ。

盗む奴もバカだが、盗まれる奴も大概にしろよ！

って話だ。

管理体制、最悪すぎだろ

たった数年で二つもの古代魔法の遺物を盗まれるとか、この責任は評議員にも及びそうだな。

しかし、今でも盗まれたこと自体が信じられない。普通は厳重に警備、そして封印されているはずだ。

それを盗み出すのは容易ではないぞ。盗むのが簡単なぐらいお粗末な管理体制だったのか。内部から手引きがあったか。

私のように隠密性が高い魔導士や大魔導士による犯行かの、どれかしかないだろう。

特にララバイが盗まれたと聞いた時は焦ったな。

あれは大昔の大魔導士ゼレフが生み出した化物だ。その化物ララバイが使う魔法は呪歌の中で現在は禁忌とされている魔法

【呪殺】である。

まぁ、ただの呪殺なら、そこまで焦らないが、管理、封印までされている古代の遺物だ。そう甘いはずがない。

そう、ララバイが奏でる呪歌はただの呪殺の歌ではない。

ソイツが奏でる音色を聞いた者を全て殺す

【集団呪殺魔法】なのだ。

非常に厄介な魔法だ。聞いただけで……とは、その効力は半端がない。改めて古代魔法の凄さが判る。

まぁ、ギルドマスターの殆どはその脅威の魔法を知っていたようだ。ララバイが盗まれたという情報が、定例会中にいきなりが入ってきた時は

一時はララバイの危険性を考慮して、定例会を中止しようとの意見まで出た程だからな。

私も中止派だったが結局、大丈夫だろうとの意見が多かったため、続けられている。本当に度胸のある爺さん達ばかりで困ったものだ。

だが、すべての者が残った訳ではない。中止派の中の少数は昼には帰っている。

どこのギルドかは知らないが、ジュビアもその一人だろう。

まぁ、その判断は悪くない。可能性は限りなく低いが、もし盗んだ奴が、ここ近郊のギルドマスター達に恨みを持っているなら、今が大チャンスだからな。

まぁ簡単に封印は解けないだろうし、ギルドマスター達も歴戦の魔導士達だ。発動する前に何らかの察知はできるだろう。

誰かが察知したら、私達、若者が動き、歌を奏でさせる前に排除すればいい。

まぁ、そう言うわけで私はまだ大丈夫だろうと考えを改めて、定例会を続けることにした。

まぁ、よくよく思えば、残って正解だったな。そのおかげで羊達を食べれて、金もたんまりと手に入ったからな。

今考えると、引き留めてしまったジュビアには酷いことをしたな。

今度、会ったら謝っておくか

……

……

……

それにしても……

ここ何年かで古代魔法やゼレフ書関係で何か動き始めている……ような気がする。

偶然にしては……

もしや、これはウェンディ達、滅竜魔導士（ドラゴンスレイヤー）に繋がるんじゃないのか？

婆さんの言う運命の予兆か？

……

……

……

はぁ……馬鹿馬鹿しい

私は何でも運命という言葉で解決しようとしているな。

デリオラ盗難はウェンディとナツが出会う前の出来事だ。関係ないだろうが

……だが一応、気に留めておくか

まぁ、そこまで深く考えなくていいだろうがな。ララバイは勿論のこと、

デリオラもそれ自体に強力な封印がなされているはずだから解除することは不可能だろうしな。

これらの回収はルーンナイトに任せればいい。そのための評議員直属魔法騎士団なのだ。

とにかく私達は評議員達が足蹴にしたニルヴァーナに集中した方がいいだろう。

これは魔法界全体の運命に関わりそうだからな。

いやはや、定例会が終わった後も忙しそうだ。ニルヴァーナとオラシオンセイスの調査・情報収集をしないとな。

ニルヴァーナだけでなく、オラシオンセイスも実情もよく分かっていないからな。

どこにいるのか。構成員が全体で何名なのかさえ、よくわかっていないのだ。

これは調査をしないといけない。

現在、オラシオンセイスについては、六名の構成員が判明しているが、その他は分からないそうだ。

私が闇ギルド調査した時には、既に2名は判明していた……それから二年で4名しか判明していない。

この事実から我々の調査に引っかからないほどの、力を持ったギルドだと考えていいのだろうか？

それともオラシオンセイス＝六魔将軍、だから六名しかいないのか？

いや、傘下に入っている闇ギルドは少数で裁き切れる数じゃない。

六魔将軍（オラシオンセイス）には、

屍人の魂（グールスピリット）

裸の包帯男（ネイキッドマミー）

黒い一角獣（ブラックユニコーン）

？？？（レッドフード）

尾白鷲（ハルピュイア）

そして

昔、私が捕縛したエリゴールがいるギルド、

鉄の森（アイゼンヴァルド）がいる。

だが、コイツらは傘下の一部だ。他にも多くの闇ギルドが入っている。

この闇ギルドの多さ……たった六名で纏めれるはずがない。

ふむ、今までのことを纏めると、やることは三つに分かれそうだな。

一つ目は、広大な大陸から地道にニルヴァーナを探す。

２つ目は、オラシオンセイスを追い、情報収集もしくは全ての構成員の討伐。

最後は、表向きには傘下のギルド討伐を名目にしつつ、捕縛した奴らから、オラシオンセイスとニルヴァーナの情報を集める。うむ、この３つをある程度、話が煮詰まったら進言してみよう。

まぁ今、考えるのは、これぐらいでいいか。

休憩しよう休憩。

そう思考したナナシは、長い時間で凝り固まった首と肩をゴキッと音を立てながら回し始めた。

「おぉ～バキバキだ。私も年を取ったな」

「何を言っておる。まだまだお主はガキじゃ」

自身の体を回して出た音にナナシが苦笑していると、部屋の中から一人の老人、マカロフが口を挟んできた。

「いやいや、ガキは卒業してんだろ。私は大人だ、お・と・な！」

「どうかのう～」

「卒業してるに決まってんだろうが……何だよ、その顔は……」

ナナシは少し小馬鹿にしたように此方を見てくるマカロフを見て苛立ちを露わにする。

そんなナナシを嘲笑うかのように、マカロフは追撃を掛ける

「ほれ、そのぐらいで苛立つようでは大人ではないの」

「ぐっ……だ、誰だって、そんな顔で見られたら苛立つだろうがよ！」

「まだまだガキじゃの。それに、もう少し忍耐力をつけねばの。魔導士としては必要なことじゃぞ」

その言葉にナナシが反論しようと声を発そうと口を開きかけた時

「さて、そろそろ休憩は終わりにして、話を進めましょうか」

「コーヒーを入れたわよ。ナナシちゃんはコーヒー大丈夫だったわよね？」

煌びやかに飾られた部屋の奥にある簡易キッチンから二人の男が現れた。

男達はナナシらの会話に口を挟むと、マカロフが座っているテーブルへ、

カチャカチャと音を立てながら、芳ばしい匂いを漂わせるポットやお菓子が入った器やカップを並べ始める。

「……まぁ、飲めないわけではない。マスターボブが入れたのなら、美味しいだろうからな。是非、頂こう」

開いたままの口を一旦閉じたナナシは、そう返答した後、

（な……んだと……

休憩が終わり？馬鹿な！？）

愕然としたと言った感じに、深く溜め息と紫煙を吐いた。

そんなナナシを無視してテーブルでは話が進む。

「あらぁ、嬉しいことを言ってくれるわねぇ」

「マスターの入れた珈琲は美味しいですからね」

「儂は酒の方がいいんじゃがの、ボブ」

がっくりと肩を落とし、悲しんでいたナナシはマカロフの言葉を聞いて呆れたようだ。

ワシャワシャと頭を掻いた後、窓際から離れ、毛足の長い真紅の絨毯が鮮やかな室内を歩く。

「まだ話は終わってないだろうが。今、酒飲むなんてありえねぇぞ」

「お主もタバコをやめんか」

「これはあれだ……嗜好品ではなく、必需品なのだよ」

「儂にとってみたら酒は同じ必需品じゃと思うが？」

「……口の減らない爺さんが……」

そう会話しつつナナシは窓から入ってくる風と、歩くことによって生じる風に長い髪を靡かせながら歩く。

「君は……相変わらず、髪留めを外すと女性っぽく見えるね……」

「あ？いやいや、誰だって髪が長かったら、女みたいに見えるだろうが」

「それに相変わらずの極論だ。まぁ……端正な顔立ちを持つ人は、僕も含めて外見が両性的に見えても仕方ないよね」

そう自慢気にうんうんと頷きながら語る茶髪の端正な顔立ちの男、ヒビキは気取ったように前髪を掻き分ける。

「僕も、って……自意識過剰じゃないのか……と言いたい所だが、週サラーの彼氏にしたい上位ランカーに言われると認める他ないか」

そう興味なさげに言いながら、豪華な装飾を凝らした四角のテーブルに辿り着いたナナシは、テーブルと同じ装飾の椅子に腰をどかりと降ろした。

「君だって、週刊ソーサラーの取材を受ければ、ランク入りすると思うけど？上位ランカーの写真、見たことあるのかい？」

「取材とか苦手なんだよ。何かネチネチしてそうで気持ちが悪い。大体、男の写真は見ない。誰が好んで男なんかを眺めるんだよ。グラビアは全員、女にすべきだ！」

「それは確実に偏見だと思うけど……」

「むっ！そういや忘れていたな……金も手に入ったことだし、明日週サラーを買わねばならん。ぐふふ」

ヒビキと同じく、端正な顔立ちをしたナナシは、その顔からは信じられないような下劣な笑みを浮かべて、思いを馳せていた。

（今回はカナ達に取り上げられないように隠さねばな。サングラスに記憶？馬鹿やろう！あれは生の冊子で見るのが一番なんだよ！）

そんな変態なことを考えた後、マスターボブが入れてくれた珈琲を一口飲んだナナシは、苦々しい顔になり、すぐさま甘いお菓子を食べるという行動を取っていた。

どうやら、苦いものはあまり好みではないようだ。そんな姿を見て

笑っていたマカロフ達だったが、時間も時間なのであろう。

一通り笑った後、ぶつくさ文句を垂れながら、少量の砂糖を入れるナナシを無視してヒビキが話を進め始めた。

それから一時間後、既に外は黄昏の空を通り過ぎようとしていた。そして、窓が閉められた部屋の中では男達の話し声が響いている。

「【オラシオンセイス】

……このギルドの構成員ブレインが話していた魔法は、これで間違いないでしょう」

ヒビキは立ち上がり、そう言いながら、魔方陣を展開し手元を動かす。

すると、空中に何やら画像のようなものを映し出した。

画像は一枚の古びた石板を映し出しており、その石板には何やら一つの形あるモノが書かれている。

「うむぅ……」

それを見た瞬間、マカロフは額にシワをのせ、声ともならぬ、うねり声を出す。

一方、ボブは手を頬にあて溜め息をついていた。

そんな中、ナナシはワシャワシャと、自身の頭を掻くと喋り出す。

「再度、確認するようで悪いが、本当に半永久的に作動する魔法が存在するのか？それは古代の石板だろ？事実かどうかなんて判らないだろうが……脚色の可能性はないのか？」

「確かに古文書（アーカイブ）に載っていただけで事実かどうかはわからないよ……でも……」

「でもね……これが本当に存在していたら大変なことになるのよ。古代の魔法ですもの。私達には判らないことだらけなのは当たり前よ」

ナナシによる疑問を答えようとしたヒビキだったが、その言葉をボブが引き継いだ。

長年の生による経験で鍛えられたであろう頭脳を悩ましながら、言葉を紡いでいく。

「でもね……古代の魔法が存在することは確かなのよね」

「……滅竜魔法にアーク。それにゼレフ書の悪魔か」

「そうよ。今ナナシちゃんが言ったのは古代に作られた魔法やその遺物。特に古代魔法は強大な力ゆえに副作用がある魔法。一度は、途絶えたはずなのに今でも存在が確認されてる。不思議よね」

それに続くようにマカロフも

「それにお主の考え方は評議員のそれと同じじゃぞ。」

「わぁってるよ。もう一度、確認したかっただけだ。」

（やはり、何度聞いても信じられん。古代文明は計り知れないな）

その後も、その日が終わるギリギリまで会合は続けられた。

その結果

各ギルドの代表達は、疲れた表情で椅子に座ったまま

「ブルーペガサスはオラシオンセイスを追うわ。いきなりの討伐はリスクが大きすぎるから、まずは情報収集に専念するわね」

「フェアリーテイルは、傘下の闇ギルドから、オラシオンセイスには察知されないように情報を引き出してみようかの」

「ケットシェルターは地道にニルヴァーナを探そう」

そう結論を話した後、お互いの顔を見て頷いた。

「それでは、本日の会合は終了させて頂きます。皆様、長い時間、お疲れ様でした。」

その後、ボブの背後に立っていたヒビキの声で終了の言葉が上げられ、長い長い話し合いが終わりを告げた。

「……調査期間は半年か……」

そう呟いたナナシは、ゆっくりと立ち上がり、閉じた窓から外を見る。

空は既に暗闇に包まれ、ただ爛々と輝く月の光が大地に降り注ぐだけだった。

3．１０　会合（後書き）

はい、今回は終了です。

何だかダラダラしていましたね。

まぁ今回、ニルヴァーナの話を入れたのは、水面下では既に動き出していてもいいのではないか

という自分勝手な考えからです。

アイゼンヴァルト編なのに、別の章の話を入れてしまい、申し訳ございません。

不快に感じられた方がいたら深くお詫びを申し上げます。

ちなみに前書きで

いきなり書かせて頂いたように

ナナシは女顔ではありません。顔立ちが整っているだけです。

ご意見等お待ちしております！

では、また次回　お会いしましょう。

3．11　作戦開始

マグノリア駅の次であるオニバス駅とオシバナ駅に挟まれた位置にあるクヌギ駅

多くの利用客でワイワイと活気あふれる駅である。

そこには旅に出る者、仕事に出る者。その者を見送る家族達など様々な人間が行き交っていた。

その者達の顔に喜びや悲しみの表情はあれど

【パァン！！！】

恐怖の表情はなかった。

魔法銃特有の銃声が鳴り響くまでは……。

「この駅はたった今からアイゼンヴァルトが頂いた！全員出て行ってもらおうか！」

1人の男魔導士の声が構内に響く。

腕は上に向けられ、その手にはうっすらと煙を上げる魔法銃が握られていた。

その銃声を合図に何十人もの柄の悪い男達がぞろぞろと構内へ侵入してくる。

「聞こえなかったのか！」

突然のことに人々は固まり、静けさが漂う構内に男の声が響く。

「ちっ」

痺れを切らしたのだろう男は、近付いてきた男達と何やら顔を見合わせると再び

【パァン！パァン！】

何度も銃を打ち鳴らし、辺りを破壊し始めた。

その瞬間、ようやく状況が理解出来たのだろう。

人々はパニックに陥った。慌てふためく者。泣き出す者。恐怖に顔を引きつらせる者。

それはこの駅の管理者である駅員も例外ではない。

「ひゃははは、バカみてぇ！」

「これぐらいでビビるとか、ぷぷっ」

そんな人々を見て、下劣な笑みを浮かべ、高らかに笑いこげる男達。

しかし

「時間がねぇ。早く外に連れ出せぇ」

一人の、長身で大鎌を担いだ銀髪の男がイラつくようにそう声を出すと

「「「は、はい！」」」

先程まで笑っていた男達はビクリと体を震わせると、先程までの威勢は成りを潜め、怯えながら、すぐさま構内から人々を追い出し始めた。

「お、おい！早く出ていけってんだよ！」

「ひぃ！？」

しかし、中には恐怖で固まり動けない者もいるらしく作業は難航を極めているようだ。

「モタモタしてんじゃねぇよ」

それを見た銀髪の男はそう呟いた後、軽く調整するように、自身が手にしていた大鎌を一振りする。すると

大鎌から一筋の風の塊が打ち出され

「「ぎゃっ！？」」

動けない者、その側に居た男の仲間をも巻き沿いにして、弾き飛ばす。

風の塊を受けた二人は窓ガラスを突き破り、外へと飛ばされていった。

「「「ひぃ!?」」」

その行為を見て、構内にいた人々は仲間である男達も含めて、恐怖に顔をひくつかせた。

「カゲヤマはまだか？」

しかし銀髪の男はそれを無視をして後ろにいた仲間に話し掛ける。

「つ、次の列車らしい」

「ちっ……予定より1日遅れやがって」

そう言いながら、唾を吐く。

「し、仕方ねぇよ。アレの封印を解くのはそう簡単じゃなかったはずだ」

「今が好機なんだぜぇ。ジシィ共が「エリゴールさん！列車が来ました！」……来たか」

…

…

…

「この列車はアイゼンヴァルトが頂く。お前らぁ、客も運転手も全部降ろせぃ」

「「「「へい！」」」」

占拠されているとは知らず、クヌギ駅へと到着した列車は、瞬く間もなくアイゼンヴァルトの構成員達によって乗っ取られた。

乗客や車掌達も先程の構内の人々と同じ様に追い出される。

それを無表情で見ていた銀髪の男、エリゴールに黒髪の男が近付いた。

「エリゴールさん！」

「カゲヤマか。この列車で戻ると聞いて待ちわびていたぞ。……ブツは持ってきたんだろうな？」

「へへっ。何とか封印は解きましたよ……これです」

エリゴールに催促されたカゲヤマは自身の鞄から取り出したブツとやらを渡す。

それは笛の形をしており、頂点にある三つ目の髑髏が特徴的であった。

「ホウ……これが禁断の魔法ラバイか」

それを受け取ったエリゴールは今までの表情が嘘だったかのようにニヤリと笑い、自身の手の内にある笛を掲げた。

「おぉ！」

「さすがカゲちゃん」

仲間達が騒ぐ中

「これで計画は完璧になった訳だな」

笑みを浮かべ、そう言い放ったエリゴールは思考する。

この笛は元々、呪殺の為の道具に過ぎなかった。しかし偉大なる黒魔導士ゼレフがさらなる魔笛へと進化させた。

この笛の音を聴いた者全てを呪殺する

集団呪殺魔法ララバイ

まったく……恐ろしい物を作ったものだ。

「作戦開始だ。まずはオシバナ駅を占拠するぞ」

「「「「へい！」」」」

笛の音を聴かさなきゃならねえ奴がいる

必ず殺さねばならねえ奴がいるんだ！！！

「エリゴールさん！発車の準備出来ました！」

首を洗って待っていろ

ギルドマスターのジジイ共

そして

フェアリーテイルの猫野郎！！！

「粛清の始まりだ」

エリゴールはニヤリと下劣な笑みを浮かべ、ポツリと呟いた後、

多くの仲間を引き連れて列車へと乗り込んだ。

アイゼンヴァルトは一路オシバナ駅を目指す。

3．11　作戦開始（後書き）

はい、短かったですね

エリゴール側はこれで終わりかな？

今回の話は必要なのか？

そう思いながら執筆した作者でした。

ではまた次回　お会いしましょう。

3．12　ハイ→←（前書き）

今回は前話とは、文章も雰囲気も

かなり！かなり！違います！

主人公が、非常にうざったらしいかもしれません

ご注意下さい

では、どうぞ

3．12　ハイ→←

エリゴール率いるアイゼンヴァルトが、オシバナ駅に乗り込んでいる頃。

「これを持ちまして、ギルドマスター連盟、定例会を終了とさせて頂きます！」

クローバー街での定例会、会場では壇上に立ったヒビキの言葉により定例会の終わりを告げられていた。

…

…

…

ヒビキの定例会終了の声が会場内に響き渡る。

それと共に、会場内ではざわざわと多くの人々の話し声が聞こえ始めた。

多くの者が笑顔であり、少数の者は、一様にほっと安心した顔である。

それは、ケットシェルター代表であるナナシも例外ではなかった。

おぉおぉ、やっと終わりやがった！どうやら今回は、ララバイを使った襲撃はないようだな。一安心だ。

それにしても

長く濃い5日間が、ついに終わりを迎えたのだ！

イヤッフゥー！！！！！

私はやっと自由になれたんだ！！！

いやぁ、定例会・会合の束縛と言う名の悪の権化から解放された私は、ここに来て初めて自由を得られた気がする。

今まで大人しかった私……

さようなら！！！

自由な私……

お帰り♪

いやはや、まさに肩の荷が下りた気分である！

これまで準備期間などを入れて、二週間程、休み無しでやってきたからな。

この期間は非常に辛いものであった。遊びや休憩もすることなく仕事仕事仕事。

まぁ、定例会5日間の昼からは自由だったので充分な時間があったのだが
、クローバー街からは出ることが禁じられていたからな。

非常に束縛された生活を送っていたものだ。

それに、この二週間、クエストに行っていたエルザはともかく、ミラやカナとも碌に会話も出来なかった……。

あぁ、早く家に帰ってミラ達を抱き締めたい！！！

と、まぁハイテンションに成りつつある私だ！

周りから見れば非常に不愉快な人間だろうな。

しかし、しかしだ！

わかってほしい。この気持ちの高ぶりを！！！

いやぁ自由に生きれると言うのは良いものだと改めて実感するな！

「やぁっと！終わったな！」

「そうじゃの。……ところで、ケットシェルターも良い情報を提供してくれたの。よかったのか？」

歓喜のあまり立ち上がった私に、隣にいた爺さんが話しかけてくる。

うむ、そうなのだ。我らケットシェルターは、今回の定例会で情報提供をしたのだよ。

本来ならば、初参加だから提供しなくてもよかった。

だが、私としては今後も他ギルドとの友好を計りたいと云う思惑があるため、きちんと情報を提供することにしたのさ。

ギルド間の友好は大切だからな。新興ギルドである我らが、これを疎かにしたら大変なことになる。

それに今回、提供した情報は……。

「あぁ、評議院からパクッた情報だから、別にかまわねぇよ。私達の懐は全然痛くねぇ」

他のマスター達に聞かれないように、椅子に座り直し、そう小声で返事を返した。

「まぁ……其方のマスターが了承したことじゃろうから良いのじゃが……」

何、そのジト目……。

しょうがないじゃないか！

しょせん新参者のウチのギルドは、他人が得た情報を開示するしかないんだよ……。勝手に情報を貸し出された評議院が悪いんだ。私は悪くない！

しかし……感謝はしよう。私だって人に育てられたんだ。感謝の気持ちぐらいある。

評議院がある方角を向いてっと、よし！

評議院の皆さん！

……開示された情報だから、もう極秘扱いにはならないだろうけど……。

良い情報を貸してくれてありがとう。今度返しに行きますよ！

そして

ケットシェルターの踏み台になってくれて

ありがとう！

ありがとう！！

ありがとうぉ！！！

「コヤツ……また変なことを考えておるの」

ありが……って、もういいか。私の気持ちは届いていることだろう。

極秘情報が開示されたと言う情報と共に。

ぐふふ

評議員のジジイ共がビックリする顔が思い浮かぶぜ。

ＨＡＨＡＨＡ！ＨＡＨＡＨＡ！

ＨＡＨＡＨＡ！ＨＡＨＡＨＡ！

ＨＡＨＡはっ！？

……あれ？待てよぅ

よく考えてみたら、ちょっとヤバくないか？

ケットシェルター

極秘情報開示

←

情報が漏れたことが評議院並びに評議員に伝わる。

評議員１

〔情報垂れ流したのはどこのどいつじゃボケ！！！〕

評議員２

〔なんか、ケットシェルターとか言う新興ギルドらしいよ！しかも発言したのは影法師！！！〕

評議員３

〔なぁーにぃー！？またアイツか！？〕

と、なるわけだな。

ふむ……

……やってしまった。最悪だ。痛いどころか、重傷だ。いや重傷どころか瀕死やもしれん。

確実にマークされたな…

って

考え過ぎか。

いかんな。大仕事が終わった興奮で混乱していたようだ。

そうさ、評議員が何かイチャモン付けてきたら、

〔どっかで（情報を）拾っただけで、極秘だなんて知りませんでした。〕

って、昔みたいに白を切ればいいんだからな。

マスターも開示することを認めてくれたし、爺さんだって、ジト目＋溜め息しか付いてないから大事にならないだろう。

それにしても、束縛されていたとは言え、今回は中々に有意義な時間を過ごせたと考えてもいいだろう。

代理として定例会等に出席と言う、中々にない貴重な経験をさせてもらったからな。

魔導士としても人としても、少しは成長出来たかもしれない。

ふむ、そう考えたら、何だが偉くなったような感じだ。このまま家に帰れば、家長の権力は私に戻ってきているかもしれない

いや、たぶん確実に私は家長だろうな。ふふふ

今の私は、二週間前の私ではないのだよ。

覚悟していろよ！

ミラ！カナ！エルザ！

帰ったら、ベットでギッタンギッタンにしてやる！

うおぉぉぉ！テンション上がってきたぁ！

むむっ、それより今のうちに買い物に出掛けなくては！
ヒビキの話によると、二時間後から大ホールで食事会が開かれるらしいのだ。

急がなくては！！！

「爺さん、私は外に出て来るぞ」

「時間までに戻るのじゃぞ」

「へいへい」

私は飛び出したい気持ちを抑えつつ、隣の席に座っていた爺さんに声を掛け、ゆっくりと優雅に席を離れた。

それにしても、何時までも子供扱いしやがって！
ちゃんと分かっているっての！

家に帰るまでが定例会です！！！

ナナシは、初めての重責から解放され、ハイテンションになると様々なことを考えつつ、足早に会場を後にした。

本人はゆっくりと優雅に歩いているつもりだが

「あっ、ナナシ。外に行くのかい？だったら僕も行く……はやっ！？」

入口正面にいたヒビキが止めることが出来ないほどの早さで足早に去ったのであった。

「魔導書♪週サラー♪」

刻々と、命の危機が迫っていることに気付かない自由なナナシであった。

……

……

……

……

「売ってないだとぉ！」

「え、えぇ、ついさっき売り切れになりましてね。」

「な、何てことだ……天は私を見放したのか…」

昼過ぎのクローバー街では、多くの買い物客で賑わっている。

そんな街にある魔導士専用の店が建ち並ぶ通りには、ガックリと肩を落とし暗い雰囲気を漂わせているナナシがいた。

…

…

…

ハイテンション？

何それ？美味しいの？

今の私は、そんな気分だ。

はぁ……会場を飛び出して一時間が経つ。

魔導書は何十冊か手に入れたんだ。しかし、しかしだ。

週サラーがどこにも売ってないのだよ。

目の前にある、この店で最後だったんだ。しかし売ってなかった…

やはりグラビアカード付きは、予約して置かないと手に入らないのか。

ちくそぅ

マグノリアに帰ってから買えば？って思うだろ？
しかし、私は今！読みたいのさ。
……こうなったらオシバナ街まで行くか？

いやいや……ダメだ。家に帰るまでが定例会だ。
勝手にクローバー街から抜け出すわけにはいかんだろう。それに時間が確実に足りないしな。
諦めるほかないか……
そんな残念で泣きそうなことを考えている私の目の前では

「やぁ、君たち。今暇かい？」

「「は、はい！！！」」

（ブルーペガサスのヒビキ・レイティス！？格好いぃ♪）

（後ろの人も格好いいなぁ♪イケメンが二人とか凄～い♪今日ついてるかも♪）

真っ昼間からヒビキがナンパをしていた。

ヒビキ……いい身分だな。

私がひたすら、走り回っているというのにナンパなぞしやがって！

それにしても、中々に可愛い女達……いや、まだ少女達だな。

この辺りにいるということは魔導士か？

昨日はジュビアで今日は……

むっ？もしや駅の売店には売ってあるのではないか？

ふむ、どうせ、行く宛もないんだ。行ってみるか。

そう考えたら私はすぐに

「ヒビキ、私は駅に行っているぞ」

その子等をナンパしているヒビキの返事も聞かず、駅へと進路を取った。

時間がないからな！

それにしても、ヒビキのナンパ成功率は半端なく高いようだ。

非常に羨ましい……。

私なんて殆ど失敗だ！

まぁ昔の話だがな。

今？今はナンパなんてしたらミラ達に殺されるから絶対にしない。

昔はよくやって半殺しされてたからな。今やったら、たぶん命はないだろう。

だから何時かヒビキから、あの写真を奪わねばならん。

あれはナンパなんて生易しいものじゃないからな

しかし実に女は不思議な生き物だ。

何ですぐにナンパとかが、バレるんだろうな。

ナンパから帰ってきた日には

三人揃って

〔〔〔知らない女の匂いがする〕〕〕

とか言って説教＋たこ殴り、だもんな

実に女は不思議で恐い生き物である。

最近では、私の癒やしであるウェンディもミラ達に染まってきているからな。

これは何とかしたいが……反抗期じゃなぁ。どうしようもない……

全く、反抗期とか成長が早すぎるよ。

兄さん悲しい……

この前、マカオを救出に行った時なんて、足を踏み抜かれたからな。

もう痛いったらありゃしねぇよ。

身と心が……。

はぁ……

あんな無垢な子が暴力に走るなんて……本当に何があったんだ？

何か変わるキッカケと言えば……

はっ！？

……ま、まさかロメオクンに何かされた！？

いや、それはないか。しかしロメオクンに出会った辺りから何か変だからな。

やはり恋か……。

あの時、書庫では彼氏疑惑を即否定して安心したが、実はロメオクンに恋をしていたんだな。

たぶん、あの時の

〔違うよ！〕

は

〔まだ告白してないよ！〕

と、いう発言だったのだろう。

そ、それで私も含めて他の男に対して何らかの嫌悪感が……。

くそっ！帰ったらロメオクンはたこ殴り決定だ！

マカオの息子と言えど容赦はせんぞ！

まだ見たことも会ったこともないがな！

きっと、

私のような立派な大人とは違って……ダメダメな性格の子供に決まっている！

ウチの娘（ウェンディ）をたぶらかしおって！
許さんぞ。あの子には私のようにしっかりした男に……

おっと、駅に着いたな。

ナナシは、そんなバカなことを考えながら構内に入ろうとすると、
駅員に歩みを止められた。

「あ？邪魔だ、散れ」

「誠に申し訳ありませんが、只今！列車はご利用出来ません！！！」

「あぁん？」

何だ？事故か？

3．12　ハイ→←（後書き）

はい、今回はハイテンションなナナシでした。

ウザかったですよね。

まぁ、あれです。

試験や重要な仕事を成し遂げた時のハイな感じを表現したかったのです。

ちなみに、次回からは、ハイじゃなくなります。

それにしても、

ようやく、アイゼンヴァルトに絡めそうです。

ナナシの戦闘？

勿論しますよ

ちなみに、アイゼンヴァルト編は、後3話ぐらいで終わります。

亀ストーリーですいません。

何かありましたら書いて頂けると有り難いです。

では、また次回　お会いしましょう。

3．13　何！？（前書き）

長くなりそうだったので半分に切りました。

では、どうぞ

3．13　何!?

「ですから!オシバナ駅で列車の脱線事故があったため、駅はご利用できません!」

「馬鹿やろう!ここはクローバーだ!中に入っても関係ないだろうが!」

駅員に止められ数十分後、未だに駅員とナナシによる攻防は続いていた。

刻々と時間が経ち、既に痺れを切らしていたナナシは無理矢理、構内に入ろうとし始めたが

「お、お客様!?お止めください!」

「痛い痛い痛い!?」

ただ一人の駅員によって羽交い締めにされ身動きが出来なくなっていた。

…

…

…

くっ、なんて力のある駅員だ。

そちらがその気なら、こちらだって魔法を使うぞ！

そう考えた所で、私は頭が急激に冷えるのを感じた。……あぁ、なんて大人気ないことをしているんだ。

魔導士にあるまじき行為だったな。少し調子に乗り過ぎていたようだ。

反省だ……反省をせねばならん。

まったく、馬鹿な私であった。

エルフマン達と違って一般人と肉体の力が同等に近い私が正面からぶつかれば、ここがホームグランドである駅員に負けることは必至！

うむ、別に正面から入らなくていいではないか

そうさ、私は魔導士

魔法を使えばいい♪

ふっふっふ

駅員敗れたり！

その後、私はギャーギャーうるさい駅員から離れ街へと帰路を取るように見せかけて、

【転影移】

溜め息をついて構内に戻る駅員の影の中に転移した。

週サラーがあることを願おう。……ついでに駅封鎖の本当の理由も収集しておくか。何だが嫌な予感がするからな。

……

……

……

クローバー駅、構内にて。

とある事情から封鎖された構内には数人の駅員以外、人影はなかった。

普段の活気がない構内をコツコツと乾いた革靴の音が鳴り響く。

人の出入りが、あまりないため、静けさを漂わせている構内は、まるで劇場のように音を反響させ心地良い音を生み出していた。

「誰かいますかー！」

そんな場所に突如として、男の野太い声が響く。

顔を左右にゆっくりと振りながら声を出していることから、どうやら中に残っている人がいないか、チェックして歩いているようだ。

その駅員は厳格そうな顔つきをしている男である。

年の頃は五十代の後半といったところか。駅員としてはベテランと呼んでいい年齢であろう。

ふと男は視線を感じ、通路の横にある入口を見る。

「はぁ……」

そんな駅員に入口の方から、溜め息を尽きながら一人の若い駅員が近づいた。

「クレームの処理、終了しましたぁ」

若い駅員は帽子を取り、疲れた表情を隠そうともせずに溜め息を吐きながら上司であろう男に報告をした。

「あぁ、ご苦労様。かなり酷かったみたいだね」

「酷いなんてモノじゃありませんよ……。何回止めても無理矢理入ろうとするんですよ。」疲れた表情で、愚痴をこぼす部下を見て上

司である男は笑った。

「いい経験になったじゃないか。」

それを聞いた部下は顰めっ面になり、二度と相手をしたくないとばかりに嫌々と肩を落とす。

そんな部下を見ていた男は、一転して真面目な表情になると

「ただ……お客様の前でそんな顔をしたら駅員失格だよ。さて、見回りを続けようか。ウチまでお客様がテロの被害にあったら洒落にならないからね」

そう言うとバツの悪そうな顔をして頷く部下を連れて歩き出した。

「クヌギとオシバナは大丈夫でしょうか……」

ある程度、構内を見回り人が居ないことを確認した二人は休憩にと、歩きながら話し始める。

「先程、上から連絡があってクヌギ駅の方は大丈夫だそうだよ。オシバナには軍が突入を開始したらしい」

「じゃあ大丈夫そうですね♪」

男の言葉を聞いた部下は安心したように胸を撫で下ろし、再び構内にある休憩所や売店をチェックし始める。

先程よりも体が幾分か軽くなったと感じた部下は、すぐさまチェッ

クを終え男の元に戻ってくるが

「いや……相手は魔導士だ。軍では適わないかもしれないね」

男の言葉を聞くと再び暗い表情に変わった。

「た、確かアイゼンバルトでしたっけ？」

そう部下の駅員が言った瞬間、足元に出来ている影がぐにゃりと歪んだ。

すると、二人が歩く背後からにゅるりと音を出しそうな感じに漆黒の手が二本出てきた。

そして勢い良く二人の首を

締め上げることもなく、二人が先ほど通過した売店へと手は伸びる。

そして、漆黒の手は片方で女性二人のグラビア表紙の雑誌を掴むと、すぐに元の場所に戻り始めた。

しかし

途中で何かに気付いたのだろう。手は戻ってくる勢いを減速させるとオロオロとしながら、自身が出てきた影と売店をキョロキョロと見回していた。

しかし数秒後、何やら決心が付いたようで、もう一つの手が雑誌を掴んでいる手の甲に指を入れ、一枚のお札をぐぷりと取り出す。

そして律儀に売店のカウンターまでお札を運んだのであった。

一方、駅員の二人は終始、それに気付くことなく会話をし続けている。

「魔導士って頼りになりますけど犯罪に回ったらおっかないですよね」

「あぁそうだね。今日は朝から鎧を着た女と翼が生えた猫？によって列車が緊急停止されたと連絡があったと思ったら、クヌギ、オシバナのテロ事件だしね……」

「闇ギルドなんか全部討伐すればいいですけどね。評議院は何してんですかね」

「まぁ愚痴を言っても仕方ないよ。しかし、今日は駅にとって厄日かもしれないね」

そう上司の男が喋ると、部下は溜め息を尽きながら歩みを進ませた。

まさか自分の後ろで犯罪紛いなこと（窃盗未遂）が起きようとして

いたことなど露と知らず歩く駅員たちだった。

ちなみに、部下の影の一部だけは、その場に留まり真っ白な床の上はうっすらと人の形をした奇妙な柄と科している。

そして、駅員達が完全に姿を消すと

ふむ、あっさりと情報収集完了だな。それに週サラーもゲットだぜ。ぐふふ

その影からナナシがゆっくりと姿を表す。

いやぁ、一時は迷ったが金を払ってよかったな。罪悪感を感じることなく幸せに読めそうだ。……と、それより列車を緊急停止だと……

エルザとハッピーもしくはシャルル……は何をやっているんだ。

テロを起こしているらしい馬鹿なアイゼンヴァルトと何か関係があるのか？帰ったら聞いてみるか

しかしアイゼンヴァルトも本当に馬鹿な奴らだ。アイツらは今日で終わりだな。

駅は人々の重要な日常の一部だ。そんなものを襲ったんだ。明日の新聞に載ること間違い無しだろう。

そしてそんな闇ギルドを評議員が放置させるわけがない。

今週中にでも、すべての構成員が討伐されるだろうな。

ナナシはそう考えながら、ふと駅にある時計を見た。

……ヤベェ……確実に食事会が始まってら

い、急いで帰らねば……

どうやら食事会は既に始まっている時間帯のようでナナシは急いで、自分の影に潜り構内から姿を消す。

客がいなくなった駅では、ただ駅員の声と革靴の音が響くだけであった。

…

…

…

…

…

ふぅ、何とか会場に潜り込むことが出来た。

会場内は様々な料理があり美味しそうに見えるな。まぁ実際、見た目だけであまり旨くないのだが……。

全く、料理人ならミラレベルぐらいに作れよ。

そう私が料理を食べながら心の中で愚痴を呟いていると、向こうの方で誰かが倒れたらしい。介抱する声が聞こえる。

爺ばかりだから、誰か死んだか……

ご愁傷様なことである。

さてさて週サラーを影から取り出しまして♪

「しっかりしろ！」

「キャー！誰か！」

……実に騒がしい。

むっ、これが例のグラビアカードか。

おっほぉー！！！

ボインボインのお姉様ではないか。一体どこのギルドだ。実にけしからん

何……私と同い年だと……。世代の波はここまで来たか

むっ、裏面もあるとな！
さてさて誰が……

……

……

……

嘘だろ

このたわわに実った桃が１２歳のものだと！？

艶やかな黒色の髪にしなやかな肢体。ルビーのように赤い眼。整った顔立ちは少女なのに気品に溢れ大人っぽさを醸し出している。

それに透き通るように白い肌は若々しい弾力に富み、良い感触がしそうだ。

背は年相応で高くないが注目すべきは、そのたわわに実った桃！！！

大人では普通だろうが、少女にはあるまじき大きさだ。ただの無地のワンピースを着ているだけなのにそれが色香を一層強くしている。

……いかん。欲しい。この子はビッグに成長するやもしれん。

一体どこのギルドの構成員なのだろうか。会いにいかねね「しっかりしろ！マカロフ！」

……え？……

「大丈夫か！マカロフ！」

えっと、誰かが倒れたという場所から、爺さんコールが鳴り響いているのだが

「おい！もしかして倒れたのは！」

そう言うや否や、ナナシは雑誌を懐に入れると血相を変えて走り寄った。

3．13　何!?（後書き）

続きは後日に投稿予定です。

では、また次回　お会いしましょう。

3．14　警告

現在は、爺さんが倒れてから数十分後だ。

ちなみに私はエントランスで薬草タバコを吸っている。

……結論から言おう。

爺さんは無事だ。

現在は大ホールでニヤニヤして私の！週サラーを読みながら、マスターボブ達とあれこれ会話をしているだろう。

全く……人騒がせな爺さんだ。

何でも、爺さんにミラとエルザから手紙が来て……私には一通も来てないぞ

……さびし……

一通ぐらい送ってくれても……

おっと話が逸れたな。

ミラの手紙によると、何でもエルザとナツとグレイがチームを組んだそうだ。

……至上最悪のチームの完成だ。

街一つが消滅するかもしれないと私でも危惧するのだから、爺さんが倒れるのも無理はない。

ホントにフェアリーテイルのマスターは気苦労が絶えなさそうだな。

まぁ、駆け寄った後、
起き上がって意気消沈している爺さんに、既に列車を止めると言う行為をやっているらしい

と

トドメに報告してやったら、逆に開き直って私の懐から週サラーを奪って読み始めたからな

もう大丈夫だろう。

いやはや、さすが私だ。
見事、爺さんは危惧を通り越し確実に現実逃避をし始めた。

これで一安心だな。

それよりエルザの手紙の方が興味深かったな。

何でも

「アイゼンヴァルトがララバイを持っているんだって？」

むっ、ちょうど良くヒビキがこちらにやってきた。

そう言えば、街でのナンパはどうなったのだろうか。

……コイツは街から帰ってきたら、さっきまで会場で給仕をしている少女達をナンパしていたからな。

あぁ……ヒビキの後ろで、少女達がこちらを見てキャーキャー騒いでいるのが見える。べ、別に羨ましくない。私にはエルザ達がいるからな。

それより

「あぁ、エルザの手紙から推測する限りな。でも大丈夫だろ。アイゼンヴァルト如きに解除出来る封印ではないだろうよ。」

「まぁたぶんね。それよりアイゼンヴァルトと言えば、クヌギ駅とオシバナ駅の話は聞いたかい？彼らに占拠されたらしいよ」

その言葉に私は頷く。と言うか、それは私が流した情報だ。

「全く、奴らは何をやるつもりなんだろうね。順番に行けば……次はクローバーかな？」

「まさか。ありえねぇよ。エルザ達もテロ情報を聞いて駅に向かっているだろうから、討伐は時間の問題だ。なんせ妖精女王（エルザ）様直々だからな。アイゼンヴァルトは終わりさな」

そう自信満々に私が言うとヒビキは苦笑している

「あんだよ？不愉快だぞ」

「いや、済まないね。実に嬉しそうに話すなって思ってね」

「当たり前だろうが、妖精女王……エルザは女魔導士としてはフェアリーテイル１なんだぞ。これを自慢せずに何を自慢しろというのだ！」

そう！エルザはフェアリーテイルでＮｏ．１の女魔導士なのだ。凄いだろう！

才色兼備とはまさにエルザに……いや、ミラもカナもそうだな。

むぅ……そう考えると、全く持って私にはもったいない女達である。

しかし、逆に考えるなら

やはり、それだけ私に魅力があるということだな。ふっふっふ。

…

…

…

そんな風にナナシが悦に浸っていると

「でも腑に落ちないね」

手で顎を押さえ、渋い顔をするヒビキは話し出す。

「何故、彼らは駅を占拠するという安直な行動を起こしたと思う？」

「ん～ララバイを所持しているなら、その行動は分かるような、分からないような。」

ナナシもタバコを影に捨てた後、考えるように顎に手を置き、話を続ける。

「案外、ララバイを発動させるために占拠したのかもしれないぞ。

あそこには行政府や軍と別に拡声器が設置してある。占拠するなら駅が一番、簡単だからな」

「……と言うとアイゼンヴァルトは封印を解いた？」

「まさか、冗談だ。」

二人がそんなことを立ったまま、話していると

「ノンノンノン♪3つのノンでその話は意味がありません♪」

「あ？」

どこから途もなく、声が聞こえたかと思ったら地面の中から一人の男が現れた。

……

……

……

……

突如として、現れた男は茶色の服と片目のモノクル、緑色の髪が特徴だった。

その男を見た瞬間、ナナシが纏う雰囲気は一瞬にして変わり、隠すこともなく不機嫌そうな顔を顕わにする。

「お久しぶりでございます。白夜様。影法師様。私はファントムロード所属の……」

「何のようだ、ソル」

男、ソルは礼儀正しくお辞儀をして名を名乗ろうとするが、顰めっ面のナナシが機先を制した。その声色は普段とは違い、ドスの効いた声だ。

しかし、ソルはそんなナナシの様子を気にする素振りなど一切せずに喋り出す。

「おやおやおや、私のことは忘れてないようで?これは凄い!ブラヴォー!!誰に操られたのかは覚えていないというのに、流石はぁ影法師様ですなぁ!!!」

「ソル……ここから早急に散れ。お前の嫌みを聴いているほど暇ではない」

「ノンノンノン♪ムッシュ・ソルとお呼び下さい」

「私は散れと言ったはずだ。強制的に排除するぞ。あ〝ぁ〝?」

ナナシは不機嫌な顔のまま、瞬時に魔方陣を展開すると漆黒の手を出した。そして目の前にいるソルの襟首を掴み、締め上げようとする。

しかし

「ナナシ！止めるんだ！」

「おやおやおや、今のあなた様はケットシェルター【代表】ですよね？王国最強のファントムロード【代表】である私に手を出していいと思っているんですか？」

ヒビキに肩を抑えられながら、ソルの言を理解し少し躊躇するナナシに向かってソルは続ける。

「あなた様はご自分の立場というモノが分かってないみたいですな。昔とは違うのですよ？

今、あなた様が同じマスター代理の私に手を出したとなったら、即、ギルド間抗争とお見受けしなければなりません。良いのですかな？」

そこまで言って、ソルはにっこりと笑いかけてくる。

「それにここでの目的は友好。我らも友好を深めようではありませんかぁ♪ねぇ？名無しの影法師様ぁ？」

そして、明らかに面白がる口調で、バカにする口調でそう言った。

ヒビキに肩を掴まれたまま、目の前で両手を広げて、したり顔のソルを睨んだナナシはキツく歯を食いしばり、乱暴に漆黒の手を離し霧散させた。

そして頭をワシャワシャと掻き溜め息をつくと、服を乱れを直しているソルと話し始める。

「先程はすまなかった……ケットシェルター所属、マスター代理ナナシ・ネームレスだ。……今後とも宜しく頼む……」

……

……

……

お互いの挨拶を終え、話すことはないとばかりに立ち去ろうとするナナシとヒビキにソルは何やら話し掛け始めた。

「私はあなた様方の役に立つ情報をお持ちしたのです」

その言葉を聞いた途端、歩みを止め怪訝そうな顔をするヒビキとナナシ。

それを見たソルはにんまりと笑いながら続ける。

「つい先程、ララバイの管理場所の調査に出ていたアリア様から連絡がありました。あれの封印は上級解除魔導士なら解ける程度のモノらしいと」

「「っ！？」」

「どうやら管理側の報告に嘘が混じっていたようですな。勿論のことですが、マスター代理としての発言ですから私の言は嘘ではございませんよ」

ソルの言葉を聞いた途端二人の表情に緊張が走る。

「聡明なお二人様ならお分かりですよね？あっ、ちなみに、この話は既に会場でもお話しましたよ。」

そう話すソルを無視して、二人は会話しながら大ホールへ向けて足早に歩き始めていた。

「……簡単に封印が解けると言うことは、オシバナでララバイを発動させると思うかい？」

「たぶんな。エルザ達がオシバナに入っていれば何とかなると思うのだが……」

その時

突然、街中にけたたましいサイレンが鳴り始めた。それは一つのことが決定したこと告げる音でもあった。

「……これって避難警報……だよね」

「……まさか……」

サイレンと共に、住民への避難警告が行政府により響き渡る。

「大量殺戮魔法を所持した魔導士が接近中！？」

避難警告を聴いたヒビキが声を上げ、ナナシは呟きながら考え始めた。

「アイゼンヴァルトの狙いはクローバーなのか？しかし、どこを狙って…また駅？……いや……そうか！…定例会か！」

「そうでございましょう。アイゼンヴァルトの狙いは私達。ギルドマスター連盟でしょう。

あそこは正規ギルドの調査でつぶされた元正規ギルドです。我々に憎しみの感情を持っていてもおかしくはありません。

ねぇ影法師さまぁ。一体、誰が彼らを暗闇に押しやったのでしょう

ねぇ」

何時の間にか、横にいてそう喋るソルを無視して二人は大ホールを目指して歩く。

「オシバナでも使用したと思うかい？」

「いや、それはないだろう。」

そう言いながら、ナナシが勢い良く扉を開け会場に入る。会場内は相も変わらず呑気なままペチャクチャお喋りをしているようであった。

「見てみろ。使用されていたら爺さん達が騒いでいるはずだからな。とにかく今は、今後のことを話し合わねばならん」

…

…

…

それから数十分後

一人の男が血相を変えて飛び込んできた。

年の頃は四十代の後半といったところか。仕立てのいい白い背広を着ていた。

だが、顔は青ざめ唇は震えていた。

「み、皆様！避難警報が出ております！」

どうやら、ここの責任者らしい。男は脂汗を額に浮かべながら言うが会場は、のほほんとしたものだ。

「今、軍が此方に向かって出発を開始したらしいよ。夕方には着くらしい」

「軍が？てか、そんなに遅くては意味ないだろ」

そんな不可思議な光景を見て、呆気にとられる男の横を三人の男達が通り抜ける。

「まぁ、あてにしないほうがいいね。それと、オシバナからの連絡

の詳細によるとラフバイを所持しているエリゴールが一人だけで此方に向かっているらしいよ。」

「……つまりエリゴールを排除すれば終わりだな」

「今のところはね。新しい情報が入ったら念話で送るよ」

「あぁ頼んだ。私はエリゴールを排除しよう」

「私は避難の手伝いをしましょうぞ。ここで死人が出るようなことがありましたらマスタージョゼに顔向きできませんからな。それに私の経歴に傷がつきます」

そう話しながら歩く男達を近くでオロオロしていた責任者の男が震える口で止める。

「み、皆様！避難警報が行政府より出ております！大量殺戮魔法を所持した闇ギルドがこちらへと向かっているのですよ！しかも目的が定例会の皆様だそうです！何を呑気に……」

そう口早に言う男を振り返ったソルがお得意の喋りで止める。

「アイゼンヴァルトのような闇ギルドなど、恐れる必要はございま

せん。この事件、王国最強のファントムロード所属であるエレメンタル４大地のソル！私が処理しましょうぞ。ですので、ご安心ください。」

それを聴いたナナシは煩わしそうに、振り返ると

「コイツや私はともかく……お前の後ろに居るのは誰だ？ただの年老いた魔導士ではないぞ」

そう言われて責任者の男は気付いたようだ。

「あ……ギルド……マスター……」

「御名答。ここにいる奴らは、自分の命ぐらい守りきれる強い魔導士達ばかりだ。それと闇ギルドは私達が排除しよう。安心するがいい」

「おや、私もその【達】に入っています？勿論、入っていますよね？」

ナナシの言葉に突っかかるソルをナナシは無視してぐぷりと影に沈む。それに続いてやれやれと溜め息をついたソルも大地に沈んだ。

最後にナナシと会話しつつ、念話をしながらアーカイブを操作していたヒビキが

「何も恐れることはありませんよ。ただ、ここ近辺で戦闘が行われる可能性があります。あなた方は周辺住民と同様に避難をお願いします」

「は、はい！」

ヒビキの言葉に責任者の男が頷いた。

その時

窓から見える空を黒い大きな鷲が切り裂くようにして、獰猛な目をギラギラと輝かせたまま飛び去っていった。

……

……

……

……

……

大渓谷に設置されている線路には、大鎌を片手に歩くエリゴールの姿があった。

エリゴールの周りには誰もおらず、静けさが漂っている。

（ギルドマスターの集まるクローバーの街まで後少しか。妖精（ハエ）共に

使った魔法の魔力もほぼ回復したし……飛ばすか）

「……ラフバイの音色で全員殺してやる……」

そう独り言を呟き、空に浮かぼうと大鎌を持ち魔法を発動させようとした

その時

「あ？」

その動作は途中で止まった。そしてエリゴールは大鎌の柄を右手で掴み直し左手を前に伸ばすと、臨戦態勢に入る。

（何かが来る）

太陽で眩しいが遠目に何やら黒い物体が見え、段々と大きくなりながら此方へと近づいてきていた。

眩しい光になじませるように目を細めて凝視していると、近付いてきた黒い物体を淡く黒光りする光が包んだ。

次の瞬間

エリゴールの目から

太陽が消えた。

否。エリゴールを照らす目の前の太陽を巨大な何かが一瞬にして遮ったのだ。

「■■■■ーー！！！」

「！？」

それは大きな大きな鷲であった。臨戦態勢のままエリゴールは動かない、いや動けない。

雄叫びと伴ってそれの赤い瞳を目にした瞬間、エリゴールは自分の体が硬直するのを感じ、動くことができなかったからだ。

そして雄叫びが大気を震わせた直後

【大鷲の咆哮！！！】

間髪容れず大鷲の口から凄まじい風の衝撃波が、エリゴールに向かって放出された。

3．14　警告（後書き）

今回は出来が悪かったと思います。

ご指摘の内容によっては、ストーリー構成から変えてもいいくらいです。

ダメ出し等、お待ちしております。

ただ補足としまして

今回、エリゴール達の詳細な情報が分かったのはオシバナから連絡があったからです。

原作では描写はないですが、アニメでは詳細な情報を持った軍が出動する場面があったので、クローバー街にも情報や避難警報が出ていてもいいかな？

という作者の勝手な独自解釈のため、でっち上げました。

補足は以上です。

今回はソルに正論を言われながら馬鹿にされてばかりのナナシでした。

まぁソルのキャラ性もありますが、ナナシのことを快く思っていないキャラもいるということです。

次回、ついに戦闘が！そうです！作者の稚拙な力量により地味な地味な戦闘が始まります。

当然1話で終わります

長々と失礼しました。

では、また次回お会いしましょう。

3．１５死神ｖｓ影法師（前）（前書き）

エリゴール戦、分けちゃいました。

理由は戦闘シーンが書けないからです。

今回は、エリゴールと戦う前からの話に遡っていますのでご注意ください。

では、どうぞ

3．15死神ｖｓ影法師（前）

大鷲による咆哮が大気を震わせた数十分前。クローバー街の上空には、鷲に変身したナナシの姿があった。

空を舞いながらナナシは思考する。

あぁ！マジで！！

ソルのクソ野郎を殴りてぇ！！！

ネチネチ、ネチネチ言いやがってぇ！！！

しかし、しかしだ……アイツの言うことは正論も入っているんだよなぁ。

そうさな、今の私はマスター代理なんだ。軽率な行動は取るべきではなかった。ごめんよ、ケットシェルターの皆！危うく大惨事になるところだった。

はぁ、爺さんの言う通り私もまだまだガキだな。しかしストレスを

溜め込むのは良くない。

この鬱憤はエリゴールとの戦闘ではらさせてもらおう。
ちなみに、これは軽率な行動ではないだろう。爺さん達が
若いもんで勝手にせぃ
とか言ったからな。私が動いても問題はないだろう。

さて、エリゴールを排除すると高らかに宣言したが、どう行動を取ろうか

軍が攻撃している時に不意打ちするか？……いや到着は夕方だ。その頃にはエリゴールはクローバーに着いているだろう。

やはり軍は当てにできないか。

かと言ってエリゴールが街に来るのを待つのもナンセンスだ。

こういうのは、自分から捜しにいかないとな。

うむ、見つけたら、即、奇襲して捕縛するか。

ついでに、鷲での戦闘の実験体になってもらおう。初の対人戦闘だからな。

不謹慎だが、なんだがワクワクしてきたぞ♪

しかし、相手は風使いでギルドのエースと呼ばれていた男だからな。私の風は適わないかもしれん。

ふむ、奇襲が成功しなかったら、騙してララバイを奪うのもアリだな。

そう考えると、私はヒビキに捜索に出る旨の連絡を入れてから、エリゴールを捜すためにオシバナに向けて飛び始めた。

大部、クローバー街から離れたが、軽く辺りを見渡しながら旋回すると、私の目には未だに逃げ惑う人々の姿が見える。

今、エリゴールがやって来たら大変なことになるかもな。なるべく早く見つけて街で戦闘を行わないようにしないといけないか。

まったく、はた迷惑な奴らだ！これだけ多くの市民に迷惑をかけたんだ。跡形もなくギルドは潰されるだろうよ。

おっと、それよりエリゴールの方が先だ。

そう思考しながら、辺りを見渡す。

相変わらず、この大渓谷は何の面白みもない場所だ。ただ岩が剥き出しになっているだけ。唯一の人工物は線路ぐらいだろうか。

しかし今回においては非常に助かる。こんな場所を人間一人が彷徨っていたら目立つからな。

さてはて、どこにいるのやら。

何時もの人間状態だったら、見えないことは間違いないぐらいの距離も、今の私は見ることができる。

鷲に変身しているからな。

鷲と言うのは人間の八倍以上の視力があるのだ。

そのため変身した私はかなり遠くまで見通せることができるのである。

それに加えて、変身しているのは、ただの鷲ではない。希少価値が高く魔力を持っている大鷲だ。

普通の鷲と体が三倍大きいので視力も三倍増しになっている……わけではないが、ちゃんと利点もあ

ん？

……

……

……

大鷲に変身したことによって強化された瞳は遥か後方、大渓谷にある線路上を歩いている男を映し出した。

『ヒビキ。線路上にて死神を発見した。ご丁寧に隠れもせずに歩いているようだ。ララバイは……見当たらない？懐に入れている可能性あり』

どうする？とナナシはバッサ、バッサと翼を打ち鳴らしながら念話でヒビキに判断を求める。

『ちょっと待ってくれ。

うん、こちらも君の目から確認した。エリゴールで間違い無さそうだね。話は闇ギルドだからする必要はないね。ただ……』

『分かっている。これより排除もしくは捕縛する』

『私も参りましょうか？』

二人の念話に、住民の避難を手伝っているらしいソルが割り込んできた。そんなソルにナナシは感情を抑えるように淡々と喋る。

『いらん。相手は通行を遮断してまで、計画を遂行しようとする奴らだ。おとりやもしれん』

『……考えすぎでは？向かってきているのは彼一人なのでしょう？』

『向かってきているのはな……それにエリゴールがラバイを持っていなかったら、どうするつもりだ』

『ふむ……保険は必要ですな。分かりました。私は住民を避難させつつ周辺を監視しておきましょう。あぁそうそう。死神様如きに負けたら……』

そこまで話すとソルとの念話はナナシによって強制的にぷつりと消された。

「今、お前の嫌みを聞いてる場合じゃねぇんだよ」

そう呟いた後、ヒビキと一言、二言会話したナナシは戦闘準備に取り掛かりエリゴールへ向けて羽を動かした。

「さぁって闇狩りの開始だ」

……

……

……

私は念話が終わった後、辺りを警戒しながらエリゴールへと向かった。後少しで戦闘が始まる。

鷲で倒せそうにないなら、すぐに変身は解こう。

撃墜されたらソルを増長させることになってしまう。これは目も当てられないことになるからな。

むっ

……どうやらエリゴールの奴、私が接近していることに気付いたようだ。体勢を整えてやがる。

なかなかの勘の良さだ。いや、視力がいいのか？それとも微妙な風の動きを察知した？

……まぁいいか。考えてもしょうがあるまい。奴が私の接近に気付いた。その事実だけで充分だ。

さて、少し驚かせるか

【瞬風動】

黒光りする魔方陣を展開し、体を風で包み込むと一瞬にしてエリゴールに近付いた。

まずは小手調べからだ！

「■■■■ーー！！！」

急接近と雄叫びで相手を怯ませた後、間髪入れずに

【大鷲の咆哮！】

あんぐりと開けた口から、飛び出した小型の竜巻は見事、エリゴールにぶち当たったようだ。

もうもうと砂埃が当たっていてよく確認できないが……エリゴール

の反応がない。

あれ？もしかして、これで終わりか？

何の反応も反撃も返ってこないっ！？

【ストームブリンガー！】

……

……

……

ナナシが変身した大鷲によって放たれた小型の竜巻はエリゴールに直撃した。

線路が敷かれている地面は砕け、砂埃が舞い上がる。

「何だ、もう終わりか」

空でバサバサと羽ばたきながら、期待がはずれたと言うように抑揚のない声で呟いた鷲だったが

【ストームブリンガー！】

その呟きは、裏切られる。

砂埃を払うように放たれた暴風は一直線に鷲に向かってきた。

「っ！？そんなわけがないか！」

そう叫びながら、体を捻り紙一重でひょいと鷲は横に避ける。

「貴様……どこのギルドの者だ！」

そう声が挙げられると、不自然な風が舞い砂塵が完全に吹き飛んだ。

そして再びエリゴールの姿が顕わになった。

その姿には、傷は一つもついてない。どうやら鷲の攻撃は寸前で受け流されたようだ。

その様子を見た鷲は、

（あぁ風は無理だな。時間が掛かりそうだ。それに、まだまだ威力が足りない。帰ったらエルザに相手してもらうか。さてさてコイツはラバイを持っているのかな？）

そう考えながら、素早く距離を取ると眩しい光を出しながら変身を解除する。

そして

「私？私はオラシオンセイスの者だ。死神のエリゴールよ。なかなか計画通りじゃないか。しかし計画変更だ。ララバイはこちらで預からせて頂く。差し出せぇ」

人間の姿に戻ったナナシは平然と、さも当たり前のように宣った。

3．１５死神ｖｓ影法師（前）（後書き）

今後、更新は月５回ぐらいかもです。

では、また次回お会いしましょう。

3．16死神ｖｓ影法師（後）（前書き）

久しぶりに執筆したので、文章が長いし、かなり変です。ご注意下さい。
今回の主人公は……まぁ最後まで読めば分かります。

戦闘は地味がモットー

では、どうぞ

3．16死神ｖｓ影法師（後）

クローバー街から幾分離れた大渓谷に、敷設されている線路上にて。

時間にすれば午後四時過ぎ。本来ならば、モウモウと煙を上げながら、列車が走っている時間帯であった。

しかし、そこに列車の姿はなく、ただ二人の男が佇むのみであった。

太陽は傾き始め、男達の足元には長く延びた影が出来ていた。

そんな男達の一人は、長い銀髪とダボダボのズボン。上半身を纏っている服はなく、刺青だらけの体をさらけ出したままである。

その男、エリゴールは震える体を抑えるために、右手で握っていた鈍色に光る大鎌に力を入れる。

「あ？オラシオンセイスだと？」

そして、自身の五メートル先で、大袈裟と言っていいほど、ニタニタと笑う男に問い掛けた。

そのルビーのように真っ赤な瞳を見つめて。

「そうだ。早く引き渡せぇ。私も時間がないのでなぁ」

不気味に笑い、返答する赤目の男は長い白髪を結びもせずに、真っすぐに降ろし漆黒の背広姿である。

「どうしたぁ？早くしないか？」

「ふっ」

「何が可笑しい？」

エリゴールは鼻を鳴らす。すると、笑っていた男は怪訝そうに眉をひそめた。

「……六年だ……」

目の前にいる男にも、聞こえないほど小さな声でエリゴールは呟く。

次の瞬間。

エリゴールの姿が消えた。

「死ね！」

「ちっ！」

否

足に風を纏わせ、一瞬のうちに男に接近したのだ。男は、笑みを止めると、懐に手を入れながら後ろに下がる。

しかし

「自分から、のこのこやってくるとはな！猫野郎！」

男の間近まで接近したエリゴールは、そう叫ぶや否や。歓喜から来る体の震えを抑え、再び地を蹴った。

そして、一瞬で背後に回ると、手にした大鎌で男の首を刈り取ろうと、大きく薙いだ。

【ガキン！】

「ほぅ、これを止めるか」

「あぁ？」

しかし、鎌は男が左手に持っている棒状の物で、受け止められている。それは投擲用の細いナイフであった。

鋭く銀色に光り輝くナイフと、鈍色に光る鎌が鍔迫り合い、ガチガチと音を立てる。

「何のつもりだ?」

エリゴールの一撃を眼前スレスレで受け止めた男は、無表情で睨みながら問い掛けた。

「何のつもりだぁ?忘れたとは言わせねぇぞ!六年前の屈辱!今こそ払わせて頂く!」

「六年前?何の話だ?それより、この攻撃はオラシオンセイスに反逆すると捉えていいのか?」

「ふざけやがって!」

エリゴールは鎌を持っている右手はそのままに、手元に魔方陣をすぐさま展開しようと、一瞬だが視線を男から逸らした

その瞬間

「っ!?」

ふと、鍔迫り合いをしていた右手が空振りし、次の瞬間には、エリゴールを無数のナイフが襲う。

大鎌を受け流した男が素早く後方に下がりながら、何時の間にか、右手に持っていた数本のナイフを投擲したのだ。

「ちぃ！」

ナイフの軌跡は、エリゴールの体に吸い込まれるように向かってきた。

魔法を発動する時間はない。そう考えたエリゴールは、大鎌を捨て何とか体をよじり転がることによって回避する。

そして素早く立ち上がるが、そんなエリゴールの足元に小さな球体が転がり込んできた

次の瞬間

【ピカッ！】

「っ！？」

エリゴールを眩しい閃光が襲う。あまりの眩しさに目を閉じるが、閃光はほんの一瞬であり、すぐに目を開けることができた。

「まずは、落ち着け。死神エリゴールよ」

そして、次に顔を上げた時には、再び五メートルほどの距離を開けた場所に、男が佇んでいた。

右手にナイフではなく、大鎌を手にしたまま。

エリゴールが足元を見ると、自身の大鎌がなかった。

「なかなかに良い得物を使っているじゃないか。しかし、あの距離で魔法を発動させようとするのはナンセンスだ。せっかくの得物が意味ないぞ？」

そう言い放ちながら、ニヤニヤと不気味な笑みを浮かべている。

「まぁ、こんな大きな得物、私には邪魔なだけだがな」

男は肩を竦めながら興味なさげにそう言うと、エリゴールの近くまで放り投げる。

何度か回転しながら地面にザクッと音がすると、大鎌は突き刺さった。

男をエリゴールは睨み付ける。

「……ふざけるなよ……」

「ん？ふざけてねぇよ。早くラブレターを渡して貰おうか？」

何時までも同じことしか言わない男にエリゴールは苛つく。

「猫野郎……いや、影法師！貴様の顔を忘れるとでも思ったか！人間は早々に顔は変わらねぇんだよ！！！いい加減にとぼけるのは止めろ！！！」

……

……

……

……

おぉ！コイツは私のことを覚えていたのか。

道理でオラシオンセイスと名乗っても、行動に迷いがないはずだ。

てか六年前のことを覚えているとか……すげぇ執念だな。

……ちょっと引いちゃったぞ……

復讐と言えど、男に今まで考えられていただなんて……気持ち悪っ！？

それにしても、あの日は月明かりぐらいしかなかったろうに。よく顔を覚えていたものだ。

気持ち悪いことは変わりないが、敵ながら天晴れである！と言いたいぐらいだな。

おっと、エリゴールがまだ何やら叫んでいるぞ。

「やっとやっと、てめぇを殺せる！！！猫野郎！！！」

【ストームブリンガー！】

その場から動かずに、怒気を発しながら、エリゴールは魔法を放ってくる。

どうやら私に、かなりの恨みがあるらしい。はた迷惑なヤツだ。

私は目の前に迫ってきた暴風から逃げることなく、魔方陣を展開さ

せる。

【コブラシャドウ】

「なっ！？」

驚くエリゴールを尻目に、すべての魔法をコブラに飲み込ませた後、放出させることなく影に沈める。

はてさて、プラン１（私の格好いい騙し術）は失敗か。

いけると思ったんだがなぁ。まさか顔で判別されるとは思わなかった。

何だか茶番劇だったよな……テンションがた落ちだ……

はぁ……目の前で影魔法を使ったら気付かれると思って、ビビりつつもナイフで、攻撃を受け止めたのに。

まさか、顔で判別されるとは思わなかったよ。あの頃はフードも被っていなかったからなぁ。

こんなことなら、別人に変身して登場すればよかった。

いや元々、奇襲した時点でプラン1は失敗だったか……

むぅ……久々の実戦は調子が狂うな。こんな状態では、クエストにも支障が出るかもしれっ！？

【ストームブリンガー！！！】

【影壁！】

危なっ！？

いきなり、今だにイライラとした顔のエリゴールが魔法を放ってきた。それを瞬時に、影で出来た壁を出現させ防ぐ。

「ちぃ！渋てぇ野郎が！」

「いやいや、これぐらいの魔法だったら受け止めれるっての」

あぶねぇ、ギリギリだったよ……

そう内心ビビりつつも、エリゴールに話し掛ける。とにかくララバイの確認だけはせねばいかん。

「お前ーララバイ使うのなんて止めろよー。ソイツは聴いたもの全てを殺すんだぜー危ないよー」

「だから何だ！これは粛清なのだ。権利を奪われた者の存在を知らずに、権利を掲げ生活を保全している、愚か者どもへのな！！！……この不公平な世界を知らずに生きるのは罪だ。だから俺はコイツを使って……」

うへぇ……何か語り出し始めたぞ。

てか、あっさりとララバイ発見だ。

私が問い掛けると共に、懐から取り出しやがった。

どこに入れてんだよ。あれ回収したくねぇ。汚そうだ。

はぁ……やっぱり……さっきの騙しが失敗して、テンションが上がらねぇ

何かやる気が出ないな

もっと良い騙し方はなかったもんか……

ん？

あっ！？

……し、しまった！

もっと良い騙し方があったではないか！？

例えば

……

……

……

「私が影法師だと？お前は馬鹿か？六年前、アイゼンヴァルトに何があったのか知らないが、誤解は止めてもらおう」

「あ？」

睨み付けて来るエリゴールを、よそに語り続け

最初はマカロフ爺さんに変身

「お主達、傘下如きに」

次に、評議員のミケロに

「本当の姿を見せるとでも思っているのか？」

そして、最後にエリゴールに変身して姿、声色全て同じままに語りかける。

「ララバイを持ってきてくれた礼として教えてやろう。影法師が行方不明だったのは知っているだろう？本当に生きて帰ってきたと思うか？」

「……まさか……」

「あぁ、そのまさかなんだよ。影法師は二年前に死んだ。俺自らの手によってなぁ」

あえて再び、元の姿に戻る。ここで最大級のしたり顔！

ここが大事だな。

「フェアリーテイルの馬鹿やろう共は、この姿で帰ってきたら泣いて喜んだぜ。笑えるよなぁ？本物じゃねぇのによ！あひゃひゃひゃ！」

…

…

…

……的な騙しができたんだがなぁ。

それで本当にオラシオンセイスかもしれない。

と

エリゴールが疑心暗鬼を抱けば、こちらの勝ちだったのだがな。

あぁ……もぅ！勿体ないことをしたもんだ！

「……よって死神が罰を与えに来た。死という名の罰をな！」

まだ語ってんのか。

てか、世の中、不公平だらけだっての。愚痴なら家に帰ってからしてください。他人を巻き込まないでくれよ

って、さっさと影に沈めてララバイを回収しよう。

「まずは出始めに貴様から殺してやる！ララバイ発動のために魔力は温存したかったが……仕方あるまい」

【ストームメイル！】

そう唱えると、辺りををごうごうと吹き荒れる風が覆い始め、風の鎧を纏った姿のエリゴールが現れた。

……コイツ、ストームメイルなんて覚えていたのか……厄介な。

このままでは、弾かれて影に沈めることはできないな。

うむ、一応、保険として手を打っていたんだが、使うことになりそうだ。

……

……

……

……

そんなことを考えるナナシを尻目に、風の鎧を纏ったエリゴールは、

「切り刻んでやる！」

そう言い放ち、気怠そうに見てくるナナシに近付こうとする。

しかし

「あ゛？」

ニ、三歩、歩みを進めた所で、何かが足が吸い付いたように動かなくなったのだ。

「なんだ？」

ふと、エリゴールが視線を下に向けると、影がぐにゃりと動くのが分かった。自身の影ではない。大鎌に出来た影だ。

「っ！？しまった！トラップか！？」

「御名答。てか、影に気を付けておけよ馬鹿野郎が。興奮して忘れていたんじゃないのか？私は影使いだぞ？……まったく、テンションが上がらねぇな」

そう言い放ちながら、ナナシはコツコツと音を立て、風の鎧を纏ったエリゴールに近づく。

しかし、エリゴールは気付いた。動かないのは足だけだと……。

「はっ！馬鹿は貴様だ！くらえ！！！」

風の鎧を纏ったまま、声高に叫ぶと共に、両手をナナシへと向ける。

「全てを切り刻む風翔魔法！」

周囲に吹く風が一際強くなり、ごうごうと、うぬり声をあげ始めた。

【エメラ・パラム！】

直後、両手から大量の魔力が込められた暴風が放出された。それは轟音と共に地面を削りながら真っ直ぐ向かっていく。

「ちぃ！抵抗するなよ！」

【影壁！】

暴風の延長上にいるナナシは、漆黒の壁を出現させ防ぐが

【エメラ・パラム！】

立て続けに第二射がナナシを襲う。

（連発だと！？壁が持たんぞ！？）

「ぐぅ！？」

ナナシが展開した壁は、第二射の暴風を受け止めるが、徐々にヒビが入る。急いで魔力を込めようとするが

「ぐはっ！？」

あっさりと壁ごと吹き飛ばされる。

全身をズタズタに切り裂かれたまま、切り揉みしながら、ナナシは線路上から、谷へと吹き飛ばされていった。

「よぇぇ」

エリゴールは唇の端を歪ませ、そう呟く。

そのまま足元の魔法を、何とか破壊しようと風を撃つ。しかし、大鎌が吹き飛んだだけで、影は依然として残り、効果はなかった。

「ちっ！厄介な……」

そう呟いた時、漆黒の手が線路に引っ付き、勢い良くナナシが上がってきた。

背広姿ではなく、漆黒のロングコートを羽織っている。顔に傷はないが、痛みを堪えるように歪んでいるため、相当なダメージを喰らったようだ。

「少々遊びすぎたようだ。まったく、自分の不甲斐なさに飽き飽きするな」

そう呟きながら、線路上に降り立つことはなく、高く高く舞い上がる。その両手には、合計8本の白銀のナイフが握られていた。

「ちっ、渋てぇ野郎が！」

「てか……てめぇ！あれ一着しかないんだぞ！ミラ達に怒られるじゃないか！」

そう叫び、そのまま回転しながら両手に持っていた8本の漆黒ナイフを鋭く振った。

「しっ！！！」

立ち止まったエリゴールへ向けて、ナイフは解き放たれた。

「あぁん？何だ？物理攻撃かぁ？」

ひゅっ、という風を切る音が出て、余裕の顔を見せ、佇んだままのエリゴールをナイフが襲う。

【ガキン！】

しかしナイフは止まった。いや止められたのだ。
幾重にも投げられたナイフは、切っ先がエリゴールに突き刺さる寸前、風の鎧に当たり砕け散る。

「馬鹿が！足は止められてもストームメイルは破れねぇんだよ！」

そう言って、再び魔法を放とうと両手を動かそうとしたが

「な！？」

動くのは左手だけで、右手は動かなかった。

刹那、何か棒状のモノが己の身体につきたっている感触がエリゴールを襲う。

次の瞬間、右半身の感覚が無くなった。

「なんだと！？」

まるで麻痺したかのように己の体が動かなくなったことに驚愕し、視線を自分の身体に落とす

しかし体に異変は何もなく、一瞬、疑問がエリゴールを襲ったがすぐさま答えは出た。

「し、しまった……」

首を横に向け後ろ斜めを見ると、己の影に数本のナイフが沈んでいくのが見えた。

「また影か!?」

そう言い放つエリゴールが見上げると、落下中のナナシは、背広の袖に出来た影に手を入れる。

「御名答」

そしてぐぷりと再び白銀のナイフを取り出した。

次の瞬間、白銀のナイフに異変が起こるのを、エリゴールは見ることになる。

【影蛇】

ナナシの袖から出てきた黒蛇がナイフに絡みつく。そして小さな黒蛇はナイフを覆い、沈み込む。

すると、白銀のナイフは黒光りするナイフへと変貌したのだ。

「しっ！！！」

そしてナナシは、再びエリゴールの【影】へと投げつけた。

ひゅっ、という風を切る音がさらに続く

八本ほどの漆黒のナイフが左右から迫っていた

「ちぃ！？」

エリゴールは反射的に、両脇を通り過ぎようとしていたナイフを風で凪ぐ

だが

鈍く光る刃が幾本か通り過ぎる。

右半身が思うように動かず、風を上手くコントロールできなかったのだ。数本のナイフは、影がある地面に深く突き刺さった。

「ぐっ！？」

エリゴールの影の至る所に刺さったナイフはぐぷぐぷと沈んでいく。

そして、次は左半身の感覚がなくなった。

「くそが！！！」

エリゴールはナナシを睨み付ける。

一方、落下中のナナシは、地面に着地することなく、自身の影にどぷりと沈んだ。

「私の勝ちだな」

ほっとした表情を浮かべたナナシは、影の中から這い出てきながら、そう呟いた。

…

……

……

はぁ……まさか、こんなにダメージを負うとは……このぐらいでは死にはしないが……痛みは尋常じゃない。

……着地すらままならなかった……

戦闘中に変なことばかり、考えすぎた罰が落ちたんだろう。

背広はボロボロ、体も傷だらけ。最悪だ。本当に私はどうかしていたな。

遊び感覚で実戦に挑むなど……馬鹿な行為をしたものだ。

反省をせねばならん、反省を。

「何をした！」

【影縫い】

何時までも、ギャーギャー煩いエリゴールに、ただ一言だけ答えて、額に左手を当てたまま近付く。

『ヒビキ、エリゴールを確保。……ララバイも無事、確保だ』

『了解したよ。お疲れ様』

「ストームメイルは、崩すことはできんぞ！この拘束が解けたら貴様を殺してやる！」

エリゴールは無理やり影縫いを解こうとする。だが既に体の感覚はなく、ただ喋る人形と化しているから解くことは無理だろう。

しかし、コイツは、まだ戦いを諦めていないようだな。まぁ今だに、風の鎧を纏ったままなのだからしょうがあるまい。

何も出だしは出来ないと、考えることができるからな。

…

…

…

エリゴールに近付いたナナシは肩を竦める。

「お前の魔力が切れるまで待てばいい。何時までも待っていてやろうか？」

「なんだと！」

「冗談だ。ディスペルを使えれば楽に壊呪できるんだがな。あいにく、まだ研究中でな」

そう愚痴りながらナナシは、影から光るペンとサングラスを取り出すと、空中に何やら書き始めた。

それから幾分間、罵倒しながら懸命に動こうとするエリゴールを尻目にナナシは書き続けた。

「何を……ストームメイルの術式！？」

「うむ、出来た」

それから数分後、空中には、エリゴールが発動したストームメイル

の術式が書かれていた。

「ほいほいっと」

ナナシは、その空色の魔方陣に、漆黒の魔方陣を幾重にも組み込む。

すると、空色から漆黒に光り輝き始める。そして、その魔方陣を風の鎧を、展開したままのエリゴールに押し当てた。

【解呪】

次の瞬間

【バキンッ！】

独特な音が出てエリゴールのストームメイルは、まるで最初から無かったかのように崩れ落ちる。

可視できるほどに、吹き荒れていた風は、徐々に収まり、霧散していった。

「なっ！？解除魔法だとっ！？馬鹿な！？」

「よぉ、死神野郎。影に沈む準備できたか？」

唾を飛ばしながら叫び、濁った目で睨んでくるエリゴールを無視して、ナナシは魔方陣を展開させる。

「お前のおかげで、私は思い出すことができたよ」

「ちくし【影沼】……」

ナナシを睨み付けていたエリゴールは、罵倒の言葉を口にする前に、自身の影へと沈んでいった。

「……実戦の怖さをな……」

【ぐぷり】

そして三つ目の髑髏が特徴のララバイだけが、ゆっくりと浮き出てきた。

「まぁ一丁あがりってヤツ……には程遠いか……はぁ……体中が痛ぇ」

溜め息をつき、そう呟きながら、ナナシはララバイへと手を伸ばす。

3．16死神ｖｓ影法師（後）（後書き）

はい、長くてすいません。てか文章の書き方忘れたため、非常に駄作に仕上がってました。

ご指摘や感想お待ちしております。

ちなみに今回は、ナナシは二年間、対人戦闘らしい対人戦闘をしてませんでしたからね。

戦闘を舐めてたんだよ。的なお話でした。

作者も主人公もブランクありまくりだったんですね。

まぁエリゴールに負けたら、今後の展開がヤバいので、負けはさせませんでしたが……

次回は、エルザ達と遭遇して、アイゼンヴァルト編は終了の予定です。

やっと女性達と絡めますね

長々と失礼しました。

では、また次回お会いしましょう。

ちなみに完全な不定期に入りました。

更新はかなり遅くなるでしょう。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8508u/

FAIRY TAIL ～影～

2011年11月8日04時11分発行